契約者たちへの鎮魂歌

渚のグレイズ

これは、72の『悪魔』たちに魂を売った、ろくでなしたちの記録。
悪魔は契約には絶対である。
しかしその契約は、必ずしも契約者を幸福にするとは限らない。

4／27追記：今後に備えて、章タイトルを追加しました。

9／21追記：自分勝手ながら、諸事情につき、当作品は凍結させていただきます。
これまでの御愛読、誠にありがとうございました。

目次

大切なお知らせ……1
○○ない死にたがりの章　7
戸塚輪廻は契約者である……7
千の景色と白い夜……16
諏訪と輪廻と農作業……39
樹海と勇者と輪廻の初陣in四国……55
炎と蘇生と〝不〟和雷同……71
端末と友情と機械オンチ……82
何故、彼はアイスを愛すのか……99
輪廻と水都と心の病……118
円陣と死闘と超越者　前編……137

円陣と死闘と超越者　後編……153
変態と下着と「病室ではお静かに」……172
廻る円環と落ちぬ太陽……186
煮こごりと遠征とラッキースケベ……201
地下と死体と命の価値は・・・遭遇編……212
地下と死体と命の価値は・・・日記編……221
地下と死体と命の価値は・・・解明編……229
ゴスロリと追っ手と再びの諏訪 -帰宅-……238
ゴスロリと追っ手と再びの諏訪 -サイカイ、そして・・・-……245
ゴスロリと追っ手と再びの諏訪 -元凶-……254
寂しがり屋のロンリーボーイの章　263
上里一正は天才児である……263
時計の針が、動きだす……275

はじまりはいつも、突然に……291
科学と呪術が、交差する時期$|$とき$?$……303
初陣のあと、勝利を祝う……326
貴方の、涙……337
訓練のために、合宿をする……350
訓練、開始……357
独りの、夜……362
訓練、完了……370
合宿の夜、共に眠る……379
仲間の秘密を、こっそり探る……385
嵐、止むこと無く……392
凍てついた心を、溶かすぬくもり……401
七人に、なった日……411

楽しい、日常……423
神樹館勇者倶楽部、発足……431
苦手を、克服する……436
しずくと、シズク……443
7月10日-序-……451
7月10日-破-……462
7月10日-糾-……474
さようならを、いうとき……480
EXTRA・1 しずくと、アスカ……489
不屈の喧嘩番長の章 497
我が名はK -全ての〝夜〟道を〝輝〟らす者-……497
Yの活動記録 -猫探し探偵煌月輝夜-……507
Vの襲来 -終わる日常-……524

Vの襲来 -勇者になる- …… 545
Vの襲来 -撃退、そして・・・- …… 567
煌月輝夜は■■■■である …… 580
輝夜のF -喫茶≫嵐ヶ丘≪の三人- …… 592
輝夜のF -月下の桃園- …… 609
Vの襲来 -今度は私が・・・- …… 624
Vの襲来 -御社の≫鉛≪- …… 634
Vの襲来 -輝夜VSナマリ- …… 642
Vの襲来 -ナマリVS勇者部- …… 649
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―墓参り編― …… 669
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―魔導編― …… 677
Kの来訪 -自称・完成型勇者との邂逅- …… 691
Kの来訪 ―輝夜と夏凜 パート1― …… 703

Kの来訪―輝夜と夏凜 パート2―……713
Kの来訪―輝夜と夏凜 パート3―……723
Kの来訪―輝夜と夏凜 パート4―……734
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―覗き編―……744
少女たちのM―私と彼の、微妙な関係―……760
少女たちのM―俺とアイツの曖昧な関係―……770
少女たちのM―煌月輝夜は男の娘である―……779
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―帰郷編―……788
少女たちのM―女子会 in the 温泉―……798
少女たちのM―樹、お歌の特訓をする―……808
少女たちのM―夢、追いかけて―……822
Vの襲来―Crash&Scrap―……837
Vの襲来―ニルヴァーナ―……849

Vの襲来 ―鍵の剣 錠の杖 ―……856
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―入院編―……869
少女たちのM ―三好夏凛の憂鬱―……880
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景 ―ウェディング―編―……889
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景 ―旅館編その①―……899
煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景 ―旅館編その②―……906
Vの再襲来-ＳｈａｐｅＳｈｉｆｔ-……915
Vの再襲来-再起動-……930
Vの再襲来-ＳＹＳＴＥＭ Ｊ.Ａ.ｉｄｏｌｌ-……941
Vの再襲来-真実-……952
Vの再襲来-睡蓮の君-……962
告げられるT-後遺症-……972
告げられるT-御社の目的-……987

EXTRA・1　お祝い事には特別な・・・・……997
EXTRA・2　『好敵手』と書いて〝親友〟と読む間柄……1007
EXTRA・3　勇者部副部長……1020

大切なお知らせ

誠に勝手ながら、当作品の更新を取り止める事に致しました。

理由は一つ。

三章同時進行がキツイ(泣)

自業自得なのは百も承知なのですが、これ以上続けようとすると、それぞれの章で使用する設定がごちゃ混ぜになってしまい、それはそれは大変な事態に陥る可能性があるので、こういった手段を取る事と致しました。

今後の予定なのですが、当作品のリメイク版をいずれ投稿する予定です。

タイトルは「契約者達への鎮魂歌 -Re・ｂｉｒｔｈ-」

なーみだのｒｅｖｅｒｓｅ♪

きっとRe・ｂｉｒｔｈ♪

はい、僕がサブライダーで一番大好きなバースのテーマソングの奴です。

バース、良いですよね・・・・
伊達さんバースも良いですけど、後藤さんバースも良い。
映画だと映司くんとかノブナガ氏とかも変身してたり、なんだかんだで変身者多いのもある種の魅力と言うべきか・・・・

何の話をしているのやら・・・・(我に帰る)

投稿が何時になるのかは不明ですが、必ず、戻って参ります。
運営に何か言われた場合は、もしかしたら、その限りでは無いかもですが・・・・・
場合によっては凍結させた当作品を復活させるかも知れないですが、今現在は、その可能性は低いです。
話が脱線に次ぐ脱線で、何が言いたいのか分かりにくいでしょうが、

つまり、簡単に言いますと、
これからもどうぞよろしくね♪

ということです！

以上！

以下、穴埋めの為の予告的な何か。

悪魔

人の願いを聞き、それを（時に歪んだ形で）叶える存在。

その際、悪魔は相手に対し対価を求める。

故に注意せよ。

悪魔との契約が、必ずしも、幸福をもたらすとは限らない事を・・・・

その男、何も持たざる者――

「夢も希望も、いつだって自分で見つけるモンさ。誰かに与えられるモンじゃあ無い」

その男、産まれながらの才持つ者――

「富も、名声も、なにもいらない。おれはただ、大切な人たちを護れれば、それで良いんだ」

その男、生まれ付いての運命（さだめ）に囚われし者――

「僕はもう、≫届かない一歩≪に嘆きたくない！だからっ・・・・・!!」

三人の物語が一つになる時、鎮魂歌（レクイエム）は奏でられる。

結城友奈は勇者であるファンフィクション

『契約者達への鎮魂歌-Re・birth-』鋭意製作中！

「役者は揃ったようだな・・・・さあ、祝うが良い!!新しい世界の誕生だ！！！！」Re・birthday

Ｃｏｍｉｎｇｓｏｏｎ……

○○ない死にたがりの章

戸塚輪廻は契約者である

過去のネタ帳あさってたら、面白そうなネタを見つけたのでリビルドして一作品創ってみました♪

よろしければお納めください。

七月四日追記――

あとがきの説明を少し変更しました。

僕の名は、戸塚輪廻。

何処にでもいる普通の少年・・・・・・だった。

西暦２０１５年７月30日

突如として人類粛正を始めた天の神は、自らの尖兵、バーテックスを降らせた。

既存の兵器群が通用しないバーテックスに、人類は成す術もなく蹂躙されていった。
そんな中、バーテックスに対抗できる力を持った少女たちが表れた。
人々はそんな彼女たちを『勇者』と呼び、称賛の声を上げた。
そして、僕もまた、『勇者』の力を獲得した少女たちの一人だ。
しかし、僕は男だ。
これにはちょっとした理由がある。
戸塚家には代々から伝わる古い本がある。
あの日、この本を使って僕は、男でありながら勇者の力を獲得するに至ったのだ。
そして、今――

「あれから三年・・・あ、四年だっけか？いやぁ、色々あったわさ～」
「何語なんだ・・・それは・・・」
隣に座る少女、乃木若葉が呆れ顔で突っ込みを入れる。
「突っ込んだら負けよ？負・け！」

「はぁ・・・」
若葉の隣、寄り添うように座る少女、上里ひなたがこれまた呆れ顔でこちらを見ている。
「ヘイ！そろそろ手伝いプリーズ！りっくん！」
遠くで鍬を振るう少女、白鳥歌野がこちらに向かって叫ぶのが見える。
「あいよー」
側に立て掛けていた鍬を持ち、畑に向かう。
「若葉、キミもどうかな？」
「うむ！では、やらせてもらおう」
予備の鍬を若葉に渡して、二人で歌野の元に行く。
畑を耕しながら、ここに至るまでの経緯を思い出していた。

故郷にて勇者の力を獲得した僕は、生き延びたみんなを護るために、その力を奮っていた。しかし、多勢に無勢。一人ではそう出来る事も限られており、絶対に護りたい、大事なたった一人の家族すらも護る事が出来ず、無力感に苛まれ、絶望

に身を沈めることになった。

その後、僕と契約した、自称『悪魔』のニック（僕が付けたあだ名）に半ば引き摺られる形で諏訪へと到着。そこで歌野たちに出会い、再起するに至ったのだった。

およそ二年程に渡る諏訪での生活、しかし、それも長くは続かなかった。

諏訪を守護する土地神の力が弱まっていたからだ。

諏訪の巫女、藤森水都の話によると、「諏訪は、四国の勇者たちを育成するための時間稼ぎをしていた」らしい。

「これまで諏訪を守ってきたこと、人々から希望の光を絶やさないでいてくれたこと、いろいろ感謝されちゃった・・・」

静かに、笑いながら、でも、ちょっと泣きそうになりながら、みぃはそう言った。

「次の襲撃はこれまでとは比べ物にならないくらいの規模になるそうです。あなたは元々部外者、これは諏訪の問題だから、せめて、あなただけでも・・・」

「うっさい　！んなモン知るか！全員で四国に逃げるぞ！」

神の力が通じない？

なら、悪魔の力だったらどうなのさ。

僕は、自分の持てる力の全てを総動員して、諏訪の人々全員を四国まで無事に送り届けてみせた。もちろん、歌野とみぃも一緒だ。

「あなたって・・・かなりむちゃくちゃね！」

「でも、おかげで生きてる・・・ありがとうございます！」

あのときの二人の笑顔は、今も僕の心に残っている。

『この笑顔のために、僕は何度でも戦おう』

諏訪から四国に到達したその日、僕は自らの心に、そう誓ったのだった。

「皆さ〜ん、お昼ご飯にしましょ〜！」

「お、みぃが来たな」

「なんだ、もうそんな時間だったのか・・・」

「ナイスタイミングよ、みーちゃん！」

自転車にお弁当を載せたみぃがやってきたのを見て、三者三様の反応を見せる僕たち。

レジャーシートにひなたも含めた五人で座り、みぃの持ってきたお弁当に舌鼓をうつ。
「はぁ～、やっぱりみーちゃんのお弁当　！スッゴク、デリシャス！」
「そんな・・・褒めすぎだよ、うたのん・・・　//」
「完全に同意。みぃは将来、良い嫁さんになるねぇ」
「およっ　!?およよよよお嫁さん!?そんなまだ早いよ私たち中学生なのにああでもりっくんは高校生でいやだからって」
「水都さん、水都さん。落ち着いてください。深呼吸、深呼吸」
ひなたに促されてすーはーすーはーと、みぃが深呼吸しているのを横目に若葉が一足先に昼食を終えた。
「ふぅ、ごちそうさま。ありがとう水都。良い昼食だった」
「はひぃ・・・どういたひまひて・・・」
「どうした、みぃ　？風邪でも引いた？」
真っ赤な顔でうつむくみぃの額に手を当てようとしたとき、
「わわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ　!!何でもない！何でもないよりっくん！私、大丈夫

だから！」

その手を捕まれ、寸でのところで阻まれてしまったのだった。

「んー、そう？なら良いんだけど・・・」

「え・・・えへへへ・・・」

なんとなく、ごまかすようにはにかんでいる感じがするが、風邪をひいているようにも見えなかったので、とりあえずお弁当の残りを掻き込む。

「さってと！今日も楽しく農作業！」

「イエス！ここを立派な畑にするわ！私たちの手で！」

えいえいおー！と歌野と共に勝どきを上げ、鍬を振るう。

側にはみぃが麦茶の水筒片手にこちらを応援してくれている。（ちなみに、もう片方の手は僕と繋ぎっぱなしなんだけど、いったい何時気づくかなぁ？）

諏訪にいたころから変わらない景色。今はそこに、若葉や他のみんなが混じる。

これが、今の僕の日常。
今度こそ護り通すと決めた、僕の大事な宝物。

戸塚輪廻くんについて
年齢：18歳
身長：１６１cm
誕生日：８月１日

年のわりに身長が低いのがコンプレックス。
代わりに身体を鍛えている。
戸塚家に代々伝わる悪魔との契約の書を使用し、悪魔『ニック』と契約。勇者の力を獲得する。
以後、その力で自身の護りたいモノのためにバーテックスと戦う。
使用武器は、両手の甲に装着して使うカギ爪。ニックの紅蓮の炎と併用して戦う。
うどんよりそば派。
記憶力がとても良い。

千の景色と白い夜

ぐんちゃん救済のための布石！
ちなみに小生はハッピーエンドが好きです。
ま、書けるかどうかはわかんないけどネ♪

それは、輪廻たち諏訪からの避難者が、四国に到着する少し前――

千景が勇者になった、という話は瞬く間に村中に広がった。
『あの』郡千景が勇者として自分たちを守ってくれる・・・と。
人は誰もが危機に陥ればプライドなんてかなぐり捨てて自身が忌み嫌っていた者にすら媚びへつらう。
そういうものだってボクは知っている。

だから、ボクだけは変わらないようにいよう。
きっとそれが、今のボクに出来るあの子の為の行為なんだから・・・

┼

バスから下りると、目の前に一人の少年が立っていた。
「おかえり、千景。香川はどうだった ？」
「枢木くん・・・」
昔と変わらない無邪気な笑みを浮かべて、彼――――枢木白夜は私を出迎えた。
今日、私が帰郷することを枢木くんは一体何時知ったのか、なんてことは聞くだけ無駄なので、素直に彼の問に答える。
「別に・・・・・・ああでも、うどんはおいしかったわ・・・」
「本当 !?良いなぁ、ボクも食べてみたい！」
「あなた、うどんより美味しいものを毎日でも食べられるじゃない」
彼の父、枢木誠一郎は現職の総理大臣。今は権限の全てを大社に渡しているらしいから、もはや名前だけの存在なのだが。
「昔みたいにはいかないよ。政権すらも大社に移しちゃったから、父さん、今は

ほとんど無職みたいなものだし」

「ふぅん・・・」

そうこうしている間に私の実家にたどり着く。

「さてと、じゃあね千景。後で家にも寄ってくれると嬉しいな」

手を振って駆けていく枢木くんを見送って、私は久しぶりに帰宅した。

―――――――――――――――――――――

枢木くんとの出会いは、およそ十年くらい前――

両親の間に確執が生まれ始めたころ、だったか・・・

否、違う。思い出した。私が影口を言われ始めたころだ。

一人、村の外れにあるハナミズキの樹の根元で泣いていたら、彼の方から話かけてきたのだ。

「どうしたの ？どこか痛いの？」

「べつに・・・・・・なんでもない・・・」

「なんでもなくないよ ！『ないてる女の子には手をさしだせ』って父さんも言ってたし！」

「・・・・・・はぁ ？」
真面目な顔で彼はそんなことを言ってきたのだった。
今でこそ思うが、彼は一体どんな教育を受けてきたのだろうか・・・。
その後も何かと私に付きまとう枢木くんに、私は遂に我慢が出来ず、
「あなたにはかんけいない ！もう、どっかいって！」
そう言って、突っぱねてしまった。
「う・・・・・・・」
少し、悲しそうな顔をした後、枢木くんは立ち去っていった。が、その直ぐ後、
「ねえ ！」
懲りもせずまた来たのだった。
「・・・・・・なによ」
「これ ！一緒にプレイしよっ！」
そう言って差し出してきたのは、携帯ゲーム機。
この時、私はゲームというものの存在を知ったのだった。
「なにこれ ？」

「ゲーム ！やったことない？なら教えたげる！」
「いや、まだやるって・・・」
「いよっし ！今日はノーコンでクリアしちゃる！」
「はなしをきいて ！」
二人の時間は瞬く間に過ぎ去っていき、いつの間にか夕方になっていた。
「楽しかった～ ！またやろうね♪ボクは枢木白夜。君の名前は？」
「・・・・・・・・・・郡千景」
「こおり・・・ちかげ・・・」
名前を言った瞬間、少しだけ、後悔したが、次の瞬間にはそれが杞憂であるとわかった。
「キレイな名前・・・・・・。ちかげ・・・だね。おぼえたよ ！」
屈託のない笑みを私に向けて、枢木くんはそう言ってくれたのだった。
「じゃあね、ちかげ。また明日、ここで」
「・・・・・・・・・・うん・・・・・・・また、ね」
それからというもの、私と枢木くんはよく二人で、このハナミズキの樹の根元で

遊ぶようになったのだった。

両親の様子を見て、枢木くんの家に行く。

しかし、私はその先でとんでもないものを見てしまうのだった。

「なに・・・これ・・・」

村中から『枢木邸』と呼ばれ、敬愛されていたお屋敷は見るも無惨に変わり果ててしまっていた。

「（お父さんが、枢木邸に行かないほうがいいって言っていたのは、このことなの・・・？）」

私の記憶にあるこのお屋敷は、いつだってキレイだった。

しかし、今目の前にあるのは、たくさんの落書きと張り紙で汚された赤レンガの塀に囲まれた、ぼろぼろの幽霊屋敷。

「いったい、なにが・・・」

「あ！やっほー、千景。早速来てくれたんだね♪」

驚き戸惑っていると、上の方から枢木くんの声が聞こえた。・・・・・上の方

？

「・・・・・・・・・・・・・・あなた、壁の上でなにしてるの ？」

「とび師の真似事。知ってる ？とび師」

「知ってる」

確か、建設現場で足場を組む人のことを指すのだったか・・・・・・・いやそんなことより！

「お屋敷、どうしたのよ。ぼろぼろじゃない」

「色々あってね～。あらよっと」

持っていたモップを器用に使い、塀の上から降りてきた枢木くんは、照れたように笑いながら言った。

「その様子だと、あの噂は聞いてないんだね」

「噂って・・・ ？」

「うーん・・・とりあえずさ、中入ろう ？多分、長話になるだろうし」

―――――――――――――――――――――

「父さんが、核エネルギー開発に力入れていたのは知ってる ？」

応接室に通されて開口一番の質問。
渡された紅茶を飲みながら、それに答える。
「知ってる。あなたがよく話してくれたから」
「・・・・・・・・・・バーテックスが降ってきたのは、核開発を進め過ぎたせいだって、そういう噂が流れているみたいなんだ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」
「今後来るであろうエネルギー問題を解決するための一大事業だったハズなのにね～・・・」
「まってよ・・・・・・何も本当にそれだけが理由ってわけじゃ・・・！」
「核とは古来より、『熱かい悩む神の火』と呼ばれ、神にしか扱えない代物とされてきた」
唐突になにかを語り始めた枢木くん。
彼はいったい何を言っているの・・・？
「大社に務める人の中には、父さんの知り合いがいてね、なにかと『お世話』になってるんだよ。この話も、その人から教えてもらったことなんだ」

「なにを・・・」
「天の神が人類を粛正しようとしたきっかけは、『人間が神に近付こうとしたから』だそうだよ」
「それが・・・なに ？」
「わからない ？」
枢木くんが、今まで見たこともないような、うすら寒い笑みを浮かべて、可能性の話をする。
「神サマはどうも、人が核エネルギーを自在に操れるようになるのが気にくわないらしいよ？だって、核――つまり『熱かい悩む神の火』を操れるのは神サマだけだからね」
「だからって・・・・・だからって、枢木くんたちが悪いわけじゃない ！」
「でも、生き残った市民の中には、それを信じている人もいる」
「っ ！」
「伝聞というものは歪曲する。どこをどう聞き間違えたのかはわかんないけど、少なくとも、このあたりでは、『父さんのせいでバーテックスが人間を襲うように

なった』らしいよ」

「・・・・・・・・・・そんな」

ひどい話だ。

今まで散々『応援している』だの『この村の誇り』だのとたくさんの称賛の言葉をかけてきたくせに、何かあった途端にこの手のひら返し・・・！

「今さら気にするようなことじゃないけどね～」

しかし枢木くんはどこ吹く風。全く気にも止めていないみたいだった。

「・・・・・・・・・・あなた、それで良いの？」

「あんな連中の言葉、耳を傾けるだけ無駄だもん。それよりもボクは千景の話が聞きたいなぁ♪」

「・・・・・・・・・・もう帰る」

昔と全く変わらない、その能天気さに呆れ果てた私は、枢木くんの静止も聞かずにお屋敷から出ていった。

そして、家に帰る途中、

「あなた・・・郡さん？」

かつて担任だった女性教師に声をかけられた。
「どうしてこんなところにいるの？みんな、あなたの家の前で待ってるのよ」
「え？」

教師に促されるまま家まで戻ると、たくさんの人が家の前で待っていた。
「あ！勇者様だわ！」
一人が私に気付き、その声をきっかけに全員が私の元に集まってくる。
私を虐げてきた人々が、こぞって私にすり寄ってくる。

その裏で、枢木くんを苦しめているくせに。

クラスメイトが私に許しを乞う。
同じ口で柩木くんにひどい言葉を浴びせてきたくせに。

商店街の店主たちがぜひうちの店を利用してくれ、と両手をすり合わせ媚を売ってきた。
柩木くんには、態度をがらりと変えるくせに。

主婦をはじめとする数多の人々が、私をこの村の誇りだと褒めちぎる。
かつてそれを言ってきた柩木くんには、裏切り者だと罵るくせに。

「（ああ・・・そうか・・・）」

私は、納得した。
枢木くんは知っていたのだ。
人間が、こういう生き物だということを。
「（だから、あんな態度だった・・・）」
納得した瞬間、私の胸に込み上げてきたのは・・・
「うおっ、なにこれぇ ？なんかのお祭り？」
その一言が聞こえた瞬間、私への称賛の声が途切れた。
声の主が誰なのか、見なくたってわかる。
「あ、千景～。よかったぁ、まだいたよ」
人混みをかき分けてやってきたのは、やはり枢木くん。
「ハイこれ。冷凍カツオ ！勇者のみんなで食べて欲しいな♪」
そう言って渡してきたのは青いクーラーボックス。
多分この中にカツオがあるのだろう。
「・・・・・・・・・別に、無理して渡してくれなくても」
「いーのいーの ！こっちはこっちでどーにかできるから。だから気にせず持っ

てって・・・」

その時、誰かが叫びを上げた。

「人殺し　！」

、と。

その声を呼び水に、枢木くんを糾弾する言葉が広がっていく。

「・・・・・・・・・・」

枢木くんは、それを黙って聞いているだけ。

「このっ・・・・・・人類の敵めぇ　！」

ついに、というべきか、とうとう、というべきか、枢木くんに向かって石を投げつける者が現れだした。

一度投げつければ二度も三度も同じこと。終いには数人がかりで枢木くんに向

かって石を投げつけだした。
「勇者様はこちらに　！」
私はその前に誰かに手を引かれて、枢木くんから引き離された。
「（これが・・・今の枢木くんの有り様・・・）」
村中の人間に忌み嫌われ、蔑まれる日々。
この光景を何処かで見たことがある。
「（ああ、そうか・・・これは、かつての私だ）」
あそこで石を投げられているのが、かつての私。
今、こうしてそれを傍目で見ているのが、かつての枢木くん。
「（なら・・・・・・私が、かつてあの場所にいた私がするべきことは・・・！）」
私は布袋に入れたままの大鎌の柄で、地面を叩いた。
大して大きくもない乾いた音は、それでも、群衆を黙らせるには十分だった。
「皆さんに・・・・・・訊きたいことがあります・・・」
皆の視線が集まる中、私は一つの問いを投げ掛ける。
「・・・・・・私は、価値のある存在ですか・・・　？」

この問いに意味なんて無い。今、目の前で行われていたことを思えば、返ってくる答えなんて容易に想像できるからだ。
だからこれは、ほんの前降り。
私の本題は、答えの後にある。
私の問いに人々は怪訝な顔をして、やがて誰かが答えた。
「もちろん、だってあなたは勇者様なんだもの」
続いて似たような意味合いの言葉が、私に浴びせられる。
わかっていた。こうなることくらい。
彼らは、私というみこしを担いでいるに過ぎない。
そこはかつて、枢木くんのいた場所。
今は、私の場所。
私と枢木くんの許しの一つもなく、彼らは勝手にすげ替えた。
なら、一つくらい私の願いを聞き入れてもらってもバチは当たらないはずだ。
「だったら――――もう、枢木くんには関わらないであげて・・・！」

その一言で、場の空気が凍り付いたのが、肌で理解できた。
でも、もう言ってしまった。覆水は盆に帰らない。しかし後悔は無い。
なぜなら彼らは、勇者を担ぐために勇者の願いを聞き入れなければならないから。
そうしなければならない理由があるから。
沈黙する人混みを無視して、枢木くんの側に行く。
「・・・・・・・・・千景」
「大丈夫、安心して。今度は私が、あなたを守るから」
これが、私の決意。枢木くんへの恩返し。きっと、枢木くんは快く受け取ってくれる。
だから――――
「ありがとう、千景」

「でも、別にいらないかな ？」

そんなあっさりと断られるなんて、思いもしなかった。

結局その日は家に泊まることなく、すぐに香川に帰った。

「ふざけてる・・・ふざけてるっ・・・ ！」

なんだってあそこで、あの流れで断わるのか、意味がわからない！

思い返せば、枢木くんはいつだってマイペースなんて言葉では言い表せないくらい、自由奔放だった。

「育てた親の顔が見てみたいわ ！」

それなら、ニュースでも見る？という声が聞こえてきた気がして、ますます腸が煮えくりかえる。

「――――かげ」

枢木くんの性格からして、決して私のことを馬鹿にしているわけではない。それは理解している。

「でも、だからこそむかつく・・・ ！」

「千景」

いけない・・・・・・そろそろ切り替えないと・・・。

「おおーい、千景 ？」

高嶋さんに心配をかけさせるわけにはいかない。

でも――――

『別にいらないかな？』

「っ !!あああああああああ!!もう!!腹立たしい!!」

「っ・・・す・・・すまない、千景」

「あ・・・」
いつの間にか目の前に、乃木さんがなんだか少し申し訳なさそうに立っていた。
どうやら気がつかない内に丸亀城についていたようだ。
「連絡しようと思っていたのだが、ちょうど、帰ってくるのが見えたから・・・」
「・・・・・・いえ、こちらこそ、ごめんなさい。別に乃木さんに怒っていたわけではないの。だから謝らないでほしい」
「ン・・・・・・それなら、いいんだ」
「それで ？一体何の用なの？」
「ああ、そうだ ！大社から我々に、緊急の依頼が来たんだ」
真面目な表情を浮かべて、乃木さんは言った。
なんでも、この四国に向かってくる生命反応を確認したらしい。
そこで、私たち勇者がその調査に向かうことになったのだという。
「わかったわ・・・すぐに準備する」
「重ねてすまない。戻ってきたばかりなのに」
「気にしないで。あと、これ。知り合いからのお土産」

そう言って乃木さんに柩木くんからもらったクーラーボックスを渡す。
「うおっ！なんだこれは？中になにが・・・？とにかく、その人にはありがとうと言っておいてほしい」
「感謝なんて・・・するだけ無駄だと思うわ・・・」
「？・・・それは、どういう・・・」
「それじゃ、先に行くから」
「えっ・・・あっ・・・ちょっ・・・待ってくれ！これはどうすれば!!」
乃木さんの静止の声を無視して自室に荷物を置きに行く。
そのまま変身して、集合場所である大橋まで跳んで向かう。
「（いいわ、あなたがそういう態度を取るなら・・・！）」
私は決めた。勇者として大成することを。
そうしてたくさんの人から称賛されるようになれば、あの頑固者もきっと折れるはず。
「（そのためには、もっともっとバーテックスを狩らないと・・・！）」
決意を胸に、私は大橋にたどり着いた。

「（やってやる・・・枢木くんを助けるのは・・・私だ！）」

それが、間違いだと気付くのは、もう少し先の話――――

枢木白夜について
年齢：14才
身長：１６５㎝
第97代日本国総理大臣・枢木誠一郎の息子。
手先が器用で、特技は裁縫と掃除。
ゲームは嗜む程度に得意。
千景とは幼いころからの友達。

自他共に認めるほど、自由奔放。
麺類はそこまで好きじゃない。どっちかというとご飯派。

諏訪と輪廻と農作業

諏訪でのお話パート１！
うたのんとの出会いのお話です。
それでは、どうぞ、お納めください

「これで・・・フィニッシュ　！」
歌野の鞭が最後のバーテックスを打ち、今日の戦闘は終了した。
「や、お疲れ様だね。歌野」
「りっくんもお疲れ　！さあ！今日もレッツ農作業！」
「やれやれ、歌野は疲れ知らずだねぇ」
諏訪に流れ着いてはや二年、もう少しで三年になる。
最初は僕を快く思っていなかった諏訪の人々も、今では軽口を言い合えるような

仲になった。
歌野とみぃは成長して、かわいらしくなった。
僕はというと、あの頃となんら変わりないように思う。
特に、身長。
なんだって１６０超えたくらいでストップするかね。親父だって１７０はちゃんと超えていたぞ。じいちゃんは知らない。僕も今年で18になったというのに平均すら下回るとはどういう了見なんだ。
「まあまあ、私はそんなりっくんもナイスで好きよ」
「僕は嫌いなの。というか、心を読まないでよ」
「だってりっくん、フェイスに出やすいんだもの」
なんだそれは。顔に出やすいだろーが。
「うたのーん。りっくーん」
「あ　！みーちゃん！」
「やっほ、みぃ。今日の襲撃も乗りきれたよ」
そうこう話しているうちに、みぃが僕らの下に走り寄ってきた。

歌野とみぃ、二人には言葉で表し尽くせないくらいにお世話になった。
「（だから、二人のこともこの諏訪も、僕が守るんだ。今度こそ・・・！）」
再度、決意を固めていると・・・
「・・・・・・オイ輪廻　！」
「うぉっ　！びっくりしたぁー・・・」
いきなり後ろから声をかけられた。
黒いシャツとジーンズ、赤いフード付きパーカーをラフに着こなしてるこの男の名前は『ニック』。
僕と契約した悪魔だ。
人間の姿をしているが本人いわく、「その方が都合が良い」からだとか。
「出たわねデビルマン　！相変わらず神出鬼没なやつ・・・！」
「黙ってろ土女」
「つちっ・・・　！」
「ハイハイ、ステイだよステイ。歌野もニックもケンカしなーいの」
まったく、顔を合わせればすぐこれだ・・・。

やっぱ神サマ（の加護を受けた人間）と悪魔だから水と油みたいな関係なのかな？

みぃなんか萎縮しちゃって僕の後ろに隠れてるし。

「で、何の用？僕はこれから歌野と一緒に畑に・・・」

「オマエ、いつまで此処にいるつもりだ？」

「!!」

みぃの身体が強ばったのを背中越しに感じた。

しかし、気付かないフリをして、ニックに問いかける。

「・・・・・・・・・どういう意味？」

ニックは鼻で笑って続ける。

「ハッ・・・分かってんだろ？此処はもう持たない」

「――――――」

「今ならまだ間に合う。とっとズラかるぞ」

「やだよ」

僕が拒絶した途端、ニックが僕の胸ぐらを掴みかかってきた。

「りっくん　！」
「ニック　！りっくんに何してるの！」
「・・・・・・・離してよ」
「断わる。このまま連れていく・・・　！」
「だから嫌だって　！」
ニックを振り払い、その場から走り去る。
「（ふざけんな・・・！僕はもう二度と・・・二度と失う訳にはいかないんだ・・・・・・!!）」
しばらく走ると、いつの間にか蕎麦畑が一望できる高台に来ていた。
ここは僕のお気に入りの場所の一つ。
だから、いつの間にか来てしまっていたのかもしれない。
その場に座り込み、蕎麦畑を眺めながらぽつぽつと、思いだしていた。
諏訪に来たあの日のことを――

―――――＋―――――

故郷を滅ぼされ、すべてを失った僕は、ただ呆然と生かされていた。

「オイ輪廻 ！いい加減自分で歩け！」
ニックに背負われて、どこかに向かっている。
食事にしたってニック任せ。
でも、それもどうでもよかった。
ただひたすらに、何もしたくなかった。
とにかくさっさと死にたかった。
「なんで僕を生かしておくのさ」
「オマエには生きていてもらわなきゃ困るんだよ ！オレがこちらに存在し続ける為に！」
なるほど、それは確かに僕に死んで欲しくないよね。
でも、そんなのどうでもいい。
「どうだって良かねェんだよ ！いいから来い！」
「背負われてる人間に言う ？あと、なんで僕の考えてることがわかるのさ」
「うるせぇ ！何もしねェなら黙ってろ！」
「・・・・・・・・・・」

そうやってニックに背負われ運ばれること数日。
僕たちはバーテックスに襲われた。
「チッ――――よりにもよってこんな所でか・・・　！」
ニックが悪態をつく。その背中をどうしてか、僕は踏み台にして跳躍していた。
「――――――――」
「ッ　!!オイ輪廻！」
両腕に僕の武器たるカギ爪付きの小手を装着し、バーテックスを切り裂いていく。
ああ、なんだって僕はこんな無駄なことをやっているのかな。
死にたかったならこんなに抵抗なんてしなければいいのに。
なんで――――

なんでこんなに、身体中が熱いんだ。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！　」

叫び、跳び、切り裂く。

自分のことなんてお構い無しの無茶苦茶な戦法。

今、この身体を動かしているのは、きっと、僕じゃない誰かなんだろうな・・・

なんて、まるで他人事の様に考えながらも、バーテックスを惨殺していく。

そんなだったから、僕は背後から近づくバーテックスに気付かなかった。

「輪廻　！後ろだ！」

「っ　！」

ニックの声に振り向くが、時すでに遅し。
バーテックスの体当たりをまともに喰らい、吹き飛ばされる。
「ガッ　！」
たったの一撃で僕の身体はズタズタにされた。
「（あ、これは死んだな・・・）」
やはり他人事の様に考えている。自分のことなのに。
でも、これで全部終わりにできる。
そう思って成り行きに身を任せていたら――――

「ハアアアアアアアアアアアアアア！！！！　」

風を斬る音と共に目の前のバーテックスが朽ちる様に消失していった。
「・・・・・・・なに・・・が・・・　？」
「キミ　！大丈夫？」
いつの間にか、鞭を持った少女が僕の目の前にしゃがみ込んでいた。
心配そうにこちらを見る彼女の瞳を見ていると、少しだけ、穏やかな気持ちになったのを今でも覚えている。
僕が少女に何か言おうとしたその時、
「輪廻テメェ　！」
突如として現れたニックに頭をおもいっきり蹴飛ばされた。
「ごふっ」
「!?!?!?!?」
あまりのことに少女は目を白黒させて、ぽかーん、としている。
そんな彼女のことを無視して、ニックは僕の首根っこを掴んでがっくがく揺らし

ながら叫ぶ。

「死ぬなっつってんだろうが　！テメェが死んだらオレがこの世に現界し続けらんねぇんだよ！」

「あ・・・・・・・・ま・・・・・・・・ちょ・・・・・・・・」

さっきの戦闘でのダメージ＋ニックに蹴飛ばされたダメージ＋揺さぶりにより、大真面目に死にかける僕。

それを見かねたのか、それともようやく思考が現実に追い付いたのか、(多分、後者)少女があわててニックを止めた。

「ストップ　！ストーップ！それ以上やったら彼、本当に死んじゃうから！」

「・・・・・・・・あ」

「――――――――――」

ちなみにこの時点で僕の意識は、ほとんど吹っ飛びかけていた。

「早くこっちに　！安全な場所で治療しましょう！」

「・・・・・・・・チッ、一理あるな」

少女に導かれつつ、ニックは僕を運ぶ。

その背に揺られる僕は、今までギリギリ保っていた意識を、ようやく手放すことにしたのだった。

これが、僕と歌野のファーストコンタクト。
今だから思うけど、なかなか刺激的な出会い形をしたと思う。

「りっくーん、どこにいるのー？」
みぃの呼び声で我に帰る。
どうも少し寝ていたみたいだ。
「みぃ、ここだよ」
「あ、りっくん。よかった、やっと見つけた」

とてとて、と走りながら僕の隣にやってくる。
息を整えて僕の隣に座るみぃを眺めていたら
「な・・・なにかな？私の顔になにかついてる？」
顔を赤くして、しどろもどろしてるみぃはかわいいと思う。
歌野なら多分、同意してくれるかもしれない。
「別に？ただ・・・二年もすれば、人ってこんなにも変わるモンなんだなぁって思ってね」
「？？？」
「みぃはかわいいな、って話」
僕がそう言うと、みぃは顔を真っ赤にして大慌て。
うん、やっぱりかわいい。
「かわっ!!そ・・・そんなことっ！そんなことないって！私なんか別に・・・」
「僕は本気だよ？」
「っ！――――」
さらに顔を赤くしたみぃが、ふと、半眼になって僕をにらむ。

「りっくん、それ、うたのんにも言ってるでしょ？」
「あ、バレた？」
「むううう!!やっぱりからかってる！りっくんのいじわる！」
頬を膨らませて、みぃが両手でぽかぽか叩いてくる。かわいい。
「あはは♪ごめんごめん。でも、僕はホントに本気だよ？」
「・・・・・・うたのんのことも？」
「とーぜん」
「・・・・・・・・・『二兎を追う者は一兎をも得ず』ってことわざ、知ってる？」
「僕の脳内辞書には無いねぇ」
「それ、絶対壊れてる」
「あれ？知らないの？」
おもむろに立ち上がり、みぃの方を振り返りつつ、告げる。

「僕はもう、ずっと前から壊れてるよ。大事なモノをなくした、あの日から・・・ね」

その時のみぃの表情は、とても、悲しそうだった。

これは、諏訪が崩壊する前の記憶。
今の僕を形作る上で必要不可欠な、大事なモノの一つ。

ニックについて
CV・三浦涼介（あくまでも個人的なイメージ）
身長・１７６㎝
輪廻と契約した悪魔。

口が悪く、性格も少しひねくれている。
が、契約した相手にはそれなりに敬意をはらう。
悪魔は普段、別次元に存在しているが『契約の書』を使って契約した人間を通して、此方の世界に自身を投影している。
その為、契約を切られると悪魔は存在を保てなくなり、消滅してしまう。
（本体は別次元に存在しているので死ぬ訳ではない）
好物はアイス。
冬だろうとお構い無しによく食べている。

樹海と勇者と輪廻の初陣in四国

親知らず抜いた後の違和感を抱えたまま、書いていたせいで、キング・オブ・雑推考!!

それでも笑って許してくださる優しい方々だけ、どうぞお納めください。

僕らが諏訪を出て、四国に移住してから1ヶ月くらい経った。

その間、僕はほとんど病院のベッドに縛り付けられており、歌野とみぃも参加したという勇者の慰安旅行に行くことができなかった。ちくしょうめぇぇぇ・・・・・・

そして、歌野たちが帰ってきて半月くらいした時、ついに僕ら諏訪組（というかむしろ僕）の、四国での初戦闘の日がやってきたのだった。

「ここが樹海かぁ～・・・」

「こんなに木々が生い茂っていたら、下まで日光が届かないから、作物が育ちそ

うに無いわよね」
「キノコならどうかな ？育ててみたいって、この前言ってたよね？」
「ナイスアイデアよ ！と、言いたいけれど、こうも空気がカラッとしていると、さすがに無理でしょうね」
「テメェらこんなとこまで来て農作業の話かよ ！」
ニックに突っ込まれたので会話を一旦やめる。
「ニックもこっち来れるんだ ？」
「ハッ・・・諏訪の土地神に交渉の仲介させて、オレもこっちに入れるようにした。その方が都合がいいからな」
「相変わらず抜け目無いねえ」
さて、そろそろ真面目になろう。
「敵の数が、これまでの比ではありません・・・」
「そうなのかい ？」
「はい・・・・・・今までの 10倍以上かと・・・」
伊予島クンが僕の問に答える。

なるほど、あの程度で多いのか・・・

「確かに、この前の時よりもかなり多いわね」

「なんで歌野が知って・・・・・・あ、そっか。旅行前の戦いは歌野も参加したんだっけか？」

「ええ、あのときは杏さんの作戦勝ちだったけど・・・」

「そうだぞ！タマのあんずが大！活！躍！だったんだぞー！」

「もうっ、タマっち先輩ったら・・・」

やれやれ、二人の仲が良好なのは何よりだね。

「今回も私が先頭に立つ」

「あ、待ってください！若葉さ――――」

伊予島クンの制止も聞かずに、若葉が飛び出していった。おいおい、大丈夫かぁ？

「・・・ん？なんだか敵さんの動きが変じゃない？」

「まずいです・・・・・・若葉さんが敵に囲まれています！」

なるほど、突出してきた奴から叩く寸法ね。バーテックスも知恵が付いてきた

じゃないの・・・・・・！

「なァんて ！感心してる場合じゃない！」

急いで彼女の元へ向かおうとして、

「オイ輪廻 ！向こうだ！」

「えっ !?」

ニックの警告に、若葉の方とは別の方向を見ると、バーテックスの群れの半分が神樹様の方へ向かっていた。

「半分が一人を引き付けて、もう半分が本命を狙う・・・・・・なんだか連中、人間じみた作戦を練ってきてるなぁ」

「感心してる場合かよ !?どうする？」

「でも神樹様の方に向かっている連中は、いつもなら全員で相手をしている数よ !?」

「だからって、若葉ちゃんをほっとけないよ ！」

「――――――」

こうやって、言い合いをしている合間にも、バーテックスは神樹様へ向かって刻

一刻と迫っている。

なら、するべきことは、ただ一つ。

「歌野、事後処理は「イヤよ」ですよねー・・・」

「え　？戸塚さん？何をする気ですか!?」

「ん　？いやなに、別になんでもないよ、ただね・・・・・・」

「目には目を、歯には歯を、物量には物量をってことさ」

「？？？　どういう意味だ　？」
珠子はまだ言ってる意味を理解できていないみたいだ。
他のみんなは、なんとなく理解できたみたいで、心配そうに僕を見る。
「戸塚くん、あなた何をするつもりなの・・・・・・・　？」
「一人でなんてだめだよ　！私も行く！」

「大丈夫大丈夫、僕の精霊は数だけなら、郡クンよりも優秀だから・・・・・・・てな訳で!!」

「いっちょやったろーじゃん！『千疋狼（せんびきおおかみ）』!!」

僕が降ろした精霊『千疋狼』は、本来の伝承だと、夜間に狼の群れに襲われた人間が木の上に登り、狼たちが梯子のように肩車を組んで樹上の人間を襲おうとするが後一歩で届かず、狼が自分たちの親玉の化け物を呼びつける、というもの。

しかし、ニックとの契約によって引き出したこの力は、本来の伝承を歪め、狼についての様々ないわく、本来の生態等をミックスし、『孤独な郡狼』という偶像を造りあげて、それに当てはめた。つまり、これを降ろした僕は———

「千人に分身できるってわけさ　！」

見渡せば、樹海の至るところに僕。
その数、およそ千人。
「ええ　！分身!?輪廻くんは忍者だった!?」
「・・・・・・七人御先より多い　!?」
「どっひゃ～・・・・・・・・ぶっタマげたなあ　!!」
「凄い人数・・・・・・これなら、突破できるかも　？」
みんなが驚く中、歌野は渋い顔で僕を見ていた。
「もう、りっくんは・・・・・・無理だけはしないでね　？」
「ごめんね　？後で畑仕事手伝うから、ね？」
「・・・・・・・・・りっくんの野菜炒めも追加」
「あいよ。野菜の用意は任せるね」
それを合図に、千人の僕が一斉に飛び出す。

半分は若葉の元へ。
もう半分は神樹様の防衛へ。
「さて、がんばるさ」

孤軍奮闘する若葉の元へ到着した時には、すでに彼女はボロボロだった。
「大丈夫かい？」
「輪廻・・・・・・なぜ来た？」
「友達を助けるのに理由がいるかい？」
「っ！・・・・・・・すまない」
「謝罪はいらないよ。代わりに、後で畑仕事を手伝うくらいで許してあげやう」
若葉に笑って答える。
さて、この状況を打開せにゃな！
意気込み、バーテックスを掃討していく。
進化体はどこにも見当たらず、通常個体だけだったから、なおのことサクサク駆逐できていた。

『このまま押しきれる・・・！』
誰もがそう思った。
だからこそ、油断していた。
「避けろ ！輪廻ェ！」
ニックの叫びで、ようやく僕らは気付いた。

それは言うなれば、灼熱の津波だった。

炎の壁が、僕らめがけて迫ってきていたのだった。

「な ！・・・・・・いつの間に!?」
「避けるのは間に合わない・・・ならっ ！」

ここで僕は分身の自分たちで若葉たちを庇った。
炎の壁はバーテックス共々僕たち全員を巻き込み、辺り一帯を焼き払ったのだった。

――――――――view change:歌野――――――――

炎が消えた後、そこに無数のりっくんはいなかった。
代わりに・・・
「そんな・・・あの炎は、バーテックスを燃やさないというの !?」
千景さんの声が聞こえる。
辺りを見れば、樹海も同じく燃やされた痕跡が見当たらない。
「さっきのファイア、どうやら人間だけを燃やすみたいね」
「そんな・・・・・・・・・そうだ、輪廻さんは !?」
そう、りっくんの分身が全部消えた。ということは、りっくんの精霊が解除された、ということ。
「・・・・・・りっくんが危ない !」
多分、若葉のところに本体のりっくんがいるはず。急いで向かおうとしたけど、

「駄目です！まだバーテックスが残って・・・・！」
「くぅ！どいて！」
バーテックスは神樹様に向かおうとはせず、全部こっちに向かってくる。これは・・・
「私たちを足止めして、若葉とりっくんをレスキューさせないつもりね・・・・・・！そうはいかないんだからっ！」
迫るバーテックスを蹴散らしながら進む。
しかし、数で勝るバーテックスの群れを突破するのは、容易なことではなかった。
「だからって！負けてらんないのよ！」
後から思えば、この時の私は、少し冷静ではなかった気がする。
だから、気が付かなかった。
「？・・・・・・高嶋さん？」
もうすでに、事態が悪い方に傾いている、ということに・・・・・・
――――――view change:輪廻――――――
「輪廻！しっかりしてくれ！輪廻!!」

身体が焼けるように痛い。熱いじゃない、痛い、だ。
いやはや、火傷ってひどいものだと熱いよりも痛いって感じるんだねぇ。
先ほどの炎を、僕は分身で防いだ。それにより、分身が全部消えた。
消えるまでに分身が経験したことは、本体にフィードバックされるのが、『千疋狼』の能力の一つ。
その『経験したこと』というのは、分身が負ったダメージも換算されるため、現在僕は生きているのが奇跡みたいな大火傷を負っている。
「若葉・・・・・・・・・・・・無事かい・・・・・・・？」
開くのもやっとな口を開いて、若葉の無事を確認する。
「ああ・・・・・・・ああ！お前のおかげで私は平気だ。だから輪廻、お前はもう休め。あとは私が・・・」
「・・・・・・・・・・・若葉」
これだけは言っておかなくちゃいけない。
そう思った僕は、痛みで悲鳴を上げている身体に鞭打って、若葉に告げる。
「ねぇ、若葉・・・・・・・・・キミ独りで・・・・・・・・・抱えちゃあ・・・・・・・・・

ダメだよ・・・・・・・・・・？」

「？輪廻、お前は何を言って」

「怖いことも・・・・・・・苦しいこと・・・も・・・・・・・・・みんなで背負えば・・・・・・・・・・・重くない・・・・・・・から」

ああ、まずい。意識が遠退く。歌野に野菜炒め作ってあげる約束、したのになぁ。

みぃなんか、めちゃくちゃ泣くだろうし、やばいなぁ。

というか、今現在進行形でヤバいのか。バーテックスに囲まれているし、若葉は僕を抱えて戦っているから、いつものように戦えない。早いとこ、僕を捨ててしまえと言おうとした、その時、

視界の端に桜色の流星が見えた。

ああ、うん。これなら大丈夫、かな？
しばらくすれば歌野たちも来るだろうし。
問題は、それまで僕の意識が持つかどうか。
あ、違う。持たないのはむしろ生命の方だ。
いやはや、まさかマンガにあるような「オレはもう持たない・・・」ていうの、アレを体験することになるとはなぁ。
まあ、以前とは違って今回は意味のある死だ。
それにみんなならきっと、僕の屍も乗り越えて、進んでいってくれるさ。
自己満足に満たされて、僕は意識を手放した。

『オイ輪廻、テメェ何やってやがる』
否、修正しよう。手放そうとしていた。に。
『前にも言ったはずだ。お前に死なれたら困るんだよ。だから――――』
やれやれ、今回も僕は死ねないのかい？

困ったなぁ、後でまた歌野とみぃに怒られるじゃないか。
『知るか。自業自得だろうが』
へいへい、でもまあ、みんなを悲しませるよりかは、はるかにマシか。
暖かい暗闇に意識を揺蕩わせて、僕は静かに眠りについた。

戸塚輪廻についてその二
得意料理は野菜炒め
むしろ野菜炒めしか作れない。
他のものを作ると、何故か暗黒物質になる。
しかし、彼の作る野菜炒めのレパートリーがかなり豊富なため、事情を知らない人々からは「料理上手」として扱われてしまう。
しかし、輪廻本人はその事を特に気にしてはいないようだ。

炎と蘇生と〝不〟和雷同

（親知らず抜いた後の痛みと違和感が消えて）身体が軽い・・・こんな気持ちで執筆するの初めて・・・！

ということで前回の続き！

どうぞ、お納めください

樹海化が解けた後、輪廻と友奈は救急搬送された。

二人とも、幸い命に別状は無いとのことだが、輪廻は予断を許さない状況が続いているという。

「これが・・・あなたの引き起こした結果よ・・・」

友奈のお見舞いに来ていた千景に、そう言われた。

「なぜこんなことになったのか・・・あなたは分かっているの・・・？」

「分かっている。全て私の無策と突出が原因だ・・・」

「違う・・・・・・！」

私の答えを、千景は否定した。あなたは何も分かっていない・・・と。

「一番の原因は、あなたの戦う理由にあるのよ！」

「戦う、理由・・・？」

「あなたはいつもバーテックスへの復讐のために戦っている・・・・・・だから、怒りで我を忘れてしまう・・・・・・周りの人間を危険に晒しても、気付きさえしない！」

千景の言っていることの、意味が分からなかった。

復讐のために戦っている・・・？

怒りで我を忘れてしまう・・・？

「あなたにリーダーの資格なんて無い！」

ああ、全く持ってその通りだ。私もそう思う。

だが、それならば、私はどうすれば良い？

一体でも多くのバーテックスを殺す。それが、奴らに無惨にも殺された罪なき人々への報いだと、そう信じて戦ってきた。なのに――――

「（それを否定されたら、私は、いったい何のために戦えば良い・・・・・・？）」
答えは、見つからなかった。
――――――view, change:輪廻――――――
『輪廻――――起きてください、輪廻』
「んみぅ・・・・・・だぁれ？」
呼び声に応えて起きてみると、僕は炎の中に揺蕩っていた。
ああ、なるほど。ここは夢の中か。
夢の中なのに起こされるとか、矛盾してるなぁ。
『すみません。何分、このような場所でしか貴方にお会い出来ませんですから』
おや、心を読むのかい。喋らなくて済むのは楽で良いけど、ちょっと気味が悪いねえ。
『重ね重ね、すみません』
「謝ってばっかりだね、別にいいけど。ところで、キミ、誰だい？どこにいるの？」
『貴方の目の前に』

いつの間にか、目の前に黒い影がいた。人の形をしておらず、なんというか、大型犬みたいなシルエット。

何者なのかわからないけど、少なくとも敵ではないようだ。

『時間がありませんので、手短に伝えます』

ういっす。

『もうお気付きかと思いますが、私は貴方に力を貸している土地神です』

まじか。全然気付かなかった。

『神樹となった者たちから知らせがきました。次の戦いは、前回よりも激しいものになる、と』

なるほど、そいつはヤバいね。あと、さっきのスルーですか。

『神樹は私に貴方への更なる助力を命じました。ですが私は「OK任せて。僕たちがなんとかするさ。だから力を頂戴」・・・・・・は？』

「言ったろ？僕たちがなんとかするって。だから早く更なる力を頂戴よ。神樹様からも言われたんでしょ？」

『・・・・・・本当に、よろしいので？』

「護れなくて辛い思いをするのは、もう嫌なんだ。だから僕は、もっと強くならなくちゃいけない。僕のこの手が、届く範囲にいる人たちくらいは、護れるように」

『・・・・・・・・・・分かりました。その決意に満ちた瞳、信じさせて頂きます』

「ありがと」

『では、これにて。そろそろ目覚めの時間です』

土地神様に言われて、身体が浮いていく感覚を味わう。

どうやら意識が覚醒していってるみたい。

あ、そうだ。

「ねえ？土地神様！もしかしてあなたのお名前って大――――」

そこまで言いかけて、僕は目覚めた。

――――ｖｉｅｗ，ｃｈａｎｇｅ:歌野――――

突然だけど、私の住まいの話をしよう。

といっても、使っているのは若葉たちと同じ、丸亀城の側の寮の一室。だけど若葉たちの部屋と違って少し広い。

なぜならば。
私とみーちゃんとりっくんの三人でこの部屋に一緒に暮らしているからだ！
なんでも、大社の人が業者さんに頼んでこの部屋だけ少し大きく改装してもらったのだとか。
それを知ったりっくんが「でかくするくらいなら部屋をもう一つ増設してよォ!!」と叫んでいたけど、正直に言って一緒の部屋にしてくれてよかったと思っている。
りっくんは放っておくと自分のことを一切しない。
最近でこそ、一人でもちゃんとご飯を食べているけども、出会ったころなんかは睡眠すらもしようとしなかったほど。
そんな彼を救ったのがみーちゃんなんだけど、その辺りはまた別の機会に。
ではなんでこんな話を始めたのかというと、
「この部屋・・・・・・こんなに広かったのね・・・・・・」
今現在、この部屋に私一人でいるからだ。
りっくんがベッド替わりに使っているソファ（前に「三人で一緒のベッドを使お

う」、と言ったら顔を真っ赤にして怒られた）に寝転がりながら、ぼーっとしていた。

りっくんは入院中、みーちゃんはどこかに買い物に行ったみたい。

こうやって、広い部屋に一人きりでいると、暗い考えが頭をよぎってしまう。

『なんで友奈さんみたいに、無理やりにでもりっくんを助けに行かなかったの？』

だってしょうがない。私一人では突破なんて無理だった。

『でも友奈さんは行ったわよ？』

あの子は強いもの。私よりも。それに、友奈さんの武器はそういうの、向いてるもの。私の武器は逆に向いてない。

『それも一つの理由。だけど本当は――――』

「うるさい――――っ！」

「ただいま～」

がチャリ、と音がして、みーちゃんが帰ってきた。

「って、あれ？うたのん？何してるの、こんな暗いところで」

パチリとみーちゃんが電気を付けてくれて、私はようやく今の時間が夕方だった

ことに気付いた。
「あら ？もうこんな時間だったのね・・・・・・・気付かなかったわ」
「・・・・・・・・・・・・」
「ソーリーみーちゃん。今からお風呂、準備するから」
そういって、その場を立ち去ろうとした私の腕をみーちゃんが掴む。
「・・・・みーちゃん ？」
「・・・・・・・ねえ、うたのん。無理しなくて、良いんだよ ？」
「っ !!・・・・・・・・・・・その言葉は、りっくんに言うべきだと思うわ」
「あはは、確かにね。でも、うたのんもだよ。最近ちょっと無理してる」
「・・・・・・・・・・・」
「私なんかじゃ不満かもしれないけど、話して欲しいな。うたのんのこと、支えたいから」
まったく、みーちゃんには敵わない。そんなにまっすぐに見つめられたら断れないよ。
私はみーちゃんと一緒にソファに座って、思いの丈を全部話した。

みーちゃんは黙って私の話を聞いてくれて、私にはそれだけでも充分だった。だけど、

「うたのんは間違ってないよ」

そう言ってみーちゃんは私を抱き締めてくれた。

「私だって、暗いこと考えて、落ち込んじゃうことあるもん。それに・・・・・・ちょっとだけ、嬉しい、かな」

「嬉しいの ？」

「うん。だって、うたのんも、私と同じで、落ち込んじゃうことがあるんだ、っておもったら・・・・・・・・・ね」

「そっかぁ・・・・・・・・」

「そうなんだよ・・・ ？」

「みーちゃんとおそろい・・・・・・・ふふっ、なんだかすてきね」

「そ・・・そうかなぁ ？」

みーちゃんが照れてる。かわいい。

「サンクスみーちゃん ！おかげで白鳥歌野、完　全　復　活！」

「ふふっ、やっぱりうたのんは元気いっぱいでないと」
「そうね！うじうじしている私なんて、私じゃないわ！」
まったく、りっくんがいないせいでナーバスになっていたわ。りっくんは後でペナルティね！
「ところでみーちゃん。こんな時間まで、何買いにいってたの？」
「あ、そうだった。実はね・・・」
どうやらみーちゃんとひなたさんが、大社本社に呼び出されたらしい。しばらく帰ってこれないのだとか。
「そっかぁ・・・しばらく会えないのね・・・・・・・・・じゃあ！」
みーちゃんをおもいっきり、ぎゅーっ！と抱き締める。
「わぷっ・・・苦しいよ、うたのん」
「会えない分のみーちゃん成分をチャージしておかないとだもの♪」
「もう・・・じゃあ私も・・・・・・ぎゅー」
「ワオ！」
みーちゃんもぎゅーっと抱き締めてきた。

「えへへ・・・うたのん成分補給だよ」
「うふふ・・・」
その後しばらく、私たちは抱き締めあっていた。

ここだけの小話――――
うたのんのメンタルが、原作よりも弱めになってるのは、りっくんが増えている、ということと・・・
その方が僕が書きやすいからです(笑)
おかげでみーちゃんも原作より強くなってしまった・・・
こっちは嬉しい誤算かな？
感想、等々お待ちしてます。

端末と友情と機械オンチ

イロイロ詰め込み過ぎて文字数がえらいことに！
あ、若葉様復活のお話は省略させていただきました。
それと、丸亀城の戦いも省略させていただきます。
この二つ、原作とそう違いがほとんど無いので、今更書くことでもないかなぁ・・・
というのと、その辺り入れたら話数が増えて増えて仕方ないので、略せるところは略させてもらいます。ごめんなさい。
というか、ぶっちゃけ書ける気がしない。
こんな僕ですが、それでも応援してくださる方々、どうぞ今後ともご贔屓に！
それでは、お納めください。

僕が目覚めたとき、目の前にみぃの顔があった。

「やあ、おはよう、みぃ」
「――――――――ふぇ」
実に近かった。みぃの吐息が感じられるくらいに。
「なんだい、寝起きドッキリ的なアレかい？」
「り・・・・・・りりりりりりりっ・・・くん・・・？」
トマトみたいに顔を真っ赤にして、まったくかわいいなぁみぃは。
「勿体無いなぁ、身体が動けばイロイロ反撃できたのに」
「――――――――」
あれ？反応がない。フリーズしてる？困ったなぁ。
「みぃ？おーい、みーぃ？」
「――――――――きゅう」
僕のお腹に向かってみぃが倒れた。
みぃの頭の重さをお腹で感じる。なんというか・・・すごく・・・いいかも・・・
「りっくんそれ、すっごくデンジャラスな考えよ」
いつの間にいたのか、歌野が扉のそばに立っていた。

「お、歌野か。おはよう」
「ええ、グッモーニンりっくん。調子はいかが？」
「身体が動かない以外は平常運航」
「それはグッドね」
扉から離れ、ベッドの脇の椅子に座る。
「さて、グッドニュースとバッドニュース、どっちから聞きたいかしら」
「悪い方からがいいなぁ」
「オーケー」
僕が寝ている間に、みぃと上里クンは大社本社に呼ばれ、神樹様から直接、神託をもらったそうだ。
内容は僕が夢でも聞いた、『近々、バーテックスの総攻撃がある』ということ。
「でも、それはひなたさんが受け取った神託よ」
「まるでみぃは別の神託を受けたみたいな言い方だね」
「オフコースよ、りっくん」
歌野が、苦虫を噛み潰したような顔をする。

ここまで歌野の表情を苦々しくさせるとは・・・・・・・

「内容は　？」

「・・・・・・・・・・りっくんと同じ、悪魔と契約した人間が、バーテックスサイドの仲間になったそうよ」

なるほど、前回のあの炎はそいつの仕業か・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・あんまり、びっくりしてないのね」

「人間なんて十人十色。僕らみたいに、『みんなを守りたい』って考えるやつもいれば、反対に、『人間を滅ぼしたい』って考えるやつもいるだろうからね」

「・・・・・・・・・・・・もしかして、りっくんは会ったこと、あるの　？そういう人に？」

歌野の問いには沈黙をもって、答えとした。

「・・・・・・・・・・まあいいわ。その件は後でゆっくり話ましょ。はい、バッドニュースはこれでフィニッシュ。ネクスト、グッドニュースよ！」

「そういう切り替えの良さ。嫌いじゃないよ」

「サンクスりっくん。それで、グッドニュースなんだけど、なんと　！四国以外

に生存者が見つかったらしいわ！」

「本当に !?」

思わず飛び起きそうになったが、相変わらず体はまったく動かないので、ガタガタとベッドが揺れるだけだった。

「ええ ！でもだいぶ遠いらしくって、合流はベリーハードなんだそうよ」

「そっか・・・・・・」

でも、生存者が見つかっただけでも、今の僕たちにはグッドニュースに違いない。

「それと、もう一つ」

「え ？まだあるの？」

「今はまだ噂に過ぎないのだけれど、本州瀬戸内海側で誰かがバーテックスと戦っているらしいわ」

「え ？」

「しかも ！その誰かさんは、これまたりっくんと同じ悪魔と――――いい加減長いわね。略して『契約者』って呼びましょう」

こうして、『契約者』の名前は誕生した。

「いやいや　！ちょい待ち！そんなテキトーでいいの!?」
「こういうのは早い者勝ち、言った者勝ちなのよ　！」
「なんてひどい」
「その辺りのお話は、後でみんなに伝えておくとして、今はその契約者のお話ね」
伝えておくのか。まあ、今はどうでもいいか。契約者の話の方が重要だ。
「とは言ったものの、今はまだ噂程度にしか、確認されてないのよ」
「それでも、わかっていることはあるでしょ　？」
「オフコース　！」
歌野の話をまとめると――――
①契約者の所在地は不明
②活動時間は日中と予想されている
③瀬戸大橋付近には現れず、内陸部をさ迷っているらしい
以上三点が、現状判明していることだ。
「・・・・・・分かってはいたけど、かなりあやふやだね」

「仕方ないわ。そもそも噂の存在だもの。逆にここまでわかっているだけでもエクセレントよ」
「そりゃそうだな」
その後、面会終了時間まで他愛のないおしゃべりをして、歌野たちは帰っていった。
ちなみにその間、みぃはずっとお腹の上で気絶しっぱなし。帰るときは歌野におんぶされて帰ったのだった。

―――――――――――――――――――――

数日後、何事もなく退院した僕を待っていたのは――――
「これが・・・・・・スマートフォン・・・・・・・っ　！」
僕専用に開発された変身アプリと、それがインストールされたスマホだった。
「これでりっくんも勇者服に着替えられるわね　！」
「そういえば、今までそのままの格好で戦っていたんだったな・・・・・・」
若葉が苦笑する。僕が寝ている間にイロイロあったらしく、前よりも雰囲気が柔らかくなった気がする。

「なあ輪廻、さっそく変身してみてくれよ！というか、タマに見せタマえ！」
「タマちゃんにさんせーい！りんくんの変身、私も見てみたい！ね、ぐんちゃん♪」
「えっと・・・高嶋さんが、そう言うなら・・・」
「おっし、それじゃ・・・あ・・・・・・・・・」
スマホを持って変身しようとして、固まる。
「・・・・・・・・・輪廻さん？」
「――――――――」
「ん？どうした輪廻？なんで変身しないんだ？」
「――――――――えっと」
「どうしたの、りんくん？何かあった？」
「――――――――えー、非常に、言い辛いことですが・・・・・・」
「なんだ？急に改まって」

「これ、どうやって電気入れるの？」

『えっ・・・・・・・・？』

――――――――――三時間後――――――――――

「よ・・・・・・・・・ようやく電源はいった・・・・・・・」
「スマホを起動させるだけで・・・三時間もかかるなんて・・・」
「郡クン、みなまで言わないで。自覚はしてるんだから・・・」
「だ・・・誰にだって苦手なことくらいあるから、大丈夫だよ！ねっ！」

「友奈、スマホ使えなきゃ変身できないんだよ ？全然大丈夫じゃないよ・・・」
「うぇっ ！あ、ええと――――」
友奈がわたわたする。言葉が見つからないなら、無理に励まそうとしなくたっていいのに・・・・・・まあ、それが友奈の良さなんだけどさ。
「ドンマイよりっくん。使い方さえ判ればりっくんなら平気だもの ！」
「要は『習うより慣れろ』、ということだな」
「イエス ！」
「ま、それしかない訳だしね ！」
歌野と若葉の言葉を受け、「よっし、いっちょがんばるさ ！」と気合いを入れて、スマホにむかう。
――――――――――更に二時間後――――――――――
「よっしゃあああああああああああ !!変身できたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「おおおお ！かぁーっこいー！」
「ナイス根性だったわ ！りっくん！」

称賛の言葉が響く中、僕は変身した自身の姿を観察してみる。
「あ、これどうぞ。手鏡ですが」
「お、さんきゅ」
上里クンから手鏡を受け取り、改めて僕の勇者服を眺めてみる。
全身を被う黒インナーの上に、羽織るようなイメージで纏う勇者服は、全体的に友奈のそれに近い形状をしていて、その色は上半分が黄色で下が緑。
腰や肩など、関節を保護するように装着されたパーツは白っぽい銀色。
そして、生物的でありながらどこか機械的な感じで、赤いラインがまるで血管のように勇者服全体に描かれていた。
「ふむふむ、基本的なところは友奈のと同じ感じかな ?」
「そうね・・・高嶋さんの勇者服に、似てる気がする・・・」
郡クンのお墨付きともなれば、流用を疑うレベルで同じと見ていいだろう。（あくまで個人的な感想です）
「それにしても・・・・・・輪廻、お前けっこうムキムキだな」
突如として、タマっちクンがそんなことを言いだした。

それに呼応して伊予島クンが、
「確かに　！何というか、『男の人』って感じだよね！」
なんというか、ちょっとこそばゆい。
「これでもっと身長があれば・・・・・・格好よかったのにね・・・」
「うぼあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
郡クンの容赦のない一言が、僕を傷つけた!!
「りっくん　!!」
倒れる僕をみぃと歌野が支える。
「ぐほぅ・・・・・・嗚呼、みぃ・・・・・歌野・・・僕はもう・・・・・・駄目だ・・・」
「何言ってるの　！たかが身長をディスられた程度よ！」
「そうだよ　！こんなことで倒れるなんて、りっくんらしくないよ！」
「いいや・・・僕には分かる・・・自分のことだから・・・な・・・」
「りっくん・・・」
「歌野・・・みぃ・・・あとは、たのむ・・・ぞ・・・がくり」
「「りっくぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅん　!!」」

「あ、そうだ。輪廻さん、一つお聞きしたいことがあるのですが」
「ん ？なんだい、上里クン」
「あ、起きた」
「・・・・・・何だったのよ、今の」
関西人のアレみたいなもんだから、気にするな。
「輪廻さん、携帯を持ったことがないのですか ？」
「ああ、うん。そうだね。スマホなんてハイカラなモン、持ってるやつなんて一人もいなかったよ」
「そうなの !?」
「そうだよ。うちの所で電話と言ったら、『黒電話』が主流だったねぇ」
「くろ・・・でんわ・・・」
「どんな未開の地域だよ ！」
「仕方ないね。かなり山奥の方だったし。ああ、でも山降りればちゃんと街があるし、スマホ売ってる店だってあったよ」
「持ってないなら・・・意味無いわよね・・・ ？」

「さっきから郡クンの一言が痛い！」
「あはは・・・諏訪でもスマホ使わなかったもんね」
「そうね。だからりっくんが機械オンチだなんて、全然知らなかったわ」
「使わないでいいならそれでいいし、ね」
「パソコンはどうなんだ？」
「触れたことすらありませーん」
「機械オンチというより、知らないだけ、のような気がしますね」
その後も、ワイワイと雑談に興じる僕たち。
漂う空気は仲の良い友人グループのよう。
以前はそこに、しこりのような、まだまだ溶けきれてない、わだかまりを感じていた。
今は違う。
僕らはきちんと、打ち解けあえた。
これならきっと、次の襲来も乗りきれる。
僕はそう、信じていた。

これは、後に『丸亀城の戦い』と呼ばれ、後世に語り継がれることになる大戦の、少し前のお話。

戸塚輪廻について③

低身長がコンプレックスである彼は、それを補うために幼い頃から身体を鍛えている。

そのおかげか、今では現役アスリートもかくやという、素晴らしい肉体を獲得す

るに至った。

ちなみに、寝ている輪廻のお腹を枕にして寝るのが、歌野の密かな楽しみ。

「低反発枕みたいでベリーグッド　！」とは歌野談

何故、彼はアイスを愛すのか

ニックの謎に迫る（？）回

前回の前書きにて、『丸亀城の戦い』は書かないと言ったな。

アレは嘘だ。（ｻﾜｧｧｧｧｧｧｧｧ・・・・・・　）

ネタを思いついたので、がんばって書くことにしました。

とりあえず今回分をどうぞ、お納めください。

ある日の授業中、いつも通りに睡眠学習をきめこんでいたら、謎の電子音に叩き起こされた。

「っ　!?・・・？？？　」

周囲を見回すと、教師を含め全員がなんでか僕の方を見ていた。

「え　？・・・・・・・何？え??え？？？　」

「りっくん」

なにがなんだか分からず狼狽していると、左隣の席のみぃが教えてくれた。
「鳴ってるの、りっくんのスマホだよ」
「え !?・・・・・・・ぅお、マジだ。さんきゅ、みぃ」
みぃにお礼を言って、教師に一言謝罪して教室を出る。
「おーい輪廻ー。ちゃんと電話でられるかー ?」
「できらあ !」
教室を出る直前、タマっちクンがからかってきたけど元気よくガッツポーズして答えた。
廊下に出てスマホを見る。んで、誰からなんだ？
「・・・・・・・・・・・え ？誰の番号？」
知らない番号だった。歌野たちの番号は全部入力済みなので、少なくともみんなではない。(もっとも、全員今授業中だからこんなこと出来るわけがない)
「とりあえずでてみるか・・・」
えっと・・・たしか・・・ここを、こう！
「よし !はいもしもS」

『輪廻テメエ！いつまで待たせやがる!!』

いきなりの大声で耳がキーン、てなった。
いや、というか・・・
「なんでニックが電話かけてくるの ？」
『んなこたァどうでもいいからさっさと来い！』
ブツンッと勢いよくきられた。
「・・・・・・・・・・・・来いってどこに ？」
――――――ｖｉｅｗ，ｃｈａｎｇｅ：ｓｉｄｅ――――――
輪廻が教師に早退する旨を伝え、足早に去っていった後、歌野は
「（あのデビル・・・・・いつか畑の肥やしにしてやる・・・・・・）」
物騒なことを考えていた。

それと並んで水都は
「(りっくん・・・・・・またあの悪魔に振り回されてる・・・・・・・)」
輪廻の心配をしていた。
と、その時授業終了の鐘が鳴り、教師が挨拶して去っていった。
「輪廻のやつ・・・・・・・なんの用事だろうな？」
「さあ？でも、あのニックっていう悪魔に呼ばれたみたいだよ？」
授業が終わるや否や、珠子と杏が話し合う。
そこに乗り掛かるようにして友奈が叫ぶ。
「きっと人助けだよ！ニックさんって悪魔だけど実はいい人なんだよ！」
「高嶋さん・・・・・・あいつになにかされたの・・・・・・？」
友奈の発言を受けて、千景が問う。すると、
「この前ゴリゴリ君もらったんだー♪」
「・・・・・・・・・は？」
友奈のこの発言に、千景は困惑した。
何故ゴリゴリ君なのか、そもそも何故持っていたのか、いやそれ以前に滅多に顔

を見せないあの悪魔にどうやって会ったというのか。
訊きたいことがたくさんありすぎて、さしもの千景もフリーズしていた。
「ゴリゴリ君　？こーんな時期によく食えるなぁ・・・」
珠子が感心していると、ひなたが
「そういえば輪廻さんが、『ニックのやつ、アイス好きでさぁ。春夏秋冬いつでもどこでも食べているんだよ』と言ってましたね」
「そうなのか・・・・・・・・余程身体が丈夫と見える　！」
「そういうことじゃないと思うわ・・・」
若葉の何処かズレた考えに突っ込む千景。
その時、なにか考え込んでいた歌野が
「よし　！みーちゃん、りっくんをチェイスするわよ！」
「いきなり何を言い出すの、うたのん　!?」
唐突にアブないことを言い出した。
「考えてもみてよ　！このままだと、りっくんはあのデビルの言いなりよ!?そしたらきっと、最後には私たちから離れていってしまうのだわ!!」

「ッ　!!」
「いや・・・流石にそれは、考え過ぎなのでは　?」
若葉がやんわりと止めようとするが、火の付いた歌野は止まらない。
「みーちゃん　!今ならまだりっくんをレスキューできるわ・・・・・・私たちが、あのデビルから、りっくんを守るの!!」
「わ・・・私たち、が・・・・・・でも・・・そんなの・・・」
「これは私とみーちゃんにしかできないミッションよ・・・・・・二人で、がんばりましょう!!」
「うたのん・・・・・・うんっ、私、がんばってみる　!」
「それでこそみーちゃん　!一緒に守りましょう!りっくんを!!」
ひしっと水都に抱き付く。
「うたのんっ　!」
水都も負けじと抱きしめ返す。
「これが・・・・・・愛のちから・・・・・・　!!」
「うむ・・・　!なんだかよく分からないが、素晴らしいぞ!二人とも!」

「ふたりとも、りんくんのことが大好きなんだねー♪」
目を輝かせる杏と、よくわかっていない若葉と、呑気に感想を述べる友奈を除いた三人が、額を寄せ合いひそひそと話し合う。
「どうする ？あれ」
「このままは流石に不味いと思いますが・・・」
「そうね・・・・・・でも、良い機会なんじゃないかしら・・・・・・」
「良い機会・・・とは ？」
「あの『悪魔』を名乗ってるあいつについて・・・・・・なにか掴めるかも・・・・・・」
「なるほど・・・普段の私生活すら謎に包まれている彼ですからね。では、歌野さんたちに協力する、ということで？」
「タマはもうなんでもいいぞ。むづかしくて付いていけん」
「なら・・・・・・決まりね・・・・・・」
その後、三人は歌野に協力する旨を伝え、それを見た杏たちも便乗し、結果、全員で輪廻の尾行をすることになったのだった。
「・・・・・・思ったのだけど・・・・・・尾行するには、人数、多すぎじゃな

い？」
「ま・・・まあ、そこは、なせば大抵なんとかなる・・・ということで・・・」
「ならないと思うわ・・・・・・・」
「ですよね・・・」
やれやれ、と肩をすくめる千景とひなたであった。

さて、その件の輪廻だが――
彼は坂出市に来ていた。
「ここか――」
正確には、坂出市内の総合ショッピングモール『イネス』内、一階フードコートエリアにいた。
「さて、反応はこの辺だけど・・・」

「遅ェぞ輪廻ェ　!!」

「・・・・・・・はい、見ーつけた」
周囲への迷惑を考えない大声。それに導かれてたどり着いた先に、果たして、ニックはいた。
「んー？・・・・・・・こっち・・・も・・・？それとも・・・こってぃも？なんて読むの、これ？」
「店の名前なんざどうでもいいんだよ。オイ輪廻」
「はいはい、お金ならここにありますよー」
輪廻がニックに財布をまるごと渡す。
受け取るや否や、ニックはアイスクリーム屋のアイスを片っ端から注文していくのだった。
「・・・・・・・まあ、どうせ使い道なんてなかったからいいんだけどさ・・・」
ふと、後ろを振り返る。

視線の先の柱の影に、見覚えのある・・・なんて言葉がなまっちょろく思える程見知ったメンバーが、そこからこちらを伺っていた。
すなわち、歌野たちである。
「(バレてるの・・・・・・わかってなさそうだなぁ～。どうしよう・・・・・・)」
一方、歌野たち――――
「・・・・・・戸塚くん、気付いているわね」
「気付いてますね・・・すごく戸惑っているみたいです」
(今のところは)まともな思考の持ち主である、千景とひなたが渋い顔をして他の全員を見ていた。
「うたのんうたのん、どうしよう・・・りっくんのお財布、ニックに獲られちゃった・・・」
「ぐぬぬ・・・忌々しいデビルマンね　！アイスが食べたいなら自分で払いなさいよ!!」
歌野と水都は輪廻たちの様子を、
「ふわぁぁぁ　!!三角関係！三角関係だよ！タマっち先輩！変則だけど、それ

がまた素敵だよぉぉぉ!!」

そんな彼女たちを眺めて興奮する杏と、

「あんずが壊れた・・・」

「しかし、あの『ニック』という悪魔・・・何が目的でアイスを・・・」

「アイスが好きなんだよ、きっと　！なんだかわたしも食べたくなってきちゃった～」

杏を見て若干引いてる珠子と、ニックについて考察している若葉、そんな彼女にピュアな答えを提示する友奈。

正直に言おう。

端から見れば只の変人集団である。

実際、彼女たちを見た男性客の一人が、顔をひきつらせて去っていったり、子供

連れの女性客が不思議がる子供の手を引いて足早に立ち去っていっていた。

と、その時

「あ、りんくんからメールだ」

「む・・・私にもきたぞ ？」

「どうやら、全員に送ったみたいですね」

とうとうしびれを切らしたのか、輪廻は隠れている（と、本人たちはそう思っている）みんなに対して一声かけることにしたようだ。

「りっくんが、私たちにもアイス奢ってくれるって」

「タマはチョコ味ー !!」

「わたしイチゴが良いー !!」

「な ！二人とも！待て！」

「行ってしまいましたね・・・どうしますか ？若葉ちゃん」

「はぁ・・・・・・仕方ない、行くか」

あっさりと飛び出していった珠子と友奈を追いかけて、全員が輪廻のもとに集うことになった。

――――view change:輪廻――――

ニックに呼ばれてイネスに来たらアイス奢らされるわ、後から尾行してきた歌野たちにも奢ることになるわ、で、僕の財布はすっかりやせ細ってしまった。
まあ、特に買いたい物とか無いからいいんだけどね。
「でも、ここのアイス・・・・・・ジェラート？ラインナップがありきたり過ぎるよねー」
「輪廻テメェ、いい加減オレにゲテモノ食わせるの止めろ!!」
「この前の『ゴリゴリ君信玄餅風味』は良い反応見れて愉しかったなぁ・・・」
「お前・・・食べたのか・・・あの信玄餅風味を・・・！」
若葉がニックのことを見る。その瞳は驚愕と『こいつ無いわー』の色に染まっていた。
・・・どんな色だ？
「食わされたんだ!!自分から食ったワケじゃねえ!!」
「・・・・・・・・・・へぇ」
郡クンの氷点下の視線がニックを射抜く。

完璧に信じてませんねぇ(笑)

「そこまでひどいんですか ？その・・・信玄餅風味って？」

「伊予島クン、食べたこと、ないの ？」

「あれは酷かった。中に入ってた餅さえ無ければ最高だったのに、あれが全部台無しにしてくれた・・・」

なぜか若葉が味のレビューを語ってくれた。もしかしなくても食べたことがありますね、コレは。

「他にはどんなの食べたことあるの ？」

友奈がニックにそんなことを聞く。いくら友奈でも、ニックが相手じゃ――――

「ナポリタン味にコーンポタージュ、カスタードプリンはまだマシだった。一番思い出したくもねェのは、手羽先味だな」

ニックのやつ、ここ最近僕があげたゴリゴリ君を全部答えやがった！どういうことなの・・・!?

「へえ、ニックさんはいろんなアイスを食べたことがあるんだねー♪」

「・・・・・・・・・・まぁな」

ほ・・・・・・絆されているっ・・・・！

高嶋友奈・・・恐ろしい子っ・・・・！

「はいっみーちゃん、あーん」

「あーん・・・うん、おいしい。うたのんのは・・・何だっけ ？」

「ミックスキャロット味よ ！というわけで！みーちゃんのもプリーズ！」ッパ。

「ふぇ !!」

向こうは向こうで食べさせ合いっこ(？)してる。

・・・・・・・・・うん。最高。

「そういえば、りっくんは食べてないのね」

「も、もしかして・・・・・・」

僕がアイスを食べてないのに歌野が気付いて、それを受けてみぃが申し訳なさそうな顔をする。こっちのことなんて、気にしなくてもいいのに。

「お金ならまだあるよ。ギリギリだけどね・・・食べないのは単純に、寒いのが嫌いだからだよ」

「あら、それならいいアイディアがあるわ　！」

言うや否や、歌野がぎゅーっと僕に抱きついてきた。

「にゃっ　!?!?!?!?」

「あら、キュートな声ね♪」

ぎゅー。と歌野が更に密着してくる。やばい。何がやばいって、歌野の匂いがすんごい。土の匂いにまじって女の子特有の『なんかいいかおり』がするからほんとやばい。

「ほら、みーちゃんも　！」

「ええ　!?私も？」

「まって歌野今はダメ今みぃに抱きつかれたら」

「えっと、じゃあ、失礼しまーす」

ぎゅー。

「！！！！！！！！！！！！！！　」

「ほわぁぁぁぁぁぁ・・・・・・輪廻さん、顔真っ赤です!!」

「あらまあ、輪廻さんは案外純情な方なんですね♪」

あわ

「・・・・・・なんか、輪廻のやつ。様子がおかしくないか？」

「フリーズしてやがるな」

「どういうことなの？ニックさん」

「輪廻のヤツは鼻が良いからな。大方、二人の匂いに挟まれて頭の奥がショートしてるんだろ」

「・・・・・・・・・・・・戸塚くんって、意外と弱点が多いのね」

「りっくんはそこがキュートなのよ♪」

「・・・・・・えっと・・・ねぇ、うたのん。これって、いつまでやるの？」

「え？」

「え？」

結局、次の日の朝になるまで二人に挟まれたままだった。

後日談――――

「ニックさんはどうしてそんなにアイスが好きなの ？」

「あ ？ああ・・・コイツはオレの体質の問題だな」

「体質　？」
「そうだ」
「へぇ～、そうなんだ～」
「・・・・・・・・・詳しく聞かないのか　？」
「へ　？なんで？」
「・・・・・・・・・・・・いや、いい・・・・・・食うか　？ゴリゴリ君」
「良いの　？じゃあ、遠慮なく♪」

「ニックのやつ・・・・・・友奈にすごく甘くなってる・・・・・・　!!」

輪廻と水都と心の病

諏訪でのお話、パート２！
りっくんとみーちゃんのなれそめ物語。
どうぞ、お納めください

うたのんが連れてきた彼は、諏訪に来てから今日までの二週間、与えられた部屋から一歩も出ずにいた。
「・・・・・・・・・・・・」
「あら ?・どうしたの、みーちゃん」
「あ・・・・・・うたのん・・・」
彼の部屋の前で固まっていたら、うたのんに呼び掛けられた。
「もしかして、彼に用事 ?」
「・・・・・・んと、そういうのじゃないんだけど・・・・・・そういううたの

んは？」
「私の用事はこれ　！」
そういって掲げたのはクワ。どうやら農作業のお誘いに来たみたい。
「・・・・・・・・・・出てくるかな　？」
「無理矢理でも出させてみせるわ　！」
「無理矢理はちょっと・・・・・・・」
「ハロー　！気分はどう？ちょっと失礼するわ！」
うたのんはドアをノックして部屋に入っていった。
しばらくして――――
「ダメだったわ・・・・・・・」
「お・・・お疲れうたのん・・・」
見るからにしょんぼりしたうたのんだけが部屋から出てきた。これで通算十一敗目。
「・・・・・・・うたのん」
「バぁぁぁぁぁぁぁぁット　！私は諦めないわ！今日はおとなしく引き下がるけ

ど、明日こそは引きずりだしてやるんだから‼」

「うたのんセリフが悪役っぽいよ・・・」

そのままうたのんは畑へと向かっていった。

その背中を見送りながら、彼に初めて会ったときのことを思い返す。

「ハロー　！調子はどう？」

うたのんが部屋に入っていく。私はその後ろに、隠れるようにしてついてく。

「・・・・・・・・ん、とりあえず、ありがと」

「大丈夫なのね。なによりだわ。お礼とかはいいから　！当然のことをしたまでなのでっ！」

「――――」

彼はぼーっとうたのんを――違う、わたしの方を見て言った。

「――そこにいるの、だぁれ　？」

「っ　‼」

「あら　？人の気配に敏感なの？ほらみーちゃん、出てきて挨拶しましょ♪」

「う・・・・・・うん」
うたのんに引っ張り出されて前にでる。
「えと・・・藤森水都、で・・・す・・・？」
「？どうかした・・・の・・・」
「――――――――――――ぁんで」
わたしの姿を見た瞬間、彼の様子は一変した。
顔を真っ青にして、ガタガタと体を震わせて、まるで、恐ろしいものを見たみたいに、はっきりと怯えていた。
「え？・・・えと・・・あの、大丈――」
「ひっ」
近付こうとしたわたしに反応して、彼は後退った。そのまま壁までさがって、なにかうわごとのように呟く。
「――りえないそんなわけ――ってあのとき――でもそれ――――だれたにんのそら――？――としても――て」
「だ・・・大丈夫ですか　？どうかしましたか？」

「こないでっ　!!」
絞りだすような、それでいて、はっきりとした拒絶。
涙を両目いっぱいにためながら、彼はわたしをにらんで言う。
「なんだよ・・・なんなんだよ　!あんた!」
「ひっ」
「くるなよ・・・くるんじゃないよっ　!なんだって・・・こんなところまで・・・もうやだ・・・やだよぉ・・・」
この時、わたしが怯んだりしなければ、こんなことにはならなかったのかな？
だって、あの時の彼、怖がっていた。
わたしを通して、誰かを見て、それに怯えていた。
このあと彼は、うたのんが呼んだお医者さんが来るまで、そのまま部屋の隅で膝を抱えて震え続けてた。

―――――――――――――――――――――

それから、しばらく経って今、わたしは彼の部屋の前にいる。
「・・・・・・今日こそは、ちゃんと話さないと」

意を決してドアをノックしようとしたとき、

がっしゃぁぁぁぁぁぁん!!

部屋から、ガラスが割れる音が聞こえた。

「な・・・何　？――――まさかっ!?」

嫌な予感のしたわたしは、急いでドアを開けて中に入る。

予感は半分的中。

彼は洗面所の鏡を素手で壊して、そのまま鏡のあった壁をなにか呟きながら殴り続けていた。

「死ね――――死ね――――死ね――――死ね――――死ね――――」

「――――――っ」

明らかに異常だった。

まるで狂ったみたいに壁を殴り続けている。

ん？狂ったみたい・・・？

そこでわたしは、あのとき彼を診たお医者さんが言っていたことを思い出した。

『彼は、天空恐怖症候群の、それもレベル三か、もしくは四の可能性があります』

うたのんの話だと、諏訪に来たばかりのころはそんな様子は見られなかった、とのこと。なら、原因は一つ。

わたしだ。

わたしが彼の心の傷に触れてしまったから、こんなことになった。

だったら、どうする？

「（そんなの・・・決まってる・・・！）」

いまだに壁を殴り続ける彼の左手をとり、話しかける。

「だ・・・ダメだよ。それ以上やったら、手がダメになっちゃう・・・」

わたしの言葉に、彼は壁を殴る手を止めた。でも、

「――――――――――――さい」
「――――――！」
いつの間に装備したのか、右手にカギ爪付きの手甲を着けて、その切っ先をわたしに向けた。

「――――――――――じゃま、しないで」

正直に言って、すごく、怖かった。でもそれ以上に、わたしは、この人を助けたいって、思っていた。
「――大丈夫、ここには、あなたを傷つける人なんて、いないから。だから、安心して・・・ね？」
なだめるみたいに、彼の手を両手で包む。
「――――――――違う」
「え？」
震える声で、彼は言った。

「――――違うんだ・・・怖いんじゃない・・・許せないんだ・・・!!」

「――――どういう、こと？」

――――+――――

それからわたしは、彼――輪廻さんの話を聞いた。

悪魔と契約して、故郷を守っていたけど、一年もせずに壊滅。たった一人の家族すらも守れなかった・・・と。

「そんな僕に・・・・・生きる資格は・・・・・無い。だから、化け物と戦って・・・・死ねれば・・・よかった・・・なのに・・・」

そんなとき、うたのんが輪廻さんを助けて、そして、わたしと会った。

「――もしかして、わたし、その、あなたの家族に・・・？」

輪廻さんはこくり、とうなずく。

「責められてる・・気がした・・・・・『なんで、まだ生きているんだ』・・・・・っ

て」

「――――」

「その後も、何度も夢に見た。はっきりと、責められている夢」

「声も、聞こえてきた。『なんで助けてくれなかった』『お前のせいだ』『お前が殺した』って」

「気がつくと、鏡の前にいた。疲れきった顔が、あった。そのくせ、まだ生きようとしてる顔だった」

「――――それが、許せなかった？」

いまだ繋いだままの彼の手が強ばった。

「だって――――そうでしょ？だれも救えなかった。みんな死んだ！命に代えても守るって約束したのに！巫女都（ミコト）も助けられなかった!!」

巫女都さん――――と、いうらしい。話を聞くに、妹さんなのかもしれない。

「こんなやつが、なんでまだ生きたがってる!?そんなの!!許せるわけがない！！！」

「なら！わたしが許すよ!!」

「――――――――え」

言ってからすごく恥ずかしくなってきた。でももう言っちゃった。だから、後には引けない。もとより、引くつもりもない。

だって、このままじゃ、可哀想だ。
輪廻さんも、巫女都さんも、輪廻さんに守ってもらった人たちも。
「輪廻さん、これは、わたしの想像だよ。多分、みんなはあなたを恨んだりしてない。あなたが、勝手にそう思い込んでいるだけ。だから」
「それは――――分かってる。でもだからこそ！僕は自分が許せない!!」
「うん。それで、いいと思う」
「――――――――――――――――え？」
わたしは、笑って輪廻さんに伝える。
「輪廻さんは、責任感が強すぎるんだよ。だから、自分を責め過ぎちゃう。そんなあなたには『自分を責めないで』なんて、無責任なこと言えないよ。でも、『死にたい』て思うくらい責める必要なんて、ないんだよ」
「――――――――――――――でも、ぼくは、守るために、生きて、きて、守るものがない、僕には、価値なんて、なくて」
なんとなく、わかった気がする。
わたしと今の輪廻さんには、共通していることがある。

ずばり、『自分に価値を見出だせない』
でも輪廻さんはまだ良い方だ。
わたしと違って、『自分の価値』を見出だせた。
なら、わたしがするべきは――――

「なら、輪廻さん。うたのんたちを・・・この諏訪を守って」

「　!!」
「輪廻さんも知ってると思うけど、今、諏訪を守っているのはうたのん一人だけ。
でも、輪廻さんも一緒に戦ってくれるなら、希望が持てるから・・・だから・・・」
輪廻さんは、じっ・・・とわたしを見つめて、それから――――わたしを抱き締めた。
「ふぇ　!?え?ちょっ」

「────────ありがと」

「！────」

恥ずかしかったけど、わたしも輪廻さんを抱き締め返した。

どうか、輪廻さんの心の傷が癒えるころには、世界に平和が戻ってますように、

そう祈りながら。

――――――――――

「────名前」

「え？」

「──そういえば、聞くの忘れてたって・・・思って」

恥ずかしそうに顔を伏せる輪廻さんがちょっとかわいいと思いながら、名前を教える。

「水都だよ。藤森水都」

「ふぅ・・・ん。名前の響きまで巫女都にそっくり」

「そうかなぁ？『巫女都』って名前の方が、良い響きだよ？」

「そうかぁ？」

「そうだよ」
ほとんど同時に、二人で笑った。
輪廻さんの笑った顔は、無邪気な子供みたいで、やっぱり、かわいいと思ってしまった。・・・失礼、かな？
と、その時だった。
ウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ・・・・・・
「何の音⁉」
「サイレン・・・バーテックスが来たっ‼」
「そういうこと・・・っ！」
サイレンの意味を知るや否や、部屋を飛び出そうとして――
「おっと、ねえ！みぃ！」
「――え？わたし？」
「うん。『水都』だから、『みぃ』ね。猫っぽくて良いでしょ？」
「えと、輪廻さんが良いな「それと！」ふぁい⁉」
「僕のことは『りっくん』と呼んで欲しいな」

「りっくん・・・？」
「親しい人はみんなそう呼ぶ。じゃ、行ってくる！」
ダッシュで行ってしまった輪廻さん――りっくんを見送って、少し思う。
「（本当に、これで、よかったのかな・・・？）」
もっと別のやり方があったのかもしれない。
でも、わたしにはこれしか方法がなかった。
「（――自分が、嫌になるなぁ）」
りっくんが増えたところで、平和が戻るよりも先に諏訪が墜ちるのが早いだろう。
それを分かっていて、りっくんに守って欲しいと言った。
つまるところ、りっくんを利用したのだ。
「（いつか、その時が来たら、りっくんだけでも・・・）」
そう、心に決めた。
なのに――

「（まさか、こんなことになるなんて――っ！）」

「ん、どぉしたの ？みぃ」
「な・・・・・・なんでもないでひゅ」
今、わたしはりっくんのお腹枕を堪能している。
りっくんがニックさんやわたしたちにジェラートを奢ってから、少ししたある日、りっくんが
「歌野ってさ、僕のお腹、枕にして寝るのが好きみたいなんよ」
「へぇー」
「みぃも、試す ？」
「へぇー・・・・・・・・・・・・・・え ？」
結局、ベッドに横たわるりっくんの誘惑に耐えきれず、こんなことになってる。
「――――――――――――ぅう」
「ん ？寝づらい？」
「いいえ ！全然！ぐっすり眠れそうです！」
「よかった～」
「（わたしは全然よくない～！）」

りっくんの匂いと体温を感じながら、呼吸と一緒に上下する少し硬い筋肉に頭を乗せる、これだけでも顔から火が出そうなのに、りっくんがわたしの頭を優しく撫でてくるから、もう、恥ずかしくて死にそう。

「みぃ、ありがとな」

「・・・・・・・・・・・・え」

「僕に生きる理由を与えてくれたこと。今でも、感謝してる」

「・・・・・・・・・・・・・・それは」

素直に喜べない。だって、わたしは――――

「分かってる。みぃが僕を利用しようとしてたの」

「っ　！そんな、気付いて・・・！」

あわてて起き上がろうとしたわたしを優しく押さえつけて、りっくんは話を続ける。

「それでも、みぃは最後には生かそうとしてくれたし、僕としてはこれ以上ないくらい感謝しかしてないから、みぃはもう、僕に縛られなくても、いいんだよ？」

「――――――わたし、は」

「みぃ」
優しくわたしの名前を呼んで、りっくんはわたしを抱き寄せた。あのときみたいに。
「もし、みぃが罪を感じているなら・・・僕に守らせて ？」
「――――――わたしを ？」
「そう」
弱みにつけこむみたいなその告白に、なぜだかわたしの心は高鳴っていた。だから――
「――――――うん。わかった」
その告白に、OKしてしまった。
「――――――――――よかった。断られたら、どうしようかと思ってた」
「そうなんだ。なんか、ちょっと意外」
「これでも僕は臆病なんだよ ？」
「知ってる」
あのときと同じように、二人で笑う。

いつか、遠い未来でも、こうやって笑い合えたらいいな、なんて虫のいいことを思いながら。

共依存って・・・良いよね・・・・・・

円陣と死闘と超越者　前編

ゆゆゆとは一切関係が無い話ですが、『いぬやしき』が実写映画でロードショーされてるそうですね。

しかもメインキャストに野上良太郎くんでお馴染みの佐藤健さんが起用されたと！

今地味に流行（？）している、過去のライダー俳優起用、今後もなにか意外な作品で行われるかも!?

そんな訳で、丸亀城の戦い！開幕！

どうぞ、お納めください。

「この前よりも数が多いな・・・」

「そうだねぇ・・・」

若葉の言葉に同意する。迫りくるバーテックスの群れは前回よりも多く、あの時と同じくらいの規模と見た。

「若葉ちゃん！りんくん！眉間にシワがよってるよ！そんな怖い顔しなくても大丈夫。わたしたちは絶対勝てるから！」

「・・・ああ、そうだな」

「・・・・・・・・・・・・眉間にシワ、よってた？」

「イエス、よってたわよ。りっくんも緊張すること、あるのねえ」

歌野に眉間をぐりぐりされる。ぬおお、ちょっと痛い。あ、でも気持ちいいかも・・・

「そうだ！みんな、アレやろう！」

「・・・・・・アレ？」

「ほら、サッカー部の人とかが大会とかでやる、みんなで固まって『えいえいおー！』ってやるアレ」

友奈が轆轤（ろくろ）を回しながら説明するが、僕と若葉は首を捻るばかり。

「もしかして円陣、ですか？」

「そう　！それ！」
「ワンダフル　！いいわねそれ、乗るわ！」
「高嶋さんがやりたいって言うなら・・・」
「タマも大賛成だぞ　！」
「成る程、皆の心を一つにするには良い方法だ」
みんなが一ヶ所に固まって円陣を組む。
僕はそれを眺めている。
入らないのかって？無茶言うなよ・・・
「何してるのよ。りっくんも混ざりなさいよ。ハリー　！」
「ほら、私と歌野の間に来い。それなら大分マシだろう　？」
「・・・・・・・・・・・・ちょっとだけ待って」
心を落ち着ける。
大丈夫、やましいことは、何もない。何もないんだ。
「もう　！りっくん！」
歌野に手を掴まれ、円陣へと引き込まれる。

「ま・・・待って！まだ心の準備がぁぁぁ・・・」

抵抗虚しく、若葉と歌野の間にすっぽり収まる。

落ち着け、落ち着くんだ僕。何もやましいことはないんだ。だから大丈夫。平常心を保つのだ。ああ、でも、なんだって歌野も若葉も良い匂いがするのかなぁ!?女の子特有の甘い香り、とでも言うのか？何にしてもこの香りが煩悩を刺激してくるからヤバイ、すごくヤバイ。これから決戦だろうに、平常心を保つのだ。念仏でも唱えて落ち着こう。

「ぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさんぼんのうたいさん」

「・・・輪廻さん、大丈夫でしょうか？」

「・・・どう見ても大丈夫じゃないわね」

「それでは、作戦通りに！」

伊予島クンの号令と共に、若葉、友奈、タマっちクンの三人がそれぞれ前方、右

方、左方へと散会する。
作戦はこうだ。
僕たちが今いる丸亀城を中心に、正面、東、西にそれぞれ勇者を配置。後方には伊予島クンが待機し、三方を援護。僕を除く残りの二人は控えとして休憩する。
三方に散った勇者たちに疲労が見えたら、控えの勇者と交代。つまりローテーションを組んで戦う訳だ。
そんな中で、僕の役割は、〝緊急時の切り札〟。
前回の戦いにおいてこちらが深手を負ったのは、敵契約者による不意の攻撃があったからだ。
今回はそれに対抗できるようにするため、僕を温存しておく作戦に出た。
問題は・・・
「ねぇ、ニック。ホントに僕ならあの炎、なんとかできるの？」
「出来る。いや・・・これは寧ろ、オレの力を使えるお前しか出来ない事だ」
「ふぅん・・・まぁ、いいけどね」
この、契約者に対する作戦がニック考案によるもの、というところか。

ニックいわく、「悪魔の力には、こちらも同じ悪魔の力で対抗するのが道理」だと。

目には目を、歯には歯を、ということだ。

その理屈は理解できるし、僕としても、これ以上歌野やみぃを心配させるようなことをしなくて済むなら、それに越したことはないと思う。思うのだけど・・・

「ねえねえニック。ホントは僕をあまり戦わせないようにするために、そういうこと、言ったんじゃないの？」

「ハッ、んなワケあるかよ！テメェがオレの言うことを聞かないのは分かりきってンだ」

「じゃ、なんで？」

「オレ達悪魔は、人間の願いを叶える為の存在。そんな悪魔が、なんで人間を滅ぼそうとする？」

「誰かがそう願ったんじゃ、ないの？」

「それだけなら、良いんだがな・・・」

「え？」

「この戦い、何か裏がある・・・。オレはそう考えている」
裏・・・か。ニックのやつは思慮深い。なにか良からぬものを感じているんだろう。
でも・・・
「だからって、戦うことを止めてしまったら、それこそ〝敵の思うつぼ〟ってやつでしょ」
「フッ・・・その通りだな。――――――オイ、輪廻」
ニックがなにかを投げ渡す。これは・・・指輪？
『オレの心臓――真鍮の指輪だ』
おお!?こいつ、直接脳内に!?
というか、ニックどこ行った？
『今オマエが持ってる指輪こそがオレの真の姿だ。普段見てるオレの姿は幻見てぇなモンだ』
「なるほ・・・ど？」
『理屈なんざどうでも良い。とにかく今はオレを身に着けろ』

「これを？ん、と・・・それじゃあ」
言われた通りに右の人差し指に指輪をはめる。
「――――――――」
「――――――――」
「――――――――何も起きないよ？」
『アプリを見ろ』
言われてスマホを取り出す。画面にはさっきまで花のマークが描かれていたが、今は羽根を広げた鳥のマークになっていた。
「なるほど、これをタップすればいいのか」
『今はするなよ』
「なんで？」
『コイツは使い方を一歩でも間違えるとその途端にアウトだからな。必要な時以外は使わない方が良い』
「・・・・・・・・・相当、強いのねぇ」
そうこうしてる内に、若葉と郡クン、友奈と歌野が交代していた。

この調子で行けば大丈夫そうだね。
「あれ？ねえ、りんくん。さっきまでそこにニックさんが居なかった？」
「ん？それは本当か、友奈」
「あ、うん。もしかしたら見間違いかもだけど」
「うんにゃ、今さっきまで・・・というか、今もニックいるよ」
「え？どこに？」
友奈たちに聞こえないように、小声でしゃべる。
「良いよね、ニック」
『好きにしろ』
良し、言質はとった。
「ほら、これ」
友奈と若葉に指輪を見せる。
「これがニックの正体、だとさ」
「へぇ・・・」
「何の装飾もない、只の指輪だな・・・」

「僕らが見てた姿は、こっちでの仮の姿なんだって。で、これが本体・・・というか、心臓らしい」
「ということは、これを破壊されたらこいつは・・・」
『死ぬな。間違いなく』
「死ぬんだって。まあ、そもそも悪魔に〝死〟の概念があるのかって話だけど」
『ホウ・・・言うじゃねぇか』
「・・・・・・なら、大事にしないと、ね？」
「？もちろん」
なんだろう。今、友奈の様子が変だったような・・・？

開戦からしばらくして、若葉とタマっちクンが交代した。
「タマちゃんおつかれ～」
「へっへー！どーだ見たか！タマの活躍！」
「おう、バッチリ刮目させてもらったよ。だから、しばらく休んでな」
タマっちクンの頭をわしゃわしゃと撫でて座らせ、若葉が戦っている場所を睨む。

今まさにその場所に、まるで蛇のような進化体が形成されたところだった。
あいつのことは良く知ってる。
切られると分裂する進化体。
僕の故郷が壊滅した原因の一つ。
「伊予島クン　！進化体が出てきたし、僕もう出るね！」
一声かけて若葉の下に行こうとする。が、伊予島クンから待ったがかかる。
「待ってください　！相手の能力を把握してからでも・・・」
「それなら大丈夫。あいつとは一回戦ったこと、あるんだ」
その言葉に、伊予島クンが息を飲むのが伝わった。
「・・・・・・対処法も知っている、と　？」
「あいつは切られると分裂する。　だから、一瞬で燃やし尽くしてしまえばいい。あるいは、粉微塵に砕くか、だ」
「まぁて待て待て　！そーいうことなら、タマに任せタマえ！」
そこに、タマっちクンが割り込んできた。
「・・・・・・休んでなって、さっき言ったでしょ　？というか、あいつを倒せる

方法、持ってるの？」

「だ～いじょうぶ　！タマに任せタマえ!!」

「いっくぞぉぉぉぉぉぉぉぉ　!!輪入道！！！！！　」

輪入道。確か、魂を運ぶ炎の車輪の妖怪だったっけ。

タマっちクンが輪入道をその身に降ろすと、彼女の旋刃盤がどんどん大きくなっていって・・・・・・ちょっと大き過ぎない？

「大丈夫　？タマっち先輩。そんな大きな旋刃盤、投げられるの？」

伊予島クンも同じことを思ったようだ。

「無理にでも投げる　！」

およそ女子がすることのないような、猛々しい雄叫びを上げて、ハンマー投げの要領で巨大旋刃盤を投てき。タマっちクンの手を離れ、進化体とは別の方向に飛んでいった。

その姿は、昔、テレビ番組なんかで見た未確認飛行物体を連想させた。

「タマっち先輩・・・旋刃盤、飛んでいっちゃったけど・・・」
「いいんだ ！こいつはこう使う！」
？？？　タマっちクンは何を言ってるんだ？
そういぶかしむのは一瞬だった。
旋刃盤が、ほんとにＵＦＯよろしく勝手に動き出したのだ。
「なんとぉー ！」

思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。
炎を撒き散らしながら飛ぶ旋刃盤は、そのまま進化体に体当たりをかまして燃やし尽くした。
「すげえ、あっという間に黒焦げじゃん・・・」
「へ・・・へへっ。どーだ、タマの輪入道は・・・」
「大丈夫 ？タマちゃん。顔色がよくないよ？」
どうやら身体にかかる負担は相当のようだ。まあアレだけの質量の物体が飛ぶ上に、脳波コントロールも出来る。と来れば、相当に負荷がかかるのも納得がいく。

「タマっちクン、もう休みなよ。キミの大活躍のおかげで残ったバーテックスも少なくなった。後はみんながなんとか」
「そうもいかなくなった」
いつの間にか、後ろに若葉が立っていた。
「どうしたの？向こうの守りは？」
「輪廻さん！あれを！」
伊予島クンの指差す方を見れば、かなりデカイ進化体が形成されていた。
何というか、子宮とその周辺器官を模した形状の進化体だった。
それ以外にも、さっきの蛇みたいなやつ、針みたいなやつ、噂に聞く射撃タイプのやつに盾持ちのやつ、と、進化体の大盤振る舞いだ。
「なるほど、向こうもなりふり構ってられなくなった・・・てところかな？」
「一番の強敵は、あの新型の進化体だろう。どんな攻撃をしてくるのか分からん」
たしかにそれも気になる。でも僕は、もっと別のことが気になっていた。
『いたぞ輪廻。十一時の方角』

「・・・ついに来たか」
目を凝らして確認する。バーテックスの群れに紛れて、人間が一人、神樹様に向かって樹海を走っている。
「みんな、バーテックスは任せるから。僕は僕の役割を果たす」
「‼・・・・・・・来たのか？」
「ああ」
「そうか・・・・・・・気を付けろよ」
「まかせて」
若葉の言葉にサムズアップで返して丸亀城を飛び出す。

「いくよ、ニック　！」
スマホを取り出しながら、ニックに告げる。
『掛け声はどうする？』
「決まってるよ　！」
ボタンをタップしつつ、叫ぶ。

「超・変身っ・・・・・・・・　！」

刹那、僕の身体は炎に包まれた。

運命、クロスする今、空へ高く舞い上がる

円陣と死闘と超越者　後編

極彩色の木々を舞うように走る一つの影。
「やあ、そんなに急いでどこに行くんだい　？」
その影に、天より光が射す。
光の正体は炎。
目映く輝く紅蓮の焔に包まれた輪廻だった。
「・・・・・・・・・・」
影は何も語らず、細剣（レイピア）を構え――――

ガキィン！

「あっぶな　!?なんかしゃべろうよもう！」

影の奇襲を輪廻はカギ爪で受け止める。奇襲を防がれた影は後退して距離を取るのだった。

『無駄だな。今のアイツには意識が無い』

「誰かに操られてるとか？」

『おそらく、な。次、五時方向』

「はいよっ！」

ガキン！

またも防ぐ。

「影に沈んでの奇襲。なかなかの手合いだけど気配を隠せてなければ、意味が無いんだよねー」

そう。輪廻が影の奇襲を防げている理由がこの、ニックとの連係だ。

ニックが影の気配を読み輪廻に教える。たったそれだけ。

それだけだと言うのに

『九時方向』

「ん！」

ガキン！
『十二時』
ガキン！
『三時』
キン！
『十時』
キン！
『二時』キン！
『九時』キン！
『十二時』キン！
『六時』キン！
『一時』キン！
『七時』キン！
「うおお　！ちょーラッシュアワー!!」
都合十二度、全ての影からの奇襲を輪廻は裁ききってしまったのだった。

「ふぃー、凄いじゃんキミ。悪魔の力をここまで使いこなせるなんて」
その言葉は、輪廻にとっては心からの称賛の言葉だったのだが・・・
『オイ輪廻、お前それ煽ってンのか？』
「え〝!?そう聞こえる？」
『聞こえるな』
「oh・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」
最も、影は何も答えないが。
『・・・解析終了。どうやら前回のとは別の奴だな』
「このあと出てくる可能性は？」
『無いだろうな』
「ん、じゃあ――――――

さっさと終わらせようか」

轟・・・！と輪廻の纏う炎が勢いを増した。
影は当然、身構える。
が、

「遅いよ」

斬られた。影は確かに、そう知覚した。
なのに、身体には傷一つ無い。
そうして自らの身体を調べて、気付いた。
先程まで纏っていた影が、取り払われていることに。

「へえ・・・・・・キミ、女の子だったんだ」
影の中から現れたのは十歳くらいの子供。
着ている衣服はあちこち摩りきれてボロボロ。四肢は細く、頬も痩けていることから、まともな食事もできないような、過酷な環境下にいたことが解る。
『ホウ・・・・・・輪廻お前、アレが女だって良く判ったな』
「ん ?ああ、確かに・・・なんでだろ?」

『無意識か』

「そんなことより、あの子と契約した悪魔の名前、判った ？」

『ア？何故そんなことを聞く？』

「あの子を助けたい」

『・・・・・・本来、悪魔の真名を契約時以外に明かすのはご法度なんだがな・・・』

「そこをなんとか ！頼むよ！対価は弾むから、さぁっ！」

ガキィン！

少女が輪廻に襲いかかる。輪廻はニックと会話しながらも、それを受ける。

細剣による乱れ突きをカギ爪で器用に受け、弾き、かわす。

「ニック ！」

『チッ――――――影を纏い、影に潜る能力。即ち『哭影潜行（シャドウ・スナッチャー）』の固有能力。そして、真鍮製の細剣。コイツの真名は

――――――序列四十位・ラウムだ』

瞬間、少女の動きがピタリ、と止まった。

「今！」

カギ爪に炎を纏わせ、少女の胸を貫く。

「最大火力でぇぇぇぇ!!」

炎の出力を上げ、少女を――否、少女と悪魔のつながりを燃やす。

ニックの扱う炎は、命あるモノを癒し、命無きモノを葬る炎。
故に、少女と悪魔のつながりを燃やすことで輪廻は、目の前の今は敵でしかない少女を助けようとしているのだ。
『オイ輪廻。そこまでしてこのガキ助ける意味なんざ無いだろう。何故助ける？』
「涙のあとが見えた。理由なんてそのくらいで充分だよ！」
『ハッ！オマエらしいよ。――――OK、終いだ』
炎を消し、爪を引き抜く。
細剣を手放した少女はそのまま倒れて――――
「おっと」
輪廻の胸にすっぽりと収まった。
「生きてるよね。　どっちも」
『ああ、問題ない。上手く契約だけを焼き切れた』
「そっか・・・・・・よかっ・・・た・・・」
ばたり、とその場に倒れる。
まるで死んでいるように見えるが、深く、ゆっくりと、寝息をたてていることか

ら、眠っているだけだろう。
「まぁ・・・初回でこの程度なら、上出来か」
倒れている二人の側に座ったニックが一人、そんなことを呟いた。

輪廻たちの上空。そこでは、六人の勇者が大型の進化体に挑もうと、巨大化旋刃盤に乗って空を飛んでいた。
「りんくんは大丈夫かな ？」
「ノープロブレム ！・・・とは完全に言い切れないけど、でも平気よ。だってりっくんだもの！」
なかなかのパワーワードである。
「歌野は、輪廻のことを心から信頼しているのだな」
「オフコース ！」
若葉の言葉に、歌野はニカッとはにかむ。
そうこうしている内に旋刃盤はバーテックスの群れに突撃しようとしていた。
「数が多い・・・ザコはこのまま蹴散らせるけど、進化体までは・・・」

「なら、ここは私の出番だな」
そう言って、若葉が一歩前に出る。
「オーケー　！そういうことなら私がサポートするわ！」
その若葉のとなりに歌野が立つ。
「歌野　？」
「一人よりも二人よ　!!・・・実はこれ、前にりっくんにも言ったことがあるのよね」
「そうか・・・背中は任せた　！」
「オフコース、ヒーロー　！」
その言葉を合図に、二人は同時に神樹へとアクセスし、旋刃盤から飛び立つ。

若葉が降ろした精霊は『源義経』人間離れした体術を持つ武人。
壇之浦の戦いにおいて、敵軍の舟を飛ぶように渡り歩いたという伝説を持つ。その名も『八艘飛び』

今、若葉は伝説の八艘飛びをバーテックスを使って再現して魅せた。すなわち、バーテックスを蹴り加速、別のバーテックスを蹴りまた加速、また別のバーテックスを蹴り更に加速・・・と、どんどん加速していき、敵とのすれ違い様に斬る。

これだけでも通常のバーテックスは一掃できる。だが、相手には進化体も複数存在している。

だからこそ、歌野がいる。

歌野が降ろした精霊は『覚』他者の心を読む妖怪。

獲得した能力は至って単純に、『戦況予測』

歌野が知覚できる範囲内限定で、敵の行動を予測するというもの。

その能力故にか、覚は力が全く強化されず、戦闘に向いているとはお世辞にも言えない。その非力さを歌野は、自身のバトルセンスで補っていた。

「ハァァァァァァァァァ！！！！　」

二人の奮戦により、道は開かれた。

「いくぞ　！突撃ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!」

珠子が、友奈が、千景が、杏が、大型進化体に襲いかかる。

燃やされ、殴られ、切り裂かれ、射抜かれた大型は成す術もなくその身を崩壊させていった。

誰もが勝利を確信した。

だからこそ、大型の死に際の一撃に、誰も反応出来なかった。

「っ　!!若葉ちゃん!!」

放たれた弾丸は真っ直ぐ若葉の方へ飛んでいき――

若葉には当たらず、その目の前で爆発した。

「ぅああっ　!!」

「若葉　!?」

「若葉ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！　」

「・・・・・・・・・え　？」

爆風に巻き込まれ、地面に向かって真っ逆さまに落ちていく若葉。

勇者たちが急いだところでもう間に合わない。

そう、勇者たちでは・・・・・・

「おっしゃトラァァァァァァァァァァァァァァァイ！！！！！！」
「りっくん !?」
輪廻だ。
落ちてきた若葉を滑り込みで受け止めてみせたのだった。
「あー、超いたい」
「・・・ぅ」
「あ、起きた ？おはよう若葉。僕らの勝ちだ」
「――――――そうか」
樹海化が解けていく。
視界が花の嵐に包まれて、気が付けば丸亀城側の生け垣に座り込んでいた。
「――なあ、輪廻」
「なんだい ？」
「以前、お前は言ったな・・・『独りで抱え込むな』と」
「言ったね」
「その意味、ようやく理解できたよ」

「へぇ」
「みんなのお陰だ」
「そっか、そりゃよかった」
輪廻と若葉の下にみんなが集まってくる。
それを輪廻は手を振って、若葉は微笑んで、出迎えたのだった。

後に『丸亀城の戦い』と称される戦は、こうして幕を閉じた。

数日後――
「・・・なあ、友奈」
夕暮れの丸亀城。普段勇者たちが教室として使用している一室にて。
「あれ？若葉ちゃんもう帰ったんじゃないの？」
「教室にお前の姿が見えたら、つい」

「そっかあ・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
二人は無言で夕日を――――否、夕日に照らされる壁と海を見ていた。
「・・・・・・・・・・・・あの時」
「あの時　？」
「私が大型の攻撃を受けそうになった時だ」
「ああ・・・」
「あの時、私に当たる筈だったあの爆弾は、誰かの援護のおかげで当たらなかったんだ」
「・・・・・・・・・・・・やっぱり」
「友奈も気付いていたか」
「うん。気配をね・・・感じたんだぁ」
「そう、か・・・・・・・ということは、やはり　？」
「たぶん、ね」

友奈が笑う。しかし、その笑顔は普段のそれよりも弱々しくて、どこか、儚げだ。

「・・・・・・・・・・友悟」

「・・・・・・・・・・・友くん」

二人の呟きは誰もいない教室に飲み込まれて、消えた。

瀬戸内海本州側の一角――――

「――――――状況終了」

『ハァイ♪おつかれ～』

「これで・・・四国はしばらく安全だな」

『そうね～。北海道と沖縄で、勇者とオーバードが頑張ってるみたいだからね～』

「・・・・・・逝くぞ」
『会って行かないの？』
「・・・今は、いい。どうせ後で会える」
『それもそうね～。で？どこ行くの？』
「そうだな――――――」

「諏訪にしようか」

変態と下着と「病室ではお静かに」

ド直球のド変態を書きたかった。
後悔はしていない。
反省もしていない。
たぶん、前回までシリアス続きだったからその反動のせい。
とりあえず、どうぞ、お納めください。

病院の一室を訪れた若葉とひなたを出迎えたのは、歌野と十歳前後の少女に挟まれて仏の顔をしている輪廻であった。
「・・・・・・これは・・・どういう状況なんだ ？」
「若葉ちゃん、これはいわゆる『修羅場』というやつです。巻き込まれないように今日はもう帰ることにしましょう」
「待って帰らないで助けてちょーだいお願いします」

「で？何がどうしてこうなったんだ？」
「それについては我輩からお教えいたします！」
「うおっ！」
突如、若葉のスカートの中からカラスが現れた。そのくちばしに白い布をくわえて。
「へ・・・え・・・あ・・・」
「お嬢さん質素なモノを着けてますねぇ。せっかくの美人が台無しですよ～。まあ、これはこれで――」
「！！！！！！！！！！！！！！！」
カラスがくわえているのが何なのか理解した若葉は、スカートを器用に押さえながら、刀を構える。その顔は羞恥によって真っ赤に染まり、目には涙すら溜まっていた。
「おおｗｗｗ怖いｗｗｗ怖いｗｗｗ」
「貴様あ!!それを返せ！でなければこの刀の錆となれえ!!」

「返せと言われて素直に従う盗人はおりませなんだなぁｗｗｗｗｗてなわけで、ばいちゃ♪」
ズブズブと自らの影の中へ沈み行くカラス。だが――――

がし
「おや　？」
「うふふふ」
満面の笑みを浮かべるひなたによって、阻止された。
その目は、一切笑ってなどいなかった。
「おやおや、怖いですねぇ。せっかくの美人が台無しですよ～　？そんな怖い笑顔ではなく、心からのスマイルがみたいですねぇ我輩」

「若葉ちゃんの下着を返していただけたら、後でゆっくりお見せしますよ ？」
「ひなた、そいつを離すなよ・・・」
鬼の形相の若葉が刀を振り上げる。
「おっとぉｗｗｗこれはいけませんねぇｗｗｗ」
「もう逃げられませんよ。さあ、返してください」
「あっはっはｗｗｗｗｗところがぎっちょんん ‼」
どぷん、とひなたに捕まれたまま、カラスは影に沈み込んだ。
「な――――！」
そして、
「スナァァァァァァァァッチィ！！！ 」
「え・・・あ・・・きゃあああああああ！！！！ 」
ひなたのスカートの中から再度現れた。くちばしに青いひらひらをくわえて。
「でゅふふｗｗｗｗなかなか良い趣味の聖布でござるのうｗｗｗｗ」
「貴様ああああああああ！！！！！！！！ 」
ひなたが被害にあったことで完全にキレた若葉が、カラスに斬りかかる。

「おっとｗｗｗｗｗ」スカッ
「チッ　！何処だ！姿を見せろォ！」
「見せろと言われて素直に従う馬鹿はおりませなんだなぁｗｗｗｗｗ」
「そこっ　！」スカッ
「こっちでおじゃるぅｗｗｗｗｗ」
「このッ　！」スカッ
「はｗｗｗずｗｗｗれｗｗｗ」
「貴様ッ　！」スカッ
「踏み込みが足りんッｗｗｗｗｗ」
「ぬあああああああああああ！！！！！！！！！」
「言い様に弄ばれてる・・・・・・」

その後、
「その辺にしときなさい。あたしのあげるから、お二人の下着を返してあげて」
「ヘイ喜んでェェェェ！！！！」

この少女の一言でカラスは二人に下着を返した。
「すごく納得がいかない・・・」
「私もです・・・」
「まあまあ」
若葉とひなたの頭を撫でる輪廻。その腰には歌野が抱き付いている。
「ハァｗｗｗハァｗｗｗでゅふふｗｗｗｗｗくんかくんかｗｗｗｗｗ」
「直接嗅ぐな邪魔」
件のカラスは妙齢の女性に変身して少女のスカートの中に頭を突っ込んでいた。
誰がどう見てもまごうことなき変態である。
「・・・・・・それで ？こいつは一体」
「オレと同じ悪魔だ」
「あ、ニック。お前今までどこに行ってたのさ !?」
いつの間にかニックがいた。
ニックは輪廻の問いに答えず、続ける。
「序列四十位ラウム。カラスの姿で現れ、都市を破壊し王族から物を盗む変態野

郎だ」
「変態とは心外な ！我輩は紳士にござりますぞ！」
「パンツ頭に被りながら言う事かよ」
「というかこの子の下着捕るなよ」
「良いのです輪廻さまっ♪あたし、下着が無いくらい平気ですからっ」
少女が許したせいか、ラウムと呼ばれた変態女はでゅふふふｗｗｗと笑って下着を外し、そのまま食べた。
「・・・・・・・ニックも人間以外になれるの ？」
「残念ながらなれない」
「アニキは名が知れてまふからね～モゴモゴ。下手に変身すると、真名が即バレなんすよモゴモゴ」
「食うか喋るかどっちかにしろロリコン」
「もぐもぐもぐもぐ・・・・・・ごっくん。アニキ、我輩はロリコンと違いますぅ～！ロリも好きなんですぅ～!!」
「こいつ下着を飲み込んだぞ」

「とんでもない変態だな・・・」
「まったくです・・・」
輪廻の後ろで着替えていた若葉とひなたが戻ってきた。
そして少女の方を向き、ようやく本題に入る。
「さて、それではお前の名前も聞かせて欲しい」
「あ、はい」

「あたしの名前は『香草美空（かぐさみそら）』と言います。年は・・・たしか、十一だったかと・・・あ、お家は東京です」
「東京　！向こうは無事なのか!?」
「いえ、あたしが覚えている限りでは、東京もあいつらにぐちゃぐちゃにされて・・・」
「・・・そうか。すまない、嫌なことを思い出させた」
「ああ、気にしないでください　！たしかにいやなことばっかりでしたが、今は輪廻さまがいますのでっ♪」

そう言って美空は輪廻の右腕にしがみつく。
それを見た歌野が反対の左腕にしがみついた。
「・・・・・・・渡さないから」
「それはあたしのセリフです」
バチバチと火花を散らせる両者。その間で輪廻がため息をつく。
「・・・・・・・・・・・・・・はぁ」
「これは・・・」
「・・・・・・・・輪廻さん ？」
若葉は困惑し、ひなたはジト目で輪廻を見る。
またもため息をついて輪廻が答える。
「・・・・・・・・・・確かに、この子を助けたのは僕だよ。でも、ここまで好かれるなんて、誰が予想できる？」
「まっ ！仕方ないですよね～！」
カラスに戻ったラウムが、輪廻の頭に乗って喋る。
「自分の事を命がけで救ってくれた上に、『オレが一緒にいてやんよ ！』みたい

なこと言われたら、どんな女子も一発コロリ、てなモンですよ～ｗｗｗｗｗ」
「輪廻さん・・・歌野さんと水都さんがいらっしゃるというのに・・・・・・」
ひなたに白い眼で睨まれ、死んだ目で輪廻がぼやく。
「自立できる歳になるまで面倒をみてあげる。って言っただけなんだけどなぁ・・・・・・・」
「それはそうと、歌野はなぜ此処に？いつもなら畑にいる時間だろう」
「そこのクロウに呼ばれたのよ」
「呼んじゃったでありんすｗｗｗｗｗ」
どうやら修羅場の原因はラウムにあるようだ。
「・・・・・・・お前のせいか」
「でゅふふふｗｗｗｗｗサーセンｗｗｗｗｗ」
「コノヤロウ・・・・・・・（怒）」

一段落ついたところで、ニックがラウムに問う。
「オイ、ラウム。オマエ、何でこのガキと契約した？」

「してないんですよね～、それが」
「ア？」
「何時、何処で、我輩が契約を結んだのか。まったくワカランチンなのでございますのですよ」
「ンな訳あるかよ。オレ達悪魔は『契約の書』を介してしか、此方に干渉出来ない。一度でも契約すれば、それを切られない限りは此方に居続けられる。が、契約を切られた瞬間、悪魔は本来居るべき場所に戻され――――」
そこでニックは何かに気付き、口を閉じる。
「そう、我輩は戻されてない。今もこちらに居続けられてる」
「バカな・・・オマエとそこのガキとの契約は完全に切れている。何で帰還しない？」
「我輩にも解りません。ですが、一つ」
「何だ？」
「あのときの我輩は名を奪われておりました。そのせいで何者かの操り人形と化していた様です」

「・・・・・・成る程な、オレがオマエの名を明かした瞬間に、ガキの動きが止まったのは、それが理由か。だが、それとオマエが此方に居続けている理由と、何の関係がある？」

「アニキもお気付きでしょう？この戦には裏がある。我輩がこちらに存続できる原因も、我輩の名を奪った奴も、きっとこの騒動の中心にいる。少なくとも、我輩はそう考えておりまする」

「・・・・・・・・・・成る程な。そうなるとやはり、『アイツ』か？」

「一体はそうでしょうな。が、元凶という訳ではござりませんでしょう」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「こら、ラウム！輪廻さまがきょとん、としてるじゃない！もっと分かりやすく説明なさい！」

美空がラウムを叱る。

「此度の戦、悪魔が一枚咬んでいる可能性がありますぞ」

ラウムの言葉に、一同は驚愕を顕にした。
「・・・・・・だとしても、我々は勝たねばならない。四国に住む人々のためにも・・・・！」
「若葉ちゃん・・・」
「そうね。若葉の言う通りだわ」
「・・・・・・・・・はは、僕の言いたいことぜぇ～んぶ、言われちゃった」
若葉が宣言すると、ひなたは瞳を輝かせ、歌野は若葉に同意し、輪廻は笑って肩をすくめた。
皆、気持ちは一緒なのだ。少なくとも、ここにいる四人は。
いや、きっと全員、同じ気持ちだろう。
輪廻は一人、そんな事を思っていた。

ちなみにこのあと、四人は看護婦に怒られた。

ラウムと香草美空について――――

ラウムは序列四十位の悪魔。序列は強さ依存ではなく、生まれた順。
美空は東京に住んでいた少女。バーテックスから姉と共に逃げ仰せたが・・・
母姉と同じ金髪。
ピーマンが苦手。

廻る円環と落ちぬ太陽

ついに発売に為りました!!勇者の章BD―BOX!!
実は小生、まだ満開祭り３のほうは視聴しておらず、それ以外は、ほぼ！堪能いたしました(ほっこり)
何はともあれりっくんのお話！
どうぞ、お納めください。

「はぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・さんざんな目にあった」
あれから少し経った。その間、歌野に添い寝を要求されたり、みぃに半泣きで問い詰められたりしていた。
昨日の夜も、歌野とみぃが一緒に寝たいとゴネてきた為に、あんまり眠れなかった。おかげでちょっと眠い。
「だから今日一日寝て過ごしたかったのに・・・」

「つまりヒマを持て余していたんだろ ？よかったな、いいヒマ潰しになってよ」
「他人事だとおもってからに・・・」
ベッド代わりのソファーで寝ていたらニックに叩き起こされ、この前行ったジェラート屋にまた行ってきたのだった。（ちなみに今はその帰り）
いい加減にしてほしいよまったく・・・。
「アイスならこの前買っておいたでしょ」
「ならもっとマシなやつ寄越せ。なんだ『ビーフシチュー味』って。お前はオレにゲテモノ喰わせてどうする気だ」
「反応を楽しみたい」
「ふざけんな !!てめ――――あ？」
「んー ？」
丸亀城の正面に、見知らぬ車が停まっていた。
黒塗りの・・・・・なんだっけこういう車。なんかお金持ちが乗ってそうなピッカピカの車だ。
「すっげー。モノホンの高級車だよね !?これ」

「・・・・・・どうやら、アイツの所有物らしいな」

ニックの視線の先に、その人はいた。

丸亀城の周辺をぐるりと廻って来たのか、僕たちが来た方向とは逆から現れた少年。彼がこの車の持ち主っぽいなぁ。雰囲気的に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少年がこちらを見つめてくる。

僕も少年を見つめ返す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつまでそうしてるつもりだ　!!」

スパーン！と小気味良い音を立ててひっぱたかれた。
「いったー。ちょっとニック。痛いじゃんかさ」
「うるせぇ！お前がいつまでもアイツとにらめっこしてるのが悪ぃンだろうが!!」
「だからってなんではたかれないといかんのさ!?」
「――――ぶふっ」
ニックと漫才していたら、少年に笑われた。

「改めて、どうもはじめまして。ボクは枢木白夜っていいます」
「あー、どうも、はじめまして。戸塚輪廻です」
とりあえず両者共に、近くの公園のベンチに座って、自己紹介をする。
にしても、枢木か・・・・・・たしか、首相の名前も枢木って言ってたような・・・
まさかね？
「参考までに聞くけど――」
「あ、はい。ボクの父は枢木誠一郎ですよ。内閣総理大臣の」

まじか。

「戸塚さんのことは聞き及んでおります。悪魔と呼ばれる存在と契約して、勇者の力を獲得したのだとか・・・」

「総理の息子さんなだけあって、勇者関連の情報は仕入れ済み、てことですか」

「敬語はやめてください。ボクの方が年下なんですよ ？」

照れたように笑う柩木。

・・・もしかして、良い人？

「えっと・・・じゃあ、遠慮なく。柩木クンはさ、何の用事で丸亀城に来たの ？」

「ボクの用事ですか ？んー・・・・・・幼馴染の様子を直に見たくて」

「幼馴染 ？」

はて、誰だろう。少なくとも歌野とみぃではないよね。

「郡千景、ご存知でしょう ？」

「へぇ、郡クンかぁ・・・・・・うぇっ !! 郡クン!?」

「はい」

満面の笑みを浮かべて枢木クンがうなずいた。驚いたなぁ。まさか郡クンの友人にこんなすごいのがいたとは・・・

「・・・・・・その様子ですと、千景はボクのことも含めて、故郷のことを何も話していないみたいですね」

「・・・・・・んー、まぁ、そうだね。でも別に、無理に話す必要もないと思うんだよね。僕は」

「ほう・・・・・・なぜ、そう思うのですか？」

「誰にだって、知られたくない過去の、一つや二つ、あると思うんだ。郡クンは特に、そんな雰囲気強いし・・・」

「・・・・・・・あなたにも、あるのですか？」

「・・・・・・・・・・・・まあね」

「・・・・・・・・・・・・・そうですか」

自販機でほうじ茶のボトルを二本購入し、片方を枢木クンに渡す。

「ああ、ありがとうございます。・・・ほうじ茶、お好きなんですか？」

「うーん、別にそういうのじゃないんだ。ただなんとなーく、ほうじ茶の気分だった。それだけだよ」
「へー、そうですか」
そう言った枢木クンはボトルを開けて、ほうじ茶を流し込むように飲む。
よっぽど喉が渇いていたのかな？
「――――――ぷはー。はあ、ふう」
「そんなイッキ飲みしなくても・・・」
「ああ、すみません。ついクセで」
「どーいうクセだよ」
「あはは、よく言われます」
なんだか変わったやつだなぁ。
こんなんが首相の息子か・・・・・世も末だな。
あ、実際終わりかけか。
「ところで戸塚さん。お好きな異性の方って、います ？」
「ぼふぉあああ !! げほっげほっ」

いきなり何を言い出すのか、この自由人は!?
「おお、すごい反応。いるんですね？」
「突然そんなこと聞かれたら誰だってびっくりするでしょ!!」
「で？誰なんです？」
「話を聞いて」
わくわくと、期待に胸を膨らませた少年の瞳でこちらを見つめる枢木クン。
「――――――歌野とみぃ」
「ほうほう、白鳥歌野さんと藤森水都さんですか。二人もだとか、業が深いですねえ！」
「うるせぇ！そういうキミはどうなのS「千景です」うわぁ、食いぎみに来た」
なんとなく、そんな気はしていたが・・・・・郡クンも大変そうだなぁ。こんな何を考えているのかわからないような人に好かれて。
「ボクは、千景と一緒にいられたら、それでいいんです・・・・・それだけ、たったそれだけのことなのに・・・・・千景はその事に気付いていない。どういうわけか、勇者の力でボクへの恩返しをしようと考えている。そんなの、ボクはい

らないのに・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
「ねえ、戸塚さんはどう思っていますか？お二人のこと」
「え？どう・・・って、好きだよ？」
「そういうのじゃないです。『好き』にも色々、あるでしょう？」
「色々も何も、『好き』なモノは『好き』でしょう？」
「――――――――？」
「――――――――？」
なんだか話が噛み合わない。
「――――戸塚さん。いくつか質問、よろしいですか」
「なに？なんなの？」
「いいから」
「――――わかった」
どうしたのかな。さっきまでと雰囲気が違う。
それから、五つほど質問をされた。

そのどれもが心理テストみたいだったから、もしかして、僕の内面を暴こうとしてる？

「――――戸塚さん」

「なんだい　？」

「あなたは一体、誰なんですか？」

――――

「――――は　？」

「『何を言ってるんだこいつ』・・・そう思ってますよね。当然の反応でしょう。理解できます。だからこそ、ボクにはあなたが解らない」

「それって、なぞかけか何か　？」

「さっきボクが出した質問は、『答えた人間の本質を見抜く』為のモノです」

「本質ぅ　？」

「例えば、千景。彼女はとても純粋で、他者の言葉に簡単に振り回されてしまう。

だから、心の底からの善意の言葉ならまだしも、利用するつもりの上っ面だけの言葉に引っ掛かってしまわないように、それとなく注意してきました」

通じていたかどうかは、わかりませんけど・・・と苦笑する枢木クンを、僕はただ、呆然と眺める。

「ほかにも、自分のことしか見ていないような人、自分を見て欲しくて他人にすがる人、さまざまな人がいました。ですが、《あなたにはそれが無い》」

「――――――――――――――まって」

「思えばあなたの言葉には中身がなかった。正確に言うのならば感情がなかった、と言うべきですね」

「――――――――――――――まってよ」

「極めつけは、さっきの『好き』発言。ここでボクは思ったんです。『もしかしてこの人は、自分がわからないんじゃないのか』ってね。こう見えてボク、そういうの察する力は強いんです。首相の息子として色々学んできましたから」

「――――――――――――――だから、まって」

「ですが、蓋を開けてみれば、わからないどころか全く無いじゃないですか。びっくりです。ボクが知りうる中でそんな人、一人もいませんでしたから。なので一つ、仮説を立ててみました」

「――――――――――――――――――――まってって」

それ以上しゃべらせてはいけない。なぜか僕はそう思った。でも時すでに遅く――――

「あなたはもしや――――

■■■■■■■■■■――――と」

その一言を聞いた瞬間、僕の頭に何かが流し込まれた。
なんだ？映像？僕と、バーテックス？戦ってる？いや、違う。これは――――

瞬間、視界がブラックアウトした。

その日の夕方――――
「ぅうん・・・あれ？ここ、僕の部屋？」

「ようやく起きたか、寝坊助」
「あれ、ニック？・・・・・・・僕、なにしてたっけ？」
「寝すぎだボケ。お前今日一日中、寝ていやがっただろうが」
「・・・・・・・・・・・・・そうだっけ？」
「そうだ」
「・・・・・・・・・・・・・ふぅん。まあ、いいか」
そろそろ歌野たちも帰ってくる。夕飯の支度をしておこう。
そう思って僕は、『少し頭痛のする頭』を軽く叩きながら、台所へと向かった。

煮こごりと遠征とラッキースケベ

みーちゃんのほっぺたを突っつく園子様（はたらく細胞ネタ）を見て、園子様にジェラるうたのん。
というネタが降臨してきたけど・・・・どう思う？

突然だけど、僕たちは今、大橋の入り口に集合している。
理由は簡単。これから、四国外調査に向かうためだ。
そもそもの発端は数日前、みぃが神託を受けたことが始まり。
それによると、僕らに味方してくれそうな契約者が現在、諏訪にいるらしい。
なので僕たちは、四国の外が今どうなっているのかを調べつつ、諏訪へと向かうことになったのだ。

「よし、全員準備は整ったな？」

「僕は大丈夫」
「ミートゥーよ ！」
全員がそれぞれなりの言葉で若葉の号令に応える。
「皆さん、ご迷惑をおかけしますが・・・・」
「よ・・・・よろしくお願いします」
今回の遠征には、みぃとひなたも同行することになっている。
「よし ！そんじゃ、二人のことを運ぶやつを決めよ――――」
タマっちクンが何か言うよりも早く、若葉がひなたをお姫様抱っこし、僕も負けじとみぃをおんぶする。
お姫様抱っこしないのかって？無理言うなって・・・
ちなみに、僕の荷物は歌野が持ってくれてる。
『――――――』
「ん ？どうした？」
「お二人共、ナチュラルにそういうことをなさって・・・・すごいです」
「――――――乃木さんに至っては無自覚だし」

「あはは——多分ツッコむだけ無駄だね、こりゃ」
「いやいや、おまえもだぞ輪廻」
「それじゃあ若葉ちゃんの荷物は私が持つね！」
こうして、僕たちは四国の外へと旅立ったのだった。

神戸に到着した僕たちは、二手に分かれて探索を開始した。
「——んー？」
「どうしたの？りっくん」
崩壊した街中を探索する僕たち。そんな中、僕はさっきから気になって仕方ないことをみぃに告げる。
「うーん・・・なんか、変なのがうようよしてるんだけど・・・・」
「変なのって？」
ほらアレ、と言って崩壊した建物の影にいる黒い何かを指差す。
「・・・・・・・・・・なにも見えないよ？」
「・・・・・・・・・・ほんとに？」

おっかしいなぁ・・・なんか黒いのが蠢いているのに・・・。

「――――――――」

「・・・高嶋さん ？どうかしたの？」

「――ふぇ ？ああ、ごめん。なんでもないよ」

・・・・んー？

――――――――――――――――――――

結局、神戸では何も見つからなかった。

途中の街でも、大した物はなかった。

が、バーテックスの卵とおぼしき物体を見つけた。

郡クンが動くよりも先に、ニックの炎で焼き付くしてやった。そしたら歌野に怒られた。しょんぼり。

そんなこんなで、夜になった。

流石に真夜中に動くのは利口とは言えないので、近場のキャンプ場でキャンプすることになった。

の、だが――――

「いいかー？ぜっっっっっったいに!!覗くなよ〜？」
「しないから!死んでも頼まれても脅されてもぜっっっっっっっっっっっっっっっったいにしないから!!」
「・・・・・・輪廻、お前昔何かあったのか？」
「あ・・・・あははは(汗)」
女子たちが水浴びをしてくる、とのことで、僕は一人、離れた場所で見張りをすることになった。
え?覗き?しないから。ぜっっっっっっっっっっっっっっっっっっっったいにしないから。
みんなかなりレベルの高い美少女だし、そういう所を気にしてくれるのは心の底から助かるよ。
歌野ってば、諏訪でも四国でも僕がお風呂入っているとすぐ、「私もー！」って言って入ってこようとするんだもん・・・・ホンっっっっっっっっっっト、

しんどい・・・・・・

「ハッ・・・ご苦労なことだな」

「・・・・・・・ねぇ、ニック。少し前から気になっていたんだけど・・・」

「あの黒い奴のことを言っているのなら、無闇に首を突っ込むな」

ぴしゃり、と黙らせられる。

「――――――――アレが何か、ニックは知ってるんだね・・・・？」

「――――――――『世界の煮こごり』」

煮こごり？なんじゃそりゃ？

「アレは、人間の怨念が寄固まって出来上がった、まさしく『煮こごり』みてェなモンだ」

「・・・・・触ったら？」

「盗り憑かれる」

「・・・・・・・なるほど」

訪れる沈黙。まぁ、ニックとはあんまり会話ってしないからね。

「・・・・・・・・・・・高嶋友奈」

「んー？」
「あの女、煮こごりが見えていた様だな・・・・」
「あー・・・・やっぱり、そう思う？」
「見える処か、多分、アイツは煮こごりのことを知っているだろうなァ」
「ふぅーん・・・・そうかぁ・・・」
それなら、後で話を聞いてみようかなーと、考えていたその時――
「――――いるね」
「――――いるな」
自分たちとは別の誰かの匂いをキャッチ。
奇しくもそれはみんなが水浴びをしている川岸の方向からしていた。
「みんなが危ない!!」
「行くぞ輪廻」
真っ直ぐにそちらへ向かう。
近場まで来て、音を立てないように更に接近。
相手は茂みの中で様子を伺っているようだ。

こちらには――――――気付いていない、か・・・

「・・・・・・・・ん？」

あいつの後ろ姿・・・・なぁんか、見たことあるような・・・・・・

「ハァｗｗｗハァｗｗｗでゅふふふｗｗｗｗｗｗお色気シーンでおじゃるｗｗｗｗｗＣＧコンプしないとｗｗｗｗｗ」

「うわぁ・・・・・」

変態がいた。

「中学生にしてあのナイスボディなお二人も良いが、元気っ娘のナインペタんもたまりませんなぁｗｗｗｗｗしかし、サムライガールと農業王の鍛えられた肉体美も、素晴らしいｗｗｗｗｗああ、いや、シャイガールの程好い肉質も、アレはアレで得点が高いですぞぉｗｗｗｗｗ黒髪美女の疵のあるあの身体も、我輩には美

しく見えますなぁｗｗｗｗうむむ・・・しかしこの中で一番一際輝いておるのは――――」

「おい変態」

「誰が変態だぁ！・・・・・・・・・・あ」

ニックの呼び掛けに、人間体をとったラウムが、こちらに振り向いた。

沈黙が流れる。

不意に、

「ばいちゃ♪」

「逃がさないから!!」

影の中へ沈んで逃げようとするラウムを捕まえようと、飛びかかる・・・・・・・が

「あらよっと」

「なんとぉ!?」

カラスに変身してそれを避けた。

当然僕はそのまま茂みの向こうへ飛んで行く。

「くっそ・・・・あいつ・・・・・・・」
取り逃がしてしまい、歯噛みしていると――――

「あ・・・・あのぉ・・・・・・・りっくん？」
「・・・・・・・・・・・あ」

みぃの声に振り向けば、そこには・・・・
そこに・・・・・・・は・・・・・・・

『き・・・・きゃあ「ぶべらばっ!!」あああ・・・・・・・・・・・・え？』

みんなが叫ぶよりも早く、僕は鼻血を大量噴射して、気絶した。

『世界の煮こごり』について

主に、人間の怨念がまるで煮こごりのように寄固まって出来上がったモノ。世界の煮こごりという名称は、悪魔たちが付けたもので、魔術世界的に言うと――――

地下と死体と命の価値は・・・ 遭遇編

この物語、本格的始動のための序章

「うぅ～ん・・・」
「あ♪輪廻さまっ」
目を覚ますと、目の前に香草クンがいた。
「よかった・・・りっくん、気絶する前のこと、覚えてる？」
「・・・・んーと、変態カラスを追いかけてるところまでは覚えてるんだけど・・・」
「そっか・・・・」
みぃが少し残念そうにしている。何があったんだろう・・・？と、それよりも
「香草クン。どうして――いや、どうやってここに？」
「ラウムと再契約しまして、その能力で輪廻さまの影に潜り込みまして！」
「なるほど」

「納得しちゃうんだ・・・」
だからなんでみぃは残念そうにしてるのさ？
まぁ、とにかく色々あったけど僕たちはここで一晩を過ごした。
バーテックスが襲ってくるかも、と見張りを進み出たけど、特に何事もなく、みんなぐっすり眠れたみたい。

―――――――――――――――――――――

パーティーに香草クンが参加した翌日――
「梅田に来たぞー！」
「今日はりっくん、朝からエキサイティングしてるわね！」
「小さい頃から梅田と銀座に行くのが夢でした！」
「――――――モノポ〇ー？」
「郡クン鋭い！その通り！」
「ぐんちゃんよくわかったね⁉」
「あのボードゲーム、梅田と銀座に止まれれば、大体勝てるって言われてるから・・・流石に、プレイしたことは無いけど・・・・・」

「そうなのか・・・・私はそもそも、モノ○リー自体知らないのだが・・・・」
「うおぉぉぉぉ!! 憧れの梅田ぁぁぁぁぁぁ！！！」
「輪廻さん!?何処に行くんですか～!!」
「お前ら、モノポリ○の話は良いから輪廻を止めるの手伝ってくれぇ～！」

―――――――――――――――――――――

全員で暴走する僕を止めたり、伊予島クンが潰された古書店を目の当たりにしてバーテックスへの怒りを燃やしたりして梅田を探索するが、やっぱり、誰もいない。
どころか、バーテックスすら見当たらない。
「バーテックスもいないとはなぁ・・・」
「・・・・あの、卵のような物体すら、見当たらないわね」
「地上には無い。となると、必然的に――――」
この街に入る少し前の会議にて、『梅田には大きな地下街がある』と言っていた。
そこなら避難シェルターにもなるし、もしかしたら、生存者も見つかるだろう、と。
「――――――行こう。もしかしたら、の可能性だって、あるかもしれないし」

「りっくん。良いこと言うじゃない♪」
「なら、それは歌野のおかげだね」
「ふふ、ユアウェルカムよ♪」

―――――――――――――――――――――

地下道への入り口はちゃんと残っていた。
周囲にばらまかれた机やらなんやらは、きっと、バリケードの名残だろう・・・・
ということは――――
「――――行こう。確かめてみなければ、何もわからない」
若葉の言葉に促され、僕たちは地下へ入っていった。
辺りは暗く、電気が通っていないのは、一目瞭然。
「こんな時は、ニックの炎で「「りっくん！」」ごめんなさい・・・・」
歌野とみぃに怒られたので、今度はふざけないでちゃんと懐中電灯を取り出した。
「誰かいないかぁ～～～！！！」
「いたら返事プリーズ！！！」
若葉と歌野が呼び掛けるが、二人の声が反響するだけで何も返ってこなかった。

「生活してた痕跡は、あるみたいですけど・・・」
伊予島クンが辺りを見回して分析してくれた。
確かに、空のペットボトルやら何かの包みなんかがまばらに散乱してはいる・・・・けど、やたら少ない気もする。梅田って、人口少ないの？それとも、逃げ込めた人数が少なかった、とか？
「――――――妙だな」
「ぅわ!?ニック!?」
いきなり隣にニックが現れた。びっくりするから止めて欲しいんだけど・・・
「妙、とは？」
「生命体の気配が無ぇ。それは解る。だが、バーテックスの気配も無ぇとはどういう了見だ？」
ニックの言葉に全員が驚愕する。
「――――どういうことなんだ？」
「さぁな。だが、用心に越したこたァ無いだろうよ」
それだけ告げて、ニックはまた指輪に戻った。

「――――――どう思う？」

全員で顔を見合わせて、ニックの発言について議論する。伊予島クンが手を上げて発言し始めた。

「ニックさんの発言が本当なら、ここには本当に何も無い、ということになりますが・・・・」

「あのデビルが、こういう時に嘘を付くのはあり得ないわ」

「どうして、そう言い切れるの・・・？」

「ニック・・・さんは、りっくんが死なないように行動しています。こんな所で嘘なんか付くわけ、無いと思います」

「ふーん・・・じゃあ、あいつは輪廻が死なないよう、タマたちに警告してくれたって所か？」

「そう考えるのが、妥当でしょうね・・・」

上里クンが難しい顔でそう言った。

「うーん・・・とにかく！みんなで注意して進む！これで良いと思うんだけど・・・・どうかな？」

友奈がそんな事を言い出した。
「――――ま、良いんじゃないの？」
「だな！」
そんな訳で、ここからは更に注意して進むことになった。
――
「なんだよ・・・・これっ!?」
広い場所に出た瞬間、タマっちクンが叫んだ。
そして同時に――――
「おやぁ・・・？やっと、生存者が来ましたかぁ・・・・・」

広場に積まれた白骨の上に座る少女が、こちらを見て、呟いた。
「貴様・・・何者だ!!」
「ははぁ・・・・血気盛んなのは結構ですねぇ。ええ。わたくしですね？」
のらりくらりと、少女は立ち上がり、名乗った。

「わたくしは、七十二の悪魔が一体。序列十六位ゼパルと申し上げます。以後、お見知りおきの程を・・・」

恭しく、一礼した少女の瞳は、まるで死体の〝それ〟のように、ひどく、濁りきっていた。

地下と死体と命の価値は・・・　日記編

「悪魔・・・ゼパルだって!?」
「おい！なんでテメェがここにいやがる！」
うわ!?またニックのやついきなり出て来て！
「お久しぶりですなぁゼパルどの！・・・・会いたかったぜクソヤロウ」
変態も出て来たよ。しかもなんか怒ってる？
「ははぁ・・・・これはまた・・・・意外な組み合わせですねぇ・・・・」
「ハッ！テメェが表に出て来てる時点で意外だがな」
「あぁまぁ・・・・確かに、そうですねぇ」
「オウオウ、クソ雑魚ナメクジのゼパルさんよぉ・・・オレとお嬢を操ってくれたオトシマエ、着けさせて貰おうじゃねぇか・・・！」
どうしよう・・・変態が変態してない！キャラ崩壊も良いところだよ!?!?
「オイ輪廻」
「はい!?」

「アイツを焼け」
「えぇ!?良いの!?あいつの事、なんにも分かってないよ!?」
「アイツはゼパル。名前を奪った対象を意のままに操る能力≫生名簒奪(ロストネームド)≪であのガキとラウムを操り、四国に攻め込ませた犯人だ」
「よし焼こう」
「りっくん!?」
　ニックの力を使おうとしたら、みぃが止めた。
「はぁ・・・・短絡的ですねぇ。こちらにも事情があるのですよ」
「テメェの事情なんざ知ったことか!!どうせロクでもねェ企みに加担してるだけだろうが!!」
「ああ、鋭いですねぇ。流石は≫指輪持ち≪、といった所ですねぇ」
「指輪・・・・？」
　ニックの本体だって言う、アレのこと？
「おやぁ？ご存知無いのですか？」
　ゼパルは心底驚いた様子で、こちらを見ていた。

「何の事だ！」
「我ら悪魔の真鍮核のことですよぉ。それが指輪型の悪魔は、七十二体中十体のみ。本来ならば、自然の摂理に準じた特別な能力を使う我ら悪魔ですが、中でもこの十体は特殊中の特殊でして、自然の摂理に反した能力を持っているのですよ」
「自然の摂理・・・・？」
「ええ、はい。例えば、彼。ええっと――――ニック、ですか？奇妙な名前を貰いましたねぇ」
「僕の命名センスにケチ付けるの？」
「あれぇ・・・・あなたが付けたんですか・・・・まぁ、どうでも良いですけど・・・・」
どうでも良いのか・・・・
「ニックの核が指輪型なのはご存知ですか？知ってる？結構。じゃあ、ニックが対価に要求するのが魂の炎だということもご存知？」
「・・・・・・・・・・・・え？」
ゼパルの言葉に、歌野とみぃが絶句し、僕を見る。
「りっくん・・・・アイツの言ってること・・・・本当？」

「正直に答えて・・・・・りっくん」
「――――――――――うん。そうだよ」
バレてしまっては仕方ない。だから、正直に答えた。
「・・・・・今は、何も言わないでおいてあげる。帰ったらみーちゃんと一緒にお説教だから」
「――――――――ごめん」
「ははあ・・・仲が宜しいのですねぇ。良い事だと思いますね。ええ・・・」
「ゼパル!!テメェ・・・何が目的だ!!」
ニックが怒鳴る。その怒号をうけてゼパルは――
「わたくしの目的は、一つ。この世の全てを解き明かしたい。たった、それだけです」
「この世の、全て・・・・・？」
「解き明かす・・・・って、どういう意味だ？」
「言葉通りの意味ですよ。例えば・・・・・・えっと・・・・はぁ、バーテックス？と、呼んでいるのですねぇ・・・・確か、英語で『頂点』の意味・・・・ぷふ」

途端に、ゼパルが笑い出した。
「何が可笑しい!!」
「ああ、いえ、すみません。――ぷぷ。なにぶん、あんなものを『頂点』などと呼ぶもので――くふふ。いやはや、知らぬ事とはいえ――ふひひ」
「ニック。こいつ燃やそう」
「手伝うぞ輪廻」
「落ち着いてりっくん!!」
「若葉ちゃんも！今は堪えてください！」
額に青筋をたてている僕と若葉を、みぃと上里クンがなだめる。
「――あー、いやはや、失礼。お詫びと言っては何ですが・・・みなさんがバーテックスと呼ぶアレについて、わたくしの研究成果を教えてあげましょう」
『え!?』
ゼパルからのその提案に、流石の僕たちも怒りが引いた。
というか、こいつ、研究成果って言ってた？
「――まさか、ここにバーテックスがいないのは」

「はい、全てわたくしの研究材料として、使わせて頂きました。いやはや、連中、見境がありませんからなぁ。おかげで何度も命の危険に晒されましたよ。まぁ、その前に、ここで人間の思考実験もしていたので、その後始末が楽になったのは、行幸でしたけど」

そう言って、一冊の手帳を投げて寄越す。

若葉の足元に落ちたそれを、彼女が拾い、黙読。

読み進めていく内に、若葉の顔色がどんどん青くなっていき――

「ふざけるなっ！！！」

若葉が叫び、手帳を地面に叩きつけた！

「若葉ちゃん!?」

「どうしましたか!?」

「――――――これは、お前の仕業なのか、ゼパル！！！」

若葉が投げた手帳を拾い、中を読む。

書いたのは、どうやら女の子らしい。

この場所で、何が起きたのか。

それが、赤裸々に書かれていた。
「思考実験・・・・ね」
「・・・・・・・デビルめ」
「・・・・・・・ひどい」
いつの間にか、両サイドから歌野とみぃが手帳を覗き込んでいた。
簡潔に述べれば、ここに避難した人間たちはどうやら、独占と奪い合いによって自滅した、らしい。
追い込まれた人間が、どのような行動に出るか。
ゼパルの言った≫思考実験≪と言うのは、このことか・・・・クソったれ。
「ちなみに・・・・この肉体は、最後まで生き延びた少女のモノでしてねぇ。あぁ、その日記を書いたのも、この少女ですよ」
「――――――御託はいい。さっさとバーテックスについて教えろ」
「冷たいですねぇ・・・・まぁ、いいでしょう」
そうして、ゼパルは話始めた。
バーテックスについて、奴の知る事全てを・・・・

地下と死体と命の価値は・・・解明編

「端的に言ってしまえば・・・・・アレは泥人形ですよ」
「泥人形・・・・？」
ゼパルは頷き、話を続ける。
「主の命令に従い、人類を粛清するだけの人形。その材質は――――『世界の煮こごり』です」
「え!?」
「何だと!?」
煮こごりって・・・・確か、怨念とかが固まって出来たやつだよな・・・・
「それが・・・アレの材料・・・・て、ことは・・・」
「――――クソが。主犯はアイツか」
変態とニックが何かに気付き、毒付く。
「――――心当たりが、あるのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ」

若葉の質問に、ニックが頷く。
「教えてくれ。世界をこんな風にした奴とは、一体誰なんだ？」
「――――――――オレたち悪魔の中で、唯一、『悪意の泥』に触れることの出来る奴がいる。そいつの名は――――」
ニックが、名前を言おうとした、正にその時だった。

「フム・・・・反応を辿って来て見れば――――お前か。ゼパルよ・・・」

「誰だ!!」

「私の名は、ジュリアス・レイ・ヴェガリオ。七二の悪魔が一体、序列六十六位キマリスを従えし超越者(オーヴァード)である!!」

背後から現れたその男は、細身のレイピアを顔前に構え、高々と名乗りを上げた。

「超越者だと!?」

「アニキ、不味いですぜ・・・キマリスの超越者ってなると、戦闘能力は・・・・・」

「ほう？そちらの二体はキマリスと同じ悪魔と見受けられる・・・・・が、どうやら契約の超越迄は至っていない模様だな」

契約の超越？超越者って・・・・・？

「フム・・・・？しかし可笑しいぞ。ここから私と同じ超越者の気配もした気がするのだが・・・・まあ、良い。さて、私との決闘に応じる猛者は居るか!!」

周囲の瓦礫が吹き飛ぶ程の覇気を飛ばし、ジュリアスはこちらを睨み付ける。

「・・・・・どうする？」

「なんとかしてあの人を退けて、ここから脱出しないと・・・・」

「どうした？応じる者は居ないのか？ならばここからは一方的な虐殺が始まるぞ？」

「――――言ってくれるな。お前は一人なのに対し、こちらは七人。数の上ではこちらが有利だぞ？」

若葉があえて挑発するような事を言う。が、ジュリアスは意にも介さず、平然と言ってのける。

「その程度の差ならば、全く問題にはならんな」

「・・・大した自信ね」

「あまり我々を見くびるな・・・！」

戦いの火蓋が、切って落とされた！

先手必勝。

郡クンと友奈が共にジュリアスに突っ込む。

「はぁぁぁぁ!!」

「フン」

郡クンの鎌を、ジュリアスはいとも簡単に弾き、流し、終いに郡クンを蹴飛ばしてしまった！

「でやぁぁぁ！！！」

その後ろから友奈が突撃。

が、その拳を軽く身を反らすだけで避けてみせたジュリアスは、そのまま友奈の腕を掴み、突撃の勢いを利用しての背負い投げで、郡クンに向かって友奈を投げ飛ばした!!

「「きゃあああああ!?!?!?」」

「ならっ！これはどーだぁ!!」

タマっちクンと伊予島クンの同時攻撃。

矢弾の嵐の中、旋刃盤がジュリアス目掛けて飛び掛かる。

「甘いぞ!!」

しかしジュリアスは、矢弾をレイピアで弾くと、旋刃盤をそのままレイピアで絡めとり、二人目掛けて投げ返した！

「あぶ――――かはっ!?」

「タマっち先輩!?」
伊予島クンを庇ってタマっちクンがそれに被弾。
「余所見をしていて、良いのかな？」
「あぐ!?」
一瞬の隙をついて、伊予島クンの背後に回ったジュリアスは、レイピアの柄で彼女の後頭部を殴り、伊予島クンは気絶。
あっという間に四人がやられた。
だが、ここで怯む訳にはいかない――――！
「歌野！」
「オフコース!!」
僕と歌野による同時攻撃。僕は奴がレイピアを持つ左から、歌野はその反対から攻める。
「ほう？」
ジュリアスは真っ先に僕を狙って来た！うん。読み通りだ！
ジュリアスが突き出してきたレイピアを、カギ爪でガッチリホールドする。その

隙に、歌野が右腕を鞭で縛る。
「これで動けまい！」
「考えたな！」
そこにすかさず若葉が攻撃する。これなら――――！
「だが、甘いと言ったぞ!!」
ジュリアスは咄嗟にレイピアを手放し、腰にマウントしてある鞘のようなものを取る。
その瞬間、鞘と思っていたそれから、光が刃となって迸る！
光の剣、とでも呼べば良いのか。ジュリアスはそれを若葉に向かって振り抜く。
若葉の生大刀と、ジュリアスの光の剣が交差し――――――

静寂が、辺りを支配する。
二人は互いに、剣を振り抜いた体勢のまま、固まって動かない。
静寂を破ったのは、若葉の左肩から吹き出した鮮血。
「若葉ちゃんっ!?!?」
上里クンの悲鳴が響く中、若葉が膝を着く。
「――――――フム。一つ、諸君等に謝罪しよう。そちらの戦闘力を侮っていた」
ジュリアスが静かに、光の剣を下ろして自身の首を撫でる。
ジュリアスの首筋に、一筋の赤い線が真横に引かれている。それが、若葉の一太刀によるものだと、僕は瞬時に気付いた。
「貴殿、名は何と言う？」

「――――若葉。乃木若葉だ」
「そうか・・・・ワカバ、貴殿の太刀筋、見事であった。今回はこれで引き下がろう。が、次に会った時は、容赦はしない」
それだけ語って、ジュリアスは来た道を悠々と歩いて戻って行った。
「はぁはぁ・・・・行っちゃいましたねぇ・・・・・で？どうするつもりですか？」
ゼパルが問う。
どうするも何も――――
「いつの間にか歌野の拘束を解いてるし、あのジュリアスとかいうやつ・・・・今は追いかけない方が無難だね」
とりあえず僕は歌野と共に気絶している四人を起こしにかかる。
しかし――――超越者、か・・・・・
「まったく、大変だ」

ゴスロリと追っ手と再びの諏訪 -帰宅-

「ほう――――ここが諏訪ですかぁ」

「――――――私より前に出るな、ゼパル」

すみませんねぇ、と言って若葉より後ろに下がるゼパル。

結局、ゼパルも僕たちと共に諏訪に行くこととなった。

その事自体は良いんだけど・・・・変態がゼパルに警戒心丸出し・・・・てか、全く隠そうともしてないんだよなぁ・・・・おかげで緊張感を持って諏訪入りできたんだけど。

「――――――みんな、ちょっと僕、別行動させて欲しいな・・・・ダメかい？」

「どうした？何かあったか？」

「若葉ちゃん・・・・・ここは輪廻さんにとって、第二の故郷なんですよ・・・・だから・・・」

「・・・・・・・・!?そうか――――そうだったな・・・・わかった、行ってこい。ただし、何かあったらすぐに連絡しろ。良いな？」

「・・・・・・・ごめん、ありがと。ちょっと行ってくる」
駆け足でその場を離脱。僕は一人、ある場所へと向かうのだった。

僕が、こちらで使わせて貰っていた家。そこまでの道を歩いて行く。
案外、覚えているもので、そこには蕎麦屋があって――だの、そこの家のおばちゃんからきゅうりをお裾分けして貰ったなぁ――だの、破壊し尽くされていてもなんとなく思い出せる。
思い出に耽りながら、たどり着いた家は、どういうわけか、まだ完全に残っていた。
「――――――まさか」
「そのまさか、だ。家に誰か居るな・・・」
僕らが四国へ逃げた後、誰かがここに拠点を造った・・・？
誰が――――なんてのは、なんとなくわかる。
「神託にあった、契約者・・・かな？」
「もしくは、バーテックス側に与する連中かもな」

どっちにしろ警戒はしたまま、家に上がる。
家具などに使用された形跡はあるものの、家の中はほとんどあの時のまま。棚に置いてある筋トレグッズもそのままだ。
「――――――なんだろ？なんか・・・・変」
「何がだ？」
ニックに尋ねられる。
けど、具体的になにが変なのかよくわからない僕は、頭をひねるばかり。
とりあえず、僕らは家内の様子を伺いながら二階の寝室へと向かって行った。
が、特に何事もなく、無事に部屋にたどり着いた。元よりそれほど大きくない二階建ての一軒家。一分もせずに玄関から二階の寝室まで行けるわけだけども・・・・・
「・・・・こういう時って、小さいトラップとか仕掛けておくもんだと思うんだけどなぁ・・・」
「無用心な野郎だ――――だからといってこっちも無用心になるこたァねぇぞ」
「うん。わかってる」
覚悟を決めて、ドアを少しだけ開く。

攻撃は――――――無い。外出中？それとも逃げた？
「いや――――――中に居る・・・・間違いなく・・・・」
ニックがそう言うなら、多分、本当だ。今度はドアを蹴り開けて入室。
部屋の真ん中には、赤い髪の、どこか友奈に雰囲気の似ている少年が立っていた。
「――――――」
「・・・・・攻撃して来ないってことは、敵じゃない・・・・ってことで良いかな？」
沈黙したままの少年は、こちらを伺うのみ。
「――――――うーん・・・なにかしゃべってくれないかい？敵対しないならさぁ」
「――――――」
「・・・・・・・困ったなぁ」
僕が首をひねると、少年も同じように首をひねる。いやいや、君のせいで困ってるんですけど？
「あらあら～？もしかして、ゆーくんの念話が通じてない～？」

すると突然、少年の後ろに若い女性が表れ、少年に絡み付くようにもたれかかった。
「ッ!?ニック！」
「――――――テメェか。カイム」
「はろはろ～♪お久しぶり～♪」
背中から生えて（？）いる球体関節の四本腕を振って、カイムと呼ばれた悪魔は嬉しそうに返事をした。
「カイム？どんな悪魔？」
「ちったァ勉強しろ。序列53位の悪魔で、鳥の言葉を理解できる『鳥声翻釈（ハミングバード）』の能力を持ってる」
「そういうこと～」
いつの間にやら、カイムはメカメカしい小鳥に変身して、少年の肩に留まっていた。雀かな？
「スズメじゃねェ、ツグミだ」
「おおざっぱに言えば仲間だし～、あながち間違いってわけでも無いのよね～」

はぁ・・・・よくわかんないや。
「それで？そこの彼は誰なの？」
「名前を聞くときは～、まず自分からじゃあないの～？」
む、確かにその通り。
「僕は戸塚輪廻。こっちはニック」
「うん～、知ってる～♪」
じゃあなんで名乗らせたし。
「そういう性格の奴だ。我慢しろ」
「そうそう♪我慢我慢～♪」
唄うようにカイムが煽る。
まったくもう・・・・・！
「え？なぁに？・・・・・・・・はぁい、わかったよ～・・・・」
少年がカイムになにか話しかけると、カイムはしょんぼりと肩を落とした。
どうやら怒られたらしい。
「仕方ないわね～・・・あたいが通訳してあげるわ」

「あ、うん。お願いします」

ゴスロリと追っ手と再びの諏訪 -サイカイ、そして・・・-

「あ、あー・・・『あー・・・どうかな？』」
「おー、声が変わった！」
「コイツのは、そういう能力でもあるからな」
へー。
『『とりあえず、はじめまして。僕は高嶋友悟。名字から分かると思うけど、高嶋友奈の双子の兄妹さ』』
「――――やっぱり、そうなんだ。顔が似てるからもしかしたら・・・って思っていたけど」
『『昔はよく、どっちが上かでケンカしてたな・・・ちょっと、懐かしい・・・・・』』
笑って友悟クンはそんな事を言う。仲の良い兄妹だったんだねえ。
「それで？こんな所にいる理由と、キミが契約者になっている理由は？」
『『契約者？――――ああ、なるほど。そんな名前が付けられていたんだ・・・・・』』
そういえば、≫契約者≪って呼んでるの僕と歌野だけじゃね？いや、若葉とかも

呼んでるか・・・・・

何にしても、僕らだけしか《契約者》って呼び名は使ってなかったなぁ・・・・

『なかなか良い呼び名だね。付けた人のセンスを感じる』

誉められてるよ、歌野。

『で、だ。キミは、あの戸塚の人間って事で良いのかな？』

「あのってどの？戸塚って名字、他にもいるの？」

『――――知らないなら、いいけど』あ、ゆーご。大変だよ！」

カイムが突如、翻訳を止めた。と、同時に外から何かの気配を感じた。

「輪廻」

「うん。今、感知した」

友悟クンに目線で合図。彼はそれに頷いて、僕と共に窓から外に出るのだった。

――――――――+――――――――

二人で向かった先には友奈たちがいた。なんか、黒くてフリフリでファンシーな洋服を着てる、黒髪のキレイな女の子を庇っているみたい。

『『友奈!!若葉さん!!』』

「え・・・・・・友悟!?」
「友くん、やっぱりここに――――――」
あれ、若葉とも知り合いなの？
「ほう――――もう一人の御尋ね者がここにいたとは・・・・・」
「げえ!?お前は!!」
友奈たちが戦っていたのは、梅田で戦った超越者――――ジュリアス・レイ・ヴェガリオ。
まさか、こんなに早く再戦することになるとは・・・・
「さて、それではもう一度言おう。今すぐその娘を渡せ。我々には彼女の能力が必要なのだ」
「お断りなのです！誰がお前たちに助力してやるものですか、この唐変木!!」
口悪っ!?なんだこの娘？なんか変な気配だけど・・・・
「――――なんでテメェがここに居る？」
「む？誰かと思ったら、お前でしたか・・・・・」
「ニックの知り合い？てことは、彼女も悪魔？」

「ああ、奴は――――」

「ちょっ!?ちょっと待つのです!!このスカポンタン！！！」

ぱたぱたガチャガチャと音を立てて、女の子が走り寄ってくる。――――ガチャガチャ？

「ふん!!」ガッ！

「あんぎゃぁぁぁぁぁぁ!?!?!?!?!?」

向こうずねを蹴られた!?なんで僕!?しかもいきなり!?

しかもめちゃくちゃ痛い!?あ、よく見るとこの娘の靴、金属製だわ。そりゃー痛いよ・・・・・いやいや！そうじゃなくて!!

「※悪魔の真名はおいそれと明かしてはならない※。そんな事すら忘れてしまったとは・・・・嘆かわしい鳥頭なのです」

「だからってなんで僕が蹴られなくちゃいけないのさ!?」

「自分の契約した悪魔を管理できないようなズボラには、丁度いいクスリで――――お前、本当にコイツと契約しているのですか？」

は？何を言ってるんだこの娘は？

僕が抗議の声を上げようとした、まさにその時だった。

「その疑問は尤もだ。しかし、今はまだ真実を語る時では無い」

「ァ・・・・・・」
息が、詰まる。
「フム――――よもや、私自らが出向く羽目になるとはな・・・・・・」
「申し訳ありません。我が主」
「しかし・・・・・・お陰で良いモノが見れた」
その男を、知っている。
神父服に身を包んだ、五分刈りの男。
ジュリアスはそいつに対して、片ヒザをついて頭を下げる。

その顔を、知っている。
生まれてから、ずっと見てきた顔。
あの男の顔を見なかった日など、ほとんど無かったくらいだ。
その、男の名は――――

「戸塚――――総司――――――――！！！！」

「ほう――――実の父親を呼び捨てとは・・・・やれやれ、そのように育てた覚えは無いのだがな」

「総司ィィィィィィィィィ！！！！！！！！！！」

許さない。

今、僕の頭の中はアイツに対する憎悪でいっぱいだ！

アイツが――――アイツのせいで――――みんなが・・・・家族が・・・・・！！！

「クソ!?待て輪廻!!」

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ニックの制止の言葉も聞かずに、僕はアイツに突撃するのだった。

戸塚総司について――

想定CV・中田譲治

輪廻の父親。

神父服は彼の趣味。

輪廻の故郷が壊滅した原因であり、そして――

ゴスロリと追っ手と再びの諏訪 -元凶-

戸塚家は、代々とある山間の村にある社にて、神官を務める一族であった。
それ故に、神の力をその身に宿す事のできる数少ない人間として、ある組織からスカウトされ続けていた。
しかし決まって返事はNO。

だからこそ、あの悲劇が起きたのやも知れない……

総司へと突貫する輪廻を止めたのは、何処からか飛ばされてきた球子と杏だった。
「ぐあっ!?」
「ぐえ」
「きゃっ！」

三人は団子になって転がり、もみくちゃになって静止。

直後、球子と杏が飛んで来た方向から、一人の少年が歩いて来た。

「Ｂｕｏｎｇｉｏｒｎｏ～♪え？今昼？知ってるよー、これはアレさ。≫はじめまして≫的なそういうニュアンスだよ。聞いてないって？それも知ってるー」

おどけた表情でペラペラと喋るイタリア系男子。そんな彼にジュリアスが、息継ぎの合間を抜って苦言を申す。

「レオーノ、その様な態度はいけないと言ったはずだ。敵をあな『『敵を侮る事無かれ』でしょ。わーかってるって！」――――――そうか」

レオーノと呼ばれた少年は、一つ咳払いをすると自己紹介を始めた。

「改めまして、Ｂｕｏｎｇｉｏｒｎｏ.ボクはレオーノ・Ｄ・ヴェンティ。序列三十四位の悪魔、フルフルの超越者！使用する能力名は『螺旋波紋』！具体的に言うと・・・・・」

その時、レオーノの右手に空気の塊が出現。それを若葉に向かって投げつけた。

速度はそれほど速くなく、若葉は生大刀で斬りつけた――――――――が、斬る事は出来なかった。

「なっ!?・・・・・・うわぁ!!」
「若葉ちゃん!?」
空気弾に刃が触れた瞬間、生大刀を握る若葉ごとその場で回転。若葉はそのまま後ろに吹き飛ばされてしまった。
「とまあ、このように、『手で触れたモノを回転させる』能力なんだ」
「・・・・っぐぅ。私は、お前に触れて無い・・・ぞ」
「回転させる時に、ちょーっと一手間加えてあげるとこうなるのさ。詳しくは、教えてあげないケド」
「――――理解してないではないか」
相手を小馬鹿にした態度を改めないレオーノに、ジュリアスはため息を吐く。
「ジュリアス、彼の好きにさせたまえ」
「――――――御意に」
「しかしレオーノ、私がここに態々足を運んで来たのだ。あまりはしゃぎ過ぎてはならないぞ」
「OK～♪それでは――――――」

総司に窘められたレオーノは、そのまま総司の後ろへと走り寄ると、恭しく一礼して高々と宣言した。

「Ｆａｔｅｌｏｆｅｌｉｃｅ(祝福せよ).凡人共!!此所におわすお方こそ、腐敗したこの世の救世主にして、人類の新たなる道標!!序列72位アンドロマリウスと契約し、人としての壁を超越した超越者(オーヴァード)!!!　尊きその名を心に刻み込みたまえ諸君・・・・・≫戸塚総司≪という猛き名を!!!」

レオーノによる紹介が終わると、ゴスロリ少女の隣に立つニックが呟いた。

「アンドロマリウス――――やはり、テメェが・・・・」

「如何にも。私こそが全ての元凶。アンドロマリウスが能力≫悪性腫操(アンリ・マユ)≪と、蛭子命の神力を掛け合わせ、お前達がバーテックスと呼ぶモノを創造し、世界に破滅と混沌をもたらした者だ」

堂々と名乗り出た総司に、若葉たちは絶句した。
これ程の事をして、こうも簡単に言ってのける彼の図太さに驚愕していたのだ。
「故に、お前達如きでは私には勝てぬぞ・・・・・私には、神の力そのものが宿っている・・・・」
「――――そんなもの、やって見なければ分からない！」
勇み、総司に斬りかかる若葉。だが、それは総司に届くよりも前に、ジュリアスによって阻まれる。
「そうはいかないぞ、ワカバ。貴殿の相手はこの私だ」
「くっ!?」
「ゆーご！」
「――――っ！(こくり)」
両手を合わせ、地面からマスケット銃を造りだした友悟は、総司に向かってそれを射つ。しかし、放たれた弾丸はレオーノにより弾かれてしまう。
「無駄無駄ァ!!」
「――――――っ!?」

「友くんの弾も届かないの!?」
「・・・・・・・」
友奈の後ろに隠れるゴスロリ少女が勇者服の裾を掴む。
怯えた様子の少女に、友奈は優しく笑いかけて総司を睨む。
「――――どうして、こんな事をするんですか？」
「レオーノが言った筈だが？『腐敗したこの世を救い、人類を正しく導く』為だ」
「ならっ!!こんな事しなくても・・・・・・たくさん人が死んじゃったんですよ!!」
「全ては尊い犠牲だ。大義の前に、それは必要不可欠なのだ」
「なら、お前もその一つになれ・・・・・・！」
突如、総司の足下の影から輪廻が飛び出した！
「む・・・・!?」
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！」
完全な不意討ちだった。しかし総司は、それを間一髪でかわしてみせた！
「クソっ!!みんなの仇！！！」
「確かに、あの村を壊滅へと導いたのは私だ。しかし、それ以前に、私はお前の父

親だぞ？」
「だからこそ!!僕がお前を殺す!!」
「子の責任・・・・か。まるで成長が見られない!!」
「がはっ!?」
輪廻が繰り出すカギ爪のラッシュを避け、隙を見て総司が輪廻にボディブローを食らわせる。
たった一撃で、輪廻は気絶。地面へと倒れ伏す――――
「輪廻さまっ！」
前に、美空が影から出現。輪廻を抱えて再び潜航した。
「成る程・・・・ラウムの能力か・・・・」
友奈の影から現れた美空は、輪廻を抱えた体制のまま、戦闘体制を取る。
「――――フン。行くぞ」
「はい。我が主様」
「――――少し、お時間を。我が主」
「好きにしろ」

つまらなそうな総司が撤退し、レオーノがそれに続くのだが、ジュリアスだけはその場に残った。

「ワカバ。貴殿に一つ提案がある」

「――――――一応、聞こう」

「私と共に来い。そなたの技、このまま消し去るにはとても惜しい」

そう言って、若葉に手を差し伸べるのだった。

しかし、若葉は当然拒絶する。

「――――――だろうな」

「逆に聞く。ジュリアス、貴方の方こそこちらに来るべきだ。貴方の剣からは、邪念を感じない・・・・貴方は何故、あんな奴の言いなりになっている？」

「――――――――――――――――」

「なっ!?!?!?!?!?!?!?」

寂しそうに笑うと、ジュリアスは若葉に一言だけ囁いて去って行った。

囁かれた若葉は顔を真っ赤にして身体を戦慄かせている。

別れの際、ジュリアスは若葉にこう言ったのだ。

「私は、そなたのような女傑が好きだ。いつかきっと、そなたを私のモノにしてみせよう・・・！」

「なっ・・・・なっ・・・・なっ・・・・!?!?!?!?」

「・・・・・・なんで若葉ちゃん、顔真っ赤なの？」

何はともあれ、総司たちの襲撃はどうにか凌ぐ事に成功したのであった。

寂しがり屋のロンリーボーイの章

上里一正は天才児である

ついに、『結城友奈は勇者であるA』のぱるにゃすによる実況動画が配信されましたね。

最後の銀にやられた方々は多いはず。僕もその一人です。

そんな訳で！ミノさん救済ルートを突き進むわすゆ編！

どうぞ、お納めください。

おれが、上里一正（カズマ）としてこの世に産まれて、七度目の誕生日に、両親が死んだ。

両親にねだって連れて行ってもらった遊覧船『あきつ』。その転覆事故に両親とおれは巻き込まれ、結果、おれだけが生き残ったのだ。

だが、大人たちはおれに、悲しむ時間を、心の整理をつける時間を、与えてはく

れなかった。
遺産相続、権限委託、難しい言葉を並べて、まくし立てる。
結局、おれの手元に残ったのは、誕生日が一日違いの妹と、大きさは変わらないはずなのに、やたら広く感じる我が家だけだった。
生活費は、ろくに顔をあわせたことのない叔父が出してくれることになった。
一度にたくさんのものを失ったおれたちに、大人たちは口々に言う。「つらかったね」「災難だったね」と・・・
だからおれは、言ってやった。

「その言葉、本心からですか？」てな。

その言葉に対して何も言い返さない大人もいれば、そうでない大人もいた。
前者には無視を決め込み、後者の、それもおれを心から心配していそうな大人たちには、子供らしくすり寄った。
そうして、自分の顔を変えて、大人たちの間で生きていった。
父さんから託された、あるものを守るために。

父さんは、この世界を守護してくださってる『神樹様』を奉る組織『大赦』の中で、最も発言力の高い地位に座していた。それはつまり、父さんの一言で大赦を自由に動かせる、ということ。
しかし、父さんは私的にその権力を利用することを良しとせず、世のため、人のために権力を奮った。
そんな父さんに託されたもの、それは大赦本庁地下に存在する資料保管庫、通称『開かずの間』のカギ。
ここには、西暦から今日までに至るまでの全ての資料が検閲されずに保管されている。

それゆえに、やろうと思えば今の世の中の常識を、根本からひっくり返すことだって出来てしまう。

だがおれは、そんなことをするつもりはない。

このカギを渡された時、父さんは言った。

「いつかの未来、お前が私の意思を継いでくれることを信じて、このカギをお前に託そう」

おれは、父さんの意思を継ぐ。

継いで、この国を、人々を守る。

だからおれは、大人たちの目を盗み、『開かずの間』に入り浸った。

ここならなにか、役に立つ資料があるはずだと、そう信じていたからだ。

結果としては、それは正しかった。

神樹様と、神樹様が創る結界『樹海』についての考察がまとめられたノートが見つかったのだ。

筆者の名は『伊予島杏』

現代において、大赦を創設した六家、通称『六花』に数えられる、伊予島家の人

間にして、初代勇者の一人。

このノートから得られた情報を元に、ある方法を模索する。

すなわち、『勇者以外の人間が、勇者と同等の力を手に入れる方法』

勇者は、神樹様の力をその身に宿すことで常識離れした能力を獲得する。

もし、勇者の素質を持つ者以外にも、神樹様の力を宿すことができたなら、西暦から続く奴らとの戦いにも、終わりが見えてくるのではないだろうか。

そう考えての研究だ。

研究を開始して一月――

遂に基礎理論が完成した。

神樹様に選ばれた少女たちは、アプリを通じて神樹様にアクセスすることで勇者になれる。

また、神樹様に記録された怪異や自然現象を、精霊という形で自身の身体に降ろし、使役していたという。

ここで一つ、仮定を立てる。

神樹様を『巨大なサーバー』として見た時、そこから伸びる樹海は『ネットインフラ』で、勇者たちは神樹様へのアクセス権限を持つ『アカウント』となる。

この仮定を前提として、おれの研究を一言で纏めるなら

「現在広く普及しているインターネットのように、誰もが『ゲストアカウント』で神樹様に接続可能になれるシステムの開発」

となる。

その名も、『ジュカイネット』

おれは早速、大赦の上役たちにこの理論を提出。反応を待った。

結果、大赦はおれの理論をゴミ箱に捨てた。

曰く、「これは神樹様への冒涜に当たる文書である」とのこと。

「人類を護ることに繋がるのだから、例え冒涜に当たるとしても、神樹様は大目に見て下さるはずだ！」

おれはそう訴えたが、頭の硬い老害どもは聞く耳を持ってくれなかった。

「あにさま、どうかお気を落とさず・・・何事にも、挫けずリトライ♪ですよ！」

「・・・・・・さんきゅ、住南（かなみ）」
この時のおれにとって、妹の佳南だけがおれの味方だった。
そう、思っていた。

―――――――――――――――――――――

「へ〜いかずくん！今日こそ遊ぼうぜ〜♪」
おれの理論をゴミ箱に捨てられてから数日後のある日、園子がやってきた。
乃木園子―――
『六花』の内の一家で、上里と同等に大赦での発言力が高い乃木家の一人娘。
昼寝とシエスタとかわいいモノ集めが趣味の変わり者。
家柄とその突飛な言動のせいで友達がいないことを少し気にしている。
そんな奴だ。
「・・・・・・なんか用か？」
「かなちゃんはもう準備万端なんよ〜？あとはかずくんだけ！さあ！レッツエンジョイカガワラァァァァイフ!!」
「待て、出かけるなんて一言も言ってない」

「ええ～ !?いかないの～？」
おれの予定を勝手に決めるな。
大体、佳南もこいつの誘いに乗るなよまったく・・・・・・
「おれにはまだやることがあるんだ。お前みたいに年がら年中ボケ～っとしてる訳にはいかない」
「でもでも～、ちょっとは息抜きも大事なんよ～」
それは理解できるし、園子もおれのことを考えて行動しているのも分かる。だが

「今は休む訳にはいかないんだよ。あと少し、もう少しで完成するん「かずくん！」」
いつになく、真面目なトーンの園子がおれの顔を両手で押さえて無理やり向かい合わせてきた。
真正面から見る園子の顔は、やはり、というか、なんというか、その、率直に言ってかわいい。
『お人形さんみたい』なんてありきたりな言葉でしか言い表せない自分の語彙力の

無さが悔やまれるくらいだ。

「ねぇ、かずくん」

「・・・・・・・あ・・・な、なに・・・かな・・・　？」

先程、園子のことをとやかく言っていたが、おれも園子と同じく友達がほとんどいない。それを嘆いたことはないが、こういう時に言い淀んでしまうのは、なんとかしたいな、と思っている。

大人相手に演説するのは得意なのだが・・・。

「え～い♪」

むにぃ、といきなり頬を引っ張られた。

「ふぁっ　！ふぁいおふぅぅぅ!!」

「わぁ、ほっぺたやわらか～い♪」

そのまま、おれの頬をぐにぐにと、いじくり回す。正直、痛い。

「ほおお」

でも――

「ん～　？なぁに～♪」

心底楽しそうに頬をこねくり回す園子がかわいかったので、なんだか止めさせられなかった。

「・・・・・・・あんへおあい（なんでもない）」

「ん～、そっか～」

なんというか、おれも甘いやつだと思う。

昔からそうだ。何時だっておれは園子には勝てない。頭が上がらない、とか、そういうのではない、と思う。

多分、園子のやることが他人を思っての行動なのを分かっているから、なんだと思う。

そうでなければ、こんな頭お花畑なやつに、こうも好き勝手させたりしない。

このあと、結局おれは佳南と園子と園子の両親と一緒に遊びに出掛けた。

帰ってきたおれは、実に数日ぶりにぐっすり眠れた。

上里一正について――――
イメージソング：
・ＰＳＩ-ｍｉｓｓｉｎｇ
・Ｒｉｍｌｅｓｓ～フチナシノセカイ～

上里ひなたの子孫。
五歳で自作OS搭載パソコンを造れるほどの天才児。
頭が良すぎて大人たちからは少し気味悪がられているが、家族ぐるみで交流のあった園子の両親は彼に対して偏見をもたず、「子供らしく、無邪気にのびのびと育って欲しい」と思っている。
妹の佳南の世話をしながらも、上里家当主としての責務を全うしようと頑張る努力家。そのせいか、変に気取っている節がある。
実は寂しがり屋。

時計の針が、動きだす

さて、こっちも動かすとしよう。
そんな訳で、どうぞ、お納めください。

その日、おれの下にとある情報が届いた。

今代の勇者を選定。その結果を記す。

乃木園子

三ノ輪銀

鷲尾須美

以上、三名を勇者の御役目に任命する。

これを見たおれは、真っ先に禊の場に向かった。

禊の場――

神樹様から流れる湧水が滝となって流れる場所で、ここから四国中に、神樹様の加護が行き渡っている。

本来ここには、おれのような部外者は入れない。が、そんなことは知らない。

「邪魔だ・・・！」

「いけません、一正さま！此処より先は・・・」
「おれには！いかなくてはならない理由がある!!」
警護の神官を押し退け、禊の場に一直線に向かう。
その途中――――
「あれぇ？かずくんだ～」
いた。園子だ。
どうやら禊は終わったようで、大赦の神事服を纏っていた。
園子の手に握られたスマホを一瞥したおれは、右手を園子に差し出す。
「園子、それを渡せ」
「・・・・・・・・・・」
園子は何も言わず、こちらを見つめる。
「おまえには荷が重い。おれが代わりを務める。だから――――」
「かずくん」
園子はゆっくりと、首を左右に振った。拒絶の意だ。
「・・・・・・なぜだ？おまえが背負う必要なんて、どこにもない。『乃木家』

に生まれたからと言って、おまえが勇者になる必要はどこにもないんだよ」
「・・・それでも、わたしは勇者になるよ」
「だからっ‼その必要なんて無いんだって‼」
「かずくん　！」
「っ　‼」
園子が吼えた。こんなこと、今まであまりなかったから、思わず怯んでしまった。
「かずくん。わたしが勇者になるのは、神樹様に選ばれたからじゃなくて、わたしが、そうしたいからなんよ～」
ふにゃり、と笑って、園子は言った。
分からない。命を賭しての戦いなんて、園子には似合わない。そもそも、園子が自らそんなことを進んで受けるだなんて、あいつの性格を鑑みてもあり得ない。
「なんでさ・・・　なんだって・・・そんな・・・」
「・・・・・・かずくんが、すっごいがんばってるからなんよ～」
「――――――――――――は　？」
訳が分からない。おれが頑張っているから？それがどう関係している？

「わたしはね、いっつもかずくんのこと見てたんだ～。かずくん、気付いてなかったでしょ？」

確かに、気付いてなかった。なにせおれにはやることがあったから。佳南のことを見ながら、上里家当主としての責務を全うしなくてはならなかったから。

「あ～、かずくんのこと、責めてるとかじゃあないんよ ？かずくん、忙しそうだったし、邪魔したりしたくなかったんよ～」

よく言う。「気分転換なんよ～ ！」とか言って、外へおれたちを連れだしたりしてたクセに。

まあ、嫌いなんかじゃ、なかったけど。

「同い年なのに、すっごいがんばってるかずくんのお手伝いがしたかったんだけど、わたしじゃ無理だから・・・」

んな訳あるか。おまえ、おれと同じくらい頭良いだろうが。

「だからね。わたしが勇者の御役目に選ばれたって聞いて、ピッカーンときたんよ。『これなら、かずくんの役に立てる』って」

「――――――――それが・・・理由・・・ ？」

「うん」
膝から、崩れ落ちた。
そんな理由で？
理解できない。
おれなんかに、そこまでの価値は無い。
おまえに、そこまでされる必要は無い。
ただ――――

ただ、隣に居てくれれば、それだけで充分なのに

「あ――」

ああ、そうか。ようやく気付いた。

結局のところおれは、あの時と何も変わっちゃいないんだ。
両親が死ぬ前のころと何も変わらない。甘ったれのガキ。
そのくせ、粋がって独りでも平気だなんて顔してる。
「――――――――ようやく、分かったよ」
「かずくん？」
「園子、おまえが勇者になるって言うなら・・・・・・」

「おれは、人間を止める」

「・・・・・・・・・・・・え？」

「じゃ、またな園子。後で会おう」

覚悟を決めたおれは、園子の声に耳を傾けることもせず、その場から走り去った。

その場所は、大赦本庁の一角、普段使われない第二会議室にある。

壁の黒板を押す。ギィ・・・と軋む音を響かせながら、倒れるようにして、隠し扉が開く。

その先には薄暗い廊下が延々と続いている。

「・・・・・・この先、か」

意を決して隠し扉の先を行く。

「何の用だ」

行こうとして、誰かに呼び止められた。

いつの間にか、後ろに青年が立っていた。

黒いシャツとジーンズ、赤いフード付きパーカーをラフに着こなしてる。
「・・・・・・・・・あなたは、『お社』の人間ですか ？」
「ホウ、ガキのクセに良く知ってる」
お社――――
六花と同じく、大赦創設の頃より存在する組織で、常に大赦の影となり暗躍してきた。
その構成員は全員、『人成らざる存在』であると言われている。
が、真偽の程は定かではない。
そもそも、お社という組織の存在すら定かではなかったのだ。
おとぎ話の存在として民草に語り継がれてはいたが、誰もその姿を見たことがなかった。
だが、上里家だけは違った。
そもそもお社を創設したのは上里家なのだ。
故におれも、お社の存在を知っていた。
知ってはいたが、来るのは今日が初めてだ。

「ア　？――オマエ、上里のガキか。なんでこんなところに居やがる」
「お――わたしのことをご存知で　？」
「ガキが猫被ってンじゃねぇよ。来い」
青年はスタスタと奥に進んで行く。その後ろをあわてて追いかけた。

しばらく歩くと、講堂のような広い部屋に出た。
良く見ると壁が本棚になっているようで、まばらではあるが本が仕舞われている。
「――オイ輪廻、客だ」
「あだっ」
青年が床で寝ていた少年を足蹴にしていた。
ん？今、輪廻・・・て、言った？
「痛いよニック。起こすならちゃんと起こしてよもう　！」
「うるせえ、いいから客だ。相手しろ」
「えぇ・・・ニックがやってよ・・・」
「上里のガキだぞ　？」

「やあ！良く来たね。歓迎するよ」
おれの名前を聞いた途端、輪廻と呼ばれた少年がこちらに笑顔を向けた。
「――――――色々、言いたいことはあるけど、とりあえず、置いておこう」
「はっはっはー。さて、何の用事かな？」
憮然としないけど、今はどうでも良い。本題に入る。

「おれに、『悪魔の力』をください」

「・・・・・・それ、どこで聞いたの？」
輪廻さんの表情が一変し、険しくなった。
「開かずの間です」
「あー、なるほど、ね。じゃあ、契約者の末路も知った上で言ってるんだよね？」

「はい」
迷うことなく答えた。
「そっかぁ。んじゃ、　OK。ニックー、呂の三番から一冊ちょーだい」
ばさり、と輪廻さんの頭に一冊の本が落ちてきた。
革表紙の分厚い本だ。かなり痛そう。というか、首の骨、折れるだろ今の。
「――――――ニックさあ、僕が何かした　？」
「何度もやらかして来ただろうが」
「今更になってその精算でもしようっての　!?」
「だとしたらどうする　？」
「焼き鳥にして喰ったろかぁ　!?」
「ハッ　！面白い・・・やれるモンならやってみやがれ!!」
炎を撒き散らしながら、上空に飛んでいった二人。
よく燃えないなあ・・・。というか、ここの天井高過ぎじゃない？
「――――――」
ふと見ると、さっきの本が落ちている。

拾い上げて表示を見る。
「『契約の書』・・・かな。多分これ、ギリシャ語だよね」
本を開く。
所々読めないが要約すると、この本の魔方陣を使えば『悪魔』と契約を結ぶことができる、とのこと。
「これを使えば――」
早速、契約の儀式を試すことにした。
――view change:輪廻――
「――まさか、上里のガキが契約者になるとはな」
「そうだねぇ」
今、僕のはるか下の方では、ヒナの子孫が悪魔を呼び、契約を交わしていた。
え？ニックとケンカしてたんじゃないのかって？
まさかぁ！今更ケンカなんかしないよ～。
「――次の世代か・・・なんだかしみじみするねぇ」
「ガキを死地に送り出すのがか？」

「――――――今まで聞いた嫌みの中で、一番の出来映えだね、それ」
「――――――そりゃ良かったな」
眼下では、契約が終了したみたいで、悪魔が少年の姿で顕現していた。
「――――僕らの時代はとうに終わりを迎えた。後のことは、彼らに任せようよ」
「――――――そうか」
新たな契約者の誕生に呪詛(しゅくふく)を。
願わくば、彼らの行く末に光多からんことを・・・。

お社について――――
神世紀の時代、あらゆる荒事を秘密裏に処理してきた大赦直属の暗部。
代表取締役の名は、『戸塚輪廻』
西暦の時代、人々を護るために悪魔と契約した少年と同じ名だが、その関係は不明。
他にも数名、構成員が存在するが、詳細は全くの不明。

本拠地は大赦本庁内、第二会議室の黒板の奥、『秘密の書架』と呼ばれている場所がそうである。

はじまりはいつも、突然に

わすゆ編は基本的にサクサク進めたいので、わりと超展開かつ、急展開です。ごめんなさい。
こんな小生を許してくださる心の広いお方は、どうぞ、お納めください。

じりりりりり・・・・・・・
バン！かち・・・
もぞもぞ・・・
「んぅ・・・なんだ、もう朝か」
「うん。そうだよ」
「っ !!・・・・・・・て、なんだ。あんたか」
上体を起こしながら、おれに話しかけてきた少年を見る。
短髪の黒髪はボサボサで、あまり手入れはされていない。

着ている服も、半ズボンにノースリーブのシャツというラフさ加減。
正直、少しは身だしなみに気を使って欲しい。
と、この前言ったのだが――
「んー・・・・・・・考えとく」
なんて言って、この有り様。
正直、そろそろ佳南が黙っていないころだから言う通りにして欲しい。
「おはようカズマ。カナミが呼んでる」
「・・・・・・おはようミカヅキ」
彼の名はミカヅキ。おれと契約した『悪魔』だ。

「ミカぁ　!! いい加減にしやがって下さい !! 食べたら磨く！身だしなみはしっかりと !! いつも言っておるでしょうが !!」
朝食後、やはり佳南が黙っていなかった。
そもそもミカヅキは自分のことにルーズすぎる。
これを期にちゃんと身だしなみにも気を使えるようになって欲しいものだ。

「それより時間。良いの？」
「む・・・確かにもうこんな時間・・・」
「佳南、おれは先に行くから」
「あー！あにさま待つですよ！ミカぁ！外出の際は戸締まり、ちゃんとするですよ！良いですね？」
「うん。いってらっしゃい」
ミカヅキに見送られておれたちは家を出る。
あいつがうちに来てしばらく経つが、やっぱり、こうやって、誰かに『いってらっしゃい』を言われるのは、ずいぶんと久しぶりに思う。
「いってきます」
「いってきまーっす！」
だから、おれたちの『いってきます』が、少し弾んだものに聞こえるのも、仕方のないことかも知れない。

学校へ向かう前に、乃木家に寄る。

理由は明白。寝坊助園子を叩き起こす為だ。
「おーい、園子ー。朝だぞ起きろー」
ふすまをスパァーンと勢いよく開き、園子の寝室に入る。
布団で愛用のネコ型枕―サンチョさんを抱き締めて眠る園子に近寄り、ゆする。
「おーきーろー」
「ＺＺＺ・・・」
起きない。が、ここまでは想定内。必殺の起床術をお見せしよう。
「サンチョさんに嫌われるぞー　？」
園子の耳元でネガティブなことを囁く。
こうすることで想像力豊かな園子は、一瞬で悪夢を見る。これぞ、秘技『園子起こし』
「んー・・・サンチョさんが・・・あ、まってよ・・・おいてかないで・・・」
「・・・・・・・・・・」
園子が悪夢にうなされている。ものすごい罪悪感にさいなまれるが、心を鬼にして、耐える。

「まって！サンチョさぁぁぁぁぁぁんん!!――――――――あれ？」
「おはよ。やっと起きたか」
「・・・・・・・・かーずーくーんー？」
「怒るならさっさと起きること。ほら、準備して」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
園子が黙ってばんざいしたまま動かない。
これは、まさか――――――
「お着替え手伝って～？」
「・・・・・・・おまえ、それでいいのか？」
「??かずくんになら、なにされても平気だよ～？」
ぽわぽわした笑顔で、そんなことを言う。
やめろ。そんな無邪気な笑顔をこちらに向けるな！
変なこと考えたおれがやらしいみたいじゃないか！
「つーか、誰かに聞かれでもしたら――――」
ふと、後ろを振り返れば、園子のお母さんと、目が合った。

「――――――」ニコッ
「――――――」（白目）
すごく、しにたい。

朝のひと悶着をなんとか収め、学校へ向かう。
園子とはクラスが別な為、教室の前でお別れだ。
そこでも園子のやつがゴネるが、なんとか説き伏せ、自分のクラス（六年二組）へ。
「おはよう」
挨拶は大事。たとえ、返事が返ってこなくとも・・・
なんだよ。泣いてねーよ。悲しいとも思ってねーよ！
「・・・・・・・・・おはよう」
「おっはよーう！しょくん！今日も元気かーい！」
おれの後から、二人の少女がやってくる。
物静かな方は、山伏しずく
やかましい方は、枢木アスカ

この二人はよく一緒にいる。というか、山伏は柩木の家に厄介になっているそうだ。理由は知らない。多分、知らない方が良い類いのやつだ。

「へいへいへーい　！カズヤ！おっはようさん！」

両手を広げてこちらに突きだしてくる。ハイタッチをご所望のようだ。

「・・・・・・・・・・・・一正だ」ぺっ。

「元気が無いなー　！そんなんじゃボクの友達第二号としてなさけないぞー！」

うるせえ、そんなもんになった覚えは無い。

と、言おうと思ったが、やめた。こいつに理屈は通じない。

「・・・・・・・・・・・・・・・はぁー」

「・・・・・・・・・・・・・・・上里」

ため息をついていたら、山伏が話しかけてきた。珍しい。

「いつもありがとう。アスカの相手、してくれて」

「・・・・・・あいつ曰く、おれたちは友達らしいからな」

「ん」

穏やかに微笑む山伏を見て、

こいつ、こんな顔もできるのか・・・
と思ったのはしゃべらないでおこう。
「おっ ？ずっくがカズヤとなんかいーふいんき！」
「一正だ。いい加減、名前間違えんな」
ほんとにこいつは空気を台無しにする天才か。
そうこうしているうちに、担任の先生がやってきた。
「ヤバイ遅刻するー ！」
廊下からそんな声が聞こえてきたが、無視して号令をかける。
「起立」
「礼」
「神樹様に、拝」
これが、神世紀における号令。いつも我々を見守ってくださり、ありがとうございます。と感謝の念を捧げてから、朝の学活に入る。

はずだった

それは、唐突に訪れた。

「ん・・・？」

これから担任の高嶋先生による、ありがたいお説教（ノロケ話）が聞かされるはずだった。

しかし――

「時間が・・・・・・止まってる・・・・・・？」

そう、周囲の時間が停止していた。つまりこれは――――

「園子たちと合流するべきだな」

そう思い、教室から出ようとした時、大橋の方角から、目映い光が周囲を包んだ。

あまりの眩しさに目を閉じる。

光が収まった時、景色は一変していた。

「これが・・・・・・樹海化・・・・・・」

資料を読んでいて、知識としては知っていても、実際に体験すると、やはり、思うものがある。

「あ～。かずくんだ～♪」

ふと、後ろから園子の声が聞こえてきた。

振り返れば、園子ともう二人、――たしか、鷲尾須美と三ノ輪銀、だったか――がいた。

「お～い」

こっちに向かって手を振る園子に手を振り返し、大橋の方を見る。

青い異形が、悠然と、大橋を進んでいた。

「あいつが、バーテックスか」

バーテックス――――

この世界を滅ぼすモノ。

アレが神樹様にたどり着いた瞬間、四国に張られた結界が解け、人類は滅ぶ。

「させるかよ・・・」

決意と共に端末を握る。

「変・・・身っ　!!」

右手首に巻いたリストバンドに端末を装着。

すると、端末から光が溢れ出し、全身を包み込んだ。

弾けるようにして光が消えた時、おれの纏う衣服は、制服から右腕だけ袖の無い左右非対称な白い勇者服になっていた。

その後、リストバンドから無数のコードが伸び、右腕を被う。その上に無骨な装甲が被さっていく。

赤と青の肩アーマーが装着された後、右手にも装甲が装着される。

五本の指には鋭利な爪、手のひらには電極、そして、手の甲には煌々と輝く光が

封じ込まれた宝玉が、それぞれ嵌め込まれた。
「ん――――準備完了　！」
「おおっ　！なんかちょーカッケェ!!」
「わあ～♪かずくんかっこい～　！」
「あれが・・・・契約者の・・・」
三者三様の反応を余所に、おれは一人、大橋へ向かう。
「え　!?ちょっと！上里くん!?」
鷲尾須美がなにか言っているが、無視だ。あいつ一体、おれ一人でなんとかしてみせる・・・！
「覚悟しろバーテックス・・・・・・テメェらはおれが滅ぼす　!!」

モザイクのカケラ、一つ一つ繋ぎ合わせて描いていく。
貴女がくれた、出会いと別れを――――

科学と呪術が、交差する時期$|$$|$とき$?$

魔神セイバー、20連で来ました♪(大勝利〜♪)

あ、やめて！石を投げないで！

聖昌石て刺々しいから刺さるのよ！

そんな訳で、続きをどうぞ、お納めください。(頭に石が刺さりながら)

「――――ふっ　！」

バーテックスの放出する水球を時にステップで、時に転がって、すべて避ける。

しかし、このままではやつに攻撃できない。

「(まだ最終調整が済んで無いけど・・・やるだけやってみるか)」

右手首の端末をタップ。画面に円グラフが表示される。

「（とりあえず出力設定を20％にして・・・よし、完了）」

一応の準備は整った。

早速、試してみよう。

「ふんっ　！」

右手のひらの電極を樹海の根にあてがい、エネルギーを放出。

瞬間、木の根が一部隆起し、おれの目の前に壁を生成したのだった。

「・・・よし、成功だ　！」

これぞ、ミカヅキの能力とジュカイネットを掛け合わせて作り上げた、おれの武器。

その名も『覆式波動機関（ふくしきはどうきかん）』

ジュカイネットにより神樹様に接続し、ミカヅキの能力である、生命エネルギーを操作する能力『波動天鎧（オーラマリオネット）』の力で樹海からいろんな物を生成。それを武器に戦う、というシステムだ。

しかし、これだけではおれはこの武器を使えない。なにせこのシステムで生成される物体は、精度は低いものの、勇者たちのみが使える神威の武器と同質の物だか

らだ。
そこで役に立つのが、これ。『所有権の書き換え能力』
おれがミカヅキと契約して獲得した能力だ。
効果は読んで字の如く。『触れた物体の所有権を自分に変える』というもの。
これにより、勇者にしか使えない武器も使用可能になる。
「ミカヅキ　!!」
『わかった』
端末からミカヅキの声が聞こえてくる。
今、ミカヅキはこの端末のAIとして機能しているからだ。
『調整は今のでだいたい出来た。どれにする？』
「三番で」
『わかった』
間を置かず、先程出来た壁から、身の丈程の、細長い一本の棒が現れた。
それを右手で掴み、エネルギーを流す。
すると棒の上端、エネルギー発振基部から、緑色のエネルギー刃が、湾曲して出

現した。それにより、棒は大鎌へと姿を変化させたのだった。

「いわゆる『霊力光刃（ビーム）大鎌（シザース）』ってやつだな」

大鎌を振り回して、一人心地る。

さて、準備は完了。いざ、勝負――――！

おれの科学とミカヅキの能力、そして神樹様の御力を組み合わせて初めて完成するこのシステム、名を『デンドロビウムシステム』と称する。

今回使用する三番兵装は、速度と隠密性を活かした『奇襲用兵装』。

だが、他のモノよりも消費エネルギーが少なく、クセが無く使い勝手がとても良い。

使い勝手の良さだったら一番兵装でもいいのだが、今回の相手には速度を活かした戦い方が合うと思い、こちらにした。

「せやっ　！」

速度にモノを言わせて急接近。大鎌による連撃をくわえる。しかしバーテックスに確かに傷を負わせることができたが、直ぐ様回復されてしまった。

「ちっ・・・解っちゃいたけど、こうも簡単に回復されるとは・・・」
お返しとばかりに放出された水球を避けつつ、悪態をつく。
直ぐにでももう一連撃喰らわせたいが、先程よりも水球の量が増え、身動きが取り辛くなっていた。次第に追い詰められていき――――

「かずくん　!!」

「っ‼園子・・・」
おれの窮地を救ってくれたのは園子だった。
槍を回転させ、水球を絡めとるように排除した。
「・・・・・・・・・・・一応、お礼は言っておく。ありがと」
「えへへ～♪」
にへら～、とはにかむ園子が、こちらに頭を向ける。なんだよ、撫でれ！ってか？
「・・・・・・・・・・・・・・・・ったく」ガシガシ
「わわわっ⁉かずくん、ちょっと乱暴だよ～」
「優しくされたけりゃ、もっとＴＰＯをわきまえろ」
「ぶ～」
頬を膨らませる園子を無視してバーテックスに突撃する。
「上里　！」
「・・・三ノ輪か」
途中、三ノ輪銀と合流した。もうここまで来たら仕方ない。ちっぽけなプライド

にこだわって全滅、なんてザマは死んでもゴメンだ。
「おれは右側から攻める。三ノ輪は左から頼む　！」
「おう　！」
「ん　！――――――――え？」
「え　？」
意外と素直にこちらの指示を聞いてくれた三ノ輪に驚き、つい足が止まってしまう。つられて三ノ輪も足を止めた。
「いや・・・・・・案外あっさり指示に従うんだな・・・と、思って」
「へ　？なんで？」
「いや、なんで・・・って・・・・・・」
「いやあ、アタシ考えるのとかニガテだし、ガラじゃないもん。そういうのは得意なやつに任せて、その分、アタシが頑張る。『役割分担』ってやつ？『テキザイハイリョ』だよ」
「・・・・・・適材適所、な」
そうそれ！と笑う彼女を見て、なんとなくだが、三ノ輪が勇者に選ばれた理由

が少しわかった気がした。

「・・・・・・三ノ輪、これからよろしく」

「おう！よろしくな」

互いに手を伸ばし、握手する。

――――――ことは、出来なかった。

「「　!?!?!?!?!?」」

おれと三ノ輪は、バーテックスの放った巨大水球に取り込まれ、今まさに絶体絶命の状況に陥ってしまった。

水球の中でもがきながら、自分の迂闊さを呪った。

戦場で棒立ちなんて、アホでもしないことだ。

隣を見れば、三ノ輪も同じようにもがいている。このままだと二人とも溺死だ。

「(どうする？右腕を使えば、確かにこんな水球抜け出せる。だが、それだけの熱量をここで使えば三ノ輪にも被害が及ぶ。それだけはダメだ)」

考えろ。

要はこの水をどうにかできればいいんだ。

考えろ。

水を無くす方法・・・・

考えろ。

蒸発、撥水、あとは・・・

「　！」

そうだ！飲み干せば良いんだ!!

直ぐ様三ノ輪にもジェスチャーで伝える。

「」ｺｸｺｸ

首を縦に振ったのを確認して、作戦開始。

ごくごく

ごくごく

ごくごく

ごく――

ごっくん！

「「ぷはぁ　!!」」

あ゛あ゛～、死ぬかとおもった～・・・

「三ノ輪～、生きてるか～？」

「ああ、なんとかな・・・」

「そりゃよかった」

「・・・はは」
「・・・ふっ」
どちらからともなく、二人して笑いあう。
すっ――と拳を突きだし合い、それを重ねる。
「かずくん　！ミノさん！」
「二人とも　！大丈夫ですか!?」
そんなことをしていたら、園子と鷲尾がやってきた。
あれ？なんで園子のやつ、濡れてるの？
「かずくんミノさん、バーテックスのお水、どんな味だった～　？」
「真っ先に聞くことがそれか」
つーか見てたなら助けろよ。
「ソーダっぽい味からウーロン的な味に変わった・・・」
「お前も真面目に答えんなよ」
「うえぇ・・・まずそう～」
「それより園子、お前どうした　？なんでそんなに濡れてる？」

「ああ～、これ～ ？」
「ぅ・・・」
おれの指摘に鷲尾が小さくうめく。
ふむ、なんとなくわかった。
「あのね～、鷲尾さんがバーテックスに狙われて～、それをわたしが助けたの～」
「やっぱりか」
「でもそのおかげでわたしの槍、盾になることを思い出したんよ～」
「忘れてたんかい」
自分の獲物のスペックぐらいちゃんと把握しておけよ。
「あの・・・乃木さん、先程は・・・その・・・」
「鷲尾、そういうのは今は後にしよう。バーテックスの位置がそろそろヤバイ」
バーテックスのいる方向を指差す。
現在、橋の中程にて悠然と行進している。
「どうする ？」

「どうする・・・・・・と言われても・・・」
「奴は近距離からの攻撃には弱い。それは確認済みなんだ。問題は・・・」
「どう接近するか・・・ですか ？」
「鷲尾の言う通りだ。さて、何か案があるか ？ちなみにおれは無い」
「ええ・・・」
おれの発言に、心底がっかりした様子の声をあげる三ノ輪と鷲尾。
なんだよ。文句あるのかよ。
「あ ！ぴっかーんとひらめいた!!」
「よし、それを待ってた」
「？？？ 」
こういう時、園子のひらめきは役に立つ。それを元にしておれが作戦を立案するのだ。「いわば ！二人の共同作業だね～！」と園子が興奮気味に話していたこともあったな・・・・・・意味分かって言ってんのかな・・・
「で、どんなの思い付いた ？」
「うん。あのね～」

作戦はこうだ。
まず、園子を先頭に、三ノ輪、おれ、鷲尾の順に単縦陣をとる。
「敵バーテックス、水球を放出してきました　！」
「園子　！」
「いっくよ〜　!!」
水球を出してきたら、園子が盾を展開。ガードしながら進む。盾で防げない位置の水球は、鷲尾が射ち落とす。
問題は――
「っ　!!大型、来ます！」
「来たな――　！」
先程おれと三ノ輪が呑み込まれた大型水球。しかし、今なら――
「三ノ輪　！」
「よし来ぉい　！」
三ノ輪が斧を水平に構える。おれはそこに飛び乗る。

「うぉおおおおりゃあ！！！！！！！　」

カタパルトの要領で三ノ輪に跳ね上げてもらい、大型水球に右腕を突っ込む。

「蒸発（ハジケ）しろ！」

エネルギーを撃ち込むと、水球は爆発。辺りに水蒸気となって飛散した。

「よし　！行軍再開！」

所定の位置に戻り、指示する。

突撃可能距離まであと少し・・・！

だが、バーテックスも阿呆じゃない。

水蒸気を切り裂くように、激しい水流がこちら目掛けて照射された。

「来るぞ　！」

咄嗟におれは園子の右後方へ、三ノ輪はその逆、鷲尾はその真ん中に位置取る。

園子を吹き飛ばした一撃。その時園子は一人だった。

だが、今はおれたちがいる。

園子は吹き飛ばされず、しっかりと受け止めることが出来ていた。
「かずくんの　！言うとおり！なんよ～！」
「すごい・・・さっきはあんなにも簡単に吹き飛ばされてしまったのに・・・　!?」
「一本じゃ容易く折れる矢も、三本、四本、まとめれば折れにくい。つまりはそういうことさ!!」
「なるほど　！良くわからん！」
「三ノ輪ァ　！もうちょい考えることをしろォ!!」
「よ～し　!!このまま行っくよ～!!」
園子の号令で、一歩、一歩、確実に前進する。
「オーエス　！オーエス！」
運動会かよ。玉転がしとかじゃあるまいに
「ほら、鷲尾さんと上里も　！」
「ええ　!?」
「オーエス　！オーエス！」

「お・・・オーエス　！オーエス！」
まじか。やるのか、鷲尾。
「「オーエス　！オーエス！」」
「仕方ない・・・オーエス　！オーエス！」
『オーエス！オーエス！』
四人の声が重なり、一つになる。
次第に縮まるバーテックスとの距離。ついに突撃可能距離まで到達した。
その瞬間、バーテックスからの攻撃が止んだ。
「今　！突撃ィィィィィィィィィ！！！！！　」
おれの号令に全員散開。
水球を鷲尾が封殺し、左からは三ノ輪と園子が、右からはおれが攻める。
「園子　！そのまま振り回せ!!」
「うん　！」
園子の槍に掴まった三ノ輪が叫ぶ。
「うんとこしょおおおおおおおおお！！！！！　」

気合一閃。槍を薙ぐ。
勢いを付けた三ノ輪は、斧から炎をほとばしらせる。
「こっから・・・出ていけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！
その一撃で、バーテックスの左半分が消し飛んだ。
おれも負けていられない・・・・！
「ミカヅキ　！リミットパージ！」
『エネルギー０００９（トリプルオーナイン）。残り一撃分。これで決めるんだよ』
「ああ　!!」
右肘と肩のアーマーがパージされ、二の腕の強制廃熱口がフルオープンになる。
アーマーがパージされたことで露になった肩のスラスターフィンが起動し、加速。
このままバーテックスへ突撃する。
が――

「っ　!!」ズガッ

目測を誤り、バーテックスを掴むはずの右手は、虚空を舞う。

「かずくん!?」

「外した!?」

「そんな!?」

「まだまだァ!」

咄嗟に身体を無理矢理捻り、バーテックスへ右腕を伸ばす。

しかし右手は届かない。だから、肘に仕込んだクランク機構を展開。ほんの少し腕を延長させた。

数字にして、およそ数センチ程度の延長。しかし、それだけあれば十分だ。

右手は確かに、バーテックスを掴んだ。

「弾けろ・・・バァァァァァァテックスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!!!!!!」

万感の想いを載せて放った一撃は、バーテックスの右半分を吹き飛ばしてみせた。
「へぶっ」
しかし、着地に失敗。
最後の最後で締まらねぇ・・・ちくせう・・・
「かずくん、平気～？」
「大丈夫か、上里？」
「いま、顔から落ちなかった？」
「おまえらよってたかって・・・・・いや、それよりバーテックスは!?」
痛む身体を無理に起こしながら、三人に問う。
「大丈夫だよ～。ほら、見て」
園子に言われて。空を仰ぎ見る。

大橋が、咲き誇っていた。

実際には花吹雪が舞っているだけなのだが、神聖なその空気に、どうしても、そんな風に見えてしまった。

「すげえ・・・・・・これが・・・・・・『鎮花の儀』か・・・・・・」

『鎮花の儀』

バーテックスをある程度弱らせることで実行可能になる、バーテックスを壁の外へと追い返す儀式。

これが発動した、ということはつまり・・・・・・

「おれたち・・・勝った・・・のか ？」

花吹雪がバーテックスと共に消え、辺りに静寂が流れる中、ぽつり、と呟いた。

「勝った・・・ ？」

「勝ったんだ・・・ ！」

「勝ったのね・・・ ！」

『やったぁぁぁぁぁぁぁ!!』

四人全員で抱き合う。
ちょっとしたおしくらまんじゅうだ。しかし気にしない。
おれたちは、お役目を成し遂げたんだ!!
そんな充足感が、四人を満たしていた。

覆式波動機関について――――
造形は紅蓮の徹甲砲撃右腕部。そこに狂スロットの騎士は徒手にて死せず、シェルブリット等を混ぜ込んで造ったのがこれ。
僕の趣味として、いろんなネタをミキシングビルドする傾向にあるので、それが顕著に現れた一品、なのかもしれない。

初陣のあと、勝利を祝う

明後日９月４日――

ニコニコでくめゆの生放送ですってよ、奥さん！

ついにゆゆゆいに参戦ですのね～！

恵みを貯めてお待ちしておりますッ！！！

翌日――

担任の高嶋先生から、おれが大赦のお役目に務めていることを公表された。

「神樹様のお役目です。昨日みたいに突然いなくなってしまうけど、みんな、応援してあげてね？」

はぁーい、という間延びした返事を聞いて、高嶋先生はうん！と頷いた。おれは全然良くは無い。

案の定だ。

「ねーねーカズヤ〜♪お役目ってさぁ〜。どんなことやってるんさぁ〜？」

「・・・・・・話せないって言っただろう。あと、カズヤじゃない一正だ」

アスカの奴が絡んで来た。こうなると思っていたから、お役目に関しては言って欲しくなかったというのに・・・・

「(しかし、言わなくては急に消失することの説明を行わないといけない・・・・・・逐一言い訳を考えるのも面倒だしな・・・・・・)」

なんて考えていると、端末から着信が入る。

園子からのメールだ。内容は――

「んお？どったの？急に荷造りしだして？ハッ・・・!?まさか・・・・デートのお誘い!?」

「ああ、そうだよ」

「なぁんて、カズヤにそんな相手がいるはずなえええええええええええええええ!?!?!?!?!?」

一々喧しい。

相手をするのも面倒だから無視して呼び出し先へと向かう。

「あ!!か〜ずく〜ん♪」
「おーい、上里ー！こっちだこっち！」
「すみません上里くん。急に呼び出したりして・・・」
「別に構わない。誘ってくれたこと、感謝してる」
呼び出し先はイネスのフードコート。
既に三人はテーブル席を確保しており、その手にはドリンクを持っていた。
「は〜い、これかずくんの〜♪」
「わかったから押し付けるな」
顔に当てられてるドリンクのカップを両手で受け取り、席に付く。
「えー・・それでは・・・」
コホン、と鷲尾が咳払いを一つする。
「今日を無事に迎えられたことを、大変うれしく思います。えー・・・・本日は大変お日柄もよく、神世紀２９８年度勇者初陣の祝勝会という事で、お集りの皆様の

今後ますますの繁栄と健康、そして明るい未来を――――――」
「長い、それと固い」
「そうだぞー、固いぞー。かんぱーい！」
「いえ～い♪かんぱ～い♪」
おれたちの言葉に不服そうな鷲尾だったが、三ノ輪と園子が乾杯を始めると、渋々それに従った。
「かずくんも、かんぱ～い♪」
「おう、乾杯」
掲げたカップに園子が自身のカップをぶつけてくる。
おいあまり強くぶつけるな中身がこぼれる。
「全く・・・はしゃぎ過ぎるなよ。小六にもなって・・・」
「ええ～？」
「良いじゃんかさぁ。それよりも上里！」
ずずいっと三ノ輪が顔を近付けてくる。
こいつも目鼻立ち、以外と整ってるんだよなぁ、などと思いつつ、返答する。

「近いぞ。で、なんだ？」
「昨日のお前の戦い方だよ！あの右手！すっげーカッコ良かったな!!」
「そうか、あの格好良さが理解出来るのか」
「ああ！あれが、悪魔の武器ってやつか？」
「少し違うな。アレは「んん？あにさまじゃねーですか」」
　む、この声は・・・
「わ～♪かなちゃんだ～♪」
「こんにちは、園子ねーさま。あとのお二人は・・・」
「えっと・・・・こんにちは」
「ちわー！アタシは三ノ輪銀ってんだー」
「あ・・・・鷲尾須美、です」
「ふむふむ、銀ねーさまに、須美ねーさま・・・と。佳南は上里佳南と言いやがります。産まれてから今日まで、そこのムッツリ大仏の妹をやってます」
　誰がムッツリだ。
「しっかし、あにさまも隅におけませんなぁ～♪」

「・・・・・・・・・・・何の事だよ」
「とっぼけちゃって～。この状況を見やがれってんです」
言われて、周囲を見回す。
ふむ・・・・・・鷲尾が居て、三ノ輪が居て、園子が居るな・・・・・・
で？
「なんだってんだよ」
「両手どころか周りに華！ハーレム状態じゃねーですか！ヒューッ！モテる男はちげーですな!!」
「・・・・・・・えぇ」
「あはは・・・・・」
「・・・・・はぁ」
佳南の一言に、鷲尾は困惑し、三ノ輪はちょっと嬉しそうで、おれは呆れて溜息をついた。
「わぁ～♪かずくんかずくん。かなちゃんに褒められちゃった～♪」
「お前は楽しそうだな・・・・」

「で、結局お前も交ざるのか・・・・」
「むー！なんですかあにさま！佳南だけ除け者ですかぁー!?」
佳南がゴネる。我が妹ながら、流石にウザい・・・・
「ふぇぇぇん。園子ねーさまぁぁぁぁ。あにさまがいぢめますぅ。妹虐待ですぅ～(棒)」
「よしよ～し、いいこいいこ～」
「嘘泣きするな慰めるなおれがまるで悪者みたいだろ!!」
「まーまー！良いじゃんか。兄妹揃って祝勝会の続きといこうよ」
「・・・・・三ノ輪、お前なぁ」
「それよりも！上里」
「なんだ？」
ずい、と再び顔を近付けてくる。コイツ・・・・一々顔を近付けないと会話できないのか？
「なんでアタシのこと『三ノ輪』って呼ぶんだ？」

「お前だっておれのこと『上里』って呼ぶだろう？」
「む・・・・確かに。じゃあ今から『カズマ』って呼ぶから！」
「勝手に決めるな」
「えぇー！良いじゃんかよー！ケチケチすんなって、カズマ！」
「・・・・・・・はぁ、好きにしろ」
「ぃよっし！それじゃ、お近づきのしるしにイネスマニアのアタシオススメの店を紹介してあげよう！」
オススメの店？つーかイネスマニアって何？

「これは・・・・良いものだ・・・・！」
「あにさまがチョコミント片手に某壺の人みてーなこと、言ってやがります・・・・・・でも、確かに、美味しい・・・・・このストロベリー♪」
「んっふっふっふ・・・気に入ってくれたようで何よりさ」
三ノ輪が紹介してくれた店は、このフードコート内にあるジェラート屋。正直、こういった場所には基本的に来ないから知らなかった・・・・・・まさか、こんな

にも旨いチョコミントジェラートがあるとは・・・!?

「おいし～♪おいしいんよ～♪こんなにおいしいものがあったなんて～！」

「大げさだなぁ、ダチと一緒に食べに来たりしないのか？」

「えへへ～、私友達少ないから・・・・」

「あ・・・・」

「だから今日、ミノさんに教えてもらって、すっごいうれしいんよ～♪メロン味大正解～♪」

園子もとても嬉しそうだ。

そんな中――――

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・須美はどうしてそんな難しい顔をしてるのさ・・・」

「いえ・・・和三盆抹茶味のじぇらーとが・・・・以外と美味しくて・・・・」

「わっしー、あんまり深く考えちゃダメだよ～。おいしいものはおいしい。それで良いんよ～♪」

「・・・・・・・・・・・そうね！はむっ♪」

園子の一言に、考えるのをやめた鷲尾は自身のジェラートにかぶり付く。
つーか園子の奴、いつの間にか鷲尾のことアダ名で呼んでやがる。三ノ輪も鷲尾のこと、名前で呼んでるし・・・・
「かずくんが来る前にね～。お話して決めたの～」
「『鷲尾』だから『わっしー』、てか？」
「さっすがかずくんだ～♪ほんとは『すみすけ』とか、『ワッシーナ』がよかったんだけどね～？」
「ワッシーナて・・・・何時の時代のアイドルだよ・・・・」
「それよりは、『わっしー』の方がだいぶマシだから・・・」
「鷲尾、おつかれさん。園子の相手、大変だったな・・・・」
「そう思うのなら、次はもっと早めに来て下さい・・・・・」
「善処しよう」
「かずくんの『善処しよう』は信じちゃだめなんよ～。だいたい治んないからね～」
「あにさまが善処言い出したら大概話を聞いてないときですからね」
酷い言われようだ。あと今回の件はおれは悪くないぞ。

そんな、下らない話をする。おれたち五人。
端から見れば、なんて事無い普通の小学生たちの交流。
改めて、この日常を護れた事を実感できた。
そんな感慨に耽りながら、自分のジェラートを食べるのだった。

ちなみにこの後、しょうゆ豆ジェラートVSチョコミントジェラートによる仁義無き言い争いが勃発したけど、めんどくちゃいので割愛。

貴方の、涙

浴びるほど、生クリームが食べたい

わすゆガチャを五周したら、ねんがんのウエディング銀ちゃんを手に入れたぞ！
ついでにはろえん須美ちゃんもゲット。
名探偵そのっちがいっぱい来た印象しかなかったけど、バレンタインそのっちとか、探偵銀ちゃんとかも来たから、まあ、豊作だよね。お財布の中身すっからかんになっちゃったけど・・・・

祝勝会をやった数日後、再びバーテックスが襲来した。
今回の相手は、天秤型（ライブラ）。

初代勇者の残した文献にも、詳細が載ってない未知のバーテックス。
どんな状況にも対応できるよう、今回の兵装は五番を選んだ。
五番兵装は『突撃特化』の『霊力光刃三又槍（ビーム トライデント）』
形状は園子の得物と同じ普通の槍だが、穂先が三又になっている。
以上である。

本当は、他にも色々盛りたかったんだ・・・しかし、余り盛り過ぎるとキャパオーバーしてしまう為、断念したのだ。だから園子とおそろいにしたとか、そういうのはないから。

結論から言おう。
今回に関しては、武装の選択を誤らなかった。
しかし、相手が悪かった。
「くぅぅぅぅ・・・・・・!!!!」
「近付けないよ〜〜!!」

名は体を表すを体現するかの様なフォルムのライブラは、俺たちの接近に気付くとその場で回転を始めたのだった。

次第にその速度は増していき、現在は台風もかくやといったレベルの暴風を起こしている。恐らく風力は11以上あるだろう。

「普通だったら、簡単に吹き飛ばされていただろうな・・・」

「で、どうする!? なんか作戦は無いのか!?」

「台風みたいだから～、まんなかは風が吹いてないと思うけど～～・・・・・！」

「つーかお前らなんでおれにしがみついているんだ！！！」

風に飛ばされないように、三又槍を地面に突き刺して支柱にしていると、園子がおれの腰にしがみつき、園子に三ノ輪がしがみつき、三ノ輪に鷲尾がしがみついてきた。なんだこの株を採ろうとする一家みたいなやつは・・・・

「ッ!! 園子！」

「かずくんはふんばってて～!!」

その時、ライブラの分銅がおれたちを襲った。園子に盾を展開してもらいどうにか防ぐものの、このままではライブラに良いようにされっぱなしだ。

「こうなったら・・・」

「あ？鷲尾？」

さっきから沈黙したままだった鷲尾の声が聞こえたと思ったら、風に飛ばされていた。アイツ、何をしてんだ・・・・

鷲尾は飛ばされつつも、どうにか姿勢を制御して矢をつがえる。いや、それ無理。届かないから。

「鷲尾ぉ!!この風で矢は跳ばない!!無駄なことは止せぇ！！！」

「・・・・・・・・」

聞こえていないのか、聞こえていて無視しているのか、鷲尾はつがえた矢をライブラに向かって放った。

が、案の定、放たれた矢は風に飛ばされ、ライブラに届くことはなかった。

「そんな・・・・・きゃああ!?!?」

鷲尾も風に吹き飛ばされ、遠くの方へと飛んでいってしまった。何をやってんだよ、まったく・・・・・！

「で！どうするんだよ！本格的にヤバいぞ！」

「・・・・・一つ、思い付いたことがある」
「かずくん・・・まさか・・・・!?」
「他に方法が思い付いたか？」
「・・・・・・でも」
「え？なに？どんな作戦？」

―――――――――――――――

「・・・・・ホントぉぉぉぉに！大丈夫なんだな!?」
「何度も言った。心配ない」
「―――ミノさん。こうなったかずくんは、てこでも動かないんよ～・・・・」
わかっているじゃないか。
「ッ―――！あー、もう！わかった！やればいいんだろ!?」
「頼む」
「その代わり！ちゃんと無事でいろよ！いいな！」
「善処しよう」
チッ、と舌打ちをして、三ノ輪も離れていく。

「おい園子。お前も――――」
「かずくん」
ぎゅ・・・と園子が抱き付く腕の力を強めた。
「お願いだから・・・・無事でいてね・・・・？」
「――――――ああ」
悲し気な表情のまま、園子がおれから離れていく。
さて、準備は整った。本来ならここに鷲尾も居て欲しかったのだが、無い物ねだりは出来ない。
「ミカ、リミットパージだ」
『エネルギーを全て攻撃に回す。それでいい？』
「無論」
右腕が変形し、右肩のスラスターファンが回転する。
出力された推力により、支え無しでもこの暴風の中で自立できるようになった。
右腕を真っ直ぐ構えて、時を待つ。
狙うは、ライブラの分銅。右腕と分銅の中心が重なった時がその時だ。

「――――――」

吹き荒れる風と、上空を舞う園子たち。

そして、時は満ちた。

「最大砲火（オーバーブラスト）――――！」

右掌の電極から、エネルギーの奔流が極太のビームとなって放たれる。

その威力は凄まじく、分銅どころか、ライブラの身体を半壊させるにまで至った。

半壊したライブラはバランスを保てなくなり、回転を止めた。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！」

そこに、園子と三ノ輪が突撃。半壊していたライブラを上空から砕いていった。

ライブラがほぼ全壊状態になったところで、≫鎮花の儀≪が発動。
今回のお役目も、どうにか終わらせることができた。
――――――view, change:須美――――――
「ふぅ・・・今回も、どうにかなった・・・な」
そう言って、上里くんは帰路につこうとしていた。
そこに、乃木さんが飛び付いて・・・
「かずくん！」
「っ!?・・・・・なんだ？園子。おれはへい」
「じゃあ、これは何？」
上里くんの右袖をまくった。

そこには、白く透き通った肌は無く、内出血により、赤黒く変色した右腕が、あった。

「カズマ！お前これ・・・・！」
「別に。大したことは無い。こんなの直ぐに直る」
「んなわけないだろ‼とにかく、安芸先生に連絡して・・・・！」
「・・・・・・・・・・・・かずくん」
「・・・・・・・・・・・・善処する。そう言っただろう？」
「・・・・・・・・・・・・ばか」
「泣くなよ。全く・・・・・・」
「かずくん。もう、止めて？こんなこと・・・・自分のこと、もっと大事にしてよ・・・・・」
「善処する」
「かずくん！」
乃木さんと三ノ輪さんが、上里くんを叱る。
けれど、今の私にはその声は、どこか遠くの出来事のように思えて仕方ない。
（私が・・・・・私が一人で突っ走ったせいで・・・・）

そうだ。あの時、上里くんの忠告を聞いておけば・・・・彼があんな大怪我を負うこともなかったはず・・・・

「はぁ・・・・全く・・・・・・鷲尾も何か・・・・鷲尾？」

「え？わっしー？」

「どうした須美!?お前もどっかケガしたのか!?」

気付けば、私は泣いていた。

「ぐす・・・・・違うの・・・・私・・・・私のせいで・・・・・・」

「鷲尾・・・・・」

「ごめんなさい・・・・・私が、ちゃんと上里くんの忠告を聞いていれば・・・・・・」

「――――――――はぁ」

ぽん、と私の頭に上里くんの左手がのせられた。

そのまま上里くんは、私の頭を撫でる。

「相手が悪かっただけだ。お前は悪くない」

「でも！」

「鷲尾。お前がどう思おうが、それはお前の勝手だ。だが事実として、ライブラと

お前の弓は相性が悪かった。今回はただ、それだけのことだ」
　上里くんが突き放すように言葉を紡ぐ。でも、その声音は優しくて、こちらのことをおもんばかっているのがわかった。
「解ったら泣き止め。それと、もう少し、周りに頼ることを考えな」
「――――――――うん」
「そうだよ。わっしー」
「アタシらダチなんだからさ」
「乃木さん・・・・三ノ輪さん・・・・」
　ちっちっちっ・・・と、上里くんが指をふる。
「違うだろ？」
「あ・・・・」
　上里くんの言葉に、二人が目を輝かせて私を見る。
　ちょっと・・・・恥ずかしいわ・・・・・
　けど――――
「――――――そのっち」

「は～い♪」
「――――――銀」
「おう！」
私が名前を呼ぶと、二人は嬉しそうに返事をしてくれた。
「へへ♪なんか・・・ようやく本当の意味で、須美とダチになれた気がするよ」
「よ～し、それじゃこれからイネスで打ち上げだぁ～～！」
「ほう・・・良いな」
「かずくんはこれから病院なんよ？」
「・・・・・・・大丈夫だと言っているｄ「駄目よ！」うおっ!?」
「そんなひどい怪我しているんだから、一正くんはちゃんとお医者様に診てもらわないと！」「お・・・・おう・・・・」
自分のことを省みない一正くんに詰め寄る。
「もし悪化でもして切断、なんてことになったら、みんな悲しむわ！だからあなたはしばらく安静にしていて！」
「・・・・・・・・園子」

「わたしも～、わっしーと同意見～」
「・・・・・・・三ノ輪」
「残念だったなカズマ。ここにお前の味方はいない」
「――――――」（白目）
やって来た救急車に一正くんを押し込んで、私たち三人はイネスへと向かって行った。

覆式波動掌について
アクエリアス戦で使用した技。右掌の電極から相手にエネルギーを叩き込み、強制的に飽和させ爆発させる。
また、右腕全部を一つの砲身として使用する『覆式波動砲』はリミットパージ時のみ、使用可能な必殺技。
しかし、機関の配線のみではエネルギー送量が足りない為、この技を使用する際は右腕の血管・神経・リンパ腺も配線として使用する、まさに諸刃の剣である。

訓練のために、合宿をする

ぱぱぱーっと書いた合宿回への導入回。
導入だから短め。

「――――――なぜ、私が怒っているか・・・分かりますよね？」
『はい・・・・』
翌日の放課後。おれたちは安芸先生に呼び出され、こってり絞られていた。安芸先生の隣には高嶋先生もいる。
「まぁまぁ先輩。みんな無事帰ってきたんですし・・・」
「今回無事だったとしても、次も無事とは限りません！あなただって分かるでしょう？」
「うぅ・・・・おっしゃる通りです・・・・」

安芸先生をなだめようとした高嶋先生までおれたちと同じ立場に回った。何をしているのやら・・・・

「ハァ・・・・あなたたちに足りないもの。それは、『連携』です」

「連携――――」

なるほど、確かにそうかも知れない。

個々の戦闘力は十分に足りている。が、おれたちはそれを活かせるだけの戦場造りが出来ていない。樹海の話ではなく、位置取りの話だ。

どんなに強い戦士であろうとも、適正距離というものが存在する。弓兵に近接戦闘をやれ、というのは『死ね』と言っているようなものだ。

そこで重要になるのが、『連携』だ。

「あなたたちには、明日より数日間、大赦が用意した宿泊施設にて合宿をして貰います」

「合宿？」

「わぁ～合宿だってかずくん～」

「楽しそうだな・・・・」

苦しそうにしてるよりはマシか・・・・

「そして、連携の訓練をするにあたって、あなたたちの中から、隊長を決めたいと思います」

隊長・・・だと・・・？

・・・・・・まぁ、確かに必要か。

おれを含めたこの四人を纏められるような奴――――少なくとも、おれには無理だな。

となると――――

「乃木さん。お願いできるかしら？」

「え？わたしですか～？」

だろうな・・・。

この中で選ぶとしたら、園子か、おれだろう。だが、おれにはそういうのは向いてない。従って、リーダーは園子一択しか無い。

「かずくん・・・どう思う～？」

「何故おれに聞く？」

「だって～・・・」
「――――鷲尾、三ノ輪。お前らの意見は？」
「うーん・・・・アタシはパス！リーダーなんてガラじゃないもん」
「――――そうね、私も・・・前のお役目のとき、思い知らされたわ・・・・」
「――――と、言うことだ。従って、お前しかいない」
「かずくんでもじゅうぶんイケると思うんよ～・・・」
「自信が無い？」
「――――――――うん」
まったく・・・・
何時まで経ってもコイツは――――
「大丈夫だ園子」
「わぷっ」
ぐりぐり、と園子の頭を撫でる。
「お前になら出来る。なんならおれが副隊長として支えてやる。だから、やれ。心配するな、みんながいる」

「かずくん・・・・・」
「――――うわぁ」
「――――はわわ」
何故だか三ノ輪と鷲尾が顔を赤らめてこっちを見ている。お前らが照れる要素なんぞ、いったい何処にあった？
「んん！こほん・・・では、隊長は乃木さん。副隊長は上里くんで決定します。よろしいですね？」
全員が頷く。
この日のミーティングはこれにて終了した。

――――+――――

「あにさまー。右腕の調子はいかがッスかー？」
「問題無い。合宿の最終日にはギプスも取れる」
「そのあいだ～、かずくんの身の回りのお世話は、わたしたちがしてあげるんよ～♪」
何故だかそういうことになったらしい。冗談じゃない。

というか・・・・

「何故園子がウチに居る？」

「あれ？あにさまは聞いてなかったんですか？」

「何を？」

「園子ねーさまが明日遅刻しないように、今日はウチに泊まっていくことになりやがったんです」

「誰が決めた？」

「佳南とおばさまに決まってるじゃねーですか」

「――――そうだったな。そう言うことを好き勝手に決めるのは何時もお前らだったな」

付き合わされるこっちの身にもなって欲しい。というか、良く園子の父親は何も言わないな・・・

「えへへ～。お父さんも、『一正くんだったら、園子のことを安心して任せられるな』って言ってたんよ～♪」

「――――詰んだ。出れない」

おれの人生は、きっと、こうやって毎日園子に振り回されることになるんだろうな・・・・

畜生めぇ・・・・・・

乃木夫妻の一正への印象について――

母「真面目で良い子なんだけど、子供なんだし、もう少し遊ぶことを考えて欲しいなぁ・・・・そうだわ！うちの園子に振り回させよう！」

父「彼は少し、子供らしくすることを覚えた方が良い。でないと将来、彼はきっと苦労する・・・・・よし。園子に遊び相手をさせよう」

似た者夫婦である

訓練、開始

現在わすゆの進行速度が一番遅いため、しばらくテコ入れ

「遅い！」
「――――――ＺＺＺ」
合宿開始日当日。三ノ輪が遅刻していた。
おかげで園子はおれの膝を枕にして寝てやがる。
しかも鷲尾はご立腹ときた。
「――――――ミカ」
『心配ない。もうすぐ来るよ』
「はざまーす！遅れてごめん！」
ミカに三ノ輪の動向をサーチして貰おうとした時、件の人物たる三ノ輪がやっと

現れた。
十分の遅刻だ。
まったく・・・・これでも勇者なのか？
「銀！いくらなんでも遅すぎよ！何をしていたの？」
「いやぁ、これには事情が・・・・ああ、いや、どんな理由があろうと遅刻したのはアタシだからな・・・ごめん、須美」
「――――もう、次は気を付けてよ」
「あはは・・・」
何はともあれ、これで全員集合だ。
おれたちはバスに揺られて、目的地へと向かって行った。

――――――――――――――――

バスに揺られて数時間。
おれたちは讃州市内のとあるビーチに来ていた。
現在ここは大赦によって貸し切り状態。
おれたちの連携訓練はここでやる様だ。

「では、これから訓練を開始します」
安芸先生が号令をかける。
「あなたたちにはこれから、あの特注のピッチングマシーンから放たれるボールを、銀ちゃんに当てないように、旨ーくやって、向こうの丘に見えるバスまで銀ちゃんを運んでもらいます！」
高嶋先生がルール説明をする。
三ノ輪がアタッカー。園子がディフェンダー。鷲尾がスナイパー。そしておれは・・・・
「高嶋先生」
「はーい。なにかな？」
「おれの役割、コマンダーって・・・・」
「適宜三人に指示を出す役割だよっ。状況に応じて臨機応変に指示してね♪」
「そう言うことじゃ・・・・つか何気に今かなり難しいこと言った!?」
「では、それぞれの役割が理解できたところで、訓練開始！」
安芸先生の号令により、ピッチングマシーンからボールが射出される。

「――――園子、三ノ輪は直進！鷲尾、仰角三度・左に十二度！三秒後に一射後、仰角そのまま右二十一度に一射！」
「は・・・・はい！」
こうして、おれたちの訓練は始まった。
――――――――――――五分後――――――――――――
「三ノ輪はまだ飛び出さない！園子は五秒制止！鷲尾は園子の頭上に向けて射て！」
「あぐ」
「飛び出さないって言っただろう!?」
「うぅ・・・・・・ごめん・・・・・」
――――――――――――十分後――――――――――――
「次！三ノ輪はまだ！園子は盾を少し右！鷲尾はその反対！」
「えっと～？」
「あだっ!?」
「園子ォ!?!?」

「ふぇぇ～・・・かずくんごめんなさ～い・・・」

――――――――――二十分後――――――――――

「鷲尾！次射は三秒後だ!!」

「ご・・・・ごめんなさい・・・」

――――――――――三十分後――――――――――

「園子！！！」

「ふぇぇ～ん」

――――――――――一時間後――――――――――

「あー！くっそぉ!?」

「三ノ輪ァ！！！！」

――――――――――そして――――――――――

「今日はここまでね」

安芸先生のその一言で、三ノ輪と園子がぶっ倒れ、鷲尾がへたれこんだ。

「――――今後の課題が多すぎる」

早速、作戦の練り直しだ。

独りの、夜

テコ入れ第二段!!
ＳＳＳＳ.ＧＲＩＤＭＡＮ見たあとだから目が冴えてるゼ・・・！

「ふわぁ～ぁ」
合宿三日目の夜。銀はトイレからの帰りにいつものやつ（トラブル）に出会し、旅館内をさ迷っていた。
「うーん・・・困った。本格的に部屋の場所わかんない」
さてどうしよう、と頭を悩ませながら歩いていると、視界の端に、なにやら光るものが見えた。
「？」
そちらを見ると、夜の浜辺に誰かがいた。

少し遠いから人影しか見えないが、それでも、今、そこにいる。
「・・・こんな時間に誰だろう」
その人物が気になった銀は、少し迷いながらも無事旅館を出て、浜辺に向かったのだった

「ハァ・・・ハァ・・・・」
『記録完了。次のパターン、行くよ』
「ハァ・・・ハァ・・・頼む」
浜辺にたどり着いた銀の視界に映ったのは、一正がたった一人で訓練している姿であった。
「あいつ・・・なにしてんだよ・・・・」
銀が呟く。その声が聞こえたのか、一正が銀の存在に気付いた。
「・・・ん？三ノ輪か、何している。明日も訓練がある。寝ろ」
「っ！それはこっちのセリフだって！カズマこそ、こんな時間になにやってんだよ！」

「――――――見て分かるだろう？訓練だ」
「訓練？」
眼鏡の位置を直しながら、一正は答える。
「立てた作戦をこうして実演しながら自分の訓練もする。実に効率的で理にかなった訓練だ」
「いやお前右腕・・・・」
「問題なく動く。だから訓練している」
「そうじゃないだろ！」
流石の銀も、一正のその態度にはキレた。
「なんだよ・・・・なんなんだよお前は!!」
「・・・・・どうした？」
「どうしたじゃない！なんでお前はもっと自分を大切にしないんだよ!!」

「なら、お前はどうなんだ？」

「ッ――!?」

「お前が、お前にとって大事なモノを、その身に代えても護りたいと願うなら、お前はその時、自分の身を案じるのか？」

「それ・・・は・・・」

銀は答えられない。

「おれは、園子を護りたい」

「――――――」

「園子だけじゃない。お前と、鷲尾のこともだ。喩えこの身が朽ち果てようとも、おれの出し得る全力で持って、おれはお前たちを護る。それだけの覚悟を、おれは持っている」

銀はもう、何も言えない。

一正の瞳に宿る、絶対不屈の闘志を眼鏡のレンズ越しに垣間見たから。

「もう、良いか？ならばおれは――――」

だから、銀は・・・

立ち去ろうとした一正の袖を、きゅ、と摘まむしか、銀にはできなかった。

「――――――」

「――――――はぁ」

そんな銀を見て、一正はため息をこぼし・・・

「ミカ」
『うん』
ミカヅキにハックさせたピッチングマシーンから、一つボールを出してもらい、
「三ノ輪」
「――――――なに？」
銀に向かってパスした。
「――――――このままじゃ、眠れない。ちょっとだけ、付き合え」
ぶっきらぼうに、そう、告げた。
「――――――しょうがないなぁ」
そうして二人は、夜の浜辺でボール遊びに準じた。

その様子を、遠くから、羨望と嫉妬が入り雑じった瞳で見つめる視線に、気付かないままで――――

一正は眼鏡キャラ。
その理由は後程

訓練、完了

テコ入れ第三段！
合宿最終日の訓練回。
どうぞお納めください（最近言ってなかった定型文）

そして迎えた、合宿最終日――――
一正の指揮の下、園子が守り、須美が援護して銀を一定の位置まで運んで行く。
「今だ！行け！三ノ輪ァ！！！」
「いよっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
一正の指示に、銀が跳ぶ。
彼女を迎撃せんと、ピッチングマシーンから多数のボールが放たれる。
それを、両手の斧を振り回して叩き落としていく。
が、如何せん斧は大振りになってしまうために、攻撃後の隙が大きい。その隙を

狙ってのものか、はたまた偶然か、迎撃仕切れなかったボールが一つ、銀目掛けて迫り来る。

誰もが、「また失敗した」そう思っていた。

たった一人を除いて

「良い位置だ。作戦通り」

一正は銀の跳躍と同時に展開していた、覆式波動機関で二番兵装『霊力熱刃（ヒート）三日月刀（ショーテル）』をボール目掛けて投げた。

ミカヅキのアシストにより、投げられた三日月刀は狙い過たずボールを射ち落としてみせた。

「行けぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！」

彼女を止める物はもう全て排除された。
徐々にバスと銀との距離が縮まっていき――

ドゴォォォォォォォォン・・・！！！

「ゴーーーーーーーーーーーーッル！！！！！！」

バスを叩き割った後、今までの鬱憤を晴らすかの如き、回転乱舞によって、バスは粉々に砕け散ったのだった。

そんな様子を見て、園子と須美が遠距離ハイタッチをする。

「よし、作戦完了（ミッションコンプリート）だ」

「おめでとう。でも上里くんはルール違反でギルティね♪」

「――――なんでさ」（白目）

『はふぅ～～～～～・・・』

夜、露天風呂にて訓練の疲れを癒す三人。

ここは女風呂なので、勿論、一正の姿は無い。

「毎日毎日、バランスの良い食事と厳しい訓練、そんでもってしっかりとした睡眠――なんというか、勇者って言うより、運動部の合宿みたいだよなぁ・・・」

「私たちの連携のための訓練なんだし、仕方ないわよ」

「なんかこう、必殺技とか授かるイベントはないものかねぇ」

「だから連携の訓練なんだってば・・・」
「あーあ、カズマみたいな必殺技が欲し・・・・・・」
ふと、昨晩の一正を思いだして尻すぼみになってしまう。
そんな銀に、園子が訊ねる。
「ミノさん。身体の傷は大丈夫？」
「えへへ、へーきへーき！そう言う園子の方は？」
「どっちかと言うと、こっちの方が～」
そう言って園子は自身の右掌を見せる。
潰れたマメの上に、更にマメが出来ていた。
「年頃の女の子のやることじゃないよなぁ・・・・」
「そうは言っても、私たちがやらなかったら我が国があんなよくわからない奴らに滅ぼされてしまうのよ」
「それはわかってるって。そ・れ・よ・り・～・・・」
銀がいたずらっ子の笑みをたたえて、両手をわきわきさせて須美に近付く。
「な・・・・なに・・・!?」

「クラス一の大きさを誇るお胸を拝んでおこうと思ってね♪」
「はぁ!?」
「前々から思っていたけど、須美のはまるでチョモランマだよなぁ！親父！その桃くれぇ!!」
銀が須美に襲いかかる。勿論須美は抵抗する。
「ちょ!?・・・・・止めなさい銀!!」
「いーじゃん！事実を言ったまでだろ！むしろそこまでおっきいクセして恥ずかしいなんて、贅沢言うな!!」
「ふ・ざ・け・な・い・で・!!」
二人が激しい攻防を繰り広げている中、園子はのんびりと「サンチョも入れてあげたかったなぁ～」なんて呟いている。
と、そこに――――
すこーん！

「あだぁ!?」

突如、壁の向こうから風呂桶が飛んできて、銀の頭にクリティカルヒットしたのだった。

「いったぁ――――なぁにすんだよ！カズマ!!」

「バカ騒ぎは他所でやれ。露天風呂は静かにゆっくり浸る物だ」

「そんなこと言って、どうせお前も須美のチョモランマが気になるんだろ～？」

「ちょ!?・・・・銀ってば!!」

「脂肪と乳腺の塊なんぞに興味無い」

「「えぇ・・・・」」

あんまりな言い様に、さしもの二人も絶句してしまった。
「かずくんはね～、うなじが好きなんよ～♪」
すこーん
「ふぇぇ～・・・・なんでわたしも～？」
「余計な事を言うからだっ!!」
この後、入ってきた安芸先生と高嶋先生に全員怒られた。

一正はうなじフェチ。
前に園子がポニーテールにしてうなじをチラ見せしたら一正の理性が蒸発して園子は襲(嘗)われた。
全てが終わった後、そこには、うなじをべっちょべちょにして、頬を赤らめて息を荒げている園子がいた。とは一正談。この後無茶苦茶謝罪した。

合宿の夜、共に眠る

これが最後のテコ入れ!!

ほんとはもうちょい詰め込みたかったけど、あんまり詰め込み過ぎるときついから、ほどほどに

「という訳で！上里くんへの罰ゲームは、『四人一緒に寝ること』に決定しましたー♪」

「いやほんとなんでさ」

おれの抗議の声を無視して、高嶋先生が準備を終えていた。

「へいかずくん！うぇるか～～～む♪」

「なんで嬉しそうなんだよ」

「まあいいじゃん。合宿最後の夜なんだし」

「良い訳あるか」

「婚約もしてないのに殿方と――――」
「鷲尾は何を言っている!?」
やれやれ、やはりこうなったか・・・・
園子は平常運転だとして、鷲尾は何かしら文句を言ってくると践んでいた。
予想外なのは三ノ輪。彼女はアレでいて乙女だ。鷲尾ほどでは無いにしても、何かしら文句の一つでもあると思ったのだが――――まぁ良いか。
「はぁ・・・・仕方ないか。おれは寝る」
「待てって、直ぐに寝るなよ」
そう言って、三ノ輪はにやけ面を隠そうともせずにこちらを見てくる。
「――――――なんだ？」
「合宿最期の夜なんだぜ？簡単に寝られると思うなよー？」
「愛用の枕があるから寝られるよ～」
そういう意味じゃないぞ。
しかし、この流れは不味い。相当面倒な事になる。
「駄目よ！夜更かしなんて！」

良かった・・・・鷲尾が真面目で・・・・

「早く寝ない子には・・・・夜中迎えに来るわよ・・・・」

「む・・・・迎えにぃ～～!?!?」

なんだろう。園子と鷲尾の想像している物に差が感じられる・・・・

「そんな怖いのじゃなくてさ！恋バナしようよ！」

ほら来た。この中で唯一普通の女子らしい女子と言えば三ノ輪位だし、彼女がその話題を言い出すのは察しが付いていた。

「みんなで一人ずつ好きな人の名前を言い合いっこしよう！」

「というならばお前、誰か好きな奴、いるのか？」

「うぐ・・・・・えと・・・・・しいて言えば・・・・・弟、とか？」

「家族はズルよ」

「そ・・・・そういう須美はいるのかよー!?」

「う・・・・わ・・・・私も・・・・いない・・・・けど・・・・」

「わたしはいるよ～♪」

「「え!?!?」」

園子の発言に、二人が驚愕の声を上げる。
「え・・・誰!?クラスの人!?」
「ついに恋バナ来たんじゃない!?」
「あのね～、ミノさんと、わっしー！」
「――――――――えぇ？」
だろうと思った。
「――――――――」
「・・・・・・ん？なんだ？」
「――――――――なんでもないよ～」
園子が無表情でこっちを見ていた気がしたが、気のせい・・・だろうか？いつも通りのぽやぽやした笑顔を向けてくる。
「はぁーあ・・・・・アタシら、これで良いのかねぇ・・・・」
「良いのよ！私たちには神聖なお役目があるのだし！」
「『仕事が恋人』――――――聞こえは良いだろうが、それはそれで寂しい感じがするな」

「須美は大人になってもそんなこと言ってそうな感じするよなー」
「・・・・・・・・・むー」
鷲尾が膨れっ面になる。お前が言い出したことだろうに。
まあいい。
さて、そろそろ真面目に寝るとしよう。
「消灯する。さっさと布団に戻れ」
「「はーい」」
パチン
周囲が暗くなる。その時――
「――――――は？」
辺り一面に、星空が広がった。

なんてことはない。園子が持ち込んだプラネタリウムが起動したのだ。
「なんでプラネタリウム!?」
「えへへ～♪」
「園子」
「な～に、かずくん」
楽しそうに笑う園子。その笑顔を見て、おれは――――――――――――楽しいか？」
「うんっ！楽しいよ～♪」
「そうか」
園子の頭を雑に撫でる。
「いや、消しなさいよ・・・・！」
鷲尾が突っ込みを入れてきたので、仕方ないからプラネタリウムの電源を落とした。

仲間の秘密を、こっそり探る

来期のアニメは豊作じゃのう・・・(ホクホク顔)
『みにとじ』に『けものフレンズ2』に『約束のネバーランド』
けもフレと言えば、降ろされちゃったたつき監督、別のアニメをやるのだとか。
個人的には、そっちも見たいんだよなぁ・・・・

「銀の身辺調査をするわ！」
「・・・・・・・・はぁ」
「すぴー・・・すぴー・・・」
合宿終了から数日後。鷲尾から園子共々呼び出され、指定の場所に行くと、鷲尾がそんな事を言い出した。訳が解らない。
聞けば、三ノ輪は毎回の如く遅刻し、しかも昨日はランドセルの中に教科書ではなく、猫を入れて登校してきたとのこと。

「・・・・・・確かに気になる。が、其処までする事でも無いだろう？」
「さあ！行きましょうそのっち！」
「すぴー・・・(かくん)」
「そのっちもやる気ね！さあ！一正くんも！」
待て。園子は頷いてない。というか園子は何で未だに立ったまま寝ている。
そして鷲尾は寝たままの園子の手を引いて、三ノ輪家に向かっていった。
「――――はぁ。仕方ない。付き合うか」
せめて知り合いに遭遇しない事を祈るとしよう。

結論から言おう。
祈りは神樹様に届かなかった。
「――――」
「今度は倒れた自転車を起こしているわ・・・」
「ミノさん立派だぁ～」
「なるほどぉー。さっすが噂の勇者サマ！ねっ、ずっく♪」

「――――ん（こくり）」

「銀ねーさま。このような事を毎日してやがりましたか・・・・素直にそんけーです」

三ノ輪の家から、彼女を尾行してる途中、アスカと山伏に遭遇した。アスカが「面白そう！」と言って二人も参加。

更に佳南までやってきて「佳南も交ざらせろです！」なんて言って参加を表明。

結果、こんな事に・・・・・

「――――――――神樹様。恨むぞ」

『アレにそんなこと言っても無駄だよ』

「――――――――知ってる」

『なら、諦めなよ』

「――――――――畜生めぇ・・・」

端末からミカが的確にツッコミを入れてくる。

それに肩を落としていると、園子がこちらを見ている事に気付いた。

「――――どうした？」

「かずくんは、楽しくない？」
「――――――――別に。そういう訳じゃ、無い」
「だったら楽しもうよ～♪」
「・・・・・全く」
本当、園子には敵わないな。
仕方ない。童心に返ったつもりで楽しむとしよう。
『カズマ、年齢的にはまだ子供だよね』
「そこにツッコミを入れるか」

――――――――――――――――――――――――

「えぇ!?じゃあ、今朝から着いてきてたの!?なんか恥ずいなぁ・・・//」
結局あの後、イネスでリンゴを落とした女性を手助けしてる三ノ輪を放っておけず、全員でリンゴを拾い集めて女性に渡すと、良い時間だった事もあり、フードコートにて三ノ輪も含めて全員で昼食を取ることになった。
「でもこれで、銀が何故遅刻するのか。その理由が判ったわ」
「ミノさんいつもああなの～？」

調査結果としては、三ノ輪は重度のトラブル巻き込まれ体質、ということだった。
行く先々でトラブルに遭遇しては、それに対処していたが故の遅刻。
ここで『無視する』という選択をしない辺り、三ノ輪は勇者なのだと感じさせる。
「すごいねぇ。シルバーはまさしく勇者様だ!!」
「・・・・・・・シルバー？」
「≫銀≫だから」
「なるほど」
アスカが三ノ輪に勝手にアダ名を付けてる。山伏はそれを止めようともしない。
無駄だって、理解しているからか？・・・・・・違うな。あの山伏の表情は、自分も楽しんでる奴の其だ。
「銀ねーさま、カッチョ良いです!!佳南、尊敬します!!」
「うぅ・・・・//」
「ミノさん顔真っ赤〜♪」
やれやれ・・・・このままじゃ話が進まん。
「それで？いつもああして誰かの手助けをしてるのか？」

「え？あ・・・・ああ、うん。そうだよ。いつもいつも、行く先々でトラブルに遭遇してさ・・・・宝くじだって当たったこと無いもん」
「くじ運とお前のソレは別問題なんだが・・・」
と、その時だった。
「――――――――っ！あにさ」
「・・・・・佳南？」
佳南が何かを言いかけて、止まった。
これは・・・・・まさか・・・・・！

鳴り響く鈴の音

光が全てを飲み込み

日常が、非日常へと切り替わる。

「ほらな？アタシって運が無いだろ？」
「ミノさんはアンラッキーガールなんよ～・・・・」
「なんて言ってないで、お役目よ！」
「――――――――大丈夫。おれたちは、やれる」
合宿の成果を出せば良い。
大丈夫。
決意を胸に、おれは変身する。

嵐、止むこと無く

ゆゆゆいの『セカンドラブ・愛、忘れてませんか キャンペーン』にヤック・デカルチャーした小生。
すずめぶにあやめぶも良いけど、やっぱ小生はめぶにぼです(鋼の意志)

「今回の相手は、山羊座(カプリコーン)か・・・・・」
壁の向こうから現れた異形を眺めながら、おれは文献にかかれていた内容を思い出す。
「どんな敵なの～？」
「下に垂れている角があるだろう？アレで振動を起こして攻撃してくる」
「振動・・・・・ということはまさか!?」
鷲尾が何かに気付いたその時、カプリコーンが地面を叩き、地震を起こした。
「うわぁ!?」

「ひゃあ!?かずくん、これは～!?」
「文献に無かった攻撃・・・・・奴め、学習したってのか!?」
地震によって崩された体制を整えている間に、カプリコーンは鷲尾の射程圏外へと上昇。このままでは、こちらは攻撃できない。
「制空権を取られた!?」
「まずいぞ・・・・・どうするカズマ！」
「問題無い。波動砲なら届く距離だ」
「そしたら一正くんの腕がまた！」
「それに関しても問題無い」
カプリコーンが自身の角を射出しての攻撃してきた。それを壁でガードした後おれは、一番兵装『手持式覆式波動砲撃銃（バスターライフル）』を呼び出す。
「こいつなら右腕を使わずとも、波動砲が撃てる」
「おおおー！なんかカッケー!!」
「銃？それにしてはかなり大型ね・・」
鷲尾と三ノ輪が砲撃銃を見て感想を述べる。

対して園子がむすぅ・・・・とむくれている。
「――――――どうした？」
「なんでこの前はそれ、使わなかったの～？」
「おれが一度に使える兵装は一種のみだ。前回は三叉槍を使っていたから、使えなかった」
「だったら、槍をしまえばよかったじゃん～」
「・・・・・・・話は後にしろ。今はお役目の時間だ」
「――――――――むぅ～～～～!!」
分かりやすく頬を膨らませて抗議する園子を差し置いて、砲撃銃の銃口をカプリコーンに向ける。
『チェンバー内、圧力正常。使用電力はどの程度？』
「30・・・・・いや45にしよう」
『二発しか撃てないけど？』
「構わない。今回のおれの仕事は、アイツを撃ち落とすことだ」
『ん。分かった』

エネルギーチャージは直ぐに終了した。
問題は、カプリコーンのどの辺りを狙うべきか？
とりあえず頭を狙うとしよう。
狙いを定めて・・・・・・・トリガー！
砲撃銃から放たれたエネルギーの奔流は、カプリコーンへと向かって伸びていき

カプリコーンに当たる直前で、何かに阻まれてしまった。

「なっ!?」
「うそ!?」
「かずくんどうしよ〜!?止められ・・・・かずくん？」
カプリコーンの前に浮かぶソレと、視線が合った。
その瞬間、おれの脳裏にあの日の情景がフラッシュバックする。

傾く船体

落ちていく人々

伸ばしあう二人の手

そして――――――――

「どうしてたすけてくれなかったの・・・・？」

「ひっ・・・・！」

いつの間にか、目の前に母さんがいた。怨念のこもった瞳で、おれを見つめて。

「ちが――――――おれ、は・・・・・・・」

「あなたなんて――――――――」

「やだ――――――やめて・・・・言わないで！！！」

「■■■■■■■■■■」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

暗闇がおれの意識を支配する。

もう何も見えない

もう

なにも

きこえない

凍てついた心を、溶かすぬくもり

「かずくん！」

あの変な黒いくらげさんが出て来てから、かずくんがしゃがみこんでうずくまってしまった。小さな声でなにかうわ言を呟いてる。

「いきていてごめんなさいうまれてきてごめんなさいたすけられなくてごめんなさいたすかってしまってごめんなさいなじめなくてごめんなさいいいこじゃなくてごめんなさい」

なにかに向かって、ずっとあやまってる。

「お・・・おい、カズマ？」

「一正くん!?どうかしたの？しっかりして！」

ミノさんとわっしーがかずくんに声をかけている。けど、かずくんは全然反応しない。ずっとあやまってばっかり。

こういう時こそ、リーダーとして私が頑張らなくちゃ！

「ミノさん！わっしー！かずくんをあの壁まで運ぶの手伝って！」

「壁？一正くんが作った？」

「分かった！バーテックスの攻撃がくるかもしれないもんな！」
わっせ。わっせ。わっせ。わっせ。
かずくんを運び終わるのと同時くらいに、バーテックスの角攻撃が飛んできた。
もうちょっと遅かったら・・・・・・・ごくり
「んで？カズマをどうするんだよ？」
「元凶を絶てば、どうにかなるかしら？」
わっしーが壁からちょっと顔をだして、バーテックスと黒いくらげさんの様子を伺う。
「うーん・・・・たぶん、あれをたおしてもダメだと思うんよ～。かずくんの心を、どうにかしてあげないと・・・・」
「じゃあ、どうするんだよ？カズマの心ったってさ・・・・」
「二人とも！大変よ!!」
わっしーが慌てた様子でバーテックスの方を指差す。
ミノさんと一緒に、壁から顔をだしてそっちを伺うと――
「えぇ!?そんなんアリかよ!?」

「・・・・・・・うわぁーお」
黒いくらげさんが、バーテックスに呑み込まれていた。
というよりも、バーテックスとくらげさんが合体した。というべきかな？
バーテックスの４つの角が、ドリルみたいな形になって、さっきよりも強そうになった。
そのドリルをこっちに向ける。
「やば――――」
発射されたドリルが、かずくんの作った壁に突き刺さった。しかもそのまま回転し始めた！
「どうしよう・・・・!?このままじゃ!?」
「クソっ！こうなりゃアタシが――――」
「待って！」
慌てるわっしーと、はやるミノさんを呼び止めて、私は今思い付いた作戦を二人に伝える。
「二人とも、かずくんのことをぎゅぅぅぅぅぅぅって、目一杯抱きしめて！」

「「はぁ？」」
「お願い！どうしても必要なんよ～！」
「えぇっと・・・・・よくわかんないけど・・・・・・わかった！」
ミノさんがかずくんをむぎゅううう、と抱きしめる。
「ちょ!?銀！」
「わっしーも！かずくんを元にもどすためにも!!」
「ううううう・・・・・・えい！」
ミノさんの反対側から、わっしーも抱きつく。
「よ～し・・・・それで・・・・」
私も、二人の上からかずくんに抱きつき、かずくんの頭を優しく撫でる。
「――――――――ぅあ」
「よしよし・・・・大丈夫だよ・・・・」
かずくんの両親が死んじゃったあの日から、ずっと、かずくんは自分を責めて、追い詰めていた。
なんとかしてあげたかったんだけど、私一人じゃ、なんにも出来なくて・・・・

きっと、そのツケが今日に回ってきたんだ。
「だから、ごめんね・・・・・かずくんはずっと、我慢してきたのに・・・・・」
「――――――――――」
優しく、優しく、頭を撫でる。
「でも、もう大丈夫。かずくんには、私がいる。わっしーも、ミノさんも。だからね・・・・・かずくん」

「もう、一人で頑張らなくて大丈夫！」

「――――――――――そ、の」
かずくんが何かを言おうとした、その時だった。
「そのっち！！！」
「園子!!壁が！！！」

バーテックスが掘っていた壁が崩れてしまった！
ドリルはそのまま、私たちに向かって伸びて――――

ビーム光線に焼かれて、爆発した。

「かずくん！」
かずくんが、砲撃銃でバーテックスのドリルを攻撃したのだ。

「――――――――もう、大丈夫。あと・・・・・・それと・・・・・」
ほっぺたを赤くして、かずくんは言った。
「――――――――ありがと、みんな」
えへへ～♪かずくんに褒められた～♪
「カズマ！大丈夫なのか？」
「一正くん、平気？身体はなんとも無い？」
「ああ。大丈夫だよ」
ミノさんとわっしーがかずくんに詰め寄る。かずくんはそれに、笑って答えた。
「よかった～。んじゃ！さっさとお役目、済ませちゃおう！」
「もう、銀！油断しちゃ駄目よ！」
「須美の言う通りだぞ？銀。先ずはアイツを引き摺り下ろす処から始めないとなんだ」
およよ？今――――
「――――カズマ？今、お前」
「――――――――行くぞ！」

「ふぇ!?ああ！ちょっと！一正くん!!」
銃を捨てて、かずくんはジャンプでバーテックスに向かって行った。
どうみても、照れ隠しだねぇ～～♪
なんて思っていたら、かずくん目掛けてバーテックスが、３つになった角ドリルを一つにまとめて飛ばしてきた。
「ミノさん!!」
「五分はこらえる！その内に!!」
すぐさまミノさんに、かずくんと巨大ドリルの間に割り込んでもらう。その間に私とわっしーで・・・・！
「わっしー！私が道を作るから！」
「了解!!」
槍を変形させてはしごを作ると、わっしーはそこをかけ上ってバーテックスへと向かう。
が、バーテックスのドリルは強力で、ミノさんの斧にひびが入り始めた。
「なるべく急いでくれぇ!!」

「問題無い！ミカぁ!!」

『リミットパージ。エネルギー残量はまだまだ余裕』

かずくんがミノさんの斧に右手を添えて、覆式波動を打ち込んだ。すると、ミノさんの斧のひびが消えて、更にさっきよりも固くなったようで、バーテックスのドリルの方が、逆に削れはじめた。

「うお!?なんだこりゃ！すっげぇ!!」

「これが覆式波動の本来の使い方だ！」

「よ～し！わっしーは今のうちに!!」

「ええっ！南無八幡・・・・・大菩薩!!」

はしごを上りきったわっしーが、気合いと共に放った矢は、バーテックスに刺さると爆発。バーテックスの身体に穴を空け、角ドリルを繋いでいるバネみたいなひもを引きちぎった。

バランスを崩して倒れるバーテックス。その先には、角ドリルが無くなってフリーになったかずくんとミノさんが。

「行くぞ銀！初戦の逆だ!!」

「おう！・・・・てちょっと待て!?どうするつもりだよ!!」

「こうするつもりだよぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

「うおおぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?!?!?!?!?!?」

かずくんが、ミノさんごと斧をジャイアントスイングして、波動砲を撃ちつつバーテックスに向かって投げた。

波動砲によって加速するミノさん。

ぐんぐんバーテックスとの距離が近付いていき——

「うおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！」

若干悲鳴に近いおたけびをあげながら、バーテックスへ連撃を浴びせた！

その攻撃がきっかけになったみたいで、『鎮華の儀』が始まった。

これでバーテックスはいなくなって、私たちも、元の世界に戻されたのだった。

七人に、なった日

現実世界に帰ってきたおれたちは全員、草むらに寝転んでいた。
「――――っあ～～～。腰にくる戦いだった～～」
「ミノさん大丈夫～？」
「後で佳南にマッサージを頼むと良い。あいつは上手だ」
「へえ、そうなの？」
「えー・・・・いいよ別に。そこまで痛いワケでもないし」
「遠慮はいらない。佳南なら喜んで引き受けるだろうさ」
「一正くんもそう言っていることだし、頼んでみれば？銀」
「うーん・・・・そこまで言うなら・・・・」
「なら決まりだな」
言うや否や、おれは立ち上がり銀に手を差し伸べる。
「ほら、行くぞ銀」
「え？・・・・あ・・・・うん・・・・」

おずおず、といった感じで、おれの手を取る銀。
続けて須美にも手を差し出す。
「え？私も？」
「・・・・・・・嫌か？」
「そんな悲しそうな顔をされても⁉」
「――――――――」
「うぅ・・・・・・・わかりました」
攻略完了
そんな訳で、二人と仲良く手を繋ぎ、佳南たちの待つイネスへと向かう事にした。
「――――えへへ～♪待ってよ、三人とも～～」
そんなおれを、園子が微笑ましく見ているのには気付いていたが、敢えてスルーしておく事にして。
――
「あ・・・・・帰ってきた」
「お帰り――――って、およよ～？」

「あにさまっ!?ご無事で――――――って、あれ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだよ」
イネスに戻ると、三人はまだフードコートに居てくれた。
居てくれたのは良いが・・・・・・何故こっちをニヤニヤしながら見る。
「あンれまぁｗｗｗｗｗ三人仲良くおててを繋いで・・・・・」
「仲良し・・・・・」
「あにさま・・・・・いつの間にそんな・・・・・あにさまはハーレムの王にでもなるおつもりで!?」
「ならんわ」
我が妹ながら、時折こいつが何を言っているのかわからなくなる。
そして銀と須美は顔を紅くするな。
「かずくんはね～～、時々こうやって～、好きな子に甘えるんよ～～♪」
「ちょっ!?おまっ・・・・園子っっっ！！！」
「すすすすす好きぃ!?カズマが!?」
「あわわわわわわわわわ」

「うっひょひょ～～～い!!二人共、もンのすごい慌てっプリぃ～～～♪」
それを見たアスカが大興奮。なんだ、このカオスな空間は・・・・
「・・・・・・へんたいにエサを与えてはいけない」
「同意だな・・・・・・」

―――――――――――――――――――――

須美と銀を落ち着けて一息ついたころ、銀が一つの質問を投げ掛けてきた。
「なぁ、カズマ。なんでお前、あんなに無茶ばっかりしてたんだ？」
「――――――それは」
「そんなに、アタシらが頼りない？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「ちょっと銀」
「悪いけど、止めないでくれ須美。今回ばかりは言わせてもらう」
いつになく真面目な表情で問い詰めてくる銀。
園子がおれたちを心配そうに見つめる中、おれは一つため息を洩らして、本心を語ることにした。

「――――――――頭脳明晰である事を、昔からおれは、疎ましく思っていたんだ」
「え？」
佳南と園子以外の全員が、驚いた表情を見せる。が、構わず続ける。
「»一«を聞いて十を知る»――――どころか、百を知る事のできたおれを、両親はちゃんと愛してくれてたとは思ってる。でも、他の奴らは――――――」
「・・・・・・・・・・・・・」
「期待してくれるのは嬉しく思ってる。でも、それと同時に、他人から『自分の事を蔑んでいる』と思われているのが・・・・・・・おれには、辛かったんだ」
おれの言葉に、須美が抗議の声を上げる。
「そんな事・・・・・！」
「»ある訳無い«？いいや、あり得る事なんだよ、これは・・・・人は他人の才能に嫉妬する。どうやっても解決しようの出来ない事なんだ、それは」
「――――――一正くん」
「誰だって、他人の持つ何かを羨ましがって、欲しがる。そうして行う成長にだって、相応の成果は存在するんだ。だからこれは、どうしようも無いことなんだよ。

頭では、そう解っているんだ・・・・・でも・・・・・・・おれは、それがどうしようもなく、怖い」

恐らく、あの黒海月はそうした恐怖心を増幅させて相手に悪夢を見せる能力を持っているのだろう。

だからこそおれは、ありもしない幻を見せられた。

「だからおれは、打算的に生きてきた。そうすれば、『他人は利用するだけの存在』として、おれの中で扱えるから――――――でも・・・・・・」

「――――――」

「須美と銀に会えて、おれは今までの自分の考えを改める事にしたんだ」

「と、言うと？」

須美に問われたので、一息ついて答える。

「園子だけじゃない。三人全員、おれが護る――――――命に換えても、だ」

「カズマ・・・・お前・・・・・・！」
「だって、嬉しかったんだ」
「えっ、何が？」
「祝勝会。おれも呼んでくれた事が――――」
「そんな事が!?」
「おれには充分だったよ。そりゃもう、かつての自分を『馬鹿者』呼ばわりしたいくらいに」
　その一言に、二人は唖然としていた。
「それで、おれは一人でもお役目を果たせるように努力してきた。合宿の時のアレは、そういう事さ」
「・・・・・・・・・・・・・」
「でも、おれの努力なんて結局役には立たなかったな・・・・・今回の事で、それを思い知らされたよ・・・・・・・・」
「かずくん・・・・・・・」

「・・・・・アスカ？」
山伏の声に、アスカの方を見る。

アスカの奴は、それはもう幸せそうに、鼻ちょうちんを作って寝ていた。

「――――――――オイ、変質者」
「誰が変質者じゃ!?せめて変態と言っておくれ！」

「じゃあ変態。おれの話を聞いていたか？」
「半分だけ～♪」
　こいつ・・・・・・・・・
「だって、長ったらしいんだもん！要はアレでしょ？カズヤはさ～「一正だ」話の腰を折らないでよ」
「ならちゃんと名前を呼べ」
「これはアダ名だよ！いーでしょ？別に！」
「そもそも許可した覚えは無い」
「許可が有ろうが無かろうが、関係なく呼びたいアダ名で呼ぶ。それがアスカちゃんクオリティ！」ゼッ
「胸張って言う事かッ！」
　まったくこいつは・・・・・・・・・
「でも、アレでしょ？カズヤはボクに対して、そんなに嫌な気持ちになったり、してないでしょ？」
「・・・・・・・・・・・それは・・・・・・・まぁ」

「それでいーじゃん」
「はぁ？」
にこやかに笑って、アスカが言う。
「カズヤさぁ、むつかしく考えすぎだよ～。打算だの何だのと考えるよりも、『こいつと仲良くなりたい！』とか『こいつとなら上手くやっていけそう！』とか、心で感じた事に従って動けばいーじゃんかさ！友達ってのは、そうやって増やしていくもんだよ！」
・・・・・・・・・・・得意気に言うアスカには悪いと思うが
「・・・・・・・・・・・・・これ、そういう話、だったっけ？」
「あるぇ？間違えちゃった～？」
――――――――――――なんか、もう
「どうでもいいや」
「ついにあにさまが諦めの境地に!?」
いや・・・・・・そうもなるだろ、これは・・・・・・
でも――――――

「かずくん」
「何？」
「良かったね～。お友達、増えたよ♪」
「――――――そうだな」
なんと言うか、これはこれで、良いのかもしれない。
そう思うと、心が暖かくなった。
そんな気がした。

上里一正について
幼少の折りに、親戚の子供に「気味が悪い」と言われた事がある。
その子供は、別に他意などなく『只純粋に思ったことを言っただけ』であり、直後に謝罪しているが、一正の純粋な心には深い傷を遺すことになってしまった。
この日以降、彼は（家族や乃木家の人々以外の）他人と接する時には、打算的に

思考して接するようになる。

そしてそれは、本心（誰かと、純粋に、仲良くなりたい）と乖離した行動であったが為に、傷を更に深いものにしてしまったのである。

楽しい、日常

「明日から訓練はお休みです！」
「・・・・・・・はあ」
今日の訓練が終わると、高嶋先生からそんな事を言われた。
なんでも、しばらくはバーテックスの襲来が無いらしい。そのため、訓練を一時休みにすることにしたのだとか。
「・・・ちゃんと休めるかしら？」
何処の社畜だ、その発言。
「よ～し♪」
園子の奴・・・・なんだか良からぬ事を企んでいるな・・・・・
「――――まぁ、休める時に休むのも、務めの内か」
「そうだぞカズマ！特にお前と須美はすぐ無茶するからな！」
「・・・・・・・・銀にだけは言われたく無い」
「一正くんに同意だわ」

「ふぇ!?」
ともかく、明日からは休日となる。
訓練が休みなだけで学校とかは普通にあるけどな。
「おっ休み♪おっ休み～～♪」
――園子が暴走しないように、しっかり見張らなくては。

――翌日――

「へ～イわっしー↑ﾚｯﾂ　!!ｴﾝｼﾞｮｲ　!!ｷｬｶﾞﾜﾗｰｲﾌ　!!!!!!!」
結論から言おう、こんなんどうやっても無理だ。
休日テンションでＨｉｇｈになっちまってる園子に、おれは為す術も無く簀巻きにされて連行。しかも「佳南も混ぜやがれです！」と言って佳南までついて来る始末・・・・・
唯一の救いはアスカと山伏に出会うことが無いってことｄ――
「んお？のっことすみちーじゃん。なにしてんのー？」
「・・・・・・・おはよう」
――神樹よ、何故おれを見放した。

「わぁ～～♪くるりんとしずしずだ～～。あのねあのね、お役目の訓練がしばらくお休みになるから、みんなで私のお家で遊ぼうと思って～」

「ボクも行く！良ーい？」

「もちろん♪人数多い方が楽しいんよ～♪」

嗚呼、やっぱりこうなったか・・・・・・

「・・・・・・上里、へいき？なんで簀巻きに？」

「むぐむぐ」

「・・・・・・ごめん、わからない」

だろうな。まさか猿轡までされるとは思っても見なかったもん・・・・・・・・(白目)

「ヘイヘイヘーイ♪カズヤもそんな所で寝てないで、ﾚｯﾂｴﾝｼﾞｮｲｷｬｶﾞﾏﾗｰｲﾌ　!!!!!!!!!」

ちくせう・・・・・！アスカのやろう、園子のテンションに感染してやがる・・・・・！

「た・・・・大変ね。一正くんも・・・・・・」

須美に助けられ、漸く簀巻き状態から抜け出す事に成功。
「ありがとう須美。恩に着る」
「このくらい気にしないで。それにしても、すみちーって・・・・」
「気持ちは分かる」
そしてこの後、園子からイヤホンを受け取った須美もまた、エンジョイ勢に加わるのであった。
「エンジョイ？」
「万歳!!」
「イエス！エンジョイ!!」
「・・・・・・・えんじょーい」
「イエーイ！です!!」
マトモなのはおれだけか・・・・・！

「へえ、そりゃ大変だったな」
「現在進行形で大変なお前に言われると、なんだか心に沁みるな、その言葉も」

死んだ瞳でため息をつくおれと銀。
現在銀は、普段の様子からは想像も出来ないような、おしとやかな衣装に身を包み、それを鼻血で噴水を披露してみせた須美とアスカに撮影されていた。
あの二人、分身までしてやがる・・・・・・おどれらは忍者か。
「はぁ・・・はぁ・・・次、いきましょ！」
「オゥイエス！ネクストドレス!!ヒャッハ!!」
「アスカのテンションが行方不明・・・・」
「須美ねーさまのテンションもですな・・・・・・」
そうして開始されるファッションショー。
勿論、銀が着替える時にはおれは退室している。
しかし・・・・・・アレだな
「似合うな、どの衣装も」
「でしょでしょ～♪ミノさんは良いモデルさんだよ～～」
「人を着せ替え人形にするなぁー!!」
「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ！」

「ウリィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！」
・・・・・・ホントテンションン高ぇな、こいつら

――――――――――――――――――+――――――――――――

園子の「次はわっしーなんよ～」という言葉に反応し、即座に逃走を計った須美を、アスカと銀が追いかけて行った合間に、乃木邸のとある部屋へ向かう。
そこは一見、只の和室。
だが、資料を読んでいたおれは知っている。
ここが、乃木家の開祖たる『乃木若葉』が、生前に使用していた部屋である事を。
「――――――――――あった」
部屋の奥、床の間におかれた台座にある小さな棒。
西暦の時代から代々受け継がれてきた、乃木家の家宝。
「これが・・・・・・・・宝具」
そっと、手に取ろうとした、その瞬間――――――
「・・・・・・・・・・・上里？」
「っ⁉――――――――山伏、か・・・・・びっくりした」

後ろから山伏に声をかけられた。
今のは流石に寿命が縮むかと思った。
「なに、これ？」
「乃木家の家宝」
「・・・・・・・・触ってもいいの？」
「────────」
何も言わないおれに対して、ジト目で見つめてくる山伏。
「そ・・・・それより、何か用か？須美が捕まって、着替えさせられたとか？」
「露骨に話を反らす・・・・・・・鷲尾なら、もう着替えさせられた。見に行く？」
「行こう行こう。あと、このことは内緒にして欲しい」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「────────」
ちくせう。なんで沈黙したまま・・・・・・・
「・・・・・・・うどん奢る。それで許して」

「・・・・・・・・・ラーメンがいい。徳島ラーメン」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

「私だけじゃない」

「――――――――――――――――OK。全員分な」

とほほ・・・・・

一正はこの後、めちゃくちゃ須美ちゃんのうなじを嘗めまわした。

神樹館勇者倶楽部、発足

≫所属≫にあったおまけ漫画の続きみたいなお話。

「わたしたちも勇者部やるんよ～!!」
ある日、園子がそんな事を言い出した。
園子が何かしらピッカーンと思い付くのはいつもの事だが・・・・・・勇者部？
「讃州市にある、中学校の部活動だそうよ」
「迷子の猫を探したり、人助けをする部なんだって！」
「へー、良いねえ♪楽しそう！」
「・・・・・・・やってみたい」
「佳南も混ぜやがるです！」

須美と銀が説明し、アスカ、山伏、佳南が部の発足に賛同する。
・・・・・・・・言っても良いのだろうか？
「？どーしたんさ、カズヤ。むつかしい顔して」
「――――――一応、ハッキリさせておかないとダメだろうから言っておく。おれたちだけで部活動の発足は無理だ」
「え～！そんなぁ～～・・・・」
みんな、ショックを隠しきれていない様子だ。――――――アスカ以外。
「ほっそく・・・・？」
「お前、それでも小六かよ・・・・・」
銀ですら発足の意味を理解していると言うのに。
「なんかディスられた気がする」
「えーと、つまり・・・・・・どーいう事だってばよ？」
「部活動発足に必要なのは、『部長、副部長を含む、六名以上の部員と、監督役の教師一名』だと。部員に関しては佳南も入れて七人いるから平気だが・・・・・」
「問題は教師ね・・・・どうしましょう？」

「「おーい、無視ー？」」

さて、どうするべきか・・・・・

と、その時山伏が手を上げた。

「はい、しずしず～」

「安芸先生は・・・・・どう？」

山伏のその一言に、思わず「あ」と声が漏れた。

なるほど、安芸先生だったら快く承諾してくれるかもしれない。それに、勇者のお目付け役でもあるから、万が一の時でも安心だ。

「よ～し、それじゃあ明日は安芸先生のところに行って、勇者部発足なんよ～～!!」

『おー！』

――――――――――翌日――――――――――

「ごめんなさい。やってあげたいのは山々なんだけど・・・・・」

安芸先生は申し訳なさそうに断った。

どうもお目付け役としての仕事の関係上無理らしい。

「うううう～・・・・そっか～・・・・」

園子がしょんぼりと肩を落とす。
万策尽きた。と思ったその時――――
「だったら、私がやってあげよっか？」
高嶋先生が声をかけてくれたのだった。
「良いの？」
「私だったら、先輩ほど忙しくないですし、この子たちが『やりたい！』って言うなら、やらせてあげたいですから！」
「そう・・・・・なら、貴女に任せるわ」
「はい！不肖、高嶋木綿希。部活顧問を引き受けましたー♪」
笑顔でビシッと敬礼する高嶋先生。おれたちも釣られて笑顔になる。
こうして、神樹館勇者部は発足した。
「それで名前は？」
「勇者部が良いで～す」
「勇者部？」
「讃州中学校にある、部活動の名前だそうです」

「へぇー・・・・讃州って言ったら、お姉ちゃんたちが住んでる場所だけど・・・・・・そんな部活、あったっけ？」

「へ？」

「ま、いっか。でも、名前そのまんま使うのはちょっとアレだなぁ・・・・・・」

「なら、少し捻って≫倶楽部≪というのは？」

「おおー！カズヤにしてはいーじゃん♪」

「一正だ。そして何だ、その上からな発言は」

「神樹館・・・・勇者倶楽部・・・・・・うん、いいかも・・・・・・」

と、いうわけで。

ここに、神樹館勇者倶楽部が発足したのだった。

しかし、この時おれたちは気付かなかった。

まさか知名度を上げる為に始めた≫お悩み相談室≪により、連日行列をこさえるレベルの繁盛っぷりをみせることになるなんて・・・・・・・

苦手を、克服する

水着回!!

最近暑いですからね、てこ入れは大事。古事記にもそう書いてある。

勇者倶楽部を発足して数日後

お悩み相談室も軌道に乗り、丁度暇が出来たおれたちは現在、市民プールに来ている。

「ヒャッハァーーーー!!プールだ！水着だ！ラッキースケベだァーーーー！！！！」

「・・・・・・・・・・へんたいが生き生きしてる」

「もう縛り付けて置いた方が良いんじゃないのか？」

おれの一言に頷いた一同は、変態(アスカ)を簀巻きにしてプールサイドに放置。ついでに『罰ゲーム中』という張り紙を顔面に張り付けておいた。

これで安全。
「よし、遊ぼう！」
「んむー!!んむむむーー!!」
・・・・・・・・いつの間に猿轡つけた？え？須美が？
・・・・・・・・・・そうか。

「んで・・・・・なんでプール？」
「んも～、ミノさん忘れたの～？今日はかずくんの泳ぎの特訓なんよ～」
そう、今回プールに来たのは他でも無い。おれが泳げるようになる為の訓練を行う為だ。
「上里、泳げないの・・・？」
「ん・・・・・まあ、な・・・・」
両親が死んだあの日以来、おれは水に対して一種のトラウマを抱いていた。が、それでは駄目だと思い特訓し、今では全身水に浸かっても恐怖しなくなった。
しかし、それとこれとは別問題で、一昨年まで水を避けて生活していたおかげで、

おれは一切泳ぐことが出来ないでいたのだ。
これでは不味い。
そう考えたおれは、恥を偲んでみんなに相談。
結果、プールで特訓と相成ったのだ。
「それで、一正くんはどのくらい泳げるの？」
「少なくとも、水中で目開けられるのは知ってる。あの時、それで合図してたし」
「アクエリアスだっけ～？ミノさんとかずくんがバーテックスを飲んじゃったやつ～」
「？・・・・よく、わからないけど、大変だったね」
「ええ、大変でした。あにさま、『自分は平気だ』って言いやがって検査に行こうともしやがらねーでして・・・・園子ねーさまに手伝ってもらえなかったら、どうなっていたか・・・・」
おっと、佳南がゴネだした。話題を逸らしてとっとと訓練を始めよう。

しばらく訓練を続け、段々泳ぐ事にも馴れてきた。

「後はもう少し速く泳げるようになれれば・・・・」
「カズマは何を目指しているのさ」
「上里の名を預かっている以上、醜態は晒せないだろう」
「ふーん・・・・・そんなもんかね」
「そんなもんさ。理解して欲しくは無いけど」
　できる事なら、銀にはこの重圧を背負って欲しく無い。
　そんな風に思えるようになったのも、きっと、彼女たちに会えたおかげなんだろうな・・・・
「そういう責任感の強い処は一正くんの美点だけど、もう少し肩の力を抜いたら？私が言うのも変かもしれないけど」
「そうだよ～、わっしーの言うとおり。かずくんは真面目さん過ぎるんよ～」
「そういうお前は不真面目過ぎるがな」
「えへへ～♪」
「褒めてねーよ」
　全く・・・・・

「・・・・・上里、楽しそう」
「なんだかんだ言って、あにさまはみんなとワイワイするのが一番好きでやがりますからねえ」
山伏と佳南が温かい眼差しでおれを見ている。そういうのやめろ。
とりあえずおれはプールサイドに上がり、休憩を取ることにした。その間、須美と銀が競泳を始め、園子がどちらも応援したりしていた。
――――――――と、その時だった。

「ヒャッハァァーーーー!!!　隙アリィィィーーーーー!!!!!!」
「わひゃあぁ～～!?!?」

いつの間にか脱出していたアスカが園子の背後から出没。そのまま園子に絡み付く。

「ぐへへ、のっこはええカラダしとりますの～」
「あっ、やめ・・・ひゃうん!?」
「ほれほれ～、ここがええのんかー？んー？」
「あはははははは!!やめっ・・・・・かずくっ・・・・・助けっ・・・・あはははははは！！！」
やべーな、触り片が変態の其だ・・・・・早くなんとかしなければ・・・・・・・だが・・・・・
「あっ・・・・・・ぅん・・・・・ひゃうぅ・・・・・・」
頬を紅潮させて、艶かしい声を上げる園子。暴れる所為か若干水着がズレてきている。それが更に艶やかさに拍車をかける。
ヤバい。
色々な意味でヤバい。
「・・・・・・・・・・・・・・・・てい」
「あばぁ!?」
そうこうしている内に、山伏がアスカの頭を叩き、園子から引き剥がした。

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・・た・・・・・助かったんよ・・・・・・」
浮き輪の上で息を荒げる園子。
――――――――――――――――――――うむ。
「うむ。じゃ、ねーです。あにさまのスケベ」
「――――――――――――――――――――不可抗力です」
「アスカねーさまと同様、簀巻きの刑に処す事にしやがりますが・・・・・・構いませんね？」
「――――――――――――――――――――解せねえ」
この後、簀巻きにされたおれと、亀甲縛りにされたアスカは、顔面に『スケベ罪』と書かれた張り紙を貼られて、プールサイドに放置されるのであった。

しずくと、シズク

しずシズ良いよね・・・・
二周年のドレスもみんなかわいいし。
という訳でシズクとの出会い回
そして、多分最期の――――――

倶楽部の活動も仲間内での集まりも無い普通の休日。
特に何もする事のないおれは、
「あにさま！掃除の邪魔ですんで、とっととどっか散歩にでも行きやがれです!!」
と、佳南に追い出され、現在宛もなく散策中。
ふと、気紛れに覗いた路地裏に、見覚えのある白っぽい髪を見た。
山伏だ。こんな所でいったい何を？
「いでででででで!?」

声をかけようとした所で、様子が変な事に気付く。
暗くて良く見えないが、彼女の前には三人の男がいた。
その内の一人は彼女に腕を捻られていた。
「――――――テメェ、良い度胸してんじゃねぇか・・・」
――――――彼女、あんな口調だったっけ？
「ガッ・・・くそ!?ガキだからって調子に乗りやがって!!」
危ない、山伏が危険だ！
咄嗟におれは端末を耳に当て、大声で叫ぶ。
「もしもし警察ですか！！！　今、路地裏で女の子が襲われていて！！！」
おれの声に反応して、男共はすごすごと退散。
どうにか危機は免れた。
「山伏、大丈夫か？」
「あ？――――よぉ、上里。助かったぜ」
「――――――山伏、か？」
普段は髪に隠れて見えない右目が露になっており、瞳の色も、若干変だ。こんな

に明るめの色だったか？

「――――――悪ィ、しずくに代わるわ」

「・・・・・・・」

無言で山伏（？）の腕を掴む。彼女達には無意味だろうが、それでもなんとなく、やってしまった。

「――――――なんだよ」

「踏み留まってくれてありがとう。正直、さっきの発言は自分でも最低だと思った。伏して謝罪する。本当にすまない」

「いや、そこまで言う程の事じゃねーよ（汗）」

「言う程の事だ。少なくとも、おれにとっては」

「――――――ホンっトーーーに！お前って奴はさぁ・・・・」

目の前で呆れてる山伏は、恐らく、別人格の山伏だ。

以前、物の本で読んだ事がある。

幼少期の出来事が切欠となり、心に亀裂が生じると、そこから別の人格を形成する事がある、と・・・

とりあえずその場から離れ、近くの公園のベンチに二人で座る。
「――――山伏は、解離性同一性障害だったんだな」
「――――――――」
「あー・・・・・・・重ね重ね、すまん。おれは、こういう性分なんだ」
明け透けに物を言うおれを、山伏が不快に感じたのだと思い、もう一度謝罪。
「――――――――いや、»かいりせーなんちゃら»ってのが、良く分かんなかっただけだって。だから謝んなよ・・・・・・・えーと、要するに、オレとしずくの事を言ってるん・・・だよな？」
が、どうやら違うらしい。
「そうだよ」
「そっか。なんかカッケーな、その呼び方」
笑って山伏の別人格はそう言ってくれた。
嫌われた訳ではない事にほっとして、同時に、そんな自分に嫌悪感を抱く。
「――――――――」
「上里。別にオレもしずくも、こんな程度でオメェの事は嫌いになんかならねーよ。

安心しろ」

「――――――――――――おれ、顔に出やすいか？」

「ああ。文字通り、顔に書いてあったぜ？」

ケラケラと笑って、山伏は言う。

「・・・・・・前にお前、自分の事話してくれたろ」

「・・・・・・・・・そうする必要があっただけだよ」

「だとしても、だ。しずくには、そんなお前が格好良く見えたらしいぜ？」

「――――――なんか、照れる」

「まあ、だからさ・・・・・なんつーか・・・・・・アレだ。これからも、しずくと仲良くしてやって欲しい」

「文脈が滅茶苦茶だが、無論だ。ついでに一つ訂正を申し込む」

「あ？」

「これからは山伏とお前、二人と仲良くする」

「――――――――――ホント、オメェって奴は・・・・・」

と、その時。

「ん？倶楽部のグループメッセージに連絡・・・・・」
＞乃木園子です
＞乃木園子です
＞乃木園子です
「――――――なんだこりゃ？」
――――――あいつ。
「・・・・・・・山伏――――じゃ駄目だな。シズクで良いか。行くぞシズク」
ＧＰＳを起動させ、ミカに園子の現在地を調べさせつつ、山伏の別人格改め、シズクの手を取りその場所に向かう。
「は？おい、なんだよ!?何があったってんだよ!?」
「園子が迷子」
「マジか」
「以前須美に『迷子になったら名前を三回連呼して』って言われててなぁ・・・・・」
「・・・・・なるほどな」
「ちなみにこれで五回目」

「多いな!?どんだけ迷子になってんだよ!?」

―――――――――――――――――――――――――――

ミカのサポートもあって、園子はあっさり発見できた。

「えへへ～♪お騒がせしました～」

「・・・・・・今後、園子には首輪でも着けておいた方が良いかもしれん」

「そうね」

「だな」

「えぇ～!?」

おれたちのやり取りを、シズクとアスカが少し離れた場所から眺めている。

「いやはや、のっこが無事でなによりだよー。ねー、シズ」

「――――だな」

安心した様子のシズクが目を閉じる。なんだ？山伏と交代するつもりか？そうはいかん。

「おい、シズク」

「・・・・・・・・・・・・んだよ」

「園子たちに自己紹介くらいしたらどうだ？」
「――――――いや、必要ね「シズ」・・・・・・・・わーったよ」
アスカに遮られ、渋々従うシズク。アスカには勝てないのかもしれない。
三人にシズクが自己紹介している間に、ようやく佳南もやってきて、結局、倶楽部の面々が全員揃ってしまった。
「――――――やれやれ、今日も騒がしそうだ」
そう愚痴るおれだったが、その心は、これから起こるであろうハプニングに対して、自分でも理解できる程にワクワクしていたのだった。

次回、≫7月10日≪

7月10日 -序-

佳南が風邪をひいた。

両親が死んでからは、人一倍健康に気を使うようになった佳南が、だ。

「――――――佳南」

「あにさま。佳南を気遣って遠足を休むだなどと言った日には、その舌の根、切り落としやがりますよ？」

「37度5分の熱が出ていて、よくもまあそんな口が効ける――――――分かった、行ってくる。ミカ、佳南の面倒を見ていてくれる？」

『うん』

返事をしたのは、足元のドラム缶。

これは、おれがとある映画を見て思い付いたオートボットで、普段は端末内にいるか、人型になっておれの近くにいるミカヅキが、おれから離れた場所でも自由に動けるようにと製作した物だ。

本来、悪魔は契約を行った後ならば、契約者から離れて行動可能らしいが、ミカ

の場合は諸事情につき、おれから１０ｍ圏内から遠くへは行く事が出来ない。
しかし、このオートボットがあれば、何処へでも行き来できるようになるのだ。
今回は試運転も兼ねて、佳南の面倒を見て貰う事にしよう。

「――――なんて事があった」
「かなみン、元気になると良いねぇ」
「・・・ちょっと、心配」
バス車内にて、アスカと山伏と会話する。
別クラスである園子たちとはバスも別であるが、公園では同じ班で行動できるように、先生方が取り計らってくれている。
「ま！何はともあれ、かなみンの分も目一杯楽しもうよ！」
「・・・・・そうだな」
「ん！」
そうこう話している内に、バスは目的地に到着した。

「わわわっ!?揺れる揺れる〜〜!?」
合流したおれたちは今、アスレチックコースを攻略中。
まあ、園子も楽しんでいるようでなによりだ。アイツらしい独特な楽しみ方をしているが。
「――――――上里、どうしたの？」
「何が？」
「さっきから、なんというか・・・・・んと・・・・」
「あー、確かに。カズヤ「一正だ」・・・・こほん。さっきからなんか、行動が慎重過ぎってゆーか、なんというか・・・もしかしてだけど・・・・目、見えてないの？これ見える？」
そう言ってアスカは、右手の人差し指と親指で輪を作り、そこに左手人差し指を抜き差し抜き差し――――
「止めい。見えてるから」
「？」
アスカの行動の意味がわからないようで、山伏はキョトンとしている。うん、お

前はそのままでいてくれ・・・
「・・・・・・ま、良いや」
とりあえずその場は納得してくれたようで、両手の動きを止めてくれた。
――――その内、話さなくちゃ・・・かな。

アスレチックコースもいよいよラスト。
アスカと山伏に怪しまれつつも、騙し騙しここまで来れた。
「ふふん♪この程度、銀さんならヨユーヨユー♪」
「ちょっと銀！危ないわよ！」
銀が片手だけでロープを登っていく。あれは・・・・不味いな。と思った傍から

「痛っ――――あっ!?」
「銀っ!!」
「わわっ!?ミノさん!!」
「っ！！！」

手を滑らせて（？）銀が落ちる。ダッシュで銀の落下地点を予測しつつ、そこに飛び込む。
「ぐえ」
「あた!?・・・・・・・うわっ！カズマ!?」
「二人とも大丈夫!?」
「かずくんナイス飛び込み～」
「――――――本当は上手い事キャッチしたかったんだがな」
銀がおれの上から退いた後、ゆっくりと立ち上がる。うん、銀にはどこも怪我は無いな。
「・・・・・・ごめん、カズマ。アタシのせいで――――」
「ん？何がだ？」
「え？」
「おれなら無事だ。そしてお前も無事だ。なら、今回の事を反省すれば、それだけで良い」
「――――――カズマ」

「駄目よ」
須美の奴がピシャリと言い放つ。あーあ、相当ご立腹なようで・・・・
「もう！危ないって言ったじゃない!!はしゃぐのは結構だけど、もうちょっと慎重に行動して!!」
「うぅ・・・・・ごめんなさい・・・・」
「まあまあ、ミノさんも反省してるみたいだし・・・・ね？」
「むー・・・・」
園子が須美を宥め、銀は俯く。
「うん・・・・反省してるよ・・・・これからは――――――口数を減らします♪」
テヘペロ♪なんて言いそうな顔で銀は宣言した。
「――――――反省してない」
「・・・・・・・・・・・・」
「？アスカ・・・・？」
「ふぇ？」

山伏の声に、何か思案していたアスカが山伏の方を見る。
「――――――大丈夫？」
「え・・・あ・・・あー、うん。ボクはへーき！それよりずっく。みんなと一緒にアレ、行って来なよ」
「アレ？・・・・・どれ？」
「やだなぁ～。アレって言ったら、アレじゃん」
そう言って、アスカはゴールの向こうにあるものを指差した。

――――――――――――――――――――――――

アスレチックコース全制覇の鐘が鳴り響く中、おれはアスカと共に先に展望台に来ていた。
「――――――――――んで、何について聞きたいんだ？」
「ありゃ、バレバレ？」
「露骨に山伏追い払っておいてよく言う。アイツは、このメンバーで唯一、事情を知らない奴だからな・・・・」
「えー？ボクはー？」

「枢木家の人間が、知らないとは言わせねえよ」
「――――――そっちも、バレバレなのね」
薄く笑うとアスカは、自身の髪型（シニヨン）をほどき、左側頭部でサイドアップを作る。
髪色こそ異なれど、その容姿はまさしく――――
「なら、ここから先は枢木アスカとしてではなく、≫私≪として喋らせてもらうわね」
「――――――お前・・・いや、貴方は」
名前を言おうとしたおれだったが、その前に、≫彼女≪が人差し指を唇に当て、『静かに』とジェスチャーを送ってきた。
「迂闊に名前を呼んでは駄目。ここにいる私は、あくまで枢木アスカなんだから」
「――――――失礼しました」
よろしい、と静かに微笑む≫彼女≪は、やはり、普段のアスカとは似ても似つかない。
「私の事は別にいいの。本題はあなたの事よ」
「――――――何が、聞きたいので？」
「単刀直入に聞くわ。あなた・・・・・・何処を支払ったの？」

その問い方は、事情をよく知る者でないと理解できない問い方。
それに対し、おれは――――
「・・・・・・・・これを」
「眼鏡？」
掛けていた眼鏡を外して、≫彼女≪に手渡す。
≫彼女≪はそれを掛け、そして把握した。
「・・・・この眼鏡。物体との距離が表示されるようになってるのね」
「はい。造るのには結構、苦心しました」
「・・・・・・でしょうね。なんたって、距離感覚が判らないのだものね」
そう。
おれは物体との距離感覚が把握出来ない。これこそが、おれがミカと契約した際に支払われた対価。今のおれは、本来ならば歩く事すら困難な状態なのだ。
「それを科学力で補ってみせるなんて・・・・・・馬鹿と天才は紙一重とは、よく言ったものね」
「称賛の言葉と受け取らせてもらいます。で？」

「え？」
「こんな事を聞いて、どうするつもりです？」
「――――――別に」
抑揚無く、呟くようにそう返した≫彼女≪の横顔は、どこか哀しげだった。

そして、運命の時が来る――――――

一正の眼鏡に表示される情報は、端末内のミカヅキが調整している。
その為、状況の変化に即座に対応できる。

7月10日 -破-

楽しかった遠足も終わり、おれたちは帰路に着く。
アスカと山伏とは自宅が別方向なので、ここには園子たち三人とおれしか居ない。
夕焼けに照らされる帰り道、遠足の楽しかった思い出を語り合うおれたち。

しかし、そんな平穏は、音を立てずに崩れ去る。

「・・・・？」
最初に気付いたのは銀だった。
少し遅れておれたちも気付く。空を飛ぶ鳥が、風に揺れる木々が、まるで一時停止をかけられた映像の如く停止していた。
「――――お役目の時間!?」

「あーあ、どうせならバーテックスももうちょっと空気を読んで欲しかったなぁ～」
「遠足中に来なかっただけ恩情だろう」
「あはは、カズマの言う通りかも」
端末を取り出して変身する。
その内に樹海化が発生し、世界は変容する。
久方ぶりに動かす覆式波動機関の調子を確かめる。うん、問題無し。メンテナンスは欠かさずやっていて良かった。
「よぉ～し！銀さん暴れちゃうぞー！」
「もう銀！調子に乗らないの!!」
「そうだ。馴れた頃こそ油断大敵だ」
「おっと、まさかの挟み撃ちだ」
「園子もいるんだぜ～～」
普段の調子で大橋へと向かう。
この四人なら、どんな奴が相手でも勝てる。
そんな自信が、今のおれにはあった。

だからこそ、こんな事になってしまったのだろうか……

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・畜生・・・・！ちくしょう・・・・・!!」
全身傷だらけで息も絶え絶えの園子を抱え、おれは大橋傍の死角へと走る。
須美は銀に任せているが、あっちもボロボロのはず――
援護したいが、目覚めない園子の方が心配だ。
「しっかりしてくれ・・・・・おれがぜったい助けるから・・・・・!!」
なんで、こんな事に・・・・
何度目になるかわからない、答えの返って来ない問いを投げ掛けながら、冷静になるためにも先の戦闘時の事を思い返す。

――――

今回、バーテックスは二体同時に現れた。蠍座（スコーピオン）と蟹座（キャンサー）の二体だ。
三人は驚いていたが、この程度おれには十分に予測できていた。
奴らは知恵を持っている。そして、おれたちとの闘いを経て学習しているのだ。
今まで一体ずつで追い返されてきたのだから、二体同時に出撃させればどちらかが神樹にたどり着けるだろう・・・・なんて策を思い付くのも当然だ。
だから冷静に、二手に別れてバーテックスに対処していた。
蠍の針に毒が仕込まれている事も、蟹の装甲が硬い事も、文献に書かれていて知っていたおれは、それにも対応できるように作戦を練り、バーテックスを着実に追い詰めていっていた。

だが、それを嘲笑うかの如く、空から絶望が降り注いだ。

園子が傘を広げ、その中に全員で入りやり過ごす。降ってきたのは針の雨だった。

そして、おれたちは無防備にも針の雨の中で立ち止まっていた。
その瞬間を待っていたと言わんばかりに、蠍が尾を振り払い攻撃してきたのだった。
再生力に物を言わせた捨て身の一撃は、咄嗟に作り出した壁を破壊して、おれたちを凪ぎ払った。
おれと銀は、それぞれの武器でガードした為に致命傷は避けられた。
が、問題は傘を広げていた園子と、後衛故に盾を持たない須美だった。
尾の一振りに吹き飛ばされる二人を、おれは只、呆然と見ているしか出来ずにいた。
「――――――――そ、の」
「カズマぁ！！！！！！」
「ッ!?」
銀の叫び声で正気に戻ったおれは、背後から迫り来る矢弾を間一髪で弾き、それにより、奇襲を掛けてきた相手が射手座（サジタリウス）である事を理解した。
「銀っ!!プランZ！！！　お前は須美を！おれは園子を担いでいく！！！」（全力で逃げろ）

「りょーかい!!」
それだけ叫ぶと、樹海の木を少しだけ拝借し、武器用のエネルギーパックに変換すると、それをバーテックスへ向かって投げつけた。
「ぉらあっ！！！」
それに合わせるように、銀が自身の武器を投擲。
見事エネルギーパックに斧が命中すると、目映く辺りを照らし出した。只の光ではない。圧縮された魔力が起こした爆発の光だ。当然ダメージもある。とは言っても、表面を少し溶かすくらいしか出来ないだろうが・・・
「今!! 散開！！！」
だが、撤退する隙は作る事ができた。
それだけで十分に役目は果たされたと言えるだろう。
「園子・・・」
地面に倒れ伏す園子に近寄り声をかける。が、返事が無い。呼吸は小さいが脈はある。大丈夫、ちゃんと生きてる。
「・・・・・・畜生」

なんで、こんな事に・・・・・

――――――――――――――――――

「――――ふぅ・・・・で、どうする？」

「――――――――――――――ぇ」

安全地帯にどうにか逃げ込めたおれたちは、須美と園子に応急措置を施した。しばらく安静にすれば、歩くくらいはできるだろう。しかし、それだけでは駄目だ。

「アタシとカズマであの三バカ、どうにかしなくちゃだろ？なんか一発逆転の作戦ないの？」

「――――――――――――――」

しばらく思案して、「ある」と頷く。

「あるの!?さっすがー♪で？アタシはどうすれば良い？」

「・・・・・・・ああ。うん、そうだな・・・銀は――――――」

ゆっくりと、右手の電極を銀の額に当て――――

「しばらく、寝てろ」

バチンッ！！！

覆式波動を撃ち込まれた銀は、『信じられない』と言わんばかりに目を見開いて、仰向けに倒れた。

「か・・・・ず・・・・・・・・・・・・・」

「ごめん。今回ばかりはどう考えても犠牲が出てしまう。なら、その人数は少ない方が良いだろう？」

「・・・・・・・・・や・・・・・・・・・・・・・め」

「平気だ。死ぬつもりは無いよ。只、おれは――――」

「お前たちの未来を、守りに行くだけだ」

「じゃ・・・・・・行ってきます」
銀から返事は無かった。
それで良い。三人が起きる頃には、全部終わっているはずだ。
後ろを振り向かず、バーテックスの下へ向かう。
本当は・・・・・少し怖い。
アスカともっとバカ騒ぎしたかった。
山伏にもっと話をしたかった。
シズクにもっと話を聞きたかった。
銀ともっと遊びたかった。
須美ともっと歴史議論をしたかった。
園子と、ずっと一緒にいたかった。
「でも・・・・・・！」
ここでおれが頑張らなければ、あいつらが生きる未来が消える。

それだけは・・・・・・絶対に阻止しなければならない。

「――――――――」

バーテックスの前に立ち、端末を取り出す。

かなり進行されていた。だがもう、これ以上は進ませない!!

「悪いけど、此処から先は一方通行なんだ。引き返してくれ」

バーテックスは応えず、臨戦体制を取る。

「そちらがその気なら、仕方ない――――――」

端末を操作し、もしもの時の『切り札』を呼び出す。

「擬似精霊システム――――起動!!」

「呑み干せ・・・・・『フェンリル』!!」

7月10日 -糾-

時間、ちょっとだけ跳びます。

私たちが起きた頃には、樹海はとても静かになっていた。

「――――――――」

わっしーと一緒にミノさんが飛んでった方向に向かってゆっくり歩く。

ミノさんには先に行ってもらった。その方がきっと、かずくんの力になれるから。

「――――――――」

途中、地面に血の痕をたくさん見た。バーテックスから血が出てくるのを見たことがないから、これは・・・・きっと・・・・・。

「――――――――あ、銀！」

そうしている内に、遠くにしゃがみ込むミノさんをわっしーが見つけた。

「銀・・・・・一正くんは？」

「――――――――――――――――――――――――――――」

「・・・・・・・ミノさん」

ゆっくりと立ち上がったミノさんは、私たちにあるものを見せてきた。

最初、それがなんなのか、良くわからなかった。

・・・・・・・・・

かぴかぴに干からびた何か。

でも、ミノさんに言われて、なんなのか検討が付いた。付いて、しまった。

「――――これが、血溜まりの中に・・・・落ちてた」

「それ・・・・・って・・・・・・」

「――――――」

ミノさんから、それを受けとる。

カサカサに渇いた表面をなぞりながら、私は、それを見つめる。

「まさか、一正くんは・・・もう・・・・・」
「須美っ!!」
「大丈夫、かずくんなら平気だよ。きっと」
ミノさんから受け取った、かずくんの右腕を抱き締めて、二人に話す。
「右腕しか見つかってないなら、まだかずくんは生きてるかもしれない・・・・・手分けして探そう!!」
「そのっち・・・・」
「園子・・・・・」
このことは、まだ二人には話したことがなかったけど、かずくんの身体は、どういうわけか≫心臓が止まらない限りは元に戻れる≪ようになっている。回復力が高いとか、そういう次元の話じゃない。
喩え右腕が切り落とされてしまっても、傷口がすぐに塞がってしまうし、切り落とされた右腕をくっ付ければ、痕すら残さず元通りに戻ってしまう。
かずくん曰く、「ヒトデ並みの回復力」と言っていたけど、実験と称して、私の目の前で自分の右腕を切り落としたりするのは止めて欲しいんよ、まったく。

あの時はかずくんのご両親が死んじゃって少し経った頃だったし、そうじゃなくたって、あんなことされたら誰だってびっくりする。めちゃくちゃ泣いたし、めちゃくちゃ怒った。

もしかしたら、あの時の事を思い出して、かずくんは出てき辛くなってるのかな？だとしたら、それはもう自業自得なので大人しく怒られて欲しい。

「・・・・カズマの事だ。たぶん、どっかの岩に挟まれて動けなくなってんじゃないか？あいつ、結構ドジなとこあるし」

「銀・・・・・そうね・・・・そうかも、しれないわね」

「あー、そっか～。そっちの可能性もあるね～。ミノさんすごいや～」

なんだか、ミノさんに負けた気がしてちょっとだけジェラシー湧いちゃうんよ～～。

だけど、いくら探しても、樹海化が終わっても、かずくんは何処にも見つからなかった。

さようならを、いうとき

最初、安芸先生から告げられた一言を、私は理解出来なかった。
「・・・・先生。今、なんと？」
「――――――そうね。到底受け入れられないわよね。特に、貴女たちは」
悲しげに目を伏せた安芸先生だったが、直ぐにいつも通りの凛々しい眼差しで真っ直ぐに私たちを見据えて伝える。

「明日、上里一正くんの葬儀を執り行います」

「待ってくれ、先生・・・・カズマは生きてる。ぜったい生きてるんだって!!」
「これは決定事項です。覆すことは・・・・・もう、出来ません」
「そんな・・・・・ご両親は何と？――――――あ」

そこで私は思い出した。一正くんには、もう・・・ご両親は――――

「現在、彼の親権を持っているご親戚の夫婦からは、既に了承を得ております。ただ、お二人は出席しない、と申してましたが・・・・」

「――――ふざけんなよ」

銀が両手を固く握り締めて、震えている。

「ふざけんなよ!! なんだそれは!?それでも親かよ!!」

「銀、落ち着いて・・・・」

「これが落ち着いていられるか!!――――なあ、園子。お前も何とか言ったらどうなんだ!?」

そのっちは、何も言わない。

というよりも、あの日からずっと、そのっちは上の空で

何時にも増してぼーっとしている。

(違う。そのっちはたぶん、眠れていないんだ)

知らない人が見ても分かる程にできた目の下の隈。

そのっちにとって、衝撃が大きすぎた・・・という事の現れだ。

「園子!!」

返事を返さないそのっちに業を煮やした銀が、そのっちに掴みかかった。それを羽交い締めにして止める。

「銀止めて！そのっちだって辛いのよ!?それくらい、見れば分かるでしょう？」

「――――――――――ごめん」

私の言葉に落ち着いた銀が、一言謝る。それでも、そのっちは動かない。

と、その時だった。

突如として静寂に包まれる世界。

時計が秒針を刻む音すらも聞こえてこない。これは・・・・!?

「まさか・・・・こんな時に!?」

「――――――――――――――――ぅう」

「え？園子？」

気付けば、そのっちが椅子から立ち上がっていた。その手に端末を握りしめて。

「ぐ・・・・・うぅ・・・・・・」

「そのっち・・・・？」

端末がミシミシと音を立てる程、強く握りしめながら、そのっちは呻き声を上げている。

そして、彼女は爆発した。

「う゛あ゛！！！！！！！！！！！！！」

「ま・・・・待ってそのっち!!」

「園子！無闇に飛び出すなよ!!なあ、おいってば!!」

桃色のバーテックスに突撃していくそのっちを、私たちは止める事が出来ない。

バーテックスは複数の爆弾を投げつけて来ていると言うのにも関わらず、そのっちはそれに構わず、寧ろ爆弾に槍を突き刺し爆発させる。

当然、爆弾は爆発する。その瞬間にそのっちは槍の盾を開いて、爆風を追い風にして加速する。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そのままバーテックスの頭部（？）に槍を突き刺す。何度も、何度も、何度も何度も。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そんな彼女の姿は、以前に一正くんが話していた『狂戦士』というものを連想してしまう。

「そのっち・・・・・・」

「須美、アタシらも行くぞ。このままじゃ園子が・・・」

「あ・・・・そ、そうね！」

銀に言われるまで私は、自分が呆けている事に気付かなかった。

いけない・・・・今はお役目の最中なんだ・・・！

――――――

お役目はとても速く終了した。

全て、そのっちが鬼神の如き活躍をしたから。でも――

「そのっち！なんであんな危険な事をしたの!?」

「そうだぞ園子！カズマだって言ってたろ？『前衛はアタシとカズマ、後衛に須美。園子は中衛で援護』って!!」

私たちはそのっちを叱った。当然だ、だって今のそのっちは三人の中で一番ボロ

ボロで、とてもじゃないけど、見ていられなかった。
「・・・・・・・・・・ねえ、わっしー」
「なに？」
「わたし、頑張ったよね・・・・かずくん、喜んでくれるかな～？」
その一言に、私はそのっちの頬をひっぱたいた。
「ちょ・・・須美!?」
「そのっちあなた・・・・!!!　こんなことをして、一正くんが喜ぶ訳ないでしょう!!!!!!」
「・・・・・・あ～、やっぱり～？」

「じゃあ、どうしてかずくんは、わたしを叱りに来てくれないのかな・・・・・・？」

そのっち・・・・・・

「ねえ、なんでかな・・・・・・？わたしの事、嫌いになっちゃったのかな・・・・・・？」

「――――――――」

私も銀も、何も答えられなかった。

「なんで、かずくん・・・・・・戻って来ないのかな・・・・・・？会いたいよ・・・・・・・・かずくんに、会い・・・・・・た・・・・・・うぅ――――――」

「そのっち!!」

「園子!!」

もう、我慢なんて、できなかった。

私たちは、互いに身を寄せあって、抱きしめあって、わんわん泣いた。

悲しくて、辛くて、心が痛くて、先生が迎えに来るまで、私たちは泣いていた。

翌日、雨が降る中、一正くんの葬儀が執り行われた。

ＥＸＴＲＡ．１　しずくと、アスカ

しずくちゃんおたおめ記念！
しずくちゃんとアスカの出会いの話。
次のＥＸＴＲＡは三月を予定

――――――それは、ある日の話。
「そういえばさ」
「・・・・・・・？」
午後の休み時間。
アスカが外に他の友達と遊びに行っており、しずくと一正が教室に残っている時のことだった。
「お前とアスカって、何時からあんな仲なんだ？」
「・・・・・・・・・気になる？」

「まあ・・・・・・少し。今暇だし」
「・・・・・・・・・・・・」
「――――話辛い事なら、無理に聞かないが」
「別に、いい・・・・・・・ちょっと、思い出していただけ」
そう言って、ぽつぽつ話始めるのだった。

――――――――――――――――――――――

アスカとしずくが出会ったのは、二人が六歳の頃。
当時のしずくは両親から虐待されており、いつも身体中にアザをつくっていた。
そんなある日、彼女はアスカに出会った。
「どーしたの君？だいじょーぶ？」
「――――――――」
両親の事もあり、アスカから差し出されたその手を、しずくは握ることが出来なかった。
だが、アスカはそれに構わず、しずくを引っ張って自宅へと連れ帰り、傷だらけのしずくを治療してあげたのだ。

それが、二人にとっての馴れ初め。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・最初、私にはわからなかった。なんで、私を助けようとしてくれるのか・・・・・でも、アスカと一緒にいるうちに、なんとなく、わかってきた・・・・・アスカは、底抜けに優しい子。だから、私みたいな子を、放って置けないって・・・・・・」

「――――――そうか」

「私は、それが嬉しかった。お父さんも、お母さんも、私をいじめる・・・・・・だから、私の周りには、敵しか居ないって、思い始めていたから・・・・・・」

「アスカが、お前を助けたんだな。精神的にも」

しずくはこくりと頷いて、笑った。

やがて休み時間終了のチャイムが鳴り、アスカが友達と共に教室へと帰ってきた。

「いやー！たぁのしかったーー♪」

「おかえり、アスカ」

「ん？うん、ただいま～・・・・・・・どったの？」

「・・・・・・なんでもない」

アスカに笑いかけながら、しずくは、自分が枢木家にお世話になるに至った時の事を思い出していた。

それは、二人が出会って二年が経った頃のこと。

しずくの両親が無理心中を謀ったのだ。しずくの誕生日だった。

幸いにも、しずくは重症を負うのみで、命に別状はなかったが、しずくは天涯孤独の身となってしまった。

その時もアスカは、しずくへ救いの手を差し伸べた。

渋る両親を説得し、ある条件を呑むことで、しずくを養子として迎え入れたのだ。

その条件というのが、『大橋市への引っ越し』だった。

かねてより検討はしていた引っ越しだったが、アスカが「どうしても！」と駄々をこねる為に先延ばしとなっていた案件。その「どうしても」の理由の大半がしずくにあったアスカとしては、しずくと共に居られるのであれば「ちょっと友達と会いにくくなるだけ・・・」と我慢すれば良いだけのことだったので、二つ返事で承諾。

そうして、アスカとしずくは、大橋市へとやって来たのだった。

――――――――――――――

「・・・・ねえ、アスカ」
「んー？なぁに？」
帰り道。隣を歩くアスカにしずくは訊ねる。
「引っ越した理由って・・・・・・結局、なんだったの？」
「え？引っ越しの理由⁇」
実はしずく、引っ越しの理由をこれまで知らないでいたのだった。
「うーん・・・・・つまんない理由だよ？それでも、聞きたい？」
「・・・・聞きたい。教えて？」
ちょっと渋い顔をするアスカだったが、簡単に言うと――――と前置いて、
「前のお家さ・・・・・・・狭かったんだよ」
「――――え？」
「いや、だからさ。前の家が狭いから、だから、引っ越ししたの」
「――――それだけ？」

「それだけ」

「――――――――――――――――――――」

これにはしずくも微妙な顔。

「――――お金、それなりにあるって、言ってなかった？」

「うん。ボクらが成人しても、何不自由なく暮らしていける程度にはあるらしーよ」

「――――――――――それなのに？」

「それなのに」

「――――――――――――――――――お金、使い処、間違えてる？」

「うん。ボクもそー思う」

微妙な空気が流れる。

「あー！もー！そんなんはどーでも良ーの！それよりずっく！今日は一緒にお風呂入ろ♪」

「やだ」

「即答!?なんでよー！いーじゃん一緒に入ろーよ～～」

「アスカ、私の胸触ってくるから」

「ぐへへへ、ずっくのちっぱいを育ててあげやう～」
「変態、嫌い」
「変態じゃないもん！たとえ変態だとしても、変態と言う名の淑女だもん!!」（ア゛ヤ゛）
「・・・・・・・・ドヤ顔すること？」
二人は今日も、仲睦まじく、一日を過ごすのであった……

補足説明

この時代の枢木家は大赦のパトロン。投資したお金は回り廻って枢木家に戻ってくるから、お互いにＷｉｎＷｉｎの関係を保てている。

徳島の枢木家は三人で暮らすには、ちょっと手狭な大きさ。そのため、しずくが増える事を渋った。「狭い家じゃ、伸び伸び子供を育てられない」が両親の持論だとかなんとか。

不屈の喧嘩番長の章

我が名はＫ　-全ての〝夜〟道を〝輝〟らす者-

さて、ここらで最期の主人公の物語を綴るとしますか！
てなわけで、どうぞ、お納めください。

神世紀２９５年、春――

その日、初めて、俺は〝俺〟を手に入れた。

神世紀の時代となっても、落ちこぼれというものはやはり、存在する。
そういった若者は神樹ではなく暴力を信じ、自分よりも弱い者を食い物にして

日々を生きていた。

讃州市内のとある公園――

高校生と思われる少年数人が、中学男子を取り囲んでいた。

「あ・・・あの・・・今月は・・・ほんとに・・・これしかなく・・・て・・・」

「んなこと聞いてねーよ。足りなきゃ誰かから盗(ギ)れ」

「そ・・・そんな恐ろしいこと　！」

「出来なきゃ痛い目、見るのてめえだぞ　？」

「ひぃ　!!」

俗に言うタカリ、というやつか。

男子は怯え、すくみ、身動きが取れずにいる。その有り様を面白がる不良たち。

男子が心の中で助けを求めた、その時――

ぴ(ド)～♪ぴ(レ)♪ぴ(ミ)♪ぴ(シ)～→♪ぴ(ラ)～←♪ぴ(ド)♪ぴ(レ)♪ぴ(ミ)♪ぴ(ソ)♪ぴ(ファ)♪ぴ(ド)♪ぴ(レ)♪ぴ(ド)～♪

「っ　!?」
公園にリコーダーの音色が鳴り響く。
不良たちはざわめき、男子はなにが起きたか理解が追い付いていない。
「だれだ　!!姿を見せろ!!」
恰幅のいい不良が叫ぶ。この集団のリーダーなのかも知れない。
「いた　！あそこだ!!」
不良の一人が指差した先には、

公衆トイレの屋根の上で、ソプラノリコーダーを真横に構えて演奏する、中学男子がいた。

ぴ～♪ぴ♪ぴ♪ぷぴー！ぴ～♪ぷすぷぴーぴ♪ぴ♪ぴ♪ぴ♪ぷぴー！

「・・・・・・・あいつ、音外してますぜ」
「・・・・・・・なにがしたいんだ ？」
困惑する不良たち。リコーダーを吹く少年に気を取られていた彼らは気付かなかった。
隙を見て、中学男子が逃げ出したことに。
「あぁ !?アイツ逃げやがった !!」
「なにぃ !?」
気付いた時にはもう遅い。男子はどこかに去ってしまっていた。
そうなると当然、不良たちの矛先は笛吹の少年に向かう。
「やいやい ！てめえのせいでアイツ逃がしちまったじゃねぇか！どうオトシマエ付けてくれんだよぉ !!」
少年は答えず、ぷすぷぴリコーダーを吹くのみ。
「オイてめえ降りてこい !!」
「カッコつけてんじゃねぇぞ !!」

「そもそも縦笛を横向きに吹いてんじゃねぇ　!!」
不良たちに散々文句を言われ、少年も流石に演奏を止めた。
「やれやれ、人の趣味にケチを付けるなんて、悪い子だ」
「気取ってんじゃねぇよ　!!」
「降りてこい　!!ブン殴ってやる!!」
「はぁ・・・血気盛んなバッドボーイズだ。　OK、ちょっと待ちな。今そっちに行ってやるよ」
そう言って屋根から飛び降りた。
ズドン、と音を立てて着地。
「――――――」
「――――――」
「――――――」
「――――――ちょっと、まって、足が、しびれて」
「――――――」
不良たちはげんなりしていた。

だった。

――――――――――――――――――――――――――

「さぁて、悪い子はお仕置きだ」
しばらくしゃがみこんでいた少年が立ち上がったのは、三十分丸々経ってから
だった。
「調子こきやがって‼」
「ブッ殺してやる‼」
「おお、怖い怖い」
不良五人に対して、少年は一人。
戦力的には圧倒的に少年の方が不利。
だが――蓋を開けてみれば、終始、少年の方が有利であった。
拳打を最小限の動きで避け、お返しにエルボーを決める。
回し蹴りをかわし、足払いをかけて転ばす。
振り下ろされた鉄パイプを受け止め、そのまま投げ飛ばす。
二人同時攻撃にも怯まず、受け止め、赤子の手を捻るが如く、あっさりと倒して
しまった。

「相手の戦闘力を過小評価しないことだよ。バッドボーイズ」
伸びている不良たちにそう告げて、少年は立ち去っていった。
公園を出てしばらくしたら、少年の後ろから何かが蒙スピードで走ってくる音が聞こえてきた。

「かーーーーーーぐーーーーーーーーやーーーーーーーーちゃーーーーーーーーん！！！！」

「おう、ゆうんぶぅ　!!」

ドッ!!

突如として現れた赤毛の少女にラリアットされて吹っ飛ぶ少年。
スピードも乗っていたせいか、数回バウンドした後にゴロゴロ転がってようやく止まった。
ボロボロにされた少年は仰向けのまま、少女と話す。

「いってぇ・・・・・何しやがる、友奈ぁ　!!」
「かぐやちゃんまたケンカしてたでしょ　！そんなことしちゃダメだって、いつも言ってるでしょ!!」

両手を腰に当ててぷんすこ怒ってる少女の名は『結城友奈』
起き上がりながら悪態をつく少年の名は『煌月輝夜』
「はぁ・・・で　？なんか用事？」
「あ　！そうだった！お説教はあとにして、かぐやちゃん。風先輩が呼んでたよ。なんでも猫探しの依頼が来てるんだって」
「猫探しか・・・フッ。俺に相応しい依頼だな」
輝夜がニヒルに笑う。
「かぐやちゃん、猫探しの〝えきすぱーと〟だもんねー♪」
それを受けて友奈がふにゃり、と笑った。
それを見て、輝夜は思う。
こんな日々が永遠に続けば良いな――――と

煌月輝夜について――――

中性的な顔立ちの少年。つまりいわゆる『男の娘』キャラ。

腰まで届く長い髪は、三つ編みで一つにまとめている。

その見た目から、たまに女子に間違われる。というか、友奈に初めて会った時に間違われ、その時に友奈がつけたアダ名が『かぐやちゃん』である。なお、輝夜本人はそのアダ名を気に入っているため修正しようとしない。

が、赤の他人に女に間違われると、キレる。

ケンカっ早く、年上相手にも怯まず果敢に挑み、そして勝利してしまうために、一時期『番長』と呼ばれ恐れられていた時期がある。

頭の良さは中くらい。運動神経は天下一。

考えるより行動するタイプ。

Yの活動記録　-猫探し探偵煌月輝夜-

煌月くんの掘り下げ回。
それとちょっとした伏線仕込み回です。
どうぞ、お納めください。

「チィーッス」
「こんにちはー　！」
ガラリと扉を開けて、入室する。
ここは讃州中の家庭科準備室。
とある部が部室として使用している部屋だ。
部の名前は『勇者部』
なかなかイカした名前だろ？
友奈なんか眼を輝かせて「かっこいー　！」って騒いでたしな。

「お、やっと来たわね。遅いぞー、猫探偵」

この人は『犬吠埼　風』学年は一つ上の三年生。

この勇者部の部長であり、創設者だ。

口を開けば「女子力女子力」とうるさいが、スタイルは抜群で黙っていれば美人な残念ガール。その上、家事全般も全てこなせるのだからホント、神樹サマは人に二物を与えてはくれないんだな。

「煌月ー？なんか失礼なこと考えてない？」

「はてさて、何のことやら？で、風さん。探して欲しい猫の特徴は？」

「露骨に話を反らさない！・・・・まあいいわ。あとでお説教ね」

またか。今日は厄日だな。

「はい、輝夜くん。これが猫の特徴よ」

車椅子を動かして、俺に一枚のペーパーを手渡してくるこの黒髪美少女は『東郷美森』俺と同い年（タメ）でクラスも同じ。

おしとやか系の清純派大和撫子って見た目だが、その実、ゴリッゴリの右側思想でスーパーハッカー。おまけに何処を探しても見つからない位のハイパーナイスバ

ディだ。

「輝夜くん？私の顔になにかついてる？」

「ああ、すまない。なんでもないよ」

「・・・・・・変なこと、考えてた？」

「――――――さてね」

ペーパーを受け取りつつ、東郷の熱視線を全身で受け止める。

さて、どんな猫チャンかな？

「――あ・・・あの！煌月先輩！」

「ん？なんだい？」

おっと、忘れる所だった。今年入ってきたダークホースの存在を。

彼女は風さんの妹の『犬吠埼　樹』学年は一つ下で一年。

風さんとほ真逆で人見知りが激しく、いまだに俺相手だと緊張する小動物系女子。女子らしく占いが得意でその的中率は六割弱、らしい。東郷曰く、「樹ちゃんは才能の塊」なんだと。磨くのは良いが、右側思考には染め上げるなよ？

「あ――――――えと」

「――――――――？」
「――――これ、どうぞ」
「ばんそうこう？なんで？」
「あら？輝夜くん、肘をすりむいてるわ・・・」
「え？ホントに？」
いつの間に。まあ、心当たりは一つしかないが。
なぁー、友奈ぁー。
あ、目ェ反らした。吹けないクセに口笛吹いてる。
「ん、ありがとう樹」
樹の頭をわしわしと撫で、ケガの場所にぺっと貼る。
「よし、それじゃ行くとするか！」
「いってらっしゃーい」
「怪我には気を付けてね」
「い・・・いってらっひゃい・・・」
この三人に、友奈と俺を含めた五人。

これが俺の所属する勇者部のメンバーだ。

勇者部の活動目的は、『世のため人のためになることを勇んで行うこと』

まあ、つまる話がボランティアだな。

しかし、ボランティア部だなんてありきたりな名前にせず、あえて『勇者』なんてケレン味のある名前にすることで人々の印象に残りやすくする。そうすれば知名度は高まるし、依頼も増える。

創った風さんにそんな意図があったかどうかは別だが。

「さて、ご依頼の猫チャンは・・・と」

「かぐやちゃーーーーーーーーん‼」

「ん？」

これから猫を探そうとしたところで、友奈が来た。今度はラリアットされることなく、俺のとなりで止まる。

「なんだ？俺の手伝いか？明後日の劇の準備はどうしたんだよ」

「準備ならほとんど終わったよ。えっと――」

ん？なんだ？少し歯切れが悪いな友奈のやつ。
まさか――――
「さっきの、ケガさせたこと。気にしてんのか？」
「う」
どうやら図星らしい。やれやれ、そんなの今更の事だろうに。まあ、友奈らしいっちゃらしいわな。
まったく、仕方ない。俺は友奈の頭を撫でながら告げる。
「いつものことだろ？気にすんなよ・・・・・・・て言っても、どうせおまえは気にするだろうからな。ほれ」
「ふぇ？」
ある場所を指差す。そこには件の猫が佇んでいた。
「手伝ってくれるんだろ？俺は猫に嫌われる体質してるからな。捕まえることができない。追い込むから捕獲頼むな」
「！・・・・うん！まかせて♪」
友奈の顔に笑顔が戻る。やっぱ友奈には笑顔が一番似合う。他の表情なんて考え

られないくらいだ。
「よし、俺が向こうから追い込む。友奈はあっちで捕まえてくれ」
「らじゃー！」

作戦は途中までは、上手くいっていた。
猫が友奈を踏み台にして近場の塀に飛び乗り、走り去って、それを追いかけたまではいい。
問題は――
「うー・・・・・・・・・・ん」
「きゅう」
茂みから出てきた小学女子に友奈がぶつかってしまい、その子と共に気絶してしまったことか。
「わっしー、大丈夫？」
「須美ー？無事かー？」
更に茂みから二人現れた。どうやらこの子の友人らしい。

「おーい、友奈ぁ　？おきろー」
友奈の頬をぺちぺち叩いて起こす。逃げた猫？どうせすぐに見つけられるさ。今はこっちが優先。
「うぅ・・・・・・・・・・はっ　！猫ちゃんは!?」
「おはよう友奈。猫なら逃げたぜ」
「うう・・・そっかぁ・・・」
目に見えて落ち込む友奈。むぎゅう、と少女を抱き締める。
「んむー　！んむー！んむむむー！」
「・・・・・・・おーい、友奈ぁ。いい加減その子を離してやれー」
「え　？――――――わあ!!ごめんね！大丈夫？」
「ぷはあ・・・・・・らいじょうぶれふ」
友奈のホールドから解かれた少女は、顔を真っ赤にさせて目を回していたが、ケガとかはしていない様子。うん、大丈夫そうだな。
「ごめんね。すっごく柔らかくて、気持ちよかったから、つい・・・」
「そりゃうちの自慢の『ましまろぼでー』ですので～」

上質な麻布（シルク）のごときロングヘアーの少女がにこやかに笑い笑いながら言った。
その言葉に友奈に抱き締められていた黒髪の少女がさらに顔を真っ赤にする。
「それはそうと、猫がどうとか・・・話してませんでした？」
もう一人の、どっちかというと快活そうな少女の一言で友奈が「そうだったー！」と叫んだ。やれやれ、忘れていたのかよ・・・

猫探しの協力を申し出てくれた三人と共に、周辺の探索をすること、五分――
「いたー！あんなところに！」
「木に登って、降りられなくなっちゃったんだね～」
最初に来た公園にある一本の木の上に、件の猫はいた。
周り回って振り出しに戻るとは――。なんて気落ちしている場合じゃないな。
「どうする？ハシゴなんて近くには無いぞ？」
「よーし！ここは合体だー！」
「「え？」」「おお!?合体!?」
「おい友奈、お前まさか・・・」

予感的中。
友奈が土台となって、黒髪少女、快活少女、の順に肩に乗る。
確かに猫に届くだろうが・・・・・・自分ら、降りるときどーすんのさ。
とか思っていたら――――
「あ」てん
「え　？」てん
「わ　！」てん
「いらっしゃ～い♪」
友奈たちをハシゴにして、降りて来た。そこをお嬢ちゃんがナイスキャッチ。
「おし、ナイスだ」
「えへへ～っとと、この子すっごい暴れるよ～　！」
捕まえられたのが気にくわないのか、それとも俺が隣にいるからか、猫がお嬢ちゃんの腕の中で暴れまわっている。すると――――
「あー　！ピッカーンとひらめいた」
何を思ったのか、まるで泣きじゃくる赤子をあやすみたいにして、猫をなだめ始

めたのだ。

「大丈夫～大丈夫～。こわくな～い・・・こわくな～い・・・」

すると猫は徐々に落ち着きを取り戻し、やがて眠ってしまったのだった。

ヒューっ！やるじゃない。

その後、うまいこと分離できた友奈たちと共に、依頼者の元へ猫を届けた。

依頼者はたいそう喜び、お礼に、と和菓子の詰め合わせをくれたのだった。

しかし俺たち勇者部は、あくまでボランティアの一環として行っているに過ぎない。故にお礼を受けとることはできない。しかし、それでは依頼者の気が晴れないだろう。そこで――――

「実は、この子を捕まえたのは僕たちじゃないんです。この、三人の小さな勇者たちなんです」

と言って、小学生ズに受け取ってもらうことにしたのだった。

――――――――――――――――――――――――

「本当にいただいてもよろしいのでしょうか？」

「いいのいいの！小さな勇者さんたちへの、わたしたちからのお礼でもあるん

だから」

「そういうこと。それに、死んだばっちゃが言っていたぜ？『無料（タダ）より高いモノは無い。だが、感謝の気持ちはプライスレス。受け取らないのは礼儀に反する』ってな」

「須美、お兄さんたちもこう言ってるし、お言葉に甘えちゃおうぜ？」

「・・・・・・・・・そうね。そうします」

どうにか折れてくれたようだ。

さて、そろそろこいつらは帰らないと、日が暮れる前に家にたどり着くことができなくなりそうだ。

少女たちの着ている制服。昔、ばっちゃも着ていたという『神樹館小学校』の制服だ。

神樹館は大橋市にある。ここ讃州市からは車でだいたい一時間半はかかる。小学生にはそう簡単にホイホイ行き来できるような距離ではない。

「またな、小さな勇者たち。次はぜひとも『勇者部』のみんなとも会ってくれよ」

「あ、はい！えっと――」

そういえば自己紹介がまだだった。

昔ばっちゃに言われたのに。『初対面の相手には、しっかり自己紹介すること。こちらから名乗れば自ずと相手も自己紹介してくれる』って。

だから、ありったけの感謝その他諸々を込めて、高らかに名乗りを上げた。

「死んだばっちゃが言っていた――俺の名は、『〝煌（かがや）〟く〝月〟となりて、総（すべ）ての〝夜〟道を〝輝（てら）〟すモノ』――すなわち、『煌月輝夜』だ!!」

「か――――カッコいいーーーーーー!!!!」

快活少女が目を輝かせてそう言えば
「そう・・・かしら・・・　？」
黒髪少女は半ば引きぎみに答え
「はじめまして～。わたし、乃木園子だよ～」
お嬢ちゃんがマイペースに自己紹介していた。
うーん、この統一感の無さよ・・・
「と、アタシもか。三ノ輪銀です　！」
「あ、鷲尾須美です。今日は・・・えっと・・・」
「こういう時は『ありがとう』で良いと思うな♪あ、わたし結城友奈。じゃあまたね！」
「はい、またいつか」
「またね」
「またね～」
三人は出てきた茂みへと戻っていった。
・・・・・・・・・うーん、なんだろう。何かが引っかかる。

「かぐやちゃん　？どうかしたの？」
「・・・・・・須美って子、なんかどっかで見たことあるんだよなぁ」
「え、そうなの　？昔会ったことがある、とか？」
「そうかなぁ・・・　？そうかもしれんな」
とりあえず今は友奈のその言葉に納得しておくことにした。
「それにしても、良い子たちだったね。また会えたらいいなぁ」
「大橋の方に住んでいるみたいだったし、そんなホイホイ行けるわけじゃないが・・・確かに、また会えたらいいな」
そんな話をして、二人して笑い合う。
「さて、そんじゃ俺らも帰るか」
「うんっ♪」

煌月輝夜について②――――
幼きころより面倒を見てくれた祖母（煌月は『ばっちゃ』と呼ぶ）を心から尊敬

している。

座右の銘は『不味い飯を出す店と悪がこの世に栄えた試し無し』もちろん、ばっちゃからの受け売り。

ばっちゃは二年前に天寿を全うし、この世を去った。

その為、現在一人暮らし。

それを知った結城家に、「時々で良いからうちにご飯、食べにいらっしゃい」と誘われ、月に一度くらいのペースでお邪魔している。

意外と対人スキルは高め。（あるゆる意味で）

Ｖの襲来　-終わる日常-

進行マキマキ♪進行マキマキ♪
急展開にはご容赦を♪

・・・・・・すいません。
巻き進行で行きたいので、急展開注意です。
それでも良いと言う、心の広い素敵なお方、どうぞ、お納めください。

ところで、『なんかすごいビーム』って聞くと、クルモンを思い出すの僕だけか

な？

「かーぐーやーちゃーん！」
「んぉ？」
俺を呼ぶ声に振り向くと、友奈と東郷が歩み寄って来た。と言っても、東郷は車椅子なんだがな。
「輝夜くん、これから部室へ？」
「その前に職員室。今日日直で」
「そういえばそうだった、じゃあ先に行ってるね」
「おう。すぐ行くから、また後でな」
「うん！じゃねー」
友奈たちと別れ、職員室へ小走りに向かう。
「失礼しまーす。不同せんせー、居ますかー？」
扉を開けて雑に挨拶すると、奥の方で一人の教師が手を挙げた。

「ああ、煌月くん。こっちですよ」

そちらに近づく。

金髪のトゲトゲ頭に柔和な笑みを浮かべるその人こそ、俺たちの担任教師『不同（ふどう）幕切（まくぎり）』である。

「いつも思うんスけど、その頭、どうにかしないんスか？不良感パないッスよ？」

「うーん・・・・・これでも地毛ですからね。剛毛なのも含めて。ほら、染めたりすると将来剥げるって良く聞くじゃないですか」

まだまだ若く見られたいので、と言って笑う。

まあ良いけど、別に。興味ないし。

「とりあえず、今日の日誌ッス。そんじゃ、おつかれーッス」

「おおっと。こらこら、不用意に物を投げない！」

すんませーん、と、とりあえずの謝辞を述べつつ、退室。

さっさと部室へと向かうのだった。

「ちわーッス　！煌月、入りまーッス」
「お、やっと来たわね」
「こ・・・こんにちは」
「こんにちは輝夜くん、さっきぶりね」
部室に入ると、風さん、樹、東郷が出迎えてくれた。あれ？友奈は？
「あ、かぐやちゃん　！ちょうど良かった。ちょっとそこ押さえて欲しいの！」
「うお、そこに居たんかお前」
友奈は床で作業していた。これ、昨日の人形劇で使ったセットじゃん。
「そーいや、お前が倒してぶっ壊したんだっけか」
「こ・・・壊したのはわたしじゃないよー　！」
確かに倒したのはわたしだけど・・・と小声で呟く友奈。ばつの悪そうに指先をちょんちょんしているのがちょっとかわいい。
「あの時はホントびっくりしたわよー。ま、誰にもケガが無くて良かったワ」
「風さん、そういう問題じゃないと思う・・・」
「固いこと言わない　！にしても、なんで壊れちゃったのかしら？」

「真ん中くらいでポッキリ折れちゃってるよね・・・」

姉妹が首を捻る。

簡単に説明すると・・・

昨日の幼稚園での人形劇の最中、テンション上がった友奈がこの舞台セットを倒してしまったのだ。

園児たちの方へ倒れて行き、あわや大惨事になるかと思いきや、セットが急に壊れてどうにか園児たちにぶつからずに済んだ。

――――ということがあったのだ。

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・どした ？東郷。俺の顔に何か付いてるか？それとも、俺に見惚れていたのか？」

「それは無いから安心して」

「あっけらかんとそんなこと言わないでよ悲しくなるじゃん」

部室に笑い声が響く。

うむ。なんとか誤魔化せたかな

時刻は過ぎて夕方。
俺達は『かめや』というどん屋に来ていた。
かけうどんが一杯百円と学生諸君にはとっても優しい値段設定(リーズナブル)になっており、その上、うまい。
おかげで我ら勇者部一同、すっかりここの常連客である。
・・・店員さんにも顔を覚えられる程に通っているし、常連と言っても大丈夫だよね？
「ぷはー！すみませーん！おかわりー！」
「三杯目・・・」
うん。こんだけ食ってんだから、常連客じゃなくても、上客としては扱ってくれてるだろ！←投げやり
「・・・風さん、あんまり食いすぎると、肥るぞ？」
「んぐっ!!げほっげほっ・・・・・・だ、だだだ大丈夫よ。アタシの場合、栄養は全部女子力に変換されるんだから！」

なにその謎理論。根拠はどこよ？
友情パワーと謎理論で並みいる敵をなぎ倒す某プロレス（？）漫画みたいな理論を述べおって・・・
「アタシのことは良いの　！それより、本題に入るわよ」
「そういえば、話があるからって理由でここに来てたんだっけ」
「そうよ　！今度の文化祭の話をするために来たのよ！」
「文化祭ぃ　？」
「もうですか　？」
讃州中の文化祭は十月に行われる。現在五月の頭。流石に早すぎやしないか？
「去年は色々ゴタゴタしてて、何も出来ませんでしたから・・・」
「あー、そういやそうだったな」
二杯目を注文したおれは、カバンからビンを取りだし、中の自家製梅干しをやってきたうどんに一粒のせる。そして、食う。
うん。うまい。
「あ♪かぐやちゃんの梅干し、いっこもーらい♪」

ひょい、ぱく。
「あっ。・・・たくもう。ちゃんと味わえよ？」
「ひゃーい」
酸っぱそうに口をすぼめながらも、元気よく返事をする。
「あ、私にもちょうだい？」
「いいぞー。ほれ」
「ん、ありがとう」
東郷はどうやら酸っぱいのは平気らしく、なんとも美味しそうに食べてくれた。
やはり手間隙かけて作った物を喜んでくれる人がいるというのは、とても良いものだ。
死んだばっちゃも言っていた。「一流の料理人は、自分の為に料理を作らない。自分の料理を食べてくれた人が、満面の笑みを浮かべて、『ごちそうさま』と言ってくれる。この為に料理を作るのだ」と。
「・・・・・・・あ・・・あのー・・・」
「ん？なんだい樹。お前も梅干し、欲しいのか？」

「あ・・・えっと・・・そうなんですけど・・・そうじゃなくて・・・」
ふむ・・・？
「うーん・・・・・・・梅干し、ニガテ　？」
「えっと・・・・・・・すこし」
「そっかー。そんな樹には、こっちのビンだな」
カバンからもう一つのビンを出す。そちらにはラベルが貼ってあり、『甘め』と書かれている。
「氷砂糖とシロップを使った『はちみつ漬け梅干し』　！これなら、酸味控えめで良い感じだと思うぞ。ほれ、食べてみ？」
ビンから一粒取りだし、樹に渡す。
「・・・・・・・・・いただきます」
はむっ
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・どうだ　？」
「――――――――――おいしい、です・・・　！」

「そうか　！それは何よりだ！」
表情から見ても無理しているわけではない。どうやらホントにちゃんと食べられたみたいだ。あー、よかった。
「ちょっとちょっと　！あんたたち！」
風さんが頬を膨らませてこちらを睨む。
「何　？風さん。梅干し食べたいのか？」
「たべるー♪」
今日も勇者部は平和です。

ちなみに、文化祭の出し物の案は宿題となった。

「ただーいまー」
『かめや』での会議（という名の食事会）を終え、東郷家が頼んでいるデイサービスの車を、いつも通りに断って、一人徒歩で帰宅。

「ああ、おかえりなさい輝夜」
出迎えてくれたのは不同先生。
なんでうちにいるのかというと、実は彼、この家の使用人なのだ。その上教職員もやっている。本人曰く、本業は使用人（こっち）らしい。
「使用人が副業に教師やるのって、どうなのさ」
「今さらですね」
「それよりマッキー。今日の夕飯は？」
マッキーとは不同先生のあだ名である。俺は幼少のころからこの人のことをそう呼んでいた。
「今日はご実家から蕎麦が届きましたので、夕飯は蕎麦にしました」
「おー蕎麦か。良いね。うどんの次に好きだよ」
煌月家の先祖は、諏訪という地からの移住民らしく、血筋の人間には蕎麦好きが多い。
が、生憎俺は蕎麦よりもうどん派だ。
もっと言うとうどんより梅干し派だ。梅干し万歳。

「もうあとは茹でるだけなので、リビングで待っていてください」
「はいよ」
「ちゃんと手洗いうがいはしっかりやってくださいよ」
「わーってる！」

夕飯を終え、二階の自室へ。
風呂は寝る前に入る主義なので、今のうちに宿題を片付けることにしよう。
ブーッ、ブーッ、
と、思ったがメールが来たので先に確認。
「む、友奈からだ」
『こんやのお月様は、まんまるできれいだよっ♪』
「・・・・・・やれやれ、いつの間にこんな言葉を覚えたのか」
このメールはいわば招待状だ。
なので早速ベランダへ出て、手摺を使って屋根へと登る。そこで待っていたのは

「あ♪待ってたよ。かぐやちゃん」

月明かりに照らされて、光輝く桜色の天使であった。

「――――やあ、友奈。月夜の密会にお招きいただき、恐縮だよ」
「えへへー♪かぐやちゃんがまたむつかしいこと言ってるー」
「・・・・・・・・・せっかくカッコつけたんだからさぁ」

「あはは、ゴメンゴメン」
「んもう・・・」
二人して笑い合う。俺と友奈は、時々こうして屋根の上でおしゃべりをする。話題は大抵、今日の出来事。今回は、風さんからの宿題が話題かな？
「ありがとね、かぐやちゃん」
「んん？なんで？なんかしたか？俺」
「昨日のことだよー」
「・・・・・・・・俺は何もしてないよ」
「・・・・・・・・・それでも、言いたいの」
「・・・・・・・・・そうかい」
それっきり、二人とも、黙ってただ月を眺めていた。
時々そよぐ風が、友奈の香りを俺に届ける。
それ以外は何もなく、ただただ、時間ばかりが過ぎていった。
どれくらい経ったか、「くちゅんっ」というかわいらしい声が隣から聞こえてきた。

「・・・・・・五月だからって、これ以上は体が冷える。そろそろ戻ろうぜ？」
「・・・・・・・うー。わかったよぉ」
そそくさと自分の部屋へと戻っていく。その途中、
「かぐやちゃん、また明日ね♪」
「ああ、また明日」
そういってお互いに手を振り合って、今夜はお開きとなった。

「そういえば、文化祭の出し物について、話し合うの忘れてた」
どうしようか？

翌日、結局なにも良いアイデアは思い浮かばなかった。
「（文化祭の出し物・・・文化祭の出し物・・・）」
現在授業中だと言うのに、全く授業内容が入ってこない。
さてさて、ホントにどうする？
「（あー、クソ。時間止まんないかなぁ？）」
そんな子供みたいなことを思った、その時

♪〜♪〜♪〜

「ぅおっ !!なんだぁ!?」
「誰ですか ？携帯の電源は切っておくように！」
辺りを見回す。なんか音源がスッゲー近いような・・・
「てゆーか、俺じゃね ？」
あわてて端末を取り出して、ふと、思い出す。
「（おかしい、授業始まる前にちゃんと電源は切っておいたハズ）」
画面には『樹海化警報発令』と表示されている。
なんだ、これは・・・
「・・・・・・これは、一体」
呆気に取られていると、けたたましい音が止み、教室は静寂に包まれていた。
んん？でもなんか、静か過ぎない？
「・・・・・・・・・・え ？」
もう一度、辺りを見回す。
先生も、クラスメイトも、時計の針も、外に舞う落ち葉すらも、なにもかもが止

まっていた。

「輝夜くん・・・・・・・友奈ちゃん・・・・・・・」

「え？なに・・・・・・・なんでみんな止まって・・・・・・・」

友奈と東郷を除いて。

「・・・・・・・・・・んだよ・・・これは・・・・」

訳が分からない。まるで時間が停止してるみたいな状況。そんな中、なぜか動ける俺たち。

「・・・とにかく、情報収集だ」

思い立ち、行動しようとした、その時――

視界が、光に覆われた。

「ぅお　！まぶし！」
「　!!東郷さん！」
「きゃあ　!!」
あまりのまぶしさにとっさに眼を閉じる。
しばらくして、眼を開けた時――――
辺りは、極彩色の木々に覆われていた。
「――――は　？」

この日、俺たちの日常は、一旦、終わりを告げたのだった。

キミが願うことなら、全てが現実になるだろう。
キミが、選ばれし者ならば・・・

Vの襲来　-勇者になる-

「なに・・・　？ここ・・・。何処だよ・・・」
景色に見覚えは欠片も無い。
そもそも俺はさっきまで教室にいたハズだ。
「わ・・・わたし、夢でも見てるのかな・・・　？」
隣に立つ友奈が自分の頬をつねる。
どうやら痛かったらしく、ちょっと涙目になっていた。
「夢じゃ・・・ないみたい・・・」
訪れる沈黙。
それを不意に東郷が破った。
「そうだ・・・端末・・・」
言われて俺も友奈もハッとなった。そうだ。事の発端はスマホが鳴らした謎のアラートだ。
三人ほぼ同時にスマホの画面を見る。

「画面が・・・変わっているね・・・」
「うん・・・」
「その上、メイン画面に戻れねぇと来た」
端末を操作しながらそんなことを言う。
む、これ、地図アプリか？友奈、東郷、俺、三人のフルネームが表示されてる。
もう一つは・・・・・・あ？なんだこれ。指輪のマーク？
なんかのボタンっぽいな、押してみよう。
ぽちっとな。
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・何も起きねぇ！
「大丈夫、東郷さん　！わたしがついてる！」
「友奈ちゃん・・・」

俺が端末と戯れている間に、友奈が東郷を元気付けていた。
ぐっとガッツポーズを取るその手が、若干震えている。
友奈はいつだってそうだ。友達のためなら自分が怖い思いをすることを躊躇わない。
だから俺は――――
「おい友奈。俺もいるってこと、忘れてねぇか？」
「え？あー。ううん！忘れてない忘れてない！」
「嘘付けお前ぜってぇ忘れてただろ！」
「わ・・・わわわ忘れてないよ～（汗）」
「・・・・・・ふふふ」
ふむ、どうやら気を紛らわせることができたようだな。
よし、とりあえず周辺の探索をしよう。
と、思ったその時――
がさがさっ
俺たちの背後で物音がした。

咄嗟に振り向くと、そこには風さんと樹の姿が。
「ああ、良かった。みんな無事ね ？」
「風先輩・・・・・・風せんぱぁい ！」
二人の姿を見た友奈が風さんに抱き付いた。
東郷もほっとした様子。
実際、俺もちょっと安心した。
「風さん、樹、二人とも無事で何よりだよ」
「あの、風先輩。どうやってここが ？」
「これのおかげよ」
東郷の問いに、風さんは自分の端末の画面を見せる。
画面には、先ほど俺が見ていた地図アプリが表示されていた。
なるほど、それを頼りにここまで来たのか。
ということは・・・・・・・
「なあ風さん。つかぬことを聞くが・・・風さんは、ここが何処なのか、知ってるのか？」

「――――――――――」
「その反応、知ってるってことで良いんだな」
「風先輩・・・・・・説明、してもらえますか？」
「煌月・・・東郷・・・」
風さんは、俺、東郷、友奈、樹、全員を一瞥してから、覚悟を決めた表情で答えた。
「わかった。とりあえず、安全な場所へ行きましょう」

――――――――――――――――――――――――

しばらく歩き、少し開けた場所に出た俺たちは、そこで風さんの説明を受けていた。
「私は、大赦から派遣されてきたの」
「大赦って・・・神樹様を奉っている・・・」
「何か、大切なお役目なんですか？」
ふぅん、大赦・・・ねぇ。あの人は何も言ってなかったけど・・・別の部署なのかね。

「ずっと一緒にいたのに・・・・・・知らなかった・・・」
家族である樹にすら、黙っていたのか。これは、よっぽど重たいモン、背負わされたな。
「・・・・・・当たらなければ、このまま黙っているつもりだったから」
当たる？抽選でもしてんのか？だれが？
「ここは、神樹様が造った結界なの」
「じゃあ　！悪いところじゃ、ないんですね」
友奈の言葉にうなずき、風さんは続ける。
「でも、私たちはここで、敵と戦わなくてはいけない」
「たたかう・・・・・・・？」
「お姉ちゃん、敵って・・・？」
東郷と樹のその言葉に反応でもしたかのように、その時、地図アプリに動きがあった。
「なあ、風さん。その敵ってやつはもしかして・・・・・・これかい？」
端末に表示された俺たち以外の点。

名前は『乙女型』
「来たわね」
全員で反応のあった方角を見る。

異形の化け物が、そこにはいた。

「・・・・・・・・なんだ、ありゃ　？」
「アレがバーテックス。世界を殺す、人類の敵」
バーテックス・・・・・・世界を殺すとは、穏やかじゃないな・・・
「アレが神樹様にたどり着いた時、文字通り世界は滅ぶ」
「おいおい・・・さっきから穏やかじゃない単語が並びまくりなんだが　？」
「ここには・・・・・・・わたしたちだけ・・・」
「私たちに・・・アレを倒せっていうの　!?」

東郷が叫ぶ。気持ちはわかる。体格差どんだけだよって話だよな。

「方法はあるわ！」

風さんが見せたのは、さっき俺が押したボタンと同じもの。あ、もしかしてそれでなんかパワー的なのもらえるパターン？

「戦う意志を示せば、アプリの機能がアンロックされて、神樹様の勇者になれる」

「よしじゃあ早速やってみよう！」

「え？ちょっと煌月‼」

風さんの静止の声を無視してボタンをタップ。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「なんも起こらんやんけ　!!(怒)」

思わずスマホを地面に叩きつけてしまった。でも俺悪くないもん。アンロックされない端末が悪いんだもん。

「ごめん。勇者になれるのは『神樹様に選ばれた無垢な少女』だけなのよ」

「え　？じゃあ俺なんでここにいるの!?」

「ええっと・・・・・・(汗)」

「　!?みんな・・・あれ・・・」

東郷の声に俺は風さんいじりを止めにして、バーテックスの方を見る。

下部がなんだか光って、膨らんで・・・なんだろう。チャージ中？的な？

そこから何かが放たれた。

それは真っ直ぐこちらに向かって飛んで来て――

「ヤバい・・・全員伏せろ　!!」
咄嗟に友奈をしゃがませ、東郷をかばう。
バーテックスが放った何かは、すぐ近くに落下し、爆発した。
爆風と破片が俺たちに襲いかかる。
「きゃあ　!!」
誰かが叫ぶ。樹か友奈どっちかか？
「みんな　！ケガは無い!?」
「ああ、なんとかな・・・」
風さんの問いに答える。
どうやら至近弾だったらしい。直撃じゃなくて安心――
「東郷さん　!?」
とはいかないようだ。
さっきの一撃で東郷が完全に怯えてしまった。
「無理よ・・・・・・できるわけない・・・・・・・」
「――――東郷さん」

やれやれ、いつもの調子は何処へやら。しかし東郷の反応はある意味正常だ。こんな訳のわからん場所にいきなり連れてこられて、『世界を守る為に異形の怪物と戦え』だなんて、常人なら失神レベルだな。いや、失神で済むかな・・・最悪、失禁するかも？

「友奈、煌月、東郷連れて逃げなさい」

「でも風せんぱ――――」

風さんの指示に、食い下がる友奈を押し留める。

「友奈、俺たちがここにいても風さんの邪魔にしかならない」

「う・・・」

「わかったか？なら東郷連れてさっさとお行き!!」

ぱしーん！と友奈の尻をはたく。うん。良い弾力。安産型ね！

「わひゃあ!!」

目尻に涙を溜め、顔を真っ赤にしてこちらをにらんだ友奈は、そのまま東郷と共に走り去っていった。

「樹、あんたも「いやだよ!!」」

若干食い込みに樹が叫ぶ。
涙目どころか半分泣いているくせに、瞳に宿る意志は屈強で、『テコでも動いてやるものか』と言外に語っていた。
「ついて行くよ・・・・・・何があっても・・・　！」
「樹・・・わかった。私に続いて　!!」
「うん　!!」
二人同時に端末のボタンをタップする。
瞬間、風さんからは黄色い花びらが、樹からは緑色の花びらが、嵐の如く舞い上がる。
それが止んだ時、二人の衣装は華やかなモノに変化していた。
風さんは、力強さとスタイリッシュさの中に乙女らしさをプラスした、クールな女性を連想する黄色い衣装を
樹は、キュート&ロリポップ。フリルがふんだんにあしらわれたプリティでキュアキュアな変身ヒロインチックな緑色の衣装を
それぞれ纏っていた。

「これが――――勇者の――――」
「・・・ちょっと煌月。あんたなんで地面に這いつくばってるのよ」
「パンツ見えねーかなって」
無言で顔面を踏まれた。しかし見切った！
「今日の風さんはホワイト　！」
「なんてやつ　!?」
なんて事やっていたら、風切り音が聞こえてきた。
ヤバいなこりゃ。死なないように退散退散。
「風さん　！今のは黙ってた罰として、しっかり脳内フィルムに焼き付けさせてもらったからな!!」
「ぐぬぬ・・・　！」
「嫌なら二人とも無事に帰ってくること　！いいな!?」
「わぁったわよっ　!!」
風さんと樹が跳躍し、俺は物陰に隠れて爆発をやり過ごす。
煙が晴れ、去って行く二人の後ろ姿を見送って、俺は友奈たちのもとへと走りだ

した。

―――――――――――――――――

友奈たちと合流した後、俺たちは小高い丘に来た。

ここならあの乙女型とかいうバーテックスがよく見える。

「風先輩・・・・・・」

友奈のつぶやきに答えるように、友奈の端末が鳴った。

「もしもし、風先輩ですか!?今戦ってるんですか!?」

どうやら風さんからみたいだ。友奈に近づき、聞き耳をたてる。

『こっちの心配より、あんたたちの方は大丈夫なの!?』『数多すぎだよぉぉぉ!!』ドーン！ドーン！

「はい！大丈夫です」

風さん、こっちの心配より妹の心配しろよ・・・。

『・・・・・ごめん、友奈。こんなことに巻き込んで・・・』

「風先輩・・・」

「―――」

「――――風先輩は・・・ずっと一人で抱えてたんですよね？誰にも言えないで・・・」

『――――――』

「勇者になってみんなの為にがんばる――それって、『勇者部』の活動目的とおんなじじゃないですか！」

『っ!!』

「っ!!」

風さんと東郷が息を飲む声が聞こえた。

友奈は何時だって、他人を気遣って行動する。

その優しさに救われた人間は、少なくない。

「風先輩は、悪くない・・・！」

『友奈――』

その時だった。

『ッ!!しまったっ!!』

ドガーン!!

「ふ、風先輩っ　!?」

ドガーン!!

更にもう一つ。爆発音。

最悪の事態を連想してしまう。

おそらく、最初の爆発で風さんがやられ、それに気を取られた樹が、続く爆発でやられた。

実際、バーテックスがこちらを見ている。目が何処にあるのか知らないけど。

「こっち、見てる・・・」

その上チャージ中と来た。こいつはマズイ・・・このままだと全員揃ってあの世行きだ。

「友奈ちゃん、輝夜くん・・・私を置いて逃げて・・・　!」

東郷がそんなことを言い出した。確かに今のこの状況だと、車椅子の東郷は足手まといにしかならない。だからといって、置いていくなんて出来ない。

「そんな　!? 友達を――――」

友奈も同じ気持ちだったらしく、東郷を説得しようとして――――何かに気付く。

「――――そうだよ」
「友奈　？」
「友達を見捨てるなんて・・・そんなの・・・　！」
バーテックスを真っ直ぐ見つめる。まさか――――
「そんなの・・・　‼」
「待て・・・友奈行くな　‼」

伸ばした右手は、走り出した友奈に届かず、虚しく空を舞う。

「勇者じゃないっ　‼」

バーテックスが爆弾を放つ。

それは狙い過たず、真っ直ぐ友奈へと向かい――

着弾した。

爆風が俺たちを叩きつける。
「ああっ　!!友奈ちゃん!!」
「クソッ　!友奈ぁ!!」
爆弾の直撃。助かる可能性なんて存在しない。普通なら。
「────────ぁ」
煙が晴れた時、そこには、桜色に輝く手甲を装備した左手を、天高く突き出す友奈がいた。
「嫌なんだ。誰かがつらい思いをする事、嫌な思いをする事が　!」
友奈はそのままファイティングポーズを取る。傍らには牛っぽいマスコットキャ

ラが浮かんでいる。
「そんな思いをするくらいなら　!!」
更に放たれた爆弾を、右の回し蹴りではじく。同時に、右足に手甲と同じ色の具足が装着された。
「私が　!!」
続く三撃目を、今度は左の回し蹴りではじく。またも具足が装着された。
そのまま跳躍。四撃目はそれでかわす。
だが五撃目が友奈に迫る。
「がんばる　!!」
それを友奈は避けようともせず、右手で殴り飛ばした。
当然、爆発。
爆煙を抜けて、現れた友奈はしかし、無傷だった。
どころか、友奈の衣装も風さんたちと同じく、別のものに変わっていた。
友奈らしい、可愛さと格好良さを兼ね備えた、スポーティーかつキュートな桜色の衣装へと。

「おおおおおおおおおおおお!!」

友奈が雄叫びを上げてバーテックスへと突撃していく。

「友奈ちゃん!!」

東郷が叫ぶ。

俺はただ、拳を握りしめて、それを見届けるのみ。

「勇者ぁパァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンチ！！！」

友奈の放った渾身の右ストレートは、バーテックスの身体を半分以上吹き飛ばした。

その向こうで、友奈が高らかに宣言する。

「勇者部の活動目的は、『人の為になることを勇んでやること』　！」

高らかに、宣言してしまった・・・

「私は　！讃州中学二年！勇者部所属、結城友奈！」

「私は・・・勇者になる　!!」

Ｖの襲来　-撃退、そして・・・-

友奈の一撃で半壊したバーテックスだったが、みるみる内に再生していってる。
なんつーチート野郎だ。
「・・・神樹様、どうかみんなを御守りください・・・」
となりの東郷は、ついに神頼みし始めた。
その神樹様に『Ｈｅｌｐｍｅ!!』て言われて俺らここにいるんだよなぁ・・・
――――――ｖｉｅｗ，ｃｈａｎｇｅ:友奈――――――
わたしの勇者パンチでバーテックスにダメージを与えることはできた。でもすぐに回復してしまった。
風先輩が言うには、『封印の儀』っていう特殊な手段じゃないと倒せないらしい。
そこで、わたしと樹ちゃんは風先輩の指示に従って、バーテックスを取り囲む位置に移動する。
「うわあ　!!」
途中、バーテックスが布みたいなので攻撃してきたけど、寸でのところでかわし

てどうにか移動できた。
「位置に付きましたー　！」
「こっちもいいよー　！」
向こうを見れば、樹ちゃんもちゃんといる。
「よぉーし・・・封印開始　！」
風先輩が合図を送る。
えっと・・・確か、祝詞を唱える・・・だったよね。説明書は・・・・・・・・え？
「こ・・・これ、全部読むの　!?」
そこには、なんだかむつかしい文章が書かれていた。
読み方も一緒に書いてあるからいいけど、なかったら絶対に読めないよぉー・・・
「え・・・ええっと・・・か、『かくりよのおおかみ、哀れみたまい』」
わたしが祝詞を詠むと、さっきも出てきた牛っぽいかわいいのが表れた。
「『恵みたまい、さきみたま、くしみたま』」
樹ちゃんもわたしに続く。そのそばには、緑色の毛玉がいる。あの子もかわいいなぁ。

「大人しくしろぉ　!!」
「「ええぇぇぇ　!!それでいいのぉぉぉぉ!?」」
「要は魂込もっていれば、何だっていいのよ　！」
「早く言ってよ～　!!」
そうこうしていると、バーテックスの頭がパカっと割れて、中からへんなのが出てきた。
「なんかベロンと出たー　！」
「あれが御霊。バーテックスの云わば心臓みたいなもの。あれを壊せばこいつを倒せる！」
「なら、私が　！」
風先輩の説明を聞いて、わたしは御霊を破壊しようと飛び出した。

が、その前に御霊が×の字に斬られて爆発。たくさんの光を放って消えた。同時にバーテックスも砂になって崩れ落ちた。

「え・・・えっと・・・今の樹ちゃん　？」

「ええ　!?わ・・・私知りません!!」

「私も違うわよ　！」

風先輩でもない・・・・・・じゃあ、誰？

そんなわたしの疑問に答えるみたいに、わたしたちの目の前に、その人は現れた。

所々ほつれていてボロボロの赤い服を着て、顔には黒いお面を着けている。そのお面には、あるマークが書かれていた。神樹様を模した、特徴的なマーク。それを

使っているのはただ一つ、大赦だけ。

でもちょっとおかしい。どうして逆さまに描かれているんだろう。

「・・・・・・あんたが、やったの？」

風先輩が訪ねる。でも赤い服の人は両手の剣[3]持つところが銃みたいになってる変わった剣[3]を構えて――――

バヂィ!!

「きゃあ　!!」

赤い服の人の攻撃は、バリアによって防がれた。防がれたけど――

「ちょ・・・ちょっとあんた　！いきなり何よ!?」

「――――――」

赤い服の人は答えず、両手の剣でまた攻撃してきた。

「きゃっ　！ま・・・まって！お願い、話を・・・」

「――――――問答無用だ」

初めて、赤い服の人がしゃべった。

少し低めだけど、女の子の声だった。

「こんの・・・待ちなさいって言ってんでしょおおおおおお　!!」

風先輩が赤い服の女の子に向かって大剣を振り下ろす。

女の子はそれを右手の剣で受け止め、

「度胸は買う。が・・・力量が足りない」

左手の剣で風先輩の大剣を弾き飛ばした。
「なっ・・・・・・がはっ」
そのまま女の子に蹴り飛ばされて、風先輩は倒れた。
「お姉ちゃんっ・・・　!!」
「風先輩っ・・・　!!」
「他人の心配してる場合か　？」
「え・・・あぐっ」
今度はわたしが蹴り飛ばされた。すごく、痛い・・・
「げほっ・・・なん、で・・・　？こんな・・・こと・・・」
「――――――嗚呼、私があんた達を攻撃した理由、か　？」
「あなたも・・・勇者・・・なんでしょ　？・・・なのに・・・なんで・・・？」
「――――――――――勇者　？アタシが？」
「そうだよ・・・あなたも勇者でしょ　？だったら、こんなこと・・・」
「――――――――――フフ」
女の子は、突然笑いだした。わたし、そんなに変なこと、言ったかな？

「ふざけるなよ」

ひとしきり笑った後、女の子から発せられた声は、分かりやすいくらい、怒っていた。

「――――――――ひ」

「アンタ、何も知らないんだな・・・お目出度い奴。もういい」

つかつか、と女の子が近付いてきて、わたしの頭を掴んだ。

「ああっ　!!」

そのまま目線（お面で目がどこにあるかわかんないけど）を合わせると、

「とっととスマホを渡せ。ぶっ壊して、使えなくしてやる」

「えっ　!?」

どういうこと・・・スマホがなくなったら、わたしたちは変身できなくなっちゃう・・・

「勇者なんざ必要ない。『魔人柱』たる私がいれば事足りる」

「・・・・・・だから、攻撃してきたの？」

「お前たちは分かっていない。勇者がどういうモノなのか・・・」

「いたっ・・・」

わたしの頭を掴む力が強くなる。

「さあ・・・渡せ・・・！」

「う・・・ああ・・・」

痛みでどうにかなってしまいそうになる。

誰か・・・

「!?――ガァ!!」

突然、わたしから手を離したとおもったら、いなくなっていた。違った。おもいっきり吹き飛ばされていた。

「――――――ま、さか」

遠くに飛行機雲が見える。樹海に沿ってまっすぐ伸びたそれが、誰が作ったものなのかわたしは知っている。

「――――――かぐやちゃん」

少し離れた場所に、女の子と左の義手が壊れてぐちゃぐちゃになっているかぐやちゃんの後ろ姿が見えた。

「（――わたし、またかぐやちゃんを・・・）」

いつだって、かぐやちゃんは理不尽にいじめられてる人のために戦っている。

あの日、初めて会ったときから、ずっとそう。

そんな彼を助けたくて、わたしは勇者になったのに――――

「友奈ぁ、無事だな！」

「――――かぐやちゃん」

こちらに背中を向けたまま、かぐやちゃんがわたしを呼ぶ。

そのまま左手を動かそうとして、壊れていることに気付いて、右手でガッツポーズをとる。

「こっから先は、俺の担当だ」

そう言って、かぐやちゃんと女の子の戦いが始まった。

煌月輝夜は■■■■である

バーテックスが消えた。
が、嫌な気配は欠片も無くならない。
案の定、向こうで何かが起きた。多分、戦闘。
「いったい、何が・・・」
「――――――――悪い、東郷。ちょっと俺の靴下持っててくれ」
靴を脱ぎ、靴下を東郷に投げ渡す。
「え？ちょっ、輝夜く・・・ん・・・？」
ガシャン、とわざとらしく音を立てて足踏みをする。うん。問題無し。
「それ――――義足？」
東郷が俺の両足を見て、言葉を失う。まあ、そうなるよな。
「心配すんな。ちょっち友奈たち助けに行くだけだから」
「あ――――違、私・・・」
「東郷」

右手で東郷の頭を撫でる。

「任せとけって。な？」

「――――――――――――」

沈黙したままの東郷を置いて、懐から小さな鍵を取り出すと、ベルトのバックルにそれを挿す。そして回す。

ドゥルルルルルルン――――！

けたたましい音と振動を感じながら、両足がドライブモードに移行したことを確認。

「よし！行ってくるぜ！」

背を向け、東郷に軽く手を振り、跳躍。

両足の裏から放たれた空気が、それをサポートし、普通では考えられないくらいの高さまで、ジャンプしてみせたのだった。

『エレクトリックスチームエンジン』

俺の両足に搭載された特殊機構の名称だ。
俺の霊力を電気エネルギーに変換して動く代物で、衝撃吸収装置にエアクッションを使用している。
「――――――あの野郎」
高い場所に登り、戦場を見れば、友奈が赤服のガキに攻め立てられていた。
「全速力でブン殴る・・・　!!」
バックル上部に備え付けられた三つのボタンの内、右側のボタンを押す。
バックルに『ＪＥＴ』と表示され、義足の形状が少しだけ変化する。
クラウチングスタートの姿勢を取り、真ん中のボタンを押す。
「よーい・・・」
エネルギーがチャージされて行く。
向こうでは風さんと友奈が蹴飛ばされ、その上、友奈が赤服に捕まっている。
しかし、ここで焦ってはいけない。
視界の右端に映るメーターが上昇していく。残り、10％。
風さんは動かない。気絶でもしてるのか？流石に死んでは・・・いないよな？

残り、８％。

樹はそんな風さんのそばでオロオロしているばかり。こればっかりは仕方ない。アイツは今まで平和に普通に暮らしていたんだ。本来なら、こんな場所に居るべき人間じゃあ無い。残り、５％。

「――――――そろそろ、だな」

一番左のボタンに手をかける。残り、４％。

３

２

１

ピーーーーー！

チャージ完了の合図と共に、大地を蹴り、ボタンを押す。

溜め込まれたエネルギーが一気に解放され、圧縮された空気が足裏のノズルから噴射され、推進材となって俺は加速した。

その後も大地を蹴る度に空気を噴射し、どんどん加速していく。

ものの数秒もしない内に戦闘領域に到着した。

そのままの速度で上体をひねり、左腕を引き絞る。
赤服との距離、およそ５メートルの地点まで走った俺は、ノズルを噴かしながらおもいっきりジャンプし、そして――――

渾身の左ストレートで、赤服をブン殴った。

その衝撃は尋常ではなく、左腕がひしゃげて使い物にならなくなった。
神経接続式じゃなくて良かった、と心の底からほっとしながらも、殴り飛ばした赤服を睨む。
「よお。よくも俺の仲間を痛め付けてくれたな・・・」
「――――――お前・・・は・・・」
「この借りは倍にして返さなけりゃなあ・・・と、その前に」

背中を反らして友奈を見る。
明らかに落ち込んでる様子の友奈がこっちを見て、なにか呟いていた。
「友奈ぁ　！無事だな？」
「――――――かぐやちゃん」
だいぶ堪えてるな・・・・・・まあ、仕方ないか。
あいつ、俺がケンカするの、嫌がってるみたいなんだよな。そりゃもう、俺のことを殴ってでも止めようとするレベルで。
多分、友奈のことだし、俺がケンカする理由も分かっててやってるんだろうな。
「かぐやちゃんがつらい思いをする必要なんて無い」とか考えてさ。
辛いと思ったことなんざ、欠片もない。それよりも、目の前で苦しんでる奴を放っておく方が、よっぽど、辛い。それが、大事な友人なら。なおさら。
だから、俺は――――――
「心配すんなって」
背中越しにそう言って、左手でガッツポーズ。
――――――を、取ろうとして、壊れていることに気付いて、慌てて右手でガッ

ツポーズを取る。
「こっから先は、俺の担当だ」

┼

赤服で黒い仮面を被っているこいつは、俺がさっき放った渾身の左ストレートを寸での所でガードした。死角からの攻撃にも関わらず、だ。
「（つー事は、アイツはかなりの猛者ってワケだ。それも相当の修羅場を超えてきた・・・・・・）」
そんなん相手にケンカ吹っ掛けちゃって、どーすんのよ、俺。しかも今、左腕もげてるし。
「ええい　！ままよ！」
先手必勝、ブーストをかけた右足で蹴りを繰り出す。
が、あっさりと受け止められる。
「そう来るよなぁ　！」
真ん中のボタンを押してから、右足をパージ。
「――――ッ　!!」

赤服が何かに気付き、咄嗟に俺の右足を放り投げるが、時既に遅し！

ドガァァァァァン！！！！

大爆発が赤服を襲う。ついでに俺も。

「ぬおぉぉぉぉ　!!威力調整間違えたぁぁぁぁぁ！！！　」

「かぐやちゃんっ　!!」

吹っ飛ばされた俺を友奈が抱き止める。

ナイスキャッチだ。後で梅干しをあげよう。

「・・・っと、そうだ　！アイツは!?」

爆心地を見る。そこには、誰も居なかった。

しばらく周囲を警戒するも、襲ってくる気配はない。どうも撤退したようだ。アレで？

「調整間違えたのが良かったな！」
「かぐやちゃんのバカ！」
友奈がおもいっきり頭をはたく。
「また・・・そんな無茶して・・・」
「――――――ケガは？」
「――――――ない」
「――――――ん、なにより」
右手で友奈の頬に触れる。その手に、友奈が手を重ねる。
「――また、あの時みたいになるかと思った」
「――――――悪い」
「だめ、許さない」
「そんなぁ・・・」
「――――――今日も」
「ん？」
「――――――待ってるから、ちゃんと来て。ね？」

「――――――――しょーがないなぁ」
そうこうしていると、風さんと樹がこっちにやってきた。
と同時に、世界がホワイトアウトしていく。
「疲れたぁ」
「そーだねえ」
友奈に抱き抱えられながら、崩れゆく樹海を眺めていたのだった。

煌月輝夜について――――
とある事情により、身体の７割が機械に置き換えられている。
今回使用した『ＥＳＥ』は、彼の知り合いの技師が考案した代物。
左腕は発泡金属製で、表面に人工皮膚を被せてあるため、パッと見では見分けがつかないようになっている。
『ＥＳＥ』の操作はベルトのバックルに偽造したパネルの上部にある３つのボタンを使用する。

591　不屈の喧嘩番長の章

輝夜のＦ　-喫茶≫嵐ヶ丘≫の三人-

とじとものゆゆゆコラボイベ、ちょーたのしい!!
だけど、全財産注ぎ込んでステップアップ二週したはいいけど、かなみちゃんが一向にこないぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！
ちくしょうっ！ここまで頑張っても来ないなんて・・・
こうなったら食費削って三周目に賭けるしかないっ！
いくぞぉぉ！！！

気が付いた時には、俺たちは学校の屋上にいた。
「神樹様が戻して下さったのよ」
赤服にボコボコにされたはずの風さんがそう言った。元気そうだねぇ。

「あ　！東郷さん！」
友奈に投げ捨てられ、ゴン！と頭を床にぶつける。ちょー痛い。
「大丈夫だった　？」
「友奈ちゃんこそ・・・」
「わたしはへーき　！」
「俺が平気じゃねぇけどな　!!」
打ち付けた額をさすりながら、上体を起こす。
「じごーじとくでしょ　！」
友奈があっかんべーして、そんなことを言う。
「最近の友奈は、なんか冷たい・・・そんな子に育てた覚えはないぞ　!!」
「かぐやちゃんに育てられた覚えなんてないもん」
「・・・・・・ふふ」
そんな、いつものやりとりを繰り広げていると――――

キーン、コーン、カーン、コーン――

「――いまの、何の予鈴？」

「授業終了のでしょ。樹海化中は世界の時間って止まったままだから」

風さんが、あっけらかんとそんな事を言ってのける。

「そっかー、授業終了の予鈴かー・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!」

「ちょっ　!?急になに!?どうしたのよ煌月」

「ちくしょうマジかよ無断欠席じゃねえかどうすんだよ最悪だあああああああああ・・・・・・」

「・・・・・・ホントにどうしたのよ　？」

「大丈夫です。かぐやちゃん、無断欠席とか、そういうのを許さない人なんで」

「真面目ねぇ。心配しなくても、後で大赦にフォローしてもらうからへーきへーき！」

バシッと風さんが俺の背中を叩く。

そうは言ってもなぁ・・・

「それよりも、樹は平気　？」

「お姉ちゃんこそ・・・」

「アタシはホラ　！女子力高いから――――おっと」

女子力高いとか良くわからんことを口走る風さんに、樹が抱き付く。

「ふぇぇぇぇぇ・・・こわかったよぉぉぉ・・・もう何がなんだか・・・」

「ふふ・・・よしよし。頑張ったわね。冷蔵庫のプリン、食べていいわよ」

泣き付く樹を風さんがなだめている。良い姉妹愛だねぇ。

「あれ元々わたしのぉぉ」
感動を返せ。

さてと、欠席に関してはもう諦めた。
勇者部五ヶ条に反するが、死んだばっちゃがよく言っていた。「諦めない心は称賛するが、時には諦めたって良いじゃない、人間だもの」と。
そんな訳で帰宅したいのだが・・・・・・
「みんな、大変だ。俺、今、歩けない」
『・・・・・・・・・・・・あー・・・・』
三人の声が重なる。
そう。今現在、俺には左腕と右足が無い。
立つことくらいなら根性で可能だろう。
しかし、歩くとなると、話は別だ。
「どうする ?友奈におぶってもらうとか？」
「へーいばっちこーい♪」

風さんの発言に、友奈がしゃがんで構える。ノリ良いね、キミ。
「流石にやだよ ！そんなカッコ悪いこと！」
「えぇー・・・」
ぶーたれる友奈。えぇーじゃねーよ。女に背負われるなんざ、カッコ悪いったらありゃしねーっての。
立ち上がって、うーん・・・と考える友奈。何かを思い付いたようで、ぽん、と手を打った。
「あ、そういえばかぐやちゃん。≫ほぼーそうこう≪とかいうの、できるんじゃなかったっけ？」
「今は無理。そもそもホバークラフトは左右そろってないとバランス取るのかなりキツイから、片足だけではあんまやりたくない」
「・・・・なんか、難しいことを言ってるのはわかった。でも実際、どうやって帰るのよ」
「煌月先輩、もういっそ、友奈さんにおんぶしてもらったらどうですか ？」
犬吠埼姉妹がそんな事を言う。

「・・・・・・・他人事だと思ってからにぃ」
仕方ない。
こうなりゃ手段は選ばない！
「友奈、マッキ・・・・・・・じゃなくて、不同先生を呼んできてくれ。ついでに俺のカバンを持ってきてくれるとありがたい」
「先生を？・・・・・・・あ、そっか。うん！わかった。いってくるね」
友奈が屋上から走り去って行く。
が、すぐに戻ってきた。
「あれ？どうした友奈。忘れ物でもした？」
「ううん。そうじゃなくて――――」
「皆さん、御役目お疲れ様です」
屋上に現れたのは、件の人物。即ち、マッキーであった。
「・・・・・・・お勤めごくろーさん。もしかして、どっかで見てた？」
「ええ、木陰からこっそりと」
こいつ・・・

まぁ、いいか。

「え？見てた・・・て、どういう・・・？」

「風さんは、大赦から『契約者』の事を聞かされなかったかい？」

「そういえばそんな話・・・てまさかあんたが・・・!?」

「残念。俺は違うんだなぁ」

「ねえかぐやちゃん。≫けーやくしゃ≪ってなぁに？」

「細かい話はまた今度。マッキー、≫嵐ヶ丘≪まで頼む」

「はい」

マッキーに肩を貸してもらい、屋上を後にする。おっと、その前に・・・

「じゃ、俺は帰るから。また明日ー」

軽く挨拶して、その場を去った。

郊外の住宅地、その一画に目的の店は佇んでいた。

喫茶≫嵐ヶ丘≪

神世紀初頭にオープンした純喫茶でありながら、読書家の店主によって四国中の

様々な書籍を読むことのできる場所にもなっている。

「こんちはー」カラン♪カラン♪

「いらっしゃあああああ !?!?!?!?!?」

俺がマッキーに肩を貸してもらいながら店に入ると、カウンターで食器を拭いていた男装の麗人が出迎えの言葉の代わりに悲鳴を上げた。

「マルさん、そんなビビられると、なんかへこむんだけど・・・」

「イヤイヤなに言ってんだよお前 !?この前まで元気にしてた奴が見るも無惨な姿になって帰ってきたらビビるに決まってるだろう!!」

「・・・・・・・・・・・・なんつーか、すんません」

「謝るくらいなら無茶するなって !! マルも杏子もあとアイツも、お前の事を心配してるんだから」

「・・・・・・・・・・・・・・ん、と・・・あー・・・」

「こういう時は、『ありがとうございます』ですよ ？」

「・・・・・・・・・・・・・・杏子さん」

喧騒を聞き付けてやってきたのか、店の奥からもう一人、物腰の柔らかな、線の

細い女性が現れた。
この二人こそ、この店の店主。
男装してる方は『土居円吒(まるた)』
もう一人の方は『伊予島杏子(きょうこ)』
という。
そして、もう一人・・・・・・ん？
「あれ ？春さんはどうしたんスか？」
「・・・・・・・・・あー」
「・・・・・・・・・えっと」
途端に歯切れが悪くなる二人。なんだ？何かあったのか？
すっ・・・とカウンター内を指差す二人。マッキーと共に中を覗きこむと――――

店員が一人、死んでいた。

「死んでませんよ。気絶してるだけです」
マッキーに指摘され、ＳＡＮチェックに入ろうとしていた俺の精神は安定した。
よくよく見れば、スマホを片手に倒れている。電話中になにかショッキングな出来事でも起きたのだろうか。
「彼、電話していたら急に倒れたんです」
「たぶん、例の報告だな」
例の報告？
「・・・・・・・う」
そうこうしている内に、起き出した。どうやら立ち直った（？）みたいだ。
「ちぃーっす春さん。ごめんね、ハデに壊しちまった」
「ああ・・・・やぁ、かぐやくん。いらっしゃぁぁ――――――――」
俺の姿を見た途端、白目剥いてぶっ倒れた。

あー、まあ、そうなるよな。
この人こそ、俺の義手と義足を一手に手掛けてくれた技師。
名前は『三好春信』
大赦直属の技術開発部最高責任者でもある。

「僕の最高傑作ぅ・・・・・」
「いや・・・だから・・・ごめんって・・・」
春さんがカウンターに突っ伏して、よよよ・・・と泣いている。
「はぁ・・・・・・いい加減にしろ春信。オラ、さっさと輝夜の身体治してこい」
スパーン、とマルさんに頭をはたかれる春さん。
「ふわぁ～い・・・・・・」
「ホントすんません・・・・・・」
泣きっ面の春さんに引っ張られ、店の地下へ向かう。
こここそ、大赦直属の技術開発部、通称『鉄火場』の本部にして開発試験場たる、ガレージである。

「――――――ぃよっし！こうなったら僕は過去の僕を超える‼」ゲッ

「ははは・・・」

「そんな訳で、まずは情報収集から。ものの見事にひしゃげてるけど、何があったの？」

俺は春さんにさっき起きた事を話した。

話を聞き終えた春さんが、神妙な面持ちで小さく「連中め・・・」と呟いていたが、なんだろうか。

「――――輝夜くん」

「うっす」

「僕は君に、謝らないといけない」

「・・・・・・バーテックスのこと、ですか」

こくり、と頷いた春さんを見て、やっぱり、と思った。

「本当は、事前にちゃんと話すべきことだったんだ」

「――――連中と戦うことになるのは、俺たちになるとは限らなかったんスよね

？風さんがそれっぽいこと、言ってました」
「違う」
「――――――――」
「大赦上層部は、君たちが・・・讃州中学勇者部が、勇者に選ばれることになると、わかっていた」
「――――――――なるほど」
つまり、風さんは騙されていたのか。
どこまで本当なのか、わからないけど。
「許してくれるとは、思っていない。どんなに罵られても、きちんと受け止めるつもりだ」
「――――――――――――――――別に　？」
「え　？」
「ここで春さんを責めたって、どうしようもないでしょ。そんなことしてる暇があったら春さん。さっさと俺の手足、直してよ」
「――――輝夜くん。君はそれで、いいのかい　？」

「良いも悪いもないでしょ。もう始まってしまったんだから。まぁたしかに、事前に説明くらいは欲しかったッスけど」
「・・・・・・すまない」
「だからね、春さん。俺が生きて帰ってこられるように、身体、パワーアップして直してください」
「・・・・・・・・・・そうか、君はそういう性格だったね」
「へっへっへ～」
「褒めてないから」
「そんなぁ」
互いに笑い合う。
どうやら春さんも吹っ切れたみたい。良かった。
「よし！それじゃあどんな感じにアップグレードして欲しいかな？」
「んー！それじゃあ――」

春さんの質問に、俺は自分の要望をこれでもかってくらいに告げて、春さんの顔

をひきつらせてみせたのだった。

やりました・・・・・・・

やったんですよ・・・・・！

日付変更と共にステップアップ二週して！

それで足りないから、計算してどこまで切り詰められるか考えて！

そうして出来たお金で回した！

なのに出てきたのは巫女ひよりちゃん！

これ以上、何をどう頑張れっていうんです!?

（訳：爆死しました）

輝夜のＦ　-月下の桃園-

とじとものゆゆゆコラボ、第二弾やるの早すぎぃぃぃぃぃぃぃぃ・・・・・・
もうお金ないよぉ（泣）

ガガァン‼
「ぅおお・・・」
「どうだい。君の要望を可能な限り叶えてみた結果だけど」
「最高」
「それはなにより」
ガショョン、と音を立てて二の腕から空薬莢が排出される。同時に強制廃熱機構が作動し、熱気が俺を襲った。
「あっつ‼」

「ふむ・・・ちょっと向きを考えないとかな ？」
「そーしてくだちい」
このあと、廃熱機構の他、いくつかの微調整を施してもらい、俺は店をあとにしたのだった。

その夜――――
「お・ま・た・せ～♪」
「おう。随分と待ったぞ」
「んもー、そこは嘘でも『今来たところだ』って言ってよー」
「こんなあからさまに時間の必要なセットを用意しておいてかぁ ？」
今、俺と友奈は俺の家の屋根にいる。ウチの屋根は平たくなっている部分があるため、そこに食器類を持ち込んで、小さいながらもお茶会の真似事ができるのだ。
「そんな訳で、本日のお茶菓子は『嵐ヶ丘』のクッキーでーす」
「わぁい♪」
「寝れなくなるから、あんま食い過ぎるなよー ？」

「ふぁーい」

クッキーを頬張りながら答える友奈。その様はリスを連想させる。

「・・・・・・・・ふう」

紅茶を一口飲んで、空を見上げる。

煌々と輝く満月とその周りで瞬く星々。

杏子さんが言うには、バーテックスとは、頂点、という意味らしい。そして、全部で十二体いるバーテックスには、それぞれ、黄道十二星座から名付けられていることも。

明日辺り、風さんも同じ話をしてくれるだろうけども、その前に予習ができるのならば、それに越したことはない。

「――――――――」

ふと、友奈に視線を向けると、空でも、クッキーの方でも無い、別の方向をしきりに気にしていた。

「――東郷のことか？」

「あ・・・・・・うん」

まあ、アイツ見るからに気落ちしてたもんな。
しゃーない。
「友奈、今から特別ゲストを呼ぼうと思うが・・・・どうだ？」
「え――――それって・・・」
友奈の期待のこもった視線を受けて、俺は夜空を舞った。
――――――ｖｉｅｗ、ｃｈａｎｇｅ：美森――――――
「はぁ・・・」
気分が晴れない。
理由は分かっている。今日のことだ。
「（私一人、変身できなかった・・・）」
輝夜くんに至っては変身せずに単身突撃し、友奈ちゃんの危機を救ってみせた。
だのに、私は――――
「（このまま変身できなかったら、私は、みんなの足手まといになってしまう。そんなのは、嫌。でも――――）」
寝台に腰掛け、一人、悶々と考えを巡らせる。

と、その時――――

コンコン、と窓を叩く音が聞こえた。

そちらを見る。

「ハーイ♪こんばんは、お嬢さん」

「え？かぐ、や・・・くん・・・？」

輝夜くんが、窓に腰掛けて私の方を見ていた。

戸締まりはちゃんとしていたはずだけど・・・

そう思って、窓をよく観察していみると、一部が丸く、切り取られていた。問い詰めるように視線を輝夜くんへ向けると、彼はおもむろに左の人差し指を外した。そこには先端から火花を散らせる細長い針があった。それを使って窓を開けたのだろう。

「――――――不法侵入は犯罪ですよ」

「これは手厳しい」

私の指摘に、輝夜くんは肩を竦めておどけてみせた。

「それで、こんな時間に何のご用？」

「うむ、ちょっとね」
そう言って輝夜くんが私の側まで歩み寄ってきて、
「よっと」
「きゃ　!?」
私を抱き抱えた。
こ・・・これは、所謂『お姫様抱っこ』という物では!?
「か・・・・輝夜くん　!?」
「要件は一つ、君を拐いに来た」
「え――――――――!?」
私が何か言うよりも早く、輝夜くんは私を抱えて、窓から、月光が淡く照らす宵闇の世界へと、私を連れ出したのだった。
――――――ｖｉｅｗ　ｃｈａｎｇｅ:友奈――――――
「きゃあああああああああああ！！！」
夜の町に、東郷さんの悲鳴がこだました。
と、同時にがしゃん、と隣で音が聞こえたから、そっちを向いたら――――

「おまたせ」

「――――――」

風にたなびく二人の黒髪。

かぐやちゃんにお姫様抱っこされている東郷さん。

月明かりの下、わたしの目に映ったのは、そんな、キレイな光景だった。

「――――――ふわぁ」

「？どうした友奈。ボケっとして」

「写真一枚、いいかな ⁉」

「思う存分撮りたまえ」（キリッ）

「輝夜くん ⁉」

かぐやちゃんから許可をもらったので端末でめっちゃ撮りまくった。

「うん、良いね ！実に良いよ～♪」

「そりゃなにより」（キメッ）

「これでかぐやちゃんがお姫様みたいなかっこしていたら、もっと良かったのになぁ」

「俺 !?」
「――――ふふふ」
――――ｖｉｅｗ, ｃｈａｎｇｅ:輝夜――――
「よっと――どうだ ？」
「うん、平気。ありがとう輝夜くん」
「呼んだのはこっちだしな。このくらいはやって当然だろ」
東郷のために即興で椅子を作り、そこに座らせる。
よし、これで準備が整った。
「さてプリンセス。君の悩みを聞かせておくれ」
「え・・・」
「かぐやちゃん・・・・・・」
げんなりした様子で友奈がこちらを睨む。
なんだよ、良いだろ別に。回りくどいのって嫌いなんだよ。知ってるだろ？
「――――輝夜くんは、すごいね」
「当然、俺だからなぎゃ !!」スパーン　！

「かぐやちゃんはもう黙ってて！」
「ひどーい」
「ぷっ」
東郷が笑う。
はたかれた頭を掻きながら、友奈と顔を見合わせて、殆んど同時に二人して笑った。

「二人は、風先輩が黙っていたこと、怒ったりしないの？」
ひとしきり笑いあった後、ぽつりと呟くみたいに東郷が聞いてきた。
「うーん・・・それを言ったら、俺だって体のこと、みんなに黙ってたんだぜ？」
「あ・・・」
左腕を叩く。
東郷が気まずそうな顔をしたが構わず続ける。
「確かに、俺のことと風さんのことはベクトルが全然違う。でも、黙っていたと

いう点では、俺と風さんは同じなんだよ」

「――――――」

だからさ、と前置いて俺は東郷に問う。

「東郷は、風さんの何に対して怒っているんだい？今まで黙っていたこと？こんなことに巻き込んだこと？それとも、別の理由？」

「――――――」

「聞かせて欲しい」

真面目な顔で東郷を見つめる。友奈は心配そうに俺と東郷を見守る。

少し、間を置いて、東郷がぽつぽつと語りだした。

「――――あのね、本当はわかっているの。風先輩は、みんなのことを思って、黙っていた。それが、どれだけ苦しかったか。誰にも、家族である樹ちゃんにすら、言えない。きっと、すごくつらかったんだと思う。それは、わかっているの。でもあのとき、私だけ変身できなくて、そのせいで、すごく、もやもやしてて・・・。『事前に言っていてくれたなら・・・』そんな風に考えてしまって・・・・・・」

「東郷さん・・・」

「――――――そう思うのは当然だろ。なにも悪いことじゃない」
「でも友奈ちゃんは変身した。輝夜くんだって、変身できないのに戦った」
「俺たちは『そうしたい』からやったんだ。別に褒められるようなことじゃない」
「でも――――」
「『でも』もへったくれもねえ　!!」パッ――ン
東郷の頭をはたく。
はたかれた東郷はぽかーんと口を開けてこちらを見る。
「死んだばっちゃが言っていた　！『時間とは、塞き止められない川である。永遠に流れ続けるが故に、一度過ぎ去ってしまったモノが、還ってくることは無い。だから、前を見ろ。後ろにばかり気を取られるな。でないと次の時、また取り逃がしてしまう』ってな！」
「――――――そっか」
我点がいったのか、東郷は穏やかに微笑んだ。
「――――ええっと　？」

友奈は首をかしげている。俺の言葉の意味を理解できなかったようだ。
うん。まあ。しょーがないよね。ばっちゃの言葉ってかなり抽象的だからなぁ。
そこがカッコいいんだけど。
「要はアレだ。『後悔先に立たず』ってこと」
「なるほどー　！」
納得がいったようでなにより。
「じゃあ東郷さん。わたし、東郷さんのことを守る　！」
「唐突だなオイ」
えへへーと笑う友奈に少し呆れつつも、東郷を守る宣言には、俺も賛成だ。
「東郷さんは無理しなくて大丈夫だよ。わたしが、東郷さんの分もがんばるから！」
「友奈ちゃん・・・」
「俺のことも忘れてもらっちゃ困るぜ　？」
「輝夜くん・・・・」
「かぐやちゃんもなの　？じゃあ二人でがんばろー！」

「おう。だがな、友奈。俺はお前のことも、守るつもりだ」
「え、わたし !?」
なんでそんな意外そうな顔をしてるんだ、こいつは・・・
「だってお前。ぜってぇ無理するだろ。ストッパー役が必要になると思うのよ」
「そんなのかぐやちゃんだって !」
「おう。そうだな」
「あっさり認めたー !」
当然、俺はお前らよりもオトナだからな！(ドヤッ)
「だからさ、友奈。俺が また無茶をやろうとした時は、傍にいて、止めて欲しい。
こんなの、友奈ぐらいにしか頼めないからな」
「――――もう、かぐやちゃんったら」
「――――私も」
「ん ?」
「東郷さん ?」
「――――私も、戦う」

「ええ　!?でも東郷さ――――」
友奈の口に指を当てて黙らせる。東郷の瞳には、さっきまでと違い、しっかりとした決意に満ちていたからだ。
「私、いつも二人に助けてもらってばかりで・・・だから、今度は私の番。私も二人のことを守る・・・・・・！」
「――――そうか。それなら」
左腕を天高く掲げる。
「「　？」」
「ほら、二人もやるんだよ」
俺に促され、二人も渋々左腕を天高く掲げる。
「我ら三人、輝く月下に宣言す。我ら、互いを信じ、互いを守り、互いの為に戦うことを、ここに誓おう！」
「――――えっと、かぐやちゃん、なにそれ　？」
「『三國志』の『桃園の誓い』。まんまじゃなくてかなりアレンジ加えたやつだけど」

「おおー！じゃ、わたしも誓う！」
「うふふ、私も、誓うわ」
ここに、誓いは成った。
この日交わした誓いを俺は、『月下の桃園』と名付けたのだった。

『鉄火場』について――
西暦時代の科学技術を継承しつつ、更なる発展を目指して日々研究を重ねている大赦直属の組織。しかし、大赦内での地位は低く、与えられる予算も少ない。
その為、喫茶店を経営して予算の足しにしている。
局長は三好春信。

Ｖの襲来　-今度は私が・・・-

勇者部メンバーのカップリングは数在れど、どういうわけか『ふうみも』が取り沙汰されることって滅多にないよねぇ

翌日――――

特に何事もなく授業を受ける。昨日の事で何かしら追及されると思っていたが、そんなことはなかった。

俺ら、目の前で消えたんだぞ？なのになんで、誰も何も聞かない？

「（そういや、風さんがなんか言ってたな。大赦にフォローしてもらうとかなんとか・・・・まさか、それのせい？）」

「かぐやちゃん」

ぺちぺちと友奈に頭を叩かれて、我に帰る。

どうやらもう授業は終わって放課後になっていたらしい。

「大丈夫 ？ぼーっとしてたよ？」
「・・・・・・・・やべぇ、授業内容聞きそびれた」
まあ、いいや。東郷にノート写させてもらうとしよう。
「おーい、東ご――――」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ぼー）」
ブルータス、おまえもか。
「とーごーさーん ？」ペチペチ
「・・・・はっ ！ああ、ごめんね友奈ちゃん」
「珍しいこともあるもんだ。おまえが授業内容聞いてないなんて」
「・・・・・・その・・・風先輩に、なんて言えば良いのかなって思って・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・えぇ、それ今更ァ ？」
「うぅ・・・」
まったく・・・・ウジウジしやがって。
いい加減でやめて欲しいので、車椅子の手摺を持ち、部室に向かう。それに対して友奈は呆れてはいるものの何も言わない。

「オラ行くぞ」
「ええっ !? 輝夜くん !?」
「大丈夫だよ東郷さんっ。わたしが付いてるから」
「だいたいが心配し過ぎなんだよ、お前はさ。ちったあ前向きにモノを考えろっての」
「友奈ちゃん・・・・輝夜くん・・・・・」
「はーい、そんなワケで高速バス『月夜に輝く道標』号。はっしーん　！」
「え　？ちょっ」
前降り無しの廊下ランナウェイ！テンションハイウェイ！ゴーアウェイ！
「イィィィィヤッフゥゥゥゥゥ！！！　」
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！　」
「あーあ、またかぐやちゃんの悪いクセが・・・・」
このあとむちゃくちゃおこられた

「さ・・・・さて、みんな無事・・・で　？なによ、り、だ・・・・よね？」

「――――――」（放心している）
「・・・・・・・・・・・」（拳骨食らって伸びてる）
「え・・・ええっと、友奈さん。東郷先輩と煌月先輩、どうしたんですか？」
「気にしなくってへーきへーき。ちょっと爆走バイクしちゃっただけだから」
「はあ・・・・」
「あー、とりあえず起こそうか・・・・話ちゃんとしたいし」
「はーい」

――

「・・・・と、いう訳なの。わかったかしら？」
風さんの解説により、昨日の出来事が良く分かった。
「樹海にダメージが入ると、現実にも影響がでる・・・・か」
ディバイディング空間的なモンじゃないのかアレ。世の中、そう上手くは出来ていないのね。
「・・・・・風先輩」
「・・・・・・・何？東郷」

「私たちを集めたのは、大赦からの指示・・・・・なんですよね？」
「・・・・・そうよ。私はこの地区の担当として選ばれたから」
「そ・・・そっか、他にも候補の人たちがいる・・・んですね」
「ええ。人類存亡の一大事、だからね」
「・・・・・・・・・こんな大事なこと、どうして言ってくれなかったんですか？」
「・・・ごめん東郷。でも当たる確率の方が少ないくらいで・・・」
「それでも、言ってくれれば何かしらの対策が取れました」
「・・・・・・・・・・ごめん」
「樹ちゃんや友奈ちゃんも、死んでいたかも知れないんですよ」
「・・・・・・・・・・・・」
「と・・・東郷さ」
二人を止めようとした友奈を制する。
ここは成り行きに任せよう。目配せでそう伝える。
「勇者部五ヶ条にもあるじゃないですか。『悩んだら相談』って・・・・」

「っ　!!」

風さんの顔が強ばる。

無理もない。五ヶ条は俺たちで考えた勇者部の約束事。それを部長たる風さん自身が守っていなかったと、東郷は責めている。

「・・・・・・・そうよね。部長失格、よね」

「そうですね。風先輩は、一人で抱え込んだりせず、私たちに話すべきでした」

だから、と一呼吸置いて、東郷が笑って告げる。

「次からは、ちゃんと話してください。どんなことでも、なるべくなら、受け止めますから」

「・・・・・・・・・え　?」

風さんはきょとん、としている。どうも東郷が怒っていると思っていたようだ。

「・・・・怒らないの　？」

「怒ってますよ勿論。でも、それはもういいんです。だって――――」

「勇者部に入ってからの日常が、すごく、楽しかったから」

「――――――ふぇ　？」

「御役目のことを黙っていたことは怒ってます。でも、同じくらい、勇者部に入ってからの日々が楽しかったから。だから、私の中では、その二つは相殺されるんです」

東郷は語る。怒りは当然あるけれど、それと同じくらい、楽しい日々を送れた、と。

「そうですよ風先輩　！もし適性がなかったらわたしたちは会えなかったんですから！」

「確かにそうだな。む、そう考えると適性に感謝だな！」
友奈の言葉に同意する。
「でもかぐやちゃん、勇者じゃないよね」
「それを今言うのかよ!?」
「心配しないで輝夜くん。あなたの分も私が頑張るから」
「待った。それじゃ俺が勇者部辞めるみたいに聞こえるんだが!?」
「えー？だって、勇者部は勇者のための部活でしょー？かぐやちゃんは勇者じゃないんだから・・・」
「え、ちょっ、待っ、まさか俺・・・・クビッスか？」
「今までありがとー」
「輝夜くんのことは忘れないわ・・・」
友奈が手を振り、東郷は涙を浮かべている。
「そんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
絶望に満ちた俺の声が部室にこだまする。
「・・・・はぁ、なんだかバカらしく思えてきた」

「よかったね、お姉ちゃん」

「・・・・・・・うん」

と、その時――

♪～♪～♪～

樹海化警報が鳴り響く。
「連日強襲 !?流石に厳しくねーか!?」
「大丈夫よ。今度は私も戦うから・・・ !!」
端末を握りしめる東郷を見て、頼もしさを感じる。
やだぁ、ちょっち惚れちゃいそう・・・

Ｖの襲来　-御社の»鉛»-

まさかこのタイミングで有償福袋ガチャをやるとは――
ＦＧＯめ、金もう無いっちゅーに・・・・

昨日も見た、樹海の極彩色。
それをまたこんな早くに再び見ることになるとはね・・・
「あれ　？そういえば牛鬼は？」
「牛鬼って、友奈さんの精霊ですか　？」
「うん　！ビーフジャーキーが大好物なんだー」
「え、牛なのに　!?」
「それにしても、どこに行っちゃったのかなあ」
「えー、コホン。あなたの探しているのは、こちらではありませんかー　？」

そう言って俺は自分の髪を――腰まで届く長さの、三編みにした艶やかな黒髪を引っ張り上げ、その先端を友奈に見せつける。

正確には、先端にしゃぶりついた牛っぽいゆるキャラを。

「・・・・・・え？あれ!?牛鬼!?なんでかぐやちゃんの髪に!?」
「んなもん俺が聞きてェよ!!今朝からこんな調子で噛みつかれて！何時気付くかなーって思って黙っていたら、全ッッッッッッッッ然!!気付く気配すら無いッッッ!!!　一体こいつぁどういうことなんだよぉぉ!!!!!!!!!」
「・・・・・・・なんというか、ごめんなさい」
「うぅ・・・ぐすっ・・・俺が何したってんだよぉ・・・・」

自慢の髪を牛に食まれたことがあまりにもショック過ぎて思わず泣いてしまう。
「・・・・よしよし。輝夜くん、大丈夫よ。あなたの髪は無事だから」
見かねたのか、東郷が俺の頭を撫でる。
その心地よさはなかなかで、「このまま東郷のヒモに成り下がるのもいいかもしれない」と思ってしまったほどだ。
「うーん・・・・はっ　！マズい・・・このままではいけないッ！」
もう大丈夫だからと東郷のなでなでから脱出。
死んだばっちゃが言っていた。「女のヒモは確かに甘美だろう。しかし、腑抜けた男は只のペットだ。女に甲斐性見せてこそ、真に男と呼べるのだ」と・・・
「そういう訳だからッ　！俺の甲斐性見せてやるゼ!!」
「良く分からないけど、立ち直ってよかったわ」

「それじゃあ、友奈ちゃん、輝夜くん、見ていて。私の・・・・変身」
端末を握りしめ、東郷が宣言する。
こちらが何か言うよりも早く、東郷はボタンを押した。

直後、青い花弁が東郷を包み込む。それが止んだ時、そこには――――――

身体のラインをこれでもかぁ！ってくらいに強調したライダースーツの様な青い衣服。

普段はリボンでまとめている艶やかな黒髪はまとめず、ストレートに垂らしており、後頭部についてる髪飾りから伸びる四本のベルトの様なモノで直立していた。

敢えて言おう。

「エロい」

と・・・。

「え ///」

「かぐやちゃんっ !!」

思わず口にしてしまった感想を聞かれ、東郷は顔を赤らめ、友奈にはブン殴られ

た。ひどいやひどいや。なにも殴らなくたっていいじゃん本当のことなんだし。

「かぐやちゃんはそろそろ『でりかしー』ってものを覚えるべきだと思いますっ！」

「だってホントのことじゃん。文句なら東郷の服をこんなデザインにした奴に言ってくれ」

「そういえばお姉ちゃん、私たちの勇者服って誰がデザインしたのかな？」

「さぁ？案外神樹様かもね」

「まじかよ。神樹様一生付いて生きます」

「鉄拳！制裁！勇者パァァァァンチ!!」

いつの間にやら変身していた友奈の渾身の右アッパーをモロに食らい、俺は車田飛びで吹っ飛んだ。

「・・・・・・えーと、友奈ちゃん」

「行こっ東郷さん！」ﾌﾟｸﾞｰ

「・・・・・・あんな風に怒った友奈、アタシ初めて見たかも」

「・・・・・・私もだよ」

そして放っとかれる俺。ちくせう・・・・・世間は男にきびちぃゼ・・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

あんたは留守番！と風さんに言われて、四人がバーテックスへと向かって行くのを見送る。

「さて・・・・・・・そろそろ出てきたらどうだい？」

「・・・・・・・・あれだけの醜態晒しておいて、今更格好付けるのか」

嘆息しながら現れたのは、昨日も現れた仮面女。

ガンブレードを二刀流にしている所を見ると、今回は本気なのだろう。

「ガンブレードとは通好みだな」

「私の好みではない。マルコシアスが勝手に決めた」

マルコシアス――なるほど、そいつが仮面女が契約した悪魔か。確か、序列は三十五位だっけ。

「良いのかい？そんな簡単に契約先を教えて」

「構わない。どうせお前はここで死ぬ」

「『死人に口無し』ってこと？物騒な物言いだ」

「連中への見せしめも兼ねてる。だから、ここでお前は死ね」
「悪いね。　せっかく拾った命、こんな所で喪うなんて、勿体無い。だから、抵抗させてもらう・・・・・！」
『ＥＳＥ』をドライブモードで起動させる。
仮面女も、両手のガンブレードを構え、此方の出方を伺う。
「ああ、そうだ。せっかくだ。キミの名前を教えてくれよ」
「――――――名前はとうに捨てた。どうしても呼びたければ »ナマリ»と呼べ」
「・・・・・・・・・ナマリ、ねぇ。金属の鉛、かな」
「・・・・・・・・・答える必要があるのか　？」
「・・・・・・・・・無いね」
会話は此処迄、此より先は――――――

「さあ、俺たちの闘争を始めよう・・・　！」

風を切り裂く、この足は何時でも
終わらない闇の中、進んで行く、戦う為に――

Ｖの襲来　-輝夜VSナマリ-

『ＥＳＥ　ドライブモード』の真骨頂は、エアスラスターによるジャンプ力の強化にある。

これを使用して俺はまず、空中からの飛び蹴りを繰り出した。

しかし、ナマリはそれを半身を反らしてかわす。

「（――チィ！前回の反省を活かしてやがる）」

着地と同時に再び跳躍。ナマリのガンブレードは空を斬る。

「（前みたいな絡め手は使えない。それなら――――）」

ガンブレードは、その特殊な機構故にとても重い。

なので、あまり小回りが効かず、大抵の攻撃が大振りなものになってしまう。しかし重量がある分、それを活かした斬撃の威力は凄まじく、そこに火薬の炸裂が発生させる衝撃を利用した場合、新生したこの左腕でも受け止めることは不可能だ。

対してこちらは徒手空拳。

リーチも一撃の威力もガンブレードに劣るが、その分小回りが効く。もっと言う

と、武器を持たない分相手よりも身軽な点も上げられるだろう。
それらを総て踏まえて、俺が取るべき作戦は、一つ。
「（ヒット&アウェイで相手の攻撃を避けつつ、隙を見て攻撃――――だな）」
正直に言ってこの作戦がどれ程通用するのか、全く以て判らない。しかし、現状行える作戦はこれ一つのみ。
「（そんなら、やるっきゃねーでしょ！）」
意を決し正面から突撃。
と、見せかけてジャンプして回り込み、足払いをかける。
ナマリは見事、引っ掛かった。倒れ行くナマリ。
しかしここで油断はしない。そのままの体制で直ぐに後ろへ跳躍。
案の定、奴の鋒が鼻先を掠めた。
倒れる際の勢いを利用しての一撃だ。生身部分の多い頭部に喰らっていたら、スプラッタ間違い無しだっただろう。想像するだけでもおぞましい。
そんな事を考えつつも、視線はナマリから反らさない。
奴の剣が地面に接触するか否かの瞬間、奴はトリガーを引いた。

ダァァン!!

火薬の炸裂音が響き、発生させた衝撃を器用に利用して、ナマリは起き上がる。

そこに向かって突撃。今度は右から回り込むように。

そのまま蹴りを入れようとして、飛び退いて下がる。先程まで俺が居た空間を、左のガンブレードが薙いでいった。

勢いを殺さず、更に突撃。左ストレートを繰り出す。

ナマリも反対のガンブレードで迎撃する。拳と刃がぶつかり合う刹那――

ガァァン――！

俺の裏拳がガンブレードを弾いた。

なんてことは無い。ぶつかり合う瞬間に拳の軌道をズラして、そのままガンブレードの刀身に裏拳を叩き込んだまでだ。

その一撃でガンブレードを手放し――――たりはしなかったが、大きく隙を作ることは出来た。

しかしナマリも只では転ばない。両方のガンブレードで挟み込むように斬り付けてくる。それを俺はジャンプでかわす。

ガキィィィン――――！

二つのガンブレードがぶつかり合い、けたたましい金属音を響かせる。

その上に着地。

そして左拳をナマリの顔面に突き付ける。

「王手（チェック）だ」

「――――――――――ふっ」

鼻で笑われた。次の瞬間――――

「ぬわっ !?」

足場が崩れた――否、ナマリが武器から手を放した。

その行動は完全に予想外で、体勢を崩される。その隙を狙われ、ナマリのボディブローを防ぐことが出来ずモロに喰らう。

「がふ」

殴り飛ばされた俺は樹海の木の根に叩きつけられる。

「どうした ？その程度か？」

「煽ってくれるね・・・・まったく・・・・」

痛みはあるが、まだ立てる。血が出てるっぽいけど大丈夫、まだ戦える。
「第二ラウンド・・・・・始めるつもりか　？」
ナマリが聞く。その問に俺は――――
「――――――――――――はぁ」
「　？」
「悪い。　もう終わりだってさ」
何を、というナマリの声は上空からの来客によって妨げられた。
ナマリは飛び退いてそれを避ける。
先程までナマリが居た場所にでっかいクレーターが出来ている。その中心、このクレーターを作った本人は――――

「――――――許さないから」

憤怒の表情を浮かべてナマリを睨む友奈だった。

Ｖの襲来　-ナマリVS勇者部-

バーテックス出てきてない！タイトルに偽りアリじゃん！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！　」
ナマリに向かって怒涛のラッシュを繰り出す友奈。
それをナマリは、ガンブレードを使って避ける。
「煌月先輩っ　！」
「――――やあ、樹。バーテックスは　？」
「は・・・はいっ。ちゃんと倒しました」
「そいつぁ重畳の至りだな」
「え　？ちょう――――」
「よく頑張りましたってこと　！」
そんな事してる場合じゃないんだよ。

友奈は現在進行形でナマリと戦闘中。
ナマリは防戦一方だがいつ形勢が逆転するかわからない。
そもそも友奈があんなにも猛っている理由がわからない。
・・・すまん、嘘だ。察しは付いてる。
「煌月・・・・って！あんたそんなボロボロで大丈夫なの!?」
「風さん。俺のことは良い。それよりも友奈を・・・!!」
「友奈が心配なのはわかったから、今はあんたの手当ての方が先!!」
押さえ付けるように俺の頭を叩いて、風さんは俺の右足の付け根にあるロックを解除して右足を外し、そのまま太腿の収納スペースに入ってる治療キットを取り出した。
「ってまって風さん。なんでそれの場所知ってるの!?」
「さっき友奈に聞いた」
あんにゃろう!!
「ねえ煌月。これ、どうやってくっ付けるの？」
治療が終わったのか、風さんはいつの間にか俺のズボンを脱がしていて、外した

右足をくっ付けようと奮闘していた。

「ちょっと!?風さんそれ逆！あー！違う！そうじゃない！ええい!!もう弄んな！俺がやるから!!」

風さんに外された右足を戻す時に一悶着あったが、どうにか手当ては無事終了。

さて戦況や如何に？

「・・・・なるほど、東郷が遠距離から撹乱しつつ、友奈が攻める、と・・・・・なかなか良い作戦じゃないか。少なくとも俺一人では実行できない」

「そりゃそうでしょ」

「一人では無理ですよ・・・さすがに・・・」

「うるさいやい」

しかし、おかしい。どう見てもナマリの動きがさっきより鈍くなっている。何故だ？

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

「――――チィッ！」

友奈の猛攻に耐えるので精一杯だから？そんな訳がない。だとしたら・・・
チュイン！
「――――クソ、なんで・・・」
東郷の援護射撃をナマリが寸での処でかわす。
まさかアイツ・・・
俺は右太腿を前から叩き、ハッチを開ける。
完全に開ききった所で中からスマホが射出された。
それを空中でキャッチ。尽かさず東郷へ電話を掛ける。
「ハロー東ご『輝夜くん大丈夫!?ちゃんと無事!?』無事だから耳元で怒鳴るな!!」
『ごめんなさい・・・あまりにもボロボロだったから・・・』
「・・・・・心配かけたのは謝るよ。ゴメン」
『輝夜くん・・・』
「それよりも東郷。お前、ちょっとこっちに来てくれ。援護射撃しながら」
『・・・・・・・・・何か策があるの？』
「ちょっと・・・な」

さて、後は・・・・

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！」

あっちで猛っている友奈をどうにか止めないと、かぁ・・・・正直しんどい。でもやらないと・・・・

「・・・・ぃよっし！覚悟完・了！」

「ちょっと煌月。あんた、どうする気!?」

「こうするの、さ！」

言うや否や、俺は友奈とナマリの間に割って入る。

友奈の拳を右手で受け止め、ナマリのガンブレードを左手で反らす。

「・・・・・・・・・・かぐやちゃん？」

「落ち着けよ友奈。俺は大丈夫だから・・・」

「・・・・・っ！」

好機と見たナマリはこの隙に後退。俺たちと距離を取った。

「そう来ると思ってたぜ！東郷!!」

「了解！」
「ッ！！！！」
その退路を防ぐ様にして、無数の弾丸が雨のように降り注いだ。その後、着弾地点に東郷が降り立つ。
そのまま逆手に持った二丁の銃を油断なくナマリに向けた。
「・・・・・・・・・・・・ぁ」
「投降して。こうなってしまえば、もう貴方に勝ち目は――」
「・・・・・・・・・・・・・・み」
「・・・・え？」
ナマリが、呻くように呟く。同時に、頭を抱えて苦しみだした。
「・・・・・・・・・・チッ、やっぱそういうこと？」
「かぐやちゃん？」
摘まむように俺の左袖を掴む友奈に目配せする。
一瞬、目を伏せ葛藤する仕草を見せたものの、次の瞬間には決意に満ちた瞳で、こちらを見返してくれた。

「樹！縛って！」
「は・・・・はいっ!!」
俺の号令と共に、樹がワイヤーを射出。同時に友奈がナマリに向かって突撃。
「っ！！！」
先程まで苦しんでいたこともあって、ナマリは見事、樹に簀巻きにされた。そこに友奈が飛び込んでいき――――
「登り――――勇者パァァァァァンチ！！！！」
強烈なアッパーカットを彼女の顎に叩き込む。
その一撃でナマリは上空に跳ね上げられた。
「風さん！大剣を水平に！」
「え？ちょっと、どうすんのよ！」
「こうすんだよ！」
地面と水平に構えられた大剣に飛び乗る。すると風さんも合点がいったらしく、
「そういうことね！じゃあ、思いっきりいくわよー？」
「覚悟は出来てる・・・・やってくれ！」

「よぉっし！」

両足で大地を踏み締めて、風さんは大剣を振り回して俺を打ち上げた。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！　女子力全開じゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「女子力関係ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！」

叫びながらもＥＳＥを稼働させ、フルパワーで噴射する。

その間にナマリは樹の拘束を解いており、突撃してきた俺に対して防御姿勢をとっていた。だが――――

「そいつはもう対策済みなんだよぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

渾身の左ストレートを盾代わりにしているガンブレードに叩き込む。双方共にダメージ無し。

だから俺は、奥歯に仕込んでもらったスイッチを思い切り噛み締めた。

瞬間――――

ガガァァン！！！！！

バキ――――ン・・・!!

左腕に搭載したギミックが発動。ナマリのガンブレードを砕いたのだった。
これぞ、春さんに頼んで造ってもらった一撃必殺の奥の手その一。
その名も『バンカーフィスト』！
仕組みは簡単。火薬を積めた薬莢を二の腕部分にセット。その爆発を利用して拳を打ち出す。
要はガンブレードとパイルバンカーの合の子ってところだ。
しかしそれだけではない。
なんとコイツは二連射出来るのだ！
そこから取って、この必殺の一撃を俺は、こう命名した。

『『震足・打金三段』・・・！」

「・・・・・なっ！」

ガンブレードを砕かれるとは思っても見なかった様でナマリは大層驚いている。その顔面目掛けてガンブレードを砕いた左ストレートが飛ぶ。

ぶっちゃけガンブレード壊しても勢いを殺しきれなくてナマリまで殴っちゃっただけである。

その一撃でナマリは地面に墜落。

後を追うように俺も落ちていくが、ＥＳＥを噴かして軟着陸。同時に左腕が展開し、強制冷却&空薬莢排出。今度は熱風が俺を襲うことはなかった。

「輝夜くん！大丈夫!?」

「お、東郷。出迎えごくろーさん」

「さっきの・・・・あの人は？」

「向こうで伸びて――――」

「ぅああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「――――なかったね。元気そうでなにより」

「なんて言ってるつもり!?」

迎撃体制に入ろうとする東郷を制して、ナマリに背中を向ける。

「輝夜くん!? いったい何を・・・・!!」

「まあ、見てな」

バックル上部に配置された三つのボタンの内、一番左側のボタンを押す。

「ワン」

音声は鳴らないので自分で言う。サウンド機能とか、なんで付けてくれなかったのかなぁ？ なんて思いながら、真ん中のボタンを押す。

「トゥー」
背後で爆音。ちらりと肩越しに見てみれば、ナマリがスーパーな戦闘民族みたいな感じで、霊力を放出していた。
なんかすげーことやってんなぁ、なんて思いつつ、右側のボタンを押す。
「スリー」
三つのボタン全てを押し終えたあと、ナマリがこっちに突っ込んできた。あの感じからすると、逆上して突撃してきた、ってところか。うん。格好のカモだな！
さて、名前は・・・・いいか。友奈、借りるぞ。

「――――――――勇者・・・キック」

バックルに刺さったカギを回す。
瞬間、圧縮されたエネルギーが一気に右足に雪崩れ込む。

俺はそのまま、その右足を、背後に迫るナマリに回転蹴りの要領で叩きつけた！

「ぐあッ!!」

俺の右足は狙い過たずナマリの顔面にクリティカルヒットした。

吹き飛ぶナマリ。先程の俺と同じように、樹海の木の根に叩きつけられたのだった。

訪れる静寂。

それを破ったのは――――

バキン――――という、ナマリの仮面が割れた音だった。

「・・・・・・・・クソ、がァ」

起き上がったナマリは、開口一番にそんな事を口走る。

が、そんな事を気にしている余裕はなかった。

何故なら――――

「お前・・・・・・左目はどうした・・・・？」

半分になった仮面から、まず最初に見えたのは、何も無い空穴であった。
本来ならその部位には眼球があると思われる場所。

そこに、何もなかったのだ。
「・・・・・・あぁ、これか」
まるで古傷を撫でるように、眼腔に指を突っ込んで、ナマリは答えた。
「捨てたよ。使えなくなったから」
あっさりと、そう答えるナマリの表情は、相変わらず読めない。
だが、その声音が先程までとうって変わって、優しげになっていた。
「今日はあんたたちの勝ちだ。おめでとう」
「・・・・・・・・そりゃどーも」
だが、と言葉を区切り、ナマリは告げる。
「此処から先へ行くのならば、覚悟しておけ・・・大事なものを・・・・・喪う覚悟を・・・・な」
言うだけ言って、ナマリは何処かへ飛び去っていった。
「・・・・・・・・・とりあえず、勝った？」
「・・・・・・・・・だと思う」
「・・・・・・・・・そう、か」

「・・・・・・そう、ね」
糸が切れた人形の如く、その場に倒れる。
あーつっかれた！
「お疲れ様、輝夜くん」
「おう、東郷もおつかれ。とんだ初陣になったな」
「ふふ・・・そうね」
そうやって、お互い、笑い会う。
どうにか今日も生き延びることが出来た。
樹海化が解けゆく中、俺は今日の夕飯のことを考えていたのだった。

「ところで・・・・その・・・・・輝夜くん///・・・・・・・ズ・・・・・ズボンは？///」

「あ、おいちょっと待って風さん俺のズボンどこやったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」

翌日、俺のズボンは『怪異!?校庭に突如舞い降りたズボン！』という見出しで、学校新聞の一面を飾ったなんてことは、実にどうでもいい蛇足である。

SSRみーちゃんが来ない・・・・

ＳＳＲみーちゃんどこ・・・・？ここ・・・・？

そうそう、忘れてました。

ＥＳＥ操作用のベルトと、ズボンのベルトは別物です。

なので、ズボンがなくてもＥＳＥの操作は出来るのです。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―墓参り編―

動物愛護団体に怒られそうな内容が少しありますが、お仕事をサボっている子へのお仕置きです。そもそも動物ではなくて妖精なので、どうか見逃してください。

バーテックス及び、ナマリの襲撃から一週間が経過した。

今のところ、バーテックスが訪れる気配は無いらしく、それに呼応してか、ナマリも襲って来ない。俺としては嬉しい限りだがね。

「さて――――と、行きますか」

「はい。行ってらっしゃい。坊っちゃん」

マッキーに見送られてながら、家を出る。その手に白と黒、二つの水筒が入ったビニール袋を持って――――

「・・・・快晴だな」

雲一つ無い青空を仰ぎ見る。

五年前のあの日も、こんな感じの天気だったな・・・・

少しだけ、昔の話をしよう。

物心付く頃まで、俺はずっと病室にいた。
いや、あれは病室というよりも、実験室と呼んだ方がしっくりくるだろう。
目が痛くなるほどに、真っ白な部屋。
大きな鏡（多分、マジックミラー）とベッドしか存在せず、他には何も無い。
そんな部屋で、俺は育った。
時折来る、カウンセラーを名乗る男に体調を訊かれ、身体中にコードで何かの計測器に繋がれた電極を貼り付けられる日々。
そんな退屈な日々から、俺を救いだしてくれた人がいた。
その人こそ、俺の≪ばっちゃ≫――――白鳥文野（アヤノ）であった。

「やぁ、ばっちゃ。去年ぶりだね」

電車で半時ほど揺られた後、少し歩いた先にある白鳥家の墓場。
ここに、ばっちゃも眠っている。
「あれから色々あったな・・・・・どれもこれも、全部ばっちゃが俺を拾ってくれたお陰だ」
ビニール袋の中から白い水筒を取り出し、中身を墓碑にぶちまける。
「今年の出来栄えはどうだい？なかなかだと思うんだ。未成年だから味見なんてしてないけど」
中身は俺お手製の梅酒。製造には許可が必要らしいけど、マッキー曰く「バレなきゃ犯罪では無いのです」だそうだ。その時のマッキーのイタズラ小僧の様な笑みは、今でも覚えている。教職員がそれで良いのか。
「それにしても、今日はやけに静か――――」

遠くから、誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「───だと思ったよ。まったく・・・」

荷物を置いて、悲鳴が聞こえた方角へと走る。

───✝───

ばっちゃに引き取られ、その娘一家であり、ばっちゃと一緒に暮らしていた『煌月家』に養子として戸籍を入れてもらった日。ばっちゃにより《輝夜》と名付けられた。

名付けられてからは、いろんな事を教えられた。

料理、洗濯、掃除、農業───

様々な技術をばっちゃから学んだ。

やがて、大概の事は出来るようになったころ、ばっちゃは俺を連れて讃州市に引っ越した。

ばっちゃ曰く、「元よりあの家はあの子たちにプレゼントする予定だったたし、丁度良い機会だったのよ」とのこと。本当かどうかは知らない。

そこそこ大きめの家に、裏庭に畑まで備え付けられている新しい生活スペース。

そこで、俺にとっての全てが変わる出会いがあった。

つまり――

「こんにちはー！」

友奈との、出会いである。

――＋――

案の定だった。

声の聞こえた場所まで来ると、そこには、真っ黒い大型犬に睨まれて縮こまっている少女がいた。

いつものことなので、いつものように――

「ギャンッ！！！」

犬を蹴り飛ばす。

黒犬は自分を蹴り飛ばしたのが俺であることを理解すると、「あ、やべ」と言いたげな顔で固まった。

「墓守犬（チャーチグリム）。テメェの仕事は女にアプローチすることじゃねえって去年も言っただろーが・・・・・」

「・・・・・・・・くぅん」

「悲しそうに鳴いてんじゃねえ。その毛根こそぎ刈り取るぞコラ」

墓守犬は渋々と墓場の見回りに戻って行った。

「さて、悪かったな。あいつ、可愛い女の子が好きで・・・・・さ・・・・」

「あ・・・・いえ。こちらこそ、助けていただいて・・・・・・・あ」

会話が止まる。目の前の、先ほどまで墓守犬に睨まれて縮こまっていた少女に目が離せない。

どこかで聞いたことのある声だとは思っていた。
どこかで見たことのある少女だとは思っていた。
でもまさか――――

「なんでこんな所にいるの？樹」
「あ・・・・あはは・・・・・」

乾いた笑みを浮かべて、少女――犬吠埼樹は、さっき俺に蹴られた後の墓守犬みたいな顔をしていた。

墓守犬について――

白鳥文野が埋葬された日。輝夜を女の子と勘違いして「へーイ彼女～。ちょっとお茶でもどう？」とナンパしたら、フルボッコにされた上に舎弟として使い魔契約させられた。

可愛い女の子が大好き。

実は犬ではなく、彼女が居ないまま死んでしまった哀れな男たちの怨念が神樹の霊気を浴びて、犬の形になったもの。そこに輝夜が墓守犬という役割を契約の際に当てはめた。

友奈に『クロ』という名前を貰ったが、輝夜は一向にその名前で呼んでくれない。なんでだろーねー？（棒）

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―魔導編―

ここ最近、いろんなことがありましたなぁ・・・

ルパン三世のｐａｒｔ５が終わり、デジライズにタイタモンやミラージュガオガモンが追加されたり、ゆゆゆいだと防人組がついに参戦！メブのＳＳＲ、ゲットしました！

かわりなのかどうか知らないですけど、亜弥ちゃんのＳＳＲが一向にこない・・・・・

巫女の出が悪いなぁ・・・・・みーちゃんに引き続き亜弥ちゃんもか・・・・・

そういや、しずくもこないや・・・・・Ｒすらこないってどんだけ嫌われてるのさ？

泣くよ？

年甲斐もなく泣いちゃうよ？

これでＳＳＲ実装されたときに、Ｒもこないとかいったら、絶対泣き叫ぶよ？

人目も憚らず、咽び泣くよ？

そんな、雨の日の小生――――

「ふむふむ、なるほど・・・駅前で見かけて、気になったから尾行してきた・・・と」
「その・・・・・・すみません・・・」
樹をバカ犬から救出したあと、俺たちは喫茶『嵐ヶ丘』に来ていた。
「別に。構いやしないさ。『探求の心こそ、向上の心』ってね」
「はぁ・・・・」
「輝夜くん、また白鳥先生の言葉？」
そう訊ねてきたのは杏子さん。現在嵐ヶ丘は彼女一人だけ。晴さんは大赦本庁に、マルさんは買い出しに出掛けているのだとか。
「俺が心から尊敬する御方ですんで」
「マルちゃん言ってたよ。『マルたちのことも、そのくらい素直に頼ってくれたらいいのに』って」
「・・・・・・確かに、杏子さんたちには良くして貰ってますけど・・・・・」

「・・・・・えっと」
ん、そういえば樹には何も説明してなかったな。せいぜいが「ここ、俺の行き付けの喫茶店」くらい。
「この人が伊予島杏子さん。活字中毒でロマンチスト。ついでに身長１８０超えの大女」
「最後のは余計だよっ！」
「え・・・えと、犬吠埼樹です！よろしくお願いします」
「あ、うん。よろしくね♪樹ちゃん」
「も一つオマケに言っておくとこの人、ロリコンで可愛い女の子が大好き」
「ええっ!?」
「だから気を付けな。お前、狙われてるぜ？」
「そ・・・・そうなんですか・・・・？」
「ひどいなぁ輝夜くんは・・・・・わたしはただ、小さくて可愛い子が大好きってだけなのに・・・・」
よよよ、と泣き真似をする杏子さん。しかし右手はちゃんとコーヒー（仕事をして）を煎れて

いる。
「そんな杏子さんから見て、樹はどう？」
「超ｇｏｏｄ。わたしの好みドストライク」
「だってさ、気を付けな」
「・・・・・・ならどうしてここを紹介しちゃったんですか」（白目）

―――――――――――――――――――――

杏子さんのコーヒーをすする。うん、今日も美味い。
「今日の出来も最高ッス」
「喜んで貰えてなによりだよ」
「――――――ふぅ」
「樹ちゃんは？」
「はい、とってもおいしかったです！」
「よかった・・・」
安堵している杏子さん。そんなに心配しなくてもここのコーヒーは充分美味いのになぁ・・・

「ところで樹ちゃん。窓際のあの子は、樹ちゃんの精霊？」
「え？」
杏子さんに言われて、窓際を見る。
そこには、樹の精霊である緑色のマリモみたいな奴が、ひなたぼっこしていた。
とても心地よさそうにしている。
「あれ？木霊・・・・いつの間に・・・・」
「あの子かわいい～♪」
「・・・・・木霊って言うのか、アイツ」
三人で木霊を眺める。
静かに、時が、流れて行く――――

「・・・・・・はっ！つい、眠りそうになっちまった」
「あはは。それじゃあ輝夜くん・・・・・・・する？」
杏子さんが上目遣いに訊ねてくる。やれやれ、またかい。まぁ、返事なんて決

まっているのだがね。
「杏子さんからのお誘いだ。無下に断るなんて・・・・・できないよ」
まったく、人には『もっと落ち着きを持て』だのとうるさいくせに・・・・・・
それと樹。別に疚しいことじゃないから、顔を赤らめなくていいから。
「これからやるのは、単なる組み手みたいなモンだよ」
「組み手・・・ですか？」
「おう、それも只の組み手じゃない。魔法によるタイマン勝負だ！」
「ま・・・・・ほう!?」
すっとんきょうな声をあげる樹。
「ああ、そういや言わなかったな・・・・」

「俺、魔法使いなんだわ」

それを聞いた時の樹の表情は、はっきり言って、胡散臭い通販を見ている時の、主婦のそれっぽかった。

ソレに気付いたのが何時の頃だったかは、正確には覚えていない。ただ少なくとも、ばっちゃに外に連れ出された後なのは確実だったと思う。

ある日のことだ。

俺がばっちゃに連れられて通りを歩いていた時、ふと、視界の端に奇妙なモノを捉えたのだ。

その頃の俺は『知ること』に貪欲で、いろんなことに首を突っ込んでいた。

だからこそ、起きてしまった事故。

それが、俺の最初の罪

「さて、もう何度目になるのかな・・・・？」

「記憶にある限りだと・・・・・・少なくとも、二十回以上ッスかねぇ」

≫嵐ヶ丘≪の地下にある、≫鉄火場≪の修練場。

核シェルター並みの強度を誇るこの区画に、俺と杏子さんはいる。
隣には、先日俺の身体を直してもらったガレージがあり、樹はそちらで修練場各所に設置されたカメラを通してモニターしている。
「ええっと・・・・結局、何をするんですか？」
「――――――そういえば、樹には話してなかったわ」
「そうなの？それじゃあ、かんたんに説明しょっか」
杏子さんが樹にレクチャーし始めた。
これから行うのは、俺と杏子さんによる魔術決闘。
ルールは単純。どちらかが降参するか、魔力切れを起こすかするまで戦う。ちなみに、体術による攻撃は反則と見なされ、即敗北。
「そもそも、私たちの扱う魔術っていうのはね、単純に分けて二種存在するの」
「一つは、『内循環型（魔術士タイプ）』自身の持つ魔力を体内で循環させて、体外に≫現象≪として出力するタイプのやり方ね」
「もう一つは『外循環型（魔法使いタイプ）』自身の魔力を餌にして、≫お隣さん≪の力を借りるタイプのやり方よ」

「≫お隣さん≪？」
「簡単に言えば、精霊みたいなモンさ。ともかく見てなって」
言うや否や、俺は右手に魔力を集める。それにつられて、水の妖精たちが集まる。
「わぁ・・・・・」
やがて妖精はビー玉サイズの水球になって、指先に集まり、それを見計らって俺は、右手を拳銃の形にして、水球を射った。
放たれた水球は狙い過たず、杏子さんがいつの間にか（ホントにいつの間に!?）用意していたベニヤ製のターゲットを粉砕してみせたのだった。
「すごい・・・・」
「ベニヤ板程度ならこんなモン軽いって」
「威力調整すれば、鉄板だって撃ち抜けるもんね」
「ふえぇぇ・・・」
さて、デモンストレーションはここまで・・・・
「んじゃ、はじめっか・・・・・!!」
「ところで輝夜くん、≫杖≪は使わないの？」

「杏子さんだって、≫祈りの大弓≪使わないんだろ？」
「――――ふふ♪」
「――――フッ」

「上等!!受けて立つ！！！」

先手はこちら。
先程使った『鉄砲水』を両手で連射。
杏子さんは動かず、ウィンドガード（風を操作する魔法）でそれを回避。しかし、その手は読んでいた。
その隙に生製した『火杭射（金属の杭を炎で射出する魔法）』を打ち込む。
「土よ・・・！」
杏子さんはグランドウォール（土で出来た壁）でそれを防御。
「いつものか・・・・予想通り！」

パチン、と指を鳴らす。瞬間、杏子さんの土壁に打ち込まれた俺の杭が爆発。壁を粉砕してみせた。

「変わらずパワーファイターだね・・・でも！」

杏子さんが地面に手を付けた瞬間、俺の足元と頭上から、拳型の土が迫ってきた。

急いでそこから離れる。

それを待っていたかのように、更に炎・水・蔦・針のトラップが次々襲いかかってくる。

「ちょっと！陰湿過ぎね⁉」

「前回ので私も学習したの。輝夜くんは動き回した方が・・・・・」

パチン、と今度は杏子さんが指を鳴らした。瞬間、俺の両足に鎖が巻き付く！

「引っ掛かりやすいってね♪」

これは――――不味い！杏子さんお得意の――――

「ヘル・スクラッパー‼」

俺の前後左右から壁がせり上がり逃げ道を奪った瞬間、天井が一気に落ちて、俺は潰されたのだった・・・

―――――――――――――――

「・・・・・・この程度じゃないでしょ？もっと、楽しませてよ・・・」

「―――休ませてもくれないとはねぇ、ひどい人だよ」

神樹様の影響で俺たちが操ることのできるのは、『五行思想』における元素――つまり《木火土金水》の五属性のみとなっている。五行思想を元にしているので当然、相剋と相生の関係もそれに準拠する。

ヘル・スクラッパーの属性は金。だから、火の魔法を使えば穴を開けて脱出口を作ることなんて造作もないことだ。

「まだまだやれるよねっ♪」

「もちろん・・・・トコトンまで付き合ってやりますとも♪」

俺たちの狂騒は終わらない。

もっと・・・もっと・・・・・もっと・・・・・!!

「楽しいねぇ！輝夜くん！」

「楽しいッスね！杏子さん！」

「「アハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！」」

「・・・・・・・ひぇぇぇ」

この後、樹は今までよりも更に、俺のことを怖がってしまった。一応フォローはしといたので、大丈夫だとは思う・・・・思いたいです・・・・・

伊予島杏子について――

身長１８３㎝の25歳。白鳥文野が受け持った最後の生徒たちの一人で≫魔導師≪。

重度の活字中毒でロマンチストなのは先祖代々の血筋故だが、自他共に認める程のロリコンなのと、案外血の気が多いのは本人の性質。

美味しいコーヒーを淹れることに誇りを持っているため、自分の淹れたコーヒーを飲まない人、無駄にする人にはキツくお灸を据えようとしてくる（輝夜もかつて、

一度だけお灸を据えられたことがある)。

Kの来訪 -自称・完成型勇者との邂逅-

ついにあの子が登場!!
案外ここまでが長かったような気がする・・・

あれから特に何事も無く、およそ一ヶ月が過ぎようとしていた頃――――
「忘れたころにバーテックス。やれやれだな」
遠くに見えるドリルっぽいモンをくっ付けた異形を眺めて呟く。
『敵、射程圏内に入りました！』
端末から東郷の声が届く。彼女の武器はスナイパーライフルにハンドガン、二丁ショットガンだそうで、別の場所にスポットしている。
「一ヶ月ぶりのお役目・・・・ちゃんとできるかな・・・・」
「えっと・・・・ここを、こうで、こう・・・」
「ほうほう」

やれやれ、何をやっているのやら。
ちなみに今回は俺もみんなと一緒にいる。とは言っても、バーテックス相手に戦うのは・・・・まだ、無理なのだが・・・・
「ええい!!なせば大抵なんとかなる！勇者部ファイトーー！！！」
「「おおーー!!」」
風さんに合わせて友奈と樹が、声を上げる。
その時――――

ドン！ドドドン!!

突如、バーテックスが爆発した。今のは・・・
「え？なに？」
「東郷さん!?」

『私じゃない・・・・』
「じゃ、誰だよ」
「あ！あれ・・・」
樹の声に、頭上を見上げる。すると――――

「ちょろいっ！」

自身の勇猛さを表すかの如き真紅の色をした、スタイリッシュかつスポーティーな衣装を纏った、両手に刀を持ったツインテール少女が、空から降ってきた。
「・・・・・・・ん？」
なんか、見たこと、あるような・・・・？
なんて思っていると、ツインテ少女は刀をバーテックスの眼前に投げた。樹海の、何も無い場所に刺さる刀。

「あいつなにを・・・」
「まさか・・・一人でやる気!?」
風さんの言葉に、ツインテ少女がやろうとしていることを理解した。
彼女は、一人でバーテックスを倒そうとしているのだ。
「封印開始・・・・・！」
刺さっている刀は抜かず、新しい刀を虚空から呼び出して少女はバーテックスへと突撃していった。
「思い知れ・・・・私の実力(ちから)・・・・・!!」
初めて目にする封印の儀。
バーテックスの頭が開き、そこから逆三角錘型の物体が現れた。あれが・・・≫御霊≫ってやつか・・・・
その時、御霊が紫色の煙を吐き出した。
直感的にヤバいと感じた俺は、右手に風の妖精の力を集め、俺たちの前方に解き放った。
「『暴風壁』・・・！」

「きゃあ!!」
「ちょ・・・煌月!?」
「かぐやちゃん!?」
『暴風壁』によって煙は俺たちを避けて行った。その間に――
「そんな目眩まし――――」
少女は煙の中を突っ切って、そして
「気配で見えてんのよ!!!」
御霊を十字に切り裂いてみせたのだった。
「殲・・・滅・・・!」
『諸行無常』
なにあれ。ちょーかっこいー・・・!

――――――――――――

バーテックスが砂になって消えた後、少女が俺たちの前に降り立ち、一瞥。そして
「揃いも揃ってボケっとした顔して・・・・こんな連中が神樹様に選ばれた勇者で

すって？ハッ！」

随分と失礼なことを明け透けに言い放ってきた。

オマケに鼻で笑うという仕打ち。

「えっと・・・・だれ？」

「なによ、ちんちくりん」

「ちん・・・!?」

そこに東郷がやってくる。タイミング良かったな。東郷がいる前でさっきの発言は≫死≪を意味していたぞ・・・・・・多分。

「私は三好夏凛。大赦から派遣された、正真正銘、正式な勇者よ!!」

んん？三好だと？

「つまり、あんた達はお払い箱って事！はい、お疲れさまでしたー」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!」

他の四人がお払い箱という言葉に驚く中、俺だけは別のことに驚いていた。

(こ・・・・こんな奴が、春さんの妹だとぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!)

三好春信

俺が、ばっちゃに続いて、心から尊敬する人物の一人。

文武両道。眉目秀麗。

基本的に物腰は柔らかく、誰に対しても優しく接する。

そんな彼の最愛の妹が・・・・

「転入生のフリなんてめんどくさい・・・けど、私が来たからにはもう大丈夫。完全勝利よ!!」

こんな・・・面白い性格をしていたなんて・・・・・!!

「なぜ今になって？どうして最初から来てくださらなかったんですか？」

「私だって、最初から出陣したかったわよ。けど大赦は、二重三重に万全を喫していたの。最強の勇者を完成させるためにね！」

東郷の問いに、自身の端末を取り出して語る。

最強の勇者とは・・・・また大きく出たモンだ。

「私の勇者システムは、あんたたち先遣隊のデータを元に対バーテックス用の最新のアップデートを施してあるわ！そしてなにより、あんたたちトーシロと違って

専用の訓練を長年受けている!!」
カッコつけて振り回した長箒の柄が黒板に当たり、ガン、と音を立てた。
さっきからなにこいつ、かなり面白いぞ。
「黒板に当たってますよ・・・」
「こりゃ躾甲斐がありそうね」
「なんですって!?」
「け・・・ケンカはダメですよ・・・！」
む、ちょっと険悪な空気。
春さんの手前、こいつとは仲良くしておきたい――というのは建前で、ぶっちゃけこいつ、かなり面白い性格してるから勇者部においておきたい。
というワケで友奈、よろしく。
目配せして友奈に合図。友奈もちゃんと答えてくれた。
まあ、元よりこいつと仲良くなりたがっていたみたいだが・・・・
「フン・・・まあ良いわ。とにかく大船に乗った気持ちでいなさい！」
「そっかー！よろしくねっ、夏凛ちゃん！」

「い・・・・いきなり下の名前!?」
「イヤだった・・・？」
「別に・・・名前なんてどうでもいい・・・」
照れた風に視線を反らして答える。
なんだろうな、この気持ち。こいつのこと、めっちゃ、からかいたい。
まさかこれが・・・・・・恋煩い!?
・・・・・・んなわきゃねーよな。ガキじゃ有るまいに。
「ようこそ、勇者部へ！」
笑顔の友奈が夏凛に告げる。
「は？誰が？」
「夏凛ちゃん」
「部員になるなんて一言も言ってない！」
「ええ、もう来ないの？」
「・・・・来るわよ。あんたたちの監視をしなくちゃだし」
「だったら部員になっちゃった方が良いよ！」

「お、そうだな」
その方が絶対に面白いことが待ってるに違いないからな・・・・
「・・・・お姉ちゃん、煌月先輩がなんか良からぬことをたくらんでる・・・」
「樹、煌月のアレは、≫獲物を見つけた蛇≪の顔だから、近付いちゃダメよ」
よし！では早速―――フフフ・・・

―――――――――――――――――――――

好物のビーフジャーキーを食べ終えて、ふらふら飛び回っている牛鬼の前に、俺の髪を垂らす。
じぃー・・・とそれを見つめる牛鬼。と、突然
かぷり
牛鬼が俺の髪に噛みついた！今だ！
「フィィィィィィィッシュ!!」
勢いよく、髪の毛を振り回し、牛鬼を引き剥がす。吹き飛ぶ牛鬼。その先には、夏凛の精霊と思われる鎧武者が・・・

かぷり、と牛鬼が鎧武者に噛みついた！

よっし！！！　作戦成功！
と、ほぼ同時くらいに
「んぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?!?!?!?」
夏凛が気付き、牛鬼を引き剥がす。
「何してんのよ!?この腐れ畜生め！！！」
『ゲドウメ・・・』
うお、こいつしゃべるぞ!?ますます面白い・・・！
「外道じゃないよ、牛鬼だよー。ちょっと食いしん坊なんだよねー」
「みんな、牛鬼に齧られてしまうから精霊を外に出しておけないの」
「そいつをしまって起きなさいよ！！！」
「勝手に出てきちゃうんだよー」

「ハァ!?あんたの端末、壊れてるんじゃないの!?」
よっしゃぁぁぁぁ!!この反応!!!　これを待っていた!!!
「煌月先輩が嬉々としている・・・」
「こういう時の煌月って、ホント、生き生きしてるわよね・・・・」

この後、友奈がうどんを食べに誘ったが、夏凛は拒絶し、一人帰宅。
友奈は夏凛と、どうやって仲良くなろうか考える。
対して俺は、夏凛と春さんを引き合わせたら面白い反応が見られそうだなぁ・・・
なんて、考えていた。

それが、あんなことになるとは思わずに・・・・

Kの来訪 ―輝夜と夏凜 パート1―

今回の話で、なんか設定に矛盾が生まれた気がする。
行き当たりばったりで進めるからこうなるんだぞ・・・と。

翌日――――
「仕方ないから情報交換と共有よ！」
そう言って、昨日同様、部室の黒板の前に立つ夏凜。
昨日と違うところがあるとするならそれは・・・
「煮干し？」
煮干しの袋を抱えて、バリバリ食べてるところか。
つーか、こいつもか。春さんも煮干し喰ってたな、そういえば・・・
「なによ。ビタミン！ミネラル！カルシウム！タウリン！ＢＴＡ！ＤＨＡ！煮

干しは完全食よ!!」
同じ事を春さんも言ってたなぁ!?
やっぱこいつら兄妹か・・・・
「あげないわよ」
「いや別にいらないわよ」
「じゃあ、このぼた餅と交換しましょう？」
「はぁ？何よそれ」
「さっき家庭科の授業で作ったの」
「東郷さんはお菓子作りの天才なんだよー♪」
「いらないわよ！」

―――――――――――――――――――――

「これまでバーテックスの襲来は周期的なものと考えられてきたけど、相当乱れている。これは、異常事態よ。帳尻を合わせるために、今後は相当な混戦が予想されるわ」
「確かに、一ヶ月前も三体来ていましたね」

夏凜の説明に東郷が、自身の初戦闘の時を思い出す。
あのとき、三体も同時に相手してたのか・・・・
「それと・・・・要注意なのが、≫御社≪」
「おやしろ？」
「――――――ナマリの所属する、組織か？」
「察しが良いじゃない」
ナマリの名に、全員が反応する。
まぁ、あれだけのことをすりゃあな・・・・
「≫御社≪は本来、大赦の裏組織でね。表立ってはできないような、所謂、≫汚れ仕事≪を請け負っていたらしいわ」
「汚れ仕事・・・・」
「そんな連中がどうしてバーテックスと？」
「さぁ？ま、私は別に何が来ても対処できるけど、あんたたちは気を付けなさい。命を落とすかもしれないわよ！他にも・・・」
そう言って夏凜は、黒板に何かを書き足す。

これは・・・・紋様か？
「戦闘経験を貯めることで、勇者はより強くなれる、これを『満開』と呼ぶわ」
「三好さんは、既に満開を経験済みなんですか？」
東郷の問いに、夏凛は顔を背けて「まだだけど・・・」と答えた。
満開・・・・ね。
強すぎる力は何かしらの反動がある。実際、俺も似たような経験してるしな。
「なぁんだ。あんたもレベル1なら、あたしたちと大差ないじゃない」
「っ！あんたたちとは基礎が違うのよ！」
「でもそれって、個人の努力次第だろー？」
「んなっ！」
にやけ面を隠そうともせず、むしろ前面に押し出して煽るように問う。
「あ！じゃあ私たちも朝練やろうよ！運動部みたいに！」
「良いですね！やりましょう！」
「樹、あんた朝起きられないでしょー」
「あ・・・・」

図星を突かれる樹。そんな彼女を友奈が笑う。
「友奈ちゃんも、朝苦手だったよねー」
「う・・・・」
そんな友奈も、東郷に図星を突かれる。結果、全員が笑った。そんな俺たちの様子を見て夏凛は――
「・・・・・・・・なんなのよ、こいつら」
すごく、呆れていた。
そんな夏凛に、友奈が言う。
「『なせば大抵なんとかなる』！」
「はぁ？なによそれ」
「勇者部五ヶ条だよっ♪」
そう言って、黒板の右上に貼られた五つの条文の書かれた紙を指す。

・勇者部五ヶ条・

一つ　挨拶はきちんと

一つ なるべくあきらめない
一つ 良く寝て、良く食べる
一つ 悩んだら相談
一つ なせば大抵なんとかなる

「なるべく、とか、大抵、とか・・・・あんたたちらしい曖昧な文章ね・・・私の中で諦めがついたわ・・・」
「あたしたちは・・・・・・アレよ！現場主義ってやつ！」
「それ、今考えたでしょ」
「あーハイハイ。考え過ぎると将来ハゲるわよ」
「ハゲないわよっ!!」
うーん、このツッコミの切れよ・・・・！

―――――――――――――――――――――

この後、来週末の幼稚園でのお遊戯会のミーティングをやって、今日の部活は終了した。

で、翌日

この日は特に重要な依頼もなかったので、さっさと帰って新開発の酢漬け梅干しの成果を確認しようと思っていたら――――

「煌月輝夜。ちょっと付き合いなさい」

夏凛に屋上に呼び出された。

いったい何の用だと言うのか。まあ、なんとなく察してはいるんだけどね。

「誰もいない屋上に二人きり・・・・まさか！恋の告白!?」

「んなわけあるかぁ!!」

「うん知ってた。他に思い付くのは・・・・あ、来週末のお遊戯会のことか？」

「それも違うわよ！」

「なんと・・・・ではアレか？文化祭の出し物について――」

「いい加減にしろぉ！！！」

「(爆)」

あー楽しい♪

なんだろうね、この、≫打てば響く≪って表現であってるのか？友奈たちと一緒

にいるときとはまた違った楽しさがあるね♪

さて、そろそろ夏凛の堪忍袋が切れそうだから、真面目に聞いてあげましょうかね。

「で、何か俺に聞きたいことがあるのか？」

「――――――――『錬獄』」

「――――――――は？」

『『錬獄』という言葉に、聞き覚えは？」

「――――――――いや、無いけど」

『錬獄』？――――レンゴク、ねぇ・・・

あだ名か、はたまた組織名か・・・

どちらにしても、ロクなヤツじゃなさそうだな

「――――なら、この三人に見覚えは？」

夏凛が三枚の写真を取り出して、俺に見せる。

「――――――――――――は？」

写真には知り合いの顔が写っていた。

いや、知り合いなんてレベルじゃない。
だって・・・・・この人たちは・・・・・・・
「なんで・・・・・マルさん、杏子さん、春さん」
俺の命を救ってくれた人で、ばっちゃ亡き今の、俺の師匠であり、ライバルでもある人たち。
「反大赦組織『錬獄』。その三人はそこで、幹部をやってるそうよ」
「・・・・・・・・なにかの間違いだろ？だって、あの人たちは、大赦の『鉄火場』で・・・・」
「その『鉄火場』。もう三年前に解散したって。なんでも、資金不足に陥って経営困難になったとか」
「・・・・・・・・嘘だ」
「・・・・・・・・・・・信じたくないのはわかるわよ。私だって・・・・信じたくなかった」
夏凛の表情が物語る。彼女は、嘘を言っていない。
「・・・・・・・・・三人の居場所を知って、どうするつもり？」

「――――――――――――――」
「答えてくれなきゃ、教えない」
「――――無理矢理にでも、吐かせてやることも可能だけど？」
パン
夏凛の髪が揺れる。右手の人差し指に、風の妖精の力を圧縮し、夏凛の真横に向けて放ったのだ。
「・・・・・・・・・今のは『太刀風』。威嚇射撃と思ってくれれば良い」
「・・・・・・・・・そ。なら、私も加減しないから」
夏凛が木刀を二本取り出して、構える。
俺は――――

Kの来訪 ―輝夜と夏凛 パート2―

＋春信

「・・・・勇者にならないのか？」
「ハッ。必要ないわよ」
俺の言葉に、夏凛は鼻で笑って答える。
・・・・・・・なるほど。そういうつもりならば
「――――わかった。居場所を教えるよ」
「・・・・・・・なによ。随分あっさりじゃない。怖じ気付いたの？」
「お前が、他人を気遣えるヤツじゃなかったら、徹底抗戦を唱えていたが・・・・・・流石、勇者に選ばれるヤツは違うな」
「――――――なんか、すっごい拍子抜けしたんだけど」
「なんでさ」

「あんた、ちゃんと他人のこと見れる人なんだ・・・・って思って・・・・」
「ばっちゃがそういう事、五月蝿かったからなぁ・・・・」
「ふぅん・・・」
夏凛はそれ以上追及してこなかった。

―――――――――――――――――――――

夏凛と共に、≫嵐ヶ丘≪に向かう。
その道すがら、俺は、春さんとの馴れ初めを夏凛に話していた。
「今から五年ほど前だ。俺は、自分の力を御しきれず、≫自壊≪を起こした」
「≫自壊≪――魔力の暴走によって、自分の身体が膨張し、限界を越えた瞬間、爆発するっていう・・・？」
「それ。ただまぁ、俺の場合は、どうにか大惨事になる前に抑え込んだから、両足と左腕だけで済んだけどな。代わりに内臓のほとんどが修復不可能な程にズタズタになっちまったけど」
「――――――」
「そんな俺を助けてくれたのが春さん――三好春信さんだった」

「――――――――わかってると思うけど、その三好春信って人は・・・」
「・・・・・・・・・お前の、兄弟・・・か？」
「兄貴から、聞いたの？」
「ちらっと、ね」
「・・・・・・・・・そう」
沈黙が流れる。
その沈黙を、夏凜が破る。
「兄貴は、最初からなんでも出来た」
「・・・・・・・万能の天才って、やつ？」
「そんなところ。だから、家族はいつも、兄貴中心に動いていた。両親は兄貴に期待していた。反対に、私のことなんて、見てくれなかった。兄貴のことは誉めるけど、私のことは誉めてくれなかった。兄貴の絵は飾るけど、私の絵は飾ってくれなかった・・・・」
「――――悔しかった？」
「――――そうね。悔しかった。兄貴の背中に追い付きたくて、沢山、努力し

て・・・・でも、追い付けなくて・・・・」

「――――――――――」

「そんな私を見て、兄貴もきっと、呆れて見放したんだと・・・・そう、思っていた・・・・なのに・・・・・」

ぎゅ・・・と両手を強く握りしめる。

夏凛の瞳には、はっきりと解るほどに、≫怒り≪が滲み出ていた。

「あいつは――――私たち家族を切り捨てた！あんなに期待されていたのに・・・!!」

夏凛の怒気を孕んだ声が響く。

俺は、そんな夏凛に、なにも声をかけられない。

そんなことをしている内に、≫嵐ヶ丘≪にたどり着いた。

≫嵐ヶ丘≪は閉店していた。

構わず、中に入る。

「――――いらっしゃい。そろそろ来ると思っていたよ」
「――――兄貴」
カウンターの中。
コーヒーを煎れながら、春さんは俺たちの来訪を待っていた。
「――――春さん。『錬獄』のこと、本当なんスか？」
「――――」
「――――答えてよ、兄貴！」
夏凜が、春さんに掴みかかる勢いで問い詰める。
その肩を掴んで抑え、春さんの返答を待つ。
そして――――
「――――ああ、本当だよ」

無慈悲にも、春さんは肯定してしまった。
「――――――そっか」
「輝夜くん、済まない。君を騙そうとしていた訳ではないんだ・・・・」
「理解は出来るッスよ。納得は出来ねェッスけど」
「・・・・・だろうね。君らしいな」
「――――――なんでよ」
夏凜が、肩を戦慄かせ、呟くように言う。
「――――お父さんも、お母さんも、みんなが、あんたに期待してた・・・・なのに、なんでよ・・・・！」
「――――――」
「ねえ、なんで何も言わないの？なんとか言ってみなさいよ！」
「――――――話はそれで終わり？なら、さっさと要件を済ませてお帰り」
「ッ!!!」
再度、夏凜が掴みかかる。今度は止めない。
自分の目線の高さにある、春さんの襟首を掴んで引き摺り下ろす。結果、春さん

は夏凛の頭突きをモロに食らった。

「ぐおっ!?」

「────フン！」

夏凛の鋭い一撃を食らった春さんは、その場に倒れた。その様を見た夏凛は、鼻で笑ってその場を去って行った。

「・・・・・・・春さん、もうちょぃ、なんか無かったのかよ。あんたさぁ・・・」

────┼────

「・・・・はぁ」

「ため息つく位なら、もうちょぃ上手く立ち回れよ天才」

「如何に《万能の天才》と呼ばれていようとも、妹の微妙な乙女心を理解することは、難しいんだよ・・・」

「いやぁ・・・アレは結構、分かりやすいと思うけど？」

「マジで？」という顔でこっちをみる春さん。

こっちのほうが「マジで？」だよ・・・

「さて、と・・・夏凛も居なくなったことだし、本題に入ろうや」

「・・・・うん。そうだね。君にはちゃんと話さないとだね」

『錬獄』

反大赦組織の名前ではあるが、その実態は≫御社≪の暴挙に堪えきれなくなった元大赦職員たちの集団。

彼らはほぼ全員が、家族を≫御社≪の人間に殺されている。その理由は様々だが、どれも正当性の欠片もない、理不尽極まりない理由で殺された。

「・・・・・・・やっぱ、そういう事だったか」

「うん。僕の場合は、僕自身が殺されそうになったんだけどね」

「・・・・・・・もしかして、杏子さんとマルさんも？」

「あの二人は少し違うかな・・・どちらかと言えば、僕と同じ理由だよ」

「・・・・・・・成る程ねぇ」

春さんの淹れたコーヒーを飲みながら、思考する。

≫御社≪

大赦の暗部組織。
それがなぜ、バーテックスとの戦いに手を出してきた？
「・・・・・・・・あー！もう!!わからん！！！」
「・・・・・・・・相手は大赦が創設されたときから存在していて、しかも表だっての行動は全くしてこなかった連中だよ？僕にもわからないのに、君に解るわけないでしょ」
「言い方が腹立つけど、実際その通りなんだよなぁ」
「とりあえず、僕から話せるのはここまで。これ以上のことは、僕も知らない」
「・・・・・・・・・・で、夏凛のこと、どうするんスか？」
「――――――――」
春さんは、寂しげな表情を浮かべて、そのまま黙ってしまった。

『錬獄』について

反大赦を掲げる秘密組織。
その実態は御社によって、親族を理不尽に殺された元大赦職員たちによって、作られた組織。
大赦の組織改革を目標に日夜行動している。
現在も、大赦内部にスパイを送り込み、様々な情報を得ている。
≫嵐ヶ丘≪はカモフラージュのための拠点。

Kの来訪 ―輝夜と夏凜 パート3―

シトナイちゃん二枚抜きしてしまった・・・・
初めてだよ、二枚抜きなんて・・・・
ＦＧＯ初めて３年くらいするのに、今まで星五二枚抜きしたことなかったからね。呼札で星五はたまにあったけどさ・・・・
とりあえず、ウチのカルデアにようこそシトナイ。
盛大に歓迎してあげよう。（お菓子の山を抱えて）

兄貴に頭突きをかましてから、数日経った。
今日は幼稚園でお遊戯会をやる日。
私はいつも通り勇者部の部室に来ていた。
こんなこと、勇者のやることじゃない。
でも、今は、そんなことでも良いから、とにかく何かをしていたかった。

兄貴のことを、なるべく、考えないように・・・

「来てやったわよ」

部室の扉を開ける。中には誰もいない。

ちょっと早く来すぎた？

仕方ないから待つことにした。

三十分後――

「遅い・・・・」

十時集合だったんじゃなかったの・・・・？

全く、弛んでる・・・・

更に三十分後――

いくらなんでも遅すぎる。
「まさか・・・」
渡された用紙を確認する。そこには――
「『現地集合』・・・・しまった。私が間違えた・・・・」
こういう時は、ちゃんと謝らなきゃ。
ああ、でも、なんて言おうか？
正直に話す？
どうしよう・・・・どうしたら・・・・
と、その時、手にしたスマホが鳴動する。
「うわぁ!?この番号・・・・結城友奈!?」
向こうからかけてきた！
どうしよう!?とりあえず、出て・・・・

ピ

「あ・・・」

間違えた。出ようと思っていたのに、切っちゃった。

どうしよう。

かけ直す？なんて言って？

こういう時、兄貴なら――――――

そこまで考えて、ふと、まるで冷や水でも浴びたみたいに、頭が冷静になった。

「・・・・・なにやってんだろ・・・・私」

そうだ。私は勇者として、バーテックスと戦うためにここにいるんだ。

幼稚園でお遊戯会をやるためでも、兄貴のことに悩まされたりするためでもない！

だから・・・・・良いんだ。

「・・・・・・・・・帰ろ」

扉の取っ手に手をかけて、開ける。

「あ、いた」

「んぎゃぁぁぁぁ！！！！！！」

目の前に、煌月輝夜がいた。

―――――――――――――――――

「・・・・・・いきなり叫ぶのはひどいと思うなぁ・・・」

「あ・・・・ああああんたがいきなり前に出てくるからでしょうが！！！」
「出てないよー、扉の前に立ってただけだよー」
「同じことでしょ！！！　てか、いったい何時から・・・」
「友奈から電話かかってきたときから？」
「居たならあんた呼びなさいよ!!」
ゲラゲラと目の前の男が笑う。
こいつは最初に出会った時からこうだ。私の事を小馬鹿にしている。実に腹立たしい。
「――――――ふぅ。あー楽しい♪さ、そんじゃ行こうか」
「え・・・・あ・・・・」
「跳んで行けば直ぐに着く。ほら、みんな待ってるぜ？」
「待って！」
煌月が立ち止まる。
「――――――どうした？」
「あ・・・・えと・・・・その・・・・」

どうしよう・・・・・咄嗟に呼び止めてしまった・・・・・

煌月が訝しげにこちらを見る。

「――――――――ふむ」

左腕を振り上げる。するとそこからスマホが飛び出した。それを右手で掴んで、どこかにかける。

「――――――――――――――――あ、風さん。俺。煌月」

相手はどうやら犬吠埼風のようだ。そりゃ当然か・・・一応アイツがこの勇者部の部長だし・・・・

「・・・・・・・うん。夏凛だろ？実はさぁ――――」

きっとこいつは全部しゃべる。私が間違えたことも、結城友奈からの電話を間違えて切ってしまったことも。

「見つかんなかったんよ。部室にいると思っていたのになぁ・・・・」

え・・・・・

「うん。そっちはこれから。その場合はもう俺ら合流できないと思うから、そん時はよろしく。んじゃ！」

ピ

「・・・・・・・・なんで？」

「なにが？」

「なにが・・・・・って・・・・・」

煌月の》黒（自壊によって魔力が混ざった）をベースに赤と青を混ぜ合わせたような》色の瞳が私を見つめる。

「ほら、帰るんだろ？」

「――――――うん」

何故だか、私は、その瞳の彩に何も言えなくなってしまい、素直に頷いていた。

――――――――――――――――――――――――

「ふーん。ここが夏凜の家？マンションの一室借りてんだ」

「――――て、なんでウチまで付いてくるのよ!!」

「だってさっき風さんに『夏凛の家まで様子見てくる』って言っちまったもーん」
「――――――――はぁ、もういい。ちょっと訓練してくるからあんたは・・・」
「お、なんか楽しそう。ついて行っても良い？」
「・・・・・・・・・・・・・・勝手にしろ」
そんな訳で、いつもの浜辺に来た。
――――――――煌月も一緒に。
「へぇ・・・・ここで自主練してんだ」
「――――――――話しかけないで、気が散る」
「あーい」
煌月が黙ったところでいつものように素振りをする。
私の勇者の武器は二本の刀。
元々は二丁斧だったらしいが、取り回しを考慮して刀になったらしい。
だから、今やっている素振りもそれに合わせたものとなっている。
二刀流になる、ということで様々な文献を読み漁った。
二刀流と聞いて真っ先に思い付く『宮本武蔵の剣術（二天一流）』に始まり、それっぽい流派

の技の数々。
読んで、学んで、実践して、自己流に改良していった。
それが今、私が扱う剣術。
「――――ふぅ」
「――――へえ、すげぇモンだな」
見れば、煌月が感心したような顔でこちらを見ていた。
「完成型勇者として、当然のことよ」
「でもさ・・・・ちょっと、迷いが出てたぜ」
「っ!?」
いたって真面目な顔で煌月が言う。
なんだってこいつは――――
「・・・・・・・・うるさいわね。あんたには関係」
「無くは無い。だろ？」
「――――」
その時、煌月が立ち上がって私の正面に立った。

「・・・・・なによ」
「いやなに。ちょっと手合わせ願おうと思ってね」
「・・・・・・は？」
「こっちは手加減してあげっからさ、全力でおいでよ」
「・・・・・・・・」（プチッ　）
煌月の態度に、正直色々溜まってた私はあっさりキレた。
「上等じゃないの！吠え面かかせてやる!!」
叫び、煌月に向かって突撃していった。

Kの来訪 ―輝夜と夏凛 パート4―

SSSS.GRIDMANを先週位から某動画サイトにて見始めました。
グリッドマンかっこよかったわぁ・・・・(恍惚)

輝夜は突撃してきた夏凛を前に棒立ちのままでいる。
夏凛が左の木刀を振り下ろす。
輝夜は、それを最小限の動きでかわし、追撃で来た右の木刀を左手で弾いた。
「やるじゃないの！」
「まあね」
「なら・・・・これはどう!!」
右払い、左振り下ろし、右振り上げ、左突きによるコンビネーション。
やはり輝夜は、それを最小限の動きでかわし、最後の突きに至っては左手で掴ん

でみせた。

「――――く!?」

慌てて引っ張るが、木刀が輝夜の手から抜ける気配は微塵も無い。

「――――一つ、」

「!?」

咄嗟に夏凜は、輝夜が持ったままの木刀から手を離し、距離を取る。

「昔話をしようか」

「――――は？」

「ほれ」

「あ」

木刀を投げ返される。夏凜は慌ててそれを拾った。

「――――」

「ほら、どうした？打ち込んで来なよ」

このまま輝夜の言うことに従うのは癪だったが、一本も取れないままの方がもっと癪だったので、夏凜は打ち込むことにした。

「これは、俺の知人たちの話をまとめたものなんだがな・・・」

そんな前置きをしてから、輝夜は話を始めた。

―――――――――

春さんには奥さんがいたって話、知ってる？あ、知ってる。ならOK。

その奥さん――名前は『三好結女』っていうんだけど・・・それも知ってる？あ

あ、会ったことあるんか。じゃ、話が早いね。

結女さんは五年前、何者かによって連れ去られて、そのまま亡くなったんだと。

・・・・動き、止まってるよ。

――――――そうそう。もっと激しく打ち込んでおいで。

さて、続きを話そうか。

当時、結女さんは妊娠していたらしいよ。多分春さんのことだし、産まれてくる子供の名前でも考えながら、毎日を幸せに過ごしていたんじゃないかな？

でも、それも唐突に終わりを向かえた。

その日、産気付いた結女さんを救急車に乗せて、自分は後からタクシーで、掛かり付けの病院まで向かったそうだ。

病院に着いた春さんを待っていたのは、何者かによって結女さんの乗った救急車

が結女さんごと持ち去られた。という知らせ。
当時、春さんは大赦内で結構上の地位にいたんだってね。自身の権限で可能な範囲で結女さんの行方を探し回ったそうだよ。
結局、見つからなかった訳なんだけどさ。
それから数日後――
春さんの家に連絡が来たそうだ。

結女さんが、遺体となって、発見されたって、連絡が――

・・・・・・だから、動きが止まってるってば。
それとも、もう、止める？
――――――そう。それで良い。動いて。もっと。
よし。それじゃ、続けようか。

と言っても、俺が話せるのはここまでなんだけどさ。
こっから先は誰に聞いてもわからなかった。
多分、春さん自身にしかわからないと思う。
だから、俺の話はここまで。
打ち込みも、ここまでにしようか・・・
お疲れさん。

―――――――――――――――――――――――――

「――――――――」
「どうだった？自分の知らない春さんの事を知って」
「――――――あんた、いったい何がしたいの？」
夏凜が怨めしそうに輝夜を見る。
その視線を受けて輝夜は
「・・・・・・強いて言うなら、仲直りして欲しい・・・かな」
「――――――なによ、それ」
「春さんには色々世話になってるからさ。余計なお世話なのは百も承知だけど・・・」

「――――――そう」
夏凛が、自分の顔を拭う。
「あんたの言うことが本当かどうか、確かめる。その上で、考える」
「うん。今はそれで良いんじゃない？」
輝夜が薄く笑う。
「さ、帰ろ帰ろ。多分みんなもう待ってるかもな」
「へ？みんなって――――」
「あ、いや。なんでもない。さー！帰ろー帰ろー」
「へ？え？ちょっと!?」
輝夜に引っ張られて、夏凛は自分の家に帰宅したのだった。

その夜、勇者部により、夏凜の誕生日パーティーが開かれたのだった・・・

―――――――――――――――――――――

数日後―――

「―――輝夜」

「ん？」

夏凜が輝夜を呼ぶ。

二人は屋上に移動して話を始める。

「大赦に連絡したけど、兄貴の事については知らぬ存ぜぬを決め込んできたわ」

「―――なるほど、そう来たか」

「まさか、大赦がここまで真っ黒な組織だったとはね・・・」

「こんなんでも、神樹様を祀ってる組織だからな。影響力目当ての薄汚い奴がいてもおかしくはないさ」
「――――あんたって、意外と頭良い？」
「まっさかぁ！」
ハハハと笑う。
そんな輝夜に嘆息する夏凜。
「――――私、もう少し探りを入れてみる。結女さんがなぜ死んだのか、それを調べるために」
「そうか、頑張れよ。そんなお前さんに――――ほれ」
輝夜が何かを夏凜に投げ渡す。夏凜はそれを受け取る。
「・・・・・箱？」
「匿名希望さんからのバースデープレゼント」
「！それって・・・・」
輝夜は唇に指を当てて沈黙。
その様子から察した夏凜は、渡された小箱を暫く眺めて、意を決し、包装を開け

た。

「――――リボン？」

中には、鈴付きのリボンが入っていた。

「――――へぇ、なかなか洒落たモンプレゼントするじゃん」

「――――――――」

夏凜は今着けているリボンをほどき、プレゼントされたリボンを新たに着ける。

「・・・・・似合ってるぞ、夏凜」

「――――――――ありがとう。そう、伝えておいて」

赤い顔で輝夜にそう告げた夏凜には、年相応の少女らしい柔らかさがあった。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―覗き編―

単なる番外編。
執筆練習とも言う。
特に考えないで頭空っぽにして書いた。

夏と言えば、プールである。

プールと言えば、水着の美女である。

ここ、讃州中学では、一昨年から女子更衣室の覗きが多発していた。果ては下着

の盗難事件まであった程だ。(ちなみに盗まれた下着は、被害にあった女子生徒たちが鬼の形相で犯人を追い詰め、フルボッコにした挙げ句に簀巻きにして逆さ釣りしたため、犯人が泣いて土下座しながら謝罪と同時に返還した)

被害に合った女子生徒の一人は「いやぁ！アタシの女子力が暴発しちゃったワ♪」などと、訳のわからないことを言っていたが、これは由々しき事態である。

なにせ、この騒動に関わる生徒は、讃州中の男子生徒全員だったのだから！

実行犯の少年たちが、犯行をしやすいように、全員で一丸となって幇助し、黙認したのである。

教師たちはこれに頭を悩ませた。

「このままではマズイ。しかし、全男子生徒が関与しているとなると、流石に・・・・」

この問題に対し、去年発足したばかりの勇者部が立ち向かった。

正確には、勇者部部員・煌月輝夜が、である。
一部の教師からは勿論、反対意見も出た。
しかし、彼がある条件を出したところ、反対派の教師たちも沈黙した。
その辺りについては今回は割愛させていただく。
さて、輝夜が防犯に着いた結果なのだが――

見事、覗き被害及び盗難被害0件を達成してみせたのだった！

それでは、どのようにして達成したのか。
これから諸君にご覧いただくのは、実際に実行犯たちが経験したことであり、ありのまま起こった現実である。

――

「ハァ・・・ハァ・・・」

「くそ・・・なんで・・・こんな・・・」
炎（演出用）にまかれながらも、少年たちは進む。
不意に、銃声が鳴り響く。
「!?くっ・・・」
少年たちがしゃがみ、その頭上を弾丸（非殺傷）の雨が通り過ぎる。
「・・・・・うぅ、もうやだ・・・こんなはずじゃ・・・」
「諦めんなよ！」
「だってよぉ・・・・」
「チッ・・・・もういい！オレは一人で――――」
『行く』という言葉が彼の口から出ることはなかった。なぜなら――――
彼の頭部目掛けて、バズーカの弾頭（非殺傷）が飛んできたのだから。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?!?!?!?」
爆発によりアフロヘアになって倒れた少年を置いて、泣き言を言っていた少年が来た道を全速力で戻りだす。
「もうやだ!!僕おうち帰るぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!!!!!!」
幼児退行まで始めた少年は、しかし、家に帰ることが出来なかった。
「!?!?!?!?!?」
少年の右足が、何かによって引っ掛けられる。転んだ先には落とし穴。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
少年も敢えなくリタイアとなった。

「クソ・・・今ので『コンバットヤマーダ』と『グレッグタニィ』が殺られたか・・・・・」
「おい、どうするんだよ御木本(みきもと)」
すぱーん！
「『モールドミッキー』と呼べって何度言わせる!!」
「だからお前のコードネームはセンス無いって何度も言ってるだろうが!?!?」

「ちなみにお前は『対魔忍』な」
「なんでそんな敵にすぐ捕まっちゃいそうなコードネームにしたのさ!?!?」
「だってお前の名前、『広末忍』だろう？」
「無理矢理こじつけなくていいよ!?それだったら本名で呼んでよ!?!?」
馬鹿な会話を続ける御木本と広末。
ふと、御木本が真面目な顔で広末に告げる。
「オレ、この作戦が終わったら・・・結城に告白しようと思ってるんだ・・・」
「え!?結城って・・・同じクラスの、あの結城か!?」
「ああ・・・いやまぁ、勝率低いのはわかってんだけどよ？でも・・・・オレは・・・・」
「御木本・・・・オマエ・・・・」
その時だった！
「アブねぇ!?」
「うわっ!?」
突如として襲いかかったレーザー（きっと非殺傷）から御木本が広末を庇って突

き飛ばした！

「うぅ・・・・・御木本・・・・大丈・・・ぶ・・・」

起き上がった広末が見たのは――――

レーザーによって、頭髪が大破した、御木本の姿だった・・・

「み・・・・・・御木本ォォォォォォォォ!?!?!?!?」

駆け寄る広末。御木本は弱々しく、告げる。
「く・・・・オレはもう・・・ダメだ・・・」
「何を言ってる!?たかが髪の毛が燃え尽きただけだろ!?」
「いいや・・・・自分の事だ・・・・よぉく、わかるさ・・・・」
「御木本・・・・」
「対魔忍・・・オレを置いて・・・先に行け！」
「!?何を・・・!?オマエを置いて行けるかよ!?」
「ワガママを言うな!!」
御木本が広末を叱責する。
「良いか・・・オマエがここで諦めたら、何のためにアイツらは犠牲になった・・・！アイツらの死を無駄にしたくないなら、オマエは行かなくちゃならねぇんだ!!」
「でもよ・・・でもよぉ!!」
「どうしても行きたくねぇってんだったら仕方ねぇ・・・オマエが東郷に『養豚場のブタでも見るような眼で見下して欲しい』と思っていることを全校生徒中にバラしてやる」

「!?!?!?」
「バラされたくなかったら迷うな　！　とっとと行けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
広末は走り去って行った。
「そうだ・・・行け・・・オマエが止まらねぇ限り・・・オレたちはオマエと共にいる・・・だから・・・止まるんじゃねぇぞ・・・！」
か細いその言葉は、辺りの炎（演出用）に呑まれて消えた。

「うぅ・・・・・クッ!?」
涙で視界が滲む中、広末はひた走る。
「山田・・・谷口・・・御木本・・・オレは・・・・・オレはぁ!!」
その瞬間、広末の中の何かが弾けた！
「――――――――!!」
広末に向かって放たれる無数の弾丸（非殺傷）

その全てを、広末は避ける。
「ああ・・・・見える・・・・見えるよ・・・・・！オレにも敵が見える！」
いったい彼は何を見ているというのか・・・・
「――――――そこ！」
飛び交う弾丸（非殺傷）の軌道から発射地点を予測。そこに向けて小石を投げる。
投げた小石はタレットに命中。見事、爆発。
しかし、射線はまだ彼を捉えて離さない！
「――――――!!」
広末はそれを、最小限の動きで誘導。タレット同士が撃ち合うように仕向けてみせた！
見事、その試みは成功し、ほぼ全てのタレットが爆発四散。
残りの障害は目標までの距離のみ！
「このまま――――――」
しかし、そうは問屋が卸さない！
御木本の頭髪を全損させたレーザーが、広末を襲う！

「!?」
しかしなんと！広末はそれをいとも簡単に避けてみせた！
そして――――
「邪魔だッ!!」
レーザータレットに急接近。そして、破壊。
爆発を背中に受けて、広末は最後の加速をかける。
そして――――
「やった！ついに――――！」
広末はそのまま女子更衣室（ゴール）の窓ガラスをぶち破り、内部に突撃。
衝撃を転がることで相殺。

し終えた、その時――――

べちん、と顔面が何かにぶつかった。

それは、不同先生の股間であった。

「おや、広末くん。もうみんな着替え終えた後ですよ」
広末は動かない。
「この後は私の授業です。広末くんも遅れないように」
それだけ告げて、不同先生はその場を立ち去っていった。

静寂が、辺りを支配する。

「う・・・・・・・・・・う・・・・・・・・」

行き場を無くした、青春の律動（リビドー）が、少年の慟哭となって、辺りに響き渡っていった・・・・・・

「――――以上が、今年の防犯の成果だ」
「はーい。煌月もお疲れさん。先生には私から報告しておくワ」
「いやいやちょっと待てぇ!?!?」
？を頭に浮かべる輝夜と風。
「いったいこれは何!?」
「更衣室の防犯設備」
「ここまで厳重にする必要性!?」
「だって～、下着ドロまで出たのよ？このくらいはしておかないと！」
「死人が出るわよ!?」
「非殺傷タイプだから大丈夫！」
「んなわけあるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
夏凛のツッコミは、今日も冴え渡っていた。

元ネタは『フルメタルパニック？ふもっふ』のアレ。
単なる息抜きだからね、しょうがないね。
今回出てきたモブが、今後出てくるかは不明。

少女たちのＭ ―私と彼の、微妙な関係―

友達以上、恋人未満な関係って、良いよね・・・・
恋人同士でいちゃラブするのも良いけど、それとは違った味わいがある、と言うか、なんというか・・・・

「東郷～？これの配置はこんなモンで良いか～？」
「どれ？――――――うん、良いと思う」
ある日の勇者部。
友奈ちゃんと夏凛ちゃんは、剣道部のお手伝いに。
風先輩と樹ちゃんは、花壇の草むしりに行っていて、残った私と輝夜くんは、部室にてホームページの更新作業を行っていた。
基本的には私の担当ではあるのだが、諸用で部活に参加できない時等は、輝夜くんが代理を務めてくれている。

その腕前は、ともすれば、私よりも早く正確なのではないか、なんて言われる程の物なのだが、今日まで誰も、彼の作業している所を見たことがなかった。
「まさか、こんな方法でプログラミングを行っていたなんてね」
「ふふん♪誰にも真似できない俺だけの技よ！」
輝夜くんの操作により、高速で英語を並べていく画面。しかし今、彼はキー操作をしていない。そもそもキーボードを使用すらしていない。ではどうやってタイピングしているのか？
それは、輝夜くんの左腕に注目すればわかる。
今、彼の左腕からは管が伸びており、それがパソコンと繋がっている。
輝夜くんに曰く、左腕とパソコンを繋ぐことで、頭で考えるだけでほとんどの操作を行えるのだとか。
「左腕のことを知らないと、何をやっているのか分からないわね」
「別に秘密にしているワケじゃー無いんだが、説明とかめんどいから。基本、しゃべらないようにしてんのさ」
「・・・・・そこを面倒くさがって、隠蔽工作は面倒がらないあたり、輝夜くんら

しい考えね」
「それ褒めてる？」
「ふふ、どうかしらね？」

―――――――――――――――――――――

「イチイチ日本語に変換せにゃアカンっつーのがめんどいんだが・・・・」
「最初から日本語で組んでおけばよかったのに・・・」
「俺は基本ＡＤＡしか使わないの！」
「えい・・・・？」
「だー、もう!!わーったよ!!ちくしょーめ！！！」

―――――――――――――――――――――

「・・・・・・終わったぁ」
「お疲れ様。はい、ぼた餅」
「あー」
　口を開けてこちらを向く輝夜くん。
「・・・・・・食べさせて欲しいって？」

「あーー」
「駄目です」
「・・・・・・・・ちぇ、しょーがねーなぁ」

「・・・・・・・輝夜くん。一つ、聞いても良いかしら？」
「答えられることなら」
「この前の人形劇のとき、舞台が倒れたでしょ？あのとき、園児たちにぶつかりそうになって、そのあと壊れた。あれ、輝夜くんがやったんじゃないの？」
「――――――まぁ、もう隠す意味も無いから良いか」
輝夜くんはそう言って、右手を広げた。
その右手の中に、風が渦巻く。
「これは――――」
「『魔法』だよ」
「魔法・・・・・？お伽噺の？」
「ゲームとかにあるやつみたいに、便利に使えるワケじゃねーけど」

「そう・・・それで、舞台を壊したの？」
「こっそりやればバレないかなー・・・って思ってたんだけどなぁ・・・・」
右手の中で渦巻く風をそのまま握り潰して、輝夜くんは机に突っ伏した。
「別に責めるつもりは無いわよ？」
「とーぜん。誉められこそすれ、責められる理由なんてあるもんか」
「舞台壊しておいて？」
「コラテラルダメージ。園児たちを救うための、必要な犠牲だったのさ・・・・」
「はいはい。そういうことにしておいてあげます」
何もする事が無い時の私と輝夜くんは、大抵、こうしてとりとめの無い会話を繰り広げている。
「東郷の足」
「え？」
「二年も動かして無いってのに、なんでそんな美脚なん？」
「ええ・・・？」
「知り合いに聞いたことがあるんだがね？筋肉ってのは、使わないとドンドン衰

えていくそうだ」

「ええ、私もそれは知ってるわ」

「だったら、二年も使ってない東郷の足はさ・・・・筋肉痩せ細ってかなり可哀想な感じになっていても、おかしくは無いハズだよな？」

「えっと・・・・・ほら！私、定期的にお医者さんに診てもらっているから・・・」

「――――――――ふぅん？」

「――――――――理由に、なってない？」

「――――――――とりあえず、そういう事にしといてあげよう」

「納得してくれた・・・・ということ？」

「疑問は尽きないけどねー」

輝夜くんは、勉強はそれほどできないけれども頭はそこそこ良い。回転が早い、とでも言えば良いのだろうか。

だから、そんな彼が疑問に思うと言うことは、私たちの知らない何かがあるということで――――

「まあいいや。それより東郷！膝枕ぷりーず!!」

「は？」
さっきまでの真面目な態度は何処へやら、私にそんな事を要求してくる。
「なんで私？」
「今ここに東郷しかいないから」
「なんで膝枕？」
「俺が足フェチだから」
「それ、理由になってないと思うんだけど・・・・」
やっぱりこの前の責任、取らせようかしら？
「いやさ、ここんとこ色々忙しかったから・・・・東郷の素晴らしいおみ足様に癒してもらいたくて・・・・」
「――――――――」
「うわぉ。ゴミを見るかのような視線。その手の人にはご褒美なんだろうなー。俺は違うけど」
「――――――――――――――――」
「頼むよ東郷～。ね？」

「――――――――――もう、仕方ないわね」
なんだかんだで、輝夜くんにはいつもお世話になっているし、時々なら、甘えさせてあげても良いかしら？
「ちょっと待ってね」
車椅子を操作して、輝夜くんの隣に移動する。
「――――――うん。これでよし。はい、どうぞ」
「わーい」
ぽふ
「――――――――――なんで顔面から飛び込んだの？」
「東郷の太腿を堪能したくて」
無言で輝夜くんの頭を絞め上げる。
「あだだだだだだだだだだだだだ！！！！！！！！　わかった！わかったから!!」
今度こそ、輝夜くんが私の膝にちゃんと頭を乗せた。
「――――――その、どうかしら？」

「――――――――――――」

「――――――輝夜くん？」

「――――――――――――すぅ・・・・すぅ・・・・」

安らかに寝息をたてて、輝夜くんは眠っていた。

なんて早い。

「・・・・こうして見ると、輝夜くんってほんと、女の子みたい・・・」

子供みたいな可愛らしい寝顔を眺めていると、いつの間にか、彼の頭を撫でていた。

この後、友奈ちゃんたちが戻ってくるまで、私は眠る輝夜くんを撫で続けたのであった。

煌月輝夜の左腕について――

輝夜の要望により、様々なギミックが搭載されている。

しかしそのせいで、耐水性に難があり、水に滅法弱い。

対して義足の方は、ＥＳＥが搭載されているくらいなので、一応の防水処理が施されている。その為、入浴くらいなら可能だが、水泳は残念ながら不可能。

よって、輝夜の弱点は『水』である。

少女たちのＭ ―俺とアイツの曖昧な関係―

アノシラスちゃんぐうかわ。
お風呂入れてあげたい。

「ただいま・・・・って、そういやマッキー今日は遅くなるって言ってたか・・・・」
「おかえりー♪」
「おう、ただいま――――って待て。なんで友奈がウチにいる？」
東郷に膝枕してもらったその日の夕方。家に帰ったら友奈まで着いてきた。
「だっておにーさんに頼まれちゃったんだもん、かぐやちゃんのこと」
「マジかよ・・・・マッキーの野郎・・・・」
「えへへー♪いろいろと頑張っちゃうからね！」
「なんだよ、いろいろって・・・・」
「もちろん！」

にっこり笑って友奈は告げた。

「かぐやちゃんの身体洗ってあげたりとかだよ♪」

断固として拒否したが、結局押しきられてしまい・・・

「はぁー・・・なんでこんなことに・・・」

「かぐやちゃーん。かゆいところはありませんかー？」

「無い。はぁー・・・・」

現在、俺と友奈は一緒に風呂に入っている。今は背中を流してもらっている最中だ。

入浴の際に、防水加工を施されていない左腕は外さなければならない。そのため、右腕だけで身体を洗ったりしないとならないのだが、そこは長年の経験。一人でも充分上手くやれる。それは何度も説明したと言うのに・・・・友奈の奴・・・・未だに俺を要介護認定してやがる。

「～♪」

楽しそうにしやがってからに・・・・

改造のおかげで欲情しにくい身体になっているからといって、少しばかり近すぎだろうが・・・

「ねぇ、かぐやちゃん」

「・・・・んだよ」

「東郷さんの膝枕、気持ちよかった・・・？」

友奈が、自分の身体を密着させながら、そんな事を聞いてきた。

こいつ・・・・そんな事を気にしてやがったか・・・・

「ああ、なかなかだったぞ。オマエも頼めば？」

「――――――ふぅん。そっか・・・」

いい加減に離れて欲しいのだが、友奈はこちらの思いも気にせず、そのままの体制で腕を前に持っていった。

「友奈？お前、何を」

気付いた時には遅かった。

両足を外され、俺は友奈に抱き抱えられたのだった。

「・・・・・・放せよ。つーか、足取るな」

「――――――――――――――――」

友奈は何も言わず、ぎう・・・ときつく抱き締めるのみ。

「――――――何が気に入らないのか、言ってくれなきゃわかんねーんだけど？」

「――――――――――――――やだ」

「あ？」

「――――――ぜったい、いわない」

ホント、めんどくせぇなぁ・・・・

「友奈」

「――――――――――――――――――――――」

「おい友奈」

「――――――――――――――――――――――」

「・・・・・ッチ」

沈黙したままの友奈と、この方法しか思い付かない自分に舌打ちすると、俺は右腕だけで自身の身体を持ち上げて友奈の拘束から脱出してみせた。この時ばかりは、ほぼ達磨状態の自分に感謝である。

「あ・・・・・」
「・・・・よっと」
空中で反転し、友奈と向かい合う。
案の定、友奈は少し泣いていた。
「ったく、嫉妬なんざお前らしくもない・・・」
「――――――――うるさいよぉ」
「ぶーたれんなって」
「ぜんぶかぐやちゃんが悪い」
「そーかよ」
頬を膨らませてそっぽ向く友奈。
そんな友奈の顔をぐい、とこっちを向かせる。
「大丈夫」
「――――――――」
「お前が俺の手を離さない限り、俺は必ず、お前の隣に帰るから。だから、心配なんかすんな」

「――――――――ほんと？」
「俺が約束破ったこと、あったか？」
「いつもケンカしてる」
「ケンカしないなんて約束、した覚えありませーん」
「むぅ！」
「はっはっはー♪」
「まったくもう・・・・」
やれやれ、ようやく機嫌が治ったか・・・・それにしても・・・・
「――――お前も、一応、成長しては、いるのな」
「？してるよー。成長期だもん」
「いやいや、そういう意味じゃなくてだねぇ？」
「??」
目線をちょっとだけ下に向ける。
友奈もそれに従い、下に向けると――
「・・・・・・・・・・!?!?!?!?」

俺の言葉の意味を悟った友奈が、ゆでダコみたいに顔を真っ赤にする。かーわいー♪

「かぐやちゃんの！！」

あ、これはマズイパターン

「バカぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

「ぶぉっふ!?」

浴槽に向かって、背負い投げの要領でぶん投げられた俺は、頭から湯船に落ち、犬神家状態になった。

「えっち！変態！すけべ！変態！変態！変態！」

「ごぼごぼごぼ」

「しばらくそこで反省してなさい!!」

「っぷはぁ！あ、おい友奈!?俺の足持ってくな！」

俺の声を無視して、友奈は両足を持って風呂から出ていってしまった。

「俺の足ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！」

この後、半分のぼせながらも謝罪しまくった。

輝夜の両足について——

ＥＳＥは、輝夜の排泄物を消費してエネルギーを得ている。

そのため、輝夜はトイレに行く必要がない。

よって、改造手術の際に、某十万馬力の人型ロボットみたいに下半身部分がのっ

ぺりしている。

少女たちのＭ ―煌月輝夜は男の娘である―

しずくちゃん・・・・・・・・どこぉ・・・・・・・・？（爆死死体）

煌月輝夜
一月二十日産まれの十三歳。
勇者部唯一の男子部員である。
そんな彼が――――――

現在、フリフリのメイド服を見事に着こなして、丈の短いスカートを抑えつつ、

顔を真っ赤にして、写真を撮られていた。

「――――――――――しにたい（涙目）」

「うんっ♪良いよ良いよ～！かぐやちゃんすっごく良い！！！」

「本当！被写体がこんなにも素敵だと、撮影してるこっちも、俄然やる気が出るわ！！！」

鼻息荒く、写真を撮りまくる友奈と東郷。その二人を睨み付けながらも、スカートからは手を離さない輝夜。

そんな三人を、私は少し離れた位置から見ていた。

「・・・・・・ねえ、風。アレ、大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫♪・・・・・・・・・・多分」

「お姉ちゃん、多分て・・・・」

確かに、普段の様子からはかけ離れたその姿は、十分に嗜虐心をくすぐられる。が、それに従い輝夜をいじり倒せば、その分、後になって仕返しが来る。しかも

倍で。
「・・・・・・ほんと、あいつって見た目だけは女の子みたいなのよね」
「中身はまるで正反対なのにねえ」
「よし！それじゃあかぐやちゃん！」
「――――――――やっとおわりか？」
「次はゴスロリでいってみよー♪」
「――――――――なんでさ（白目）」

――

さかのぼること二日前。
「貸衣装屋さんから依頼が来たわ！」
「貸衣装？」
「ということは、コスプレして接客とかですか！」
友奈が嬉しそうにそんなコメントをしていると、輝夜のやつは、微妙な顔をしていた。
「――――――友奈のあの顔は、俺を着せ替えて遊ぼうとたくらんでる時の顔だな」

「あんたを？」
「おう。これでも見てくれだけは良い方らしいからな、俺」
「ふぅん――――――ぶふっ！」
ふと、タキシード姿の輝夜を想像してしまい、思わず吹き出してしまった。
「――――――おいヤク中女。今何を想像した」
「誰がヤク中だ」
「あわわわ。ケンカしないで・・・・！」
「ハイハイ。煌月も夏凛も、ケンカしてないで話を聞きなさい」
風に言われて、睨み合っていた視線を外す。
「・・・・命拾いしたな」
「・・・・そっちこそ」
「はぁー。まったく、煌月。この依頼はあんたが居なくちゃ始まらないんだからね？」
「――――――まじで？」
「マジよ」

内容によると、宣伝用の写真を撮る為に、モデルになってくれる美人が欲しい、とのこと。

「うん。それは理解できる。でも何で俺なん？」

「この中で美人って言ったら、あたしか東郷か煌月でしょ？」

風のその発言に、友奈がうんうん、と首を縦に振る。

「じゃあ風さんがやれよ!!」

「向こうからのご指名なのよ!!」

「だからなんでさ！！！」

「この写真見せたらそうなっちゃったのよ！！！」

「ごふっ!?」

風が一枚の写真を取り出した瞬間、輝夜が吐血してぶっ倒れた。

「え!?ちょ・・・・輝夜!?」

「わぁ！懐かしい！去年演劇部のお手伝いした時のやつだぁ♪」

「無視されてる・・・・」

「煌月はそのうち復活するから、ほら、二人も見てみなさい」
釈然としないが、写真が気になるので仕方なく放ってそちらを見る。
舞台後の集合写真のようで、演劇部のメンバーとおぼしき男女数名に交ざって、友奈、風、東郷の三人が写っている。輝夜の姿は無い。
と、思ったら――――
「――――あれ？お姉ちゃん。このお姫様役の人は・・・・？」
「さすが樹。鋭いわね。煌月よ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」
今、風は何と言ったか？
この、何処からどうみても深窓のご令嬢にしか見えないような、この少女が、輝夜だって？
「風。騙そうったってそうはいかないわよ。こんな良いとこのお嬢様みたいな女の子が、輝夜な訳無いじゃない」
「まぁ、そう思うわよねぇ。普通」

死んだ目をして風が視線を反らす。

「・・・・・・・東郷？」

「夏凛ちゃん。残念だけど、これは真実なの」

「・・・・・・・友奈？」

「あのときのかぐやちゃん、すっごく可愛かったなぁ♪」

――――――――マジで？

―――――+―――――

なんて、衝撃の事実が明らかにされたのが、つい先日の話。

「――――『女は化粧をすれば化ける』って、よく言われてるけど、まさか男もだなんて」

「夏凛さん。多分違うと思います」

わかってるわよ。ちょっと現実逃避してただけ。

「ハァ・・・ハァ・・・良い・・・良いよ～♪すっごく良いっ！！！」

「やっぱり輝夜くんは、黒よりも白い服の方が似合うわね♪甘呂梨（ロリ）というのも、悪くないわ!!」

「――――――――――――――――――――（虚ろ目）」

フリフリで真っ白でふわっふわな衣装を着せられた輝夜が、終始鼻息が乱れっぱなしの友奈と東郷に撮影され始めて、既に一時間が経過した。

その間着せ替えられた回数は、計六回。

どれもフリフリがいっぱい付いた、かわいい系の衣装だ。

「（無）」

「かーぐーやーちゃん！もっと笑顔で～」

「そうよ！せっかくの可愛い衣装なんだから、笑顔を頂戴!!」

「（無無）」

輝夜も、撮影が始まった当初は、恥ずかしさから顔を赤らめていたが、現在は最早、悟りの境地にでも立っているかの如く、無表情を貫き通している。

「・・・・・・・そろそろ、良いんじゃない？」

「・・・・・・・そうね。多分大丈夫でしょ」

時計を見て、そう判断した私と風は、いまだにハッスルしまくってる友奈と東郷をなだめ、依頼を完了することとなった。

宣伝の結果、その貸衣装屋は大繁盛したそうだ。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―帰郷編―

お久しぶりのこの作品！
ゆゆテの方が忙しくてねぇ・・・・言い訳にしかならんけど

煌月家の実家は玉藻市にある。
白鳥家の分家であるが、そこそこの農地を持っており、シーズンになると、地元民向けに『収穫体験』を行っていたりする。
「親父ぃ！カゴが足りねぇけど!!」
「いつもの所に置いてねぇかぁ!!」
「無いから聞いてんだろぉ!!」
現在、輝夜は実家にてトマトを始めとする夏野菜の収穫を手伝っている。他の勇者部員はいない。依頼で別の場所に行っているのだ。
「ちょっと輝夜ぁ。あんた、どうして風ちゃんたち呼ばなかったんよ？」

「言ったろうに。別の依頼で今日は来れないって！」
「まぁったく！あんたと違って風ちゃんや美森ちゃんは、あーんなしっかりしてるのに!!」
「それ今関係あるか？」
「あたしがもう少〜し若けりゃ、あんな良い娘放って置かなかったのにぃ〜」
「あーハイハイ。そーですかい！」
「あ。言っておくけどあたし、ちゃんと旦那のことも愛しているからね？これでも若い頃は『両刀使い』なぁ〜んて言われてたんだから！」
「聞いてねーよ」

収穫が一段落して、輝夜は母親に一言告げる。
「ちょっと出掛けてくる」
「おん？どこに？」
「プラモ屋！」

プラモ造り。
これは、輝夜にとっては趣味と言うよりも日課に近い。
幼少の頃より、文野に教えられてきたことの一つに、『なにか細かい作業をこなして、手先の器用さを鍛えるべし』というものがある。
それを輝夜は、ボトルシップ作成やプラモ造りでもって行っているのである。
おかげで、現在の彼の腕前は、木組みとはいえ、かなりの完成度を誇る駆逐艦雪風を、ボトルシップで作成して魅せる程のレベルで、それを東郷の誕生日にプレゼントした事がある。
「～♪～♪」
鼻歌を歌いながら、行き付けのプラモ屋まで歩く。
プラモ屋の前までやってきた、その時――
「もしかして・・・・・輝夜？」
後ろからの声に振り向くと、そこには、二つのおさげを前に垂らした同年代くらいの少女がいた。
「――――――ええっと？」

「・・・・・覚えてない？私よ、楠芽吹」
「楠――――ああ！棟梁んとこの頑固娘！」
輝夜は思い出した。目の前の少女の事を。
彼女は楠芽吹。
大工の父を持つ少女で、輝夜にとっては所謂ファースト幼なじみというやつだったりする。
「誰が頑固だ。あと、別にパパは棟梁って訳じゃないから」
「知ってる。大赦御用達の宮大工だろ？」
「分かってんじゃない」
「棟梁ってのはただのアダ名だ。深い意味はねーよ」
「――――それ、パパは知ってるの？」
「返事してくんないけどねー」
「――――あんた、嫌われてるんじゃないの？」
ジト目で芽吹にそんな事を言われて、輝夜はとりあえず高笑いしておいた。

プラモ屋で、目的の物――『スーパー安土城ロボ・パーフェクトアーマー』を購入した輝夜は、楠家にお邪魔していた。

「棟梁！お久しぶりッス!!」

作業中だった芽吹の父に挨拶する。彼はちらりと輝夜の方を見て、再び作業に戻るのだった。

「――――――変わんないなぁ、棟梁は」

「だから棟梁じゃないって・・・・まぁ、良いわ」

芽吹と共に、彼女の部屋に上がらせてもらう。

「相変わらず女っ気の無い部屋だこと」

「なによ、ぬいぐるみでも置いておけっての？」

「ほう、ぬいぐるみかい？」

「・・・・・そうね、私なんかには、似合わないわよね」

自虐的に、そんな事を言う芽吹。だが、輝夜は――

「んー、案外そうでも無いと思うなぁ」

「・・・・・・・慰めかしら？」

「なんでさ。確かに、意外に思われるかも知れねぇけど、似合わないなんて事ぁねーよ」
「・・・・・・・なんでそう言い切れるのよ」
「んー。根拠は無い！」
「自信たっぷりに言うな」
「はっはっはー」

パチ・・・パチ・・・とニッパーでランナーからパーツを切り取る音だけが響く。
芽吹と共同で先程購入した『スーパー安土城ロボ・パーフェクトアーマー』を作成しているのだ。
こうなると、二人は一言も喋らず、作業に没頭してしまう。
「――――――右腕完成っと」
「素組だけ？塗装は？」
「持って来るの忘れた」
「戸棚の上から二番目奥」

「ん、遠慮なく」
がさがさと戸棚の中を漁る。
「――――お前さ、学校かどっかで、なんかあったのか？」
「え？」
「なぁんか・・・・覇気が無いっつーか・・・・気力が無いっつーか・・・・なんか変だぞ」
「――――私の事忘れてた癖に、そういうのを見抜くのは、相変わらず得意なのね」
「言うなよ・・・・・・話、聞かせてくれるか？」
「――――一昨年の事よ」
「――――大赦に呼ばれたっていう、アレか・・・・落ちたんだっけか」
「ずいぶんとハッキリ言う・・・」
「事実だろう。んで？」
「――――私のしてきたことは、いったい、なんだったのか・・・・・・って・・・・」

「――――――ふむ」
「必要なもの以外全部切り捨てて！必死に努力して！その結果がこの有り様・・・・・！いったい、何が足りなかったの・・・・・？」
「――――――」
「ねぇ、輝夜。あなただったら分かる？私に足りないもの」
ゲートを切り落とす手は既に止まっており、芽吹は懇願するように、輝夜に問う。
「――――――切り捨てちゃいけないモンまで、捨てたからじゃねぇかな？」
「切り捨てちゃ、いけないもの・・・・・？」
「例えば・・・・・≫他人≪とか？」
「――――――どういう意味？」
輝夜も、戸棚を物色するのを止め、芽吹に向き直る。
「死んだばっちゃが言っていたことだがね・・・・『孤高であるならば、孤独になるべからず』・・・・ってな」
「――――孤独」

「思い当たる節でもあったか？」
「――――――――わからない。けど、私が選ばれなかった理由は・・・・・・なんとなく、理解できた・・・・かな」
「そうかい。そりゃ、なにより」
満足そうに頷いて、輝夜は戸棚の物色に戻る。

「――――なぁ、ホントにここにあるのか？お前のパンツしかねーぞ？」
「――――――――――――右じゃなくて、左の戸棚よ（怒）」

―芽吹と輝夜の関係について―
輝夜が煌月家の子になって、初めてできた友達が芽吹。
以降、竹馬の友として、輝夜が讃州市に引っ越すまで共に過ごした。
手先の器用さを鍛える特訓として、プラモ造りを教えたのも芽吹だったりする。
風呂に一緒に入ったことは、流石に無い。

少女たちのＭ ―女子会 in ｔｈｅ 温泉―

明けましておめでとう！
新年一発目の鎮魂歌は輝夜のいない勇者部だ!!
・・・・・のっけから主人公いないとか（笑）

輝夜を除いた、勇者部の少女たち五人はとある温泉旅館にて、老人会向けの演劇を行うことになっていた。
今日はその当日の朝。
友奈、風、樹の三人が朝風呂を堪能している最中であった。
「はぁ～・・・・良いお湯～♪」
「ほんとうですね～・・・・」
「ハイハイ、和んでるとこ悪いけど、本題入るわよ」
手を叩き、自分に注目させる風。

東郷と夏凜は現在就寝中。というのも、現在時刻は朝の四時。流石にまだ起きている人間はほぼいない。
「えーっと、何の招集でしたっけ？」
「まだねむいよぉ～～・・・・」
「我慢なさい」
手厳しい事を言って、風は今回の議題を提示する。

「ズバリ！私たちの女子力向上についてよ!!」

「――――――女子力？」
「――――――向上？」
「そうよ！」
「具体的には？」

「うーん・・・・・・・・・・・・・・胸とか？」
胸、という言葉に脳裏に過るはある少女。
勇者部一、というか、中学生一の胸部を誇る彼女の顔だ。
「――――――確かに、欲しいかも」
自身の、金床の様な胸板をぺたぺたと触り、ぼそりと樹が呟いた。
「い・・・樹ちゃんはこれからだよー（汗）」
「――――――余裕の発言ですね」
「樹ちゃん!?」
励ます友奈に対して、冷ややかな目を向ける樹。
その視線の先には、起伏こそ乏しいもののきちんとあるといえる大きさのモノが存在している。
「ふ・・・流石、彼氏持ちは違いますね・・・・」
「ふぇ？彼氏？私、お付き合いなんてしてないよ？」
温泉に浸かりながらも、心が冷えきった樹の、冷めた発言に対して、友奈はきょとんとするばかり。

「――――――お姉ちゃんどうしよう。友奈さんと煌月先輩、無意識だ」
「――――――幼なじみが、恋愛に発展しないのって、こういう理由（コト）だからかぁ・・・・・」
「え？え？なんでここでかぐやちゃんの話？」
戸惑う友奈に対して、犬吠埼姉妹はそっと、ため息をつくのであった。

――

結局この後、東郷と夏凜も入ってきたので、東郷にバストアップの秘訣を教えて貰う三人。
「え・・・ええっと・・・・和食、なんてどうでしょう？」
「よし、犬吠埼家は明日から朝は和食ょ!!」
「目指せ！メガロポリス!!」
そんなこんなで犬吠埼家の朝食が和食になった。
「はぁ・・・・・・胸なんて、剣振るのに邪魔でしょうが」
「おい、華の中学生」

「なによ。私たちには『勇者』っていう大事なお役目がある事、忘れてんじゃ無いでしょうね？」
「確かにお役目も大事だけど、それ以前に私たちは女子中学生なのよ？勉学、スポーツ、それに恋愛！日常の尊さを知るからこそ、お役目にも身が入るってもんよ！」
「そういうもんかしら？」
「そういうもんよ」
ふぅ・・・ん、と素っ気ない態度の夏凜だが、『そういえば、この前兄貴にも似たようなこと、言われた気がする・・・』なんて事を思っていた。
実は夏凜、あれから時々≫嵐ヶ丘≪に顔を出しているのだ。表向きは、兄春信の監視の為。その本音は――――きっと、言わずもがな、だろう。
「恋愛かぁ・・・・」
「友奈ちゃんは、どんな殿方が好み？」
「東郷が友奈にそんな事を聞いてる!?」
驚愕する風を他所に、友奈が頭を捻ってうんうん唸る。

「うーん・・・・・一緒にいて、楽しい！って思える人・・・・かなぁ？」
「なら、私は？」
「えへへ♪もっちろん！楽しいよ!!」
「うふふ♪私もよ」
「あ・・・結局はそこに行き着くのね・・・・」
驚いたり落胆したりと、テンションの落差が激しい風であった。

―――――――――――――――――――――

湯から上がり、演劇を終わらせ、依頼主の女将に「せっかくなので、お土産でもどうでしょう？お一人一つまででしたら、お譲りしますよ？」と誘われた勇者部一行は、女将の厚意に甘え、土産屋を覗いている。
「結構充実してるのねぇ」
「食べ物にストラップ・・・わ！パズルなんかもある！」
そんな中――――
「はっ!?あれは!!」
東郷が何かを見つけた。

「東郷さん？何を見つけたの？」
「友奈ちゃん！あれを!!」
「ん？――――――はぅわっ!!あれはぁぁぁぁ！！！」
「なに？二人とも何を見つけたのよ？」
爛々と輝く瞳で二人が見つめる先を、夏凛も覗いてみる。そこには――――――

「――――――『丸亀城ロボ』？なにこれ？」

「えぇ!?夏凛ちゃん知らないの!?!?」
「『古城呂菩（ロボ）しりーず』その記念すべき最初の一体目よ!!」
「こ・・・・古城ロボ？」
「神世紀二百年を記念して、日本プラモデル協会の有志たちが毎年一体ずつ発売している日本のお城を原型（モデル）にしたしりーずよ！」

「今年は十周年だ、ってことで二体発売されることになってたんだよー♪あ、そういえばその発売日って、今日だ」

「『超（スーパー）安土城呂菩・完全武装形態（パーフェクトアーマー）』ね！」

「かぐやちゃん、たぶんいつものプラモ屋さんでもう買ってるよね」

「もう買ってる頃合いよね」

「ね！東郷さん！」

「うふふ、私も同じ考えよ、友奈ちゃん♪」

呆然とする夏凜を他所に、友奈と東郷が口を揃えて女将に告げる。

「「これください!!」」

お金を払おうとする二人に対して、女将は「どうせ売れ残りだから、お代は結構」

と言って無償で渡してくれた。
「なんだか申し訳ない気分・・・」
「良いじゃない。くれるって言ってるんだから。遠慮なく貰っちゃいなさいよ」
「夏凛ちゃん・・・・・うん、そうだね♪」
「ふふふ♪輝夜くんに良いお土産が出来たね」
「うんっ!!」

翌日、帰宅した輝夜を待っていたのは、『丸亀城ロボ』を持って満面の笑みでこちらに手渡してくる、友奈と東郷の姿だった。

輝夜は柄にもなく、泣いた。

『古城ロボシリーズ』について

武者〇伝の日本城バージョンみたいなもん。

輝夜はこのシリーズの一体目、『丸亀城ロボ』以外の全機体を所有しており、「最初の一体だけがどうしても手に入らないぃぃぃ〜〜〜」と嘆いていた。

少女たちのＭ ―樹、お歌の特訓をする―

そろそろこっちも本編入らなきゃ――――――

入りたくねぇよぉ・・・・・・でも進めなきゃ・・・・・・

物語ってのは、ちゃんと終わらなきゃ『物語』とは言わないんだから・・・・・・・ちゃんと、『めでたしめでたし』で、終わらせる為にも・・・・・今は、進めなきゃ・・・・・・

そんなことより今回は四話のカラオケ回！

カラオケと言えば、この前小生が贔屓にしてる某動画サイトで、久々にガガガＦＩＮＡＬの燃えたら負けＭＡＤ視聴してまして・・・・・二番サビのジェネシックがドーン！で負けましたよ。からのラスサビの、静かに入るところからのジェネシックが立ち上がると同時に曲が盛り上がるところでオーバーキル。

あの動画、勝てる気がしないぜ・・・・・・・！(真っ白に燃え尽きながら)

「ちわーっす」
「あ！かぐやちゃん。今からカラオケ行くよー♪」
「なんだかわからんが、わかった」
「いやなんでさ!?」
ある日のこと、諸事情で遅れた俺が部室に顔を出すと、なんでか知らんがカラオケに行くことになっていた。
夏凛がなんかツッコミを入れてきたので、とりあえずカラオケに行く事になった経緯をカラオケ屋に向かいながら聞く事にしよう。

「なるほど、歌のテストねぇ・・・・」
「すみません・・・私の事情に付き合わせてしまって・・・」
「気にするなって。悩める後輩助けんのも、先輩の仕事さ。それに――」

ノリノリで歌う風さんを見る。友奈と東郷がそれに合わせて合いの手やらマラカスやらで盛り上げる。
「みんな楽しそうだしなっ♪」
「――――――はい♪」
「イエーイ！聞いてくれてありがとー♪」
おや、話している内に終わったか。
さて、点数は――――――ほう！92点か！
「良かったよ、お姉ちゃん」
「さんきゅー♪」
樹の言葉に風さんが答える。
さて、お次は――――――
「夏凛ちゃん夏凛ちゃん。この曲知ってる？」
「ん？知ってるけど・・・・」
「じゃ、一緒に歌おうよ！」
「はぁ!?ちょ・・・・冗談じゃないわよ！馴れ合う為にここにいる訳じゃないん

だから!!」
「そうよね〜〜。私の後じゃあねぇ〜〜。ゴ・メ・ン・ねぇ〜〜〜」
風さんが自分の出した点数を指差して、夏凛を煽る。
「――――――友奈。マイクを貸しなさい」
「へ？」
「早くっ！！！」
「は・・・・はいっ!!」
――――――――――――――――――――――――
友奈と夏凛の抜群のコンビネーションによるデュエットで、叩き出された点数は
――――――92点！
「はぁ・・・・はぁ・・・・」
「はぁ・・・・はぁ・・・・夏凛ちゃんすっごい上手〜〜♪」
「ふ・・・・・フンッ。この程度、どうって事無いわ！」
相変わらずのツンデレ台詞、頂きましたァーーーーーーーーー!!
「――――ちょっと輝夜。なによ、こっち見て」

「いえいえ別に何も～～？２８２８」
「ぐぅ!!こ～～い～～つ～～・・・・!!」
「まぁまぁ、次は樹ちゃんの番だよっ♪」
「は・・・・・はいっ」
緊張気味の樹が歌う。
結果は――――――まあ、言わぬが花だな。
「あうう・・・・」
「まだちょっと硬いかなぁ」
「誰かに見られていると思うと、それだけで緊張しちゃって・・・・」
だいぶ重症だな、こりゃ。
「まぁまぁ、今は練習なんだし。ほら！お菓子でも食べて――――――って、無い!?」
「お菓子なら牛鬼が全部喰っちまったぞ？」
「んなぁ!!!!!」
「あはは、牛鬼は食いしん坊さんですね～」

「うううう～～・・・・食べ過ぎだよぉ～～・・・・」
涙に濡れる友奈をなだめていると、突然、軍歌が流れ始めた！
これは――――！
「あ、私の入れた曲」
東郷がマイクを握ると、夏凛以外の俺たち四人は立ち上がり、敬礼する。
「ぅえっ!?何!?」
呆然とする夏凛を他所に、東郷はがっつり歌い切る。
音楽が止み、採点画面に切り替わったところで四人同時に着席。
「――――何、今の？」
「私たち、東郷さんが歌う時はいつもこんなだよ～♪」
「こうしないと、後が怖いんさー・・・・『護国の心が足りーん！』って――――」
「そ・・・・・そう・・・・・」
「そうよ。という訳で・・・・・・・・・・夏凛ちゃんには後でお話があります」ゴゴゴゴゴゴ・・・・・
「ひぃ!?」

あーあ、東郷の心に火ィ着いちまったな・・・・
おっと、そうだ忘れてた。東郷の次は俺の曲だ。
「よし――――――俺の歌を聞けェ！！！！」
今回歌うのは、俺の『48のカラオケ十八番』の一つ。
旧暦時代、初の合体変形ロボットアニメとして有名になったシリーズの三大ＯＶＡ作品の一作目にて、物語後半のOP曲として使用された曲だ。
「――――――上手いわね、輝夜」
「そりゃそうだよ！なんたってかぐやちゃんの『48のカラオケ十八番』の一つだもん！」
「――――――突っ込んだら負けかしら？」
気持ちよく歌い上げた俺は、採点結果を期待して待つ。
さて、結果は――――――83点か。
「まぁまぁだな」
「でも上手でした！さすがです、煌月先輩！」
「フッ――――まあな！」(ドヤァ　　)

「それじゃ、次はなに歌おっか？」
「そうねぇ――――――」
いつも通りに雑な扱いを受けつつ、次に歌う曲を選んでいると、風さんが部屋から出ていった。
なんだろ、便所かな？
――――――ｖｉｅｗ､ｃｈａｎｇｅ:風――――――
水の流れる音が響く中、私は洗面台の鏡に写る自分の顔を見た。
ひどい顔だ。とてもじゃないけど、みんなには見せられない。
「大赦からの連絡？」
その時、髪紐の鈴を鳴らしながら、夏凛が入ってきて私に訪ねる。
「――――『最悪の事態を想定しておけ』、って」
「ふぅん・・・私には連絡してこない癖に・・・・・」
夏凛はそうぼやくと、私を見据えてはっきりと言った。
「怖いの？」
「――――――――」

「なら、あんたは統率役には向いてない。私の方がうまくやれるわ」
夏凛のその言葉に、私はそれまで流しっぱなしにしていた水道の蛇口を止める。
「これは私の役目で、私の理由なのよ」
「――――――――」
黙る夏凛の横を通って外に出る。
「後輩は黙って先輩の背中を見てなさい」
通りがかりに、一言だけ告げて。

――――――――――――――――――――――――

夕暮れの帰り道。
カラオケの後は、勇者部のみんなでこうして並んで帰ることが多い。
「歩いて帰るのって久しぶりね・・・・」
「うん。でも、樹ちゃんの歌の訓練にはならなかったねえ・・・・」
「でも楽しかったです！」
「そりゃなにより。昔、死んだばっちゃも言っていた。『楽しむ事こそ、上達の道』とね」

前を歩く樹たちが、楽しげに会話している中、私は、大赦から送られてきたメールの事で、頭が一杯だった。
「風さん？聞いてる～？」
「ぅえ？な・・・何？」
だから、煌月の声に反応するのに、ワンテンポ遅れてしまった。いつもなら即座に反応していたのに・・・・
「樹の歌のことよ」
「あ・・・・ああ・・・そうね」
夏凛がフォローを入れてくれる。
おかげで私は会話に追い付く事ができた。
「うーん・・・・樹はもうちょい練習が必要かな？」
「α波出せるように・・・・・！」
「α波から離れなさいよ・・・・」
「久々に見たなぁ・・・・東郷のα波信仰・・・・」
何気ない平凡な中学生らしい日常。

私たちは、この平和な日々を守るために、戦わなくてはならない。
（もしもの時は――――）
大赦がああ言ってくるという事は、最悪の場合、この中の誰かが――――
「ふ～～～う～～～さんっ！」
「ぅわっ!?びっくりしたぁ！」
いつの間にか、目の前に煌月が居た。
いろんな色がごちゃ混ぜになって出来た漆黒の瞳で真っ直ぐに私を見つめて。
「なんか、悩み事？」
「――――やっぱ、分かる？」
「分かりやすいねぇ。風さんが会話に乗っかってこないもん」
「――――そっか」
幼馴染なだけあって、友奈と煌月の二人は、他人の感情にとても敏感だ。
本当、素直に凄いと思う。
「敢えて聞くようなことはしないよ。でもね――――」

「もしもの時は、俺がなんとかしますから・・・・ね？」

「――――――――煌月？」

初めて聞く、煌月の≪ですます口調≫に少し驚く。

でも、それだけじゃない。

さっきまで黒かった瞳の色が、何故か一瞬、金色に輝いているように見えた。

目をこすり、もう一度見直す。

けれど煌月の瞳は、いつも通りの黒い色。
「――――今のは・・・・いったい・・・・」
「ん？何、風さん。俺に惚れた？」
「それは無い」
「ひどーい」
良かった。いつもの煌月だ。
「――――ありがと、煌月」
「ｙｏｕｒｗｅｌｃｏｍｅ」
瞳と同じく黒い、三つ編みの髪を揺らして、煌月が笑う。
その笑顔を眩しく思いながら、私たちは帰路に付くのだった。

輝夜の瞳と髪の色について――――
人によって説明が異なるが、基本的には『様々な色を混ぜ合わせて出来た黒』で

ある。

そのため、見る角度によっては黒の中に別の色が時折見える。

少女たちのＭ ―夢、追いかけて―

原作と同じシーンはカット&カぁット！
あ、「キングクリムゾンッッッ！！！」の方が良かった？どうでもいい？そっかー（´・ω・）

「暇ー、退屈ー」
「だからって入り浸るなよ・・・・」
みんなでカラオケに行った日の翌日。
諸事情で飼えなくなった子猫の受け取り依頼をこなすために、友奈、東郷、夏凛のチームと、犬吠埼姉妹チームに別れて行動している。が、俺は体質――――というより、義足の発する電磁波の影響で動物に嫌われてしまうため、一人ハブられることとなった。
なので、暇な俺は≫嵐ヶ丘≪に来ていた。

「そんな暇なら勉強しろー、学生」
今日の担当はマルさんだけのようで、他の二人は見当たらない。
そんなマルさんに、カウンターの上に頭を乗せてぐでーっとしていた俺は、その頭をぺちぺちとお盆で叩かれる。
「だぁって～～・・・・」
「勉強はしといた方が良いぞー・・・本当に」
「急にマジなトーンしてどーしたんスか？」
「いや――――――先生にどやされた時のこと、思い出して・・・・・・・・」
青い顔をして、ガクガクブルブルと震えだすマルさん。
なるほど、現役教師時代のばっちゃ、そんな怖かったんか・・・・・
「ほら、コーヒーやるから今日はもう帰れ。んでもって勉強しろ」
「へーい・・・・」
仕方ないので、差し出されたコーヒーをイッキ飲みして、今日の所は帰る事にした。

じ・・・・・・っと、こちらを見る、誰かの視線を、背中に感じながら。

特に何も無いまま、更に翌日。

部室に行くと、机の上に大量の薬瓶が置かれていた。

夏凛がドヤ顔しているから、十中八九夏凛の私物だろう。というか、この中でこんな大量に薬瓶持ってるの、夏凛ぐらいだよな。

「ついにヤク中女が他の連中をシャブ漬けにしようと――――!?」
「んな訳あるかぁ!!」
話を聞くと、どうやら樹の為に喉に効果のあるサプリを多種用意したとの事。やっぱシャブ漬けじゃん。
「さあ樹！これを飲みなさい、全種類!!」
「えぇ!?」
「いやいや、無理でしょ」
「流石の夏凛ちゃんでも難しいと思うわ」
「そうだぞー。自分で出来ない事を他人にやらせようとするなよー」
「上等だコラー!!やってやろうじゃないの！！！」
最後の俺の煽りが効いたのか、夏凛がキレて机のサプリ全種類をイッキ飲みしだした。
※彼女は特別な訓練を受けています。絶対に真似しないで下さい。※
最後にオリーブオイルを一気に煽って全制覇達成。めでたくねぇ。
「ぷはぁ・・・・・どうよ！」

と、次の瞬間顔色を青くした夏凛は、口元を押さえて部室から駆け足で出ていったのであった・・・・・

ちなみに俺は爆笑の渦に巻き込まれた。

あー、お腹痛い！

んで結局、樹には効果がイマイチだったようで特に何も起こらなかった。

まあ、そんなもんだよなぁ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「んで？話って？」

部活が終わって帰ろうとしたところ、樹が俺に相談を持ちかけてきた。

「あの・・・・実は」

どうも樹は、姉と違って自分には戦う理由が無い事に悩んでいるようだ。勇者部に入ったのも、風さんに勧められたから。

「私には・・・・何も無い・・・・」

「いやいや、あるでしょ」

「――――――――――――え？」

「今は気付いてないだけさ。何も無いなんて、そんなこたぁ無いよ」
「でも――――」
「なら、なんで勇者部に居続けられるんだい？」
「え？それってどういう・・・・？」
きょとんとする樹の頭を撫でながら、俺は告げた。
「樹。キミが風さんの後ろを、ただ何も考えずに追いかけているだけの人間なら、こんな大変なお役目を背負わされた部活、さっさと辞めてる。でも、キミはまだ続けているだろ？それはつまり、続けたいと思うだけの≪何かしら≫が樹の中にあるからさ」
「私の・・・・中に？」
「それがなんなのか、俺にはわからないし、見付けてあげることも出来ない。これは、樹自身が見付けなくちゃならない事だからね」
「――――――――」
「そろそろ完全下校時間か・・・・ほら、明日はテストの日だろ？」
「あ、そうでした！」

「がんばれ樹。俺は応援してるぜ。テストも、理由探しも」

「──────煌月先輩、ありがとうございます！」

ペコリと頭を下げて、樹は去って行った。

──────†──────

翌日の放課後。

俺たちは部室にて、樹の来訪を待っている。

「樹ちゃん、大丈夫かな・・・・」

「大丈夫よ。なんたって私の妹だもの！」

とは言う風さんだが、さっきから作業に集中できていないのが目に見えて明らかだ。

と、その時、件の人物が部室に到着した。

「樹ちゃん。結果は────？」

「────────バッチリでした！」

晴れやかな笑顔と共に告げられた結果に、部室内は歓声に包まれた。

「やったね樹ちゃん！」

「きっと、みんなをカボチャだと思ったのが良かったのね！」
「ふ――――ふん！良くやったじゃない！」
「おめでとう。信じてたぜ、樹」
「みなさん――――――ありがとうございます!!」

その後、風さんの提案で、樹の歌を聞くこととなった。
前日、カラオケで聞いた時よりも、綺麗で、澄わたっていて、思わず聞き惚れてしまった程の、素敵な歌声だった

――――――――――――――――――――

「いやぁ！樹、歌のテストで合格できて、良かったな！」
「そうね――――――って、なんで付いてくるのよ!?」
帰り道、今日は夏凛と一緒に帰る。
帰るというか、»嵐ヶ丘»に向かっている。
「俺が夏凛に付いて行ってるんじゃなくて、たまたま夏凛と向かう場所が同じなだけさ～♪」

「――――――――――そういうことにしといてあげる」
「かっかっかぁ♪」
むくれる夏凛を笑いつつ、≫嵐ヶ丘≪に向かって並んで歩く。
その途中――――――――

「あの・・・・・・『こうづきかぐや』・・・・さん・・・・・・でしょうか・・・・・・？」

目の前に、謎の金色の鉄塊に乗った幼女に話かけられた。
鉄塊は、先細りした十本の足で自立しており、アスファルトがひび割れて凹んでいることから、相当重量があるように見える。
「――――――そうだけど、キミは？」
夏凛の前に立ち、幼女に問う。
茶色の髪の、どことなく、夏凛に似た顔立ちの、四・五歳くらいの幼女は、それを聞くと――――
「ああ、よかった・・・・・・間違えずにすんで――――――」
微笑むと同時に鉄塊から降りると――――

「じゃあ――――――――しんでください」

幼女は鉄塊と思っていたそれを持ち上げると、俺に向かって振り下ろしたのだった。

Ｖの襲来 ―Ｃｒａｓｈ＆Ｓｃｒａｐ―

上から襲い来る鉄塊を、夏凛を抱えて横に飛んで避ける。
「――――よく、気付きましたね・・・・これが、わたしの手だって」
只の鉄塊と思っていたそれは、目の前の幼女の両手だった。
それに気付いたのは、彼女が地面に降りた時。と言っても、アレが彼女の手とは気付いて無かった。ただ、ナマリが襲撃してきた時と同じ様な、圧迫感を感じた。
それだけの話だ。
「・・・・・なんなのよ、あれ」
「多分、御社の刺客だろ・・・・・お前、巻き込まれちまったな。すまん」
「謝るくらいなら、後でうどんでも奢んなさい」
「オッケ、梅干しも付けてやる！」
「どうせなら煮干しにしてよ！」
勇者に変身した夏凛と共に、目の前の幼女に立ち向かう。
と、その瞬間――――

♪～～♪～～♪～～

この音・・・樹海化警報!?て事はバーテックスかよ！
「ちょ・・・・・!?こんな時に!?」
「ッチ！・・・・・・夏凛！お前は友奈たちと合流しろ！」
「でも・・・・・！」
「いいから！バーテックス倒すのが、勇者の役目だろ！」
「――――――――やられるんじゃないわよ！」
視界が光に包まれ、景色が極彩色の密林に変化するのと同時に、夏凛は遠くに飛び経った。
目の前の幼女はそれを動かず、ただ見守るのみ。俺の予想通り、奴の狙いは俺だけのようだ。
「さて・・・・・・キミみたいな、いたいけな幼女に襲われる理由はなんだろうね？」
「わかってる・・・・はず、です・・・・・あなた、は・・・・・おじいさまの、じゃま・・・・・・だから、です」

「ふむ・・・・・おじいさまとやらが、御社を統べる者・・・・・という事かな？」
「あなた、には・・・・・おしえま、せん」
もう一度、幼女は自身の巨大な手を振り下ろし、攻撃してくる。俺はそれをもう一度横に飛んで避けた。
「・・・・・・・・うわさ、どおり・・・・・すばしっこい・・・・・」
幼女の動きは鈍重な上に攻撃モーションが大振りだから、ナマリよりも相手にしやすい。
の、だが――――
「――――――――一発でも当たったら即死モンだろ、これ」
先程まで俺が立っていた樹海の木の根が、文字通り、ぺしゃんこになっている。ロードローラーとか、プレス機とかにかけられたみたいにぺらっぺらに、である。
「――――――――やっぱ、あんたも契約者か・・・・」
「おーぼーど、です・・・・・・よく、わかりました・・・・・・・・・ね？」
「あんたの、その両手がどんなモンかわからんが・・・・単に重いだけでこんな風にはならない。そもそもそれだけの重量のあるモンを、あんたが軽々と振り回せる

ワケがない。と、くれば――――――答えは明白だ」
「――――そういう、こうかの道具・・・・・・という、かんがえ、は？」
「それもあり得るが、そんなモン動かし続けるにゃ、俺か杏子さんレベルの量の魔力が必要だ。が、あんたからはそれだけの魔力を感知出来ない。だからその線は無いと判断できるってワケだ」
「――――――頭の回転・・・・はやいです、ね？」
「まーな♪」
得意げに胸を張っていると、幼女が両手を左右に大きく広げた。

「じゃあ――――――本気、出しますね？」

その一言に、背筋が凍った俺は、咄嗟に上空に高く跳んだ。それと同時に幼女が、まるで目の前のハエでも叩き潰すみたいに、両手を閉じた。

ぐしゃり、と音がして、俺が立っていた場所の後ろにあった木の根が全て、潰された。

「――――――――――――うっそだろぉ・・・・」

思わずそんな言葉を吐き出す程に、圧倒的な攻撃だった。

「これが・・・・・わたしの悪魔・・・・・・・アンドレアルフスの、能力・・・・・・・

『圧壊殄掌（プレス・オブ・クラッシュ）』・・・・そして・・・・・わたしの、両手の・・・・・宝具・・・・・・・

『掌上魔猿』で・・・・・射程を、てのひらから・・・・わたしの視界に・・・・・広げています・・・・・・」

幼女の解説を聞きながら、俺は、先の圧壊に巻き込まれて膝から下がネジ切られ

た右足を庇いながら着地した。
「・・・・・・どうします、か？・・・・・・その足・・・では・・・・・・自慢のスピードも・・・・・・形無し、です・・・・・・よね？」
「――――――――――――――」
こんな能力の敵が相手では、友奈たちに相手を頼むのも難しい。そもそも、友奈たちが来るよりも前に、俺は紙っぺらみたいになって死ぬだろう。
まさに、万事休す。
なのではあるが――――――――
「――――――――――――――本当は」
「・・・・・・？」
「本当はさ・・・・・・使いたくなかったんだ」
「なんの・・・・・・こと？」
幼女の質問には答えず、俺は続ける。
「コレにはさ・・・・・・俺の罪が、その記憶が詰まっているから・・・・・・苦い思い出さ。でも――――――」

右ポケットから、アンティークな鍵を取り出しつつ、更に続ける。
「ちっぽけなプライドに拘って、命捨てンのはバカだからさ・・・・・・・・もう、俺は拘らないことにする」
「――――なに・・・・を？」
鍵のブレード部を握り、およそ五年ぶりになる解呪の文言を呟く。

「宝具解放――――鍵杖（けんじょう）『ニルヴァーナ』」

「!?・・・・その、名前・・・・・は!?」
驚愕する幼女の目の前で、俺の手の中の鍵が一瞬で足と同じ長さの大きさになる。
握りが錠前の形状をした、鍵のような形の杖。
これこそ、俺の宝具。その名も≫鍵杖『ニルヴァーナ』≪
「さて――――――こいつを解放しちまったからには・・・・・・さっさとあんたを倒させてもらうからな」
ニルヴァーナを構え、俺は幼女に宣言した。

宝具『掌上魔猿』について――――
出典元は≫西遊記≪
釈迦の手のひらの上から逃れられない孫悟空の逸話から。
所有者の視界に映るもの全てを、≫掌の上にある≪と確定させる宝具。
逃れる術は、所有者の視界から外れることのみである。

Vの襲来 ―ニルヴァーナ―

「え!? 輝夜くんが!!」
「――――そんな」
東郷と友奈が、夏凛から告げられた御社の刺客襲撃の報に驚愕する。
「すぐにでも援護に行かないと、あいつ・・・・絶対無理するだろうから・・・・」
「で・・・・でも、バーテックスは？どうするんですか？」
「それは――――」
樹の指摘に沈黙する夏凛。
その時、友奈が声を上げる。
「かぐやちゃんなら大丈夫！」
「友奈ちゃん・・・・？」
いつも通りの笑顔で、それでも、一抹の不安を瞳に抱きながら、友奈は言う。
「かぐやちゃんは、夏凛ちゃんに言ったんでしょ？『バーテックスの方は頼む』って・・・・なら、今はかぐやちゃんを信じよう！」

「――――――友奈」
「友奈さん・・・・・・」
「そうね・・・・友奈ちゃんがそう言うなら・・・・・・！」
そこに、偵察に出ていた風が帰ってくる。
「敵さん、壁の外から仕掛けてくるみたい！」
「よぉっし！かぐやちゃんの分もがんばるぞー!!」
気合いを入れる友奈にきょとんとする風だったが、すぐに気を取り直して報告する。
「ありゃ多分、残りのバーテックス全部来てるわね・・・・・」
「まったく――――気合い入り過ぎてこっちもサプリ増し増しよ・・・・・・樹もキメとく？」
「いえ・・・・遠慮しときます・・・・」
「よし・・・・みんな！気合い入れて行くわよ!!と言うわけで・・・・・ここはアレ、いっときましょ！」
「アレ？なによ、アレって・・・」

風の言葉に、夏凛を除いた全員が肩を組んでわっかを作る。それはいわゆる――

――

「え・・・・円陣!?」
「気合い入れるならこれが一番女子力高いのよ！」
「意味わからんわ!!」
「ほらほら～♪夏凛ちゃんも早く～～」
友奈が自身の左側を空けて、夏凛を招く。ちなみに右側は東郷が陣取っている。
「・・・・・・ったく！しょうがないわね！」
ツンデレ台詞を吐きつつ、夏凛も円陣に加わったところで、風が音頭を取る。
「あんた達！これが終わったら、何でも好きなもの奢ってあげるわ！だから、死ぬんじゃないわよ!!」
「やった♪じゃあみんなでお腹いっぱい美味しいもの食べよう！肉ぶっかけうどんとか♪」
「ふんっ、言われなくても殲滅してやるわ！」
「わ・・・私も、叶えたい夢があるから・・・・！」

「頑張って皆を――――国を護りましょう！」
「よぉーーし・・・勇者部ファイトーー!!」
『おぉーーー！！！』
そうして華は、戦場に舞う。
散り往く運命を知る事無く――――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

勇者達が戦闘を始めた頃、輝夜はニルヴァーナをその手に呼び出していた。
「ま・・・・さか・・・・・・・あなたが、持ってる・・・・なんて――――」
「ほう・・・・なるほど、ニルヴァーナの行方については、あんた等は知らなかったってワケか」
呟きながら、輝夜は近くの木の根に、ニルヴァーナの先端でコン、と叩いた。
その瞬間、叩かれた地点からメキメキと枝が伸び、幼女に破壊された輝夜の右足を覆い尽くした。
「よっ・・・と」

ボールを蹴るようなモーションで、枝から引き抜かれた右足は、色味以外は元通りになっていた。

それを確認した輝夜は、数回足踏みをして一言、良し、と呟いた。

「めっちゃカラフルだけど、それ以外は良好――――っと・・・・・んじゃ、おっ始めるか！」

来る――――！

そう直感した幼女は、身を守るように両手を前面に広げた。

直後、彼女の頭上から、大量の鉄杭が降ってくる。

「っ!?」

咄嗟の判断で上を視た幼女は、そのまま鉄杭を両手で叩き潰した。

空中で杭は鉄塊となり、幼女にはねのけられる。
「さすがに今のは避けられるよなぁ。――――――――――じゃ、これは？」
輝夜がニルヴァーナで地面をカツン、と突くと、幼女の足元から蔦が伸び、幼女の両手足を縛りつけた。
「――――――っ!!」
「更にそこから・・・・・・・！」
パチン、と指を鳴らす。
幼女の周囲に、炎、水、土、鉄、木で出来た弾丸が無数に出現し、輝夜はその間に指で銃の形を作ると・・・
「・・・・Ｆｉｒｅ」
輝夜の一声で弾丸は発射され、全て幼女に突き刺さった。
――――――――――ように見えた。
「・・・・・・・逃げたか。地面掘って逃走とは、なかなか奇抜な幼女だこと」
幼女が自身の足下に空けた穴を見ながら、輝夜は考える。
（あの子・・・・・なんとなぁく、夏凛に似てた・・・・・・いや、むしろあの

顔立ちは――――――）

と、そこまで考えて中断する。否、させられた。

何故なら――――

「なんだ？あの光・・・・・？」

遠くに見えた目映い輝きに、そうせざるを得なくなったからだ。

「――――――そうだ。バーテックスが来てたんだっけ。しゃーないからこのまま俺もいくか。何が出来る訳でもないけど・・・」

ニルヴァーナはしまわず、持ったままで輝きが見えた場所まで跳躍して行く輝夜。

その後ろ姿を、幼女が遠くから見ていた。

「・・・・・・・・次は、逃がさない・・・・・・・から」

呪詛のように呟いて、幼女は立ち去って行ったのだった。

次はいきなり戦闘終了後の話――――――――に、なるかも？

Ｖの襲来 ―鍵の剣 錠の杖 ―

前回、原作六話冒頭から入る的な事を言ったな・・・・・・

あれは嘘だ。

ニルヴァーナについて説明しなかったのを思い出したので、五話後半を執筆。

そいでは、どうぞ、御堪能ください。

「ん？あれは・・・・・」

友奈たちが戦っているであろう戦場に向かっている途中、上空に炎の塊が浮かんでいるのを見た。

その炎が突然弾けた、と思った瞬間、何かが落ちていった。

「お姉ちゃん！！！」

樹の叫びから、火の玉をくらったのは風さんで、それを出したのはバーテックスのようだ。

「そいつを倒せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！」

樹の声がした方角とは別の方角から風さんの叫び声が聞こえてくる。まだ、バーテックスは倒せていないようだ。

ふと、辺りが暗くなった。

変だと思い上を見れば、巨大なバーテックスの御霊が。

いったい何が起きているというのか。

木々の間を抜け、俯瞰できる高所に登り、そうしてようやく全貌が見えてきた。

どうやら巨大バーテックスを相手に封印の儀を行ったところ、あいつの巨大御霊

が空に出現した様子。
そういえば、俺の端末でもマップは見れたな・・・
確認したところ、あの巨大バーテックスは複数のバーテックスが融合して出来た模様。
なら・・・・・！
「ニルヴァーナぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
バーテックスへと飛び掛かりながら、俺はニルヴァーナの本来の能力を解放するのだった。

《ニルヴァーナ》

正式名称《模倣型解脱法方程式演算処理錠鍵》

太古の昔に≫解脱の方程式≪というものを発見した魔導師がいたという。

そいつはその方程式を、≫鍵と錠前を組み合わせた剣≪に組み込み宝具にすると、『人の世の理を正す』という名目の下、大量虐殺を行ったのだと言う。

そんな曰く付きの代物を、何故か俺は産まれたときから所有していた。それに気付いたのは俺が四歳の頃、悪霊に取り憑かれた人間を見つけ、そいつに襲われた時だった。

ニルヴァーナを振りかざし、悪霊を取り憑かれた人間の魂ごと祓ってしまった俺に、その余波で大怪我をしたばっちゃは厳しく叱ってくれた。

あのときの事は、今でもトラウマの一つとして、心に刻み込まれている。

ばっちゃに叱られたことが、じゃない。

ばっちゃに大怪我を負わせてしまった自分自身に、恐怖し、トラウマになったのだ。

なぜ、俺にこんなモンが扱えるのかはわからない。

だが、その理由が何であれ、今、こうして、みんなのために戦えるのであれば、

俺は――――――――!!

「錠剣(じょうけん)――解放!!」

右手に握るニルヴァーナの形状が、杖から剣へと変化する。
これこそ、ニルヴァーナ本来の姿。
とは言っても俺に出せる出力は、精々が一割弱程度。
それ以上出力を上げようとすれば、五年前の時の様に自壊を起こして、今度こそ俺は肉塊となってしまうだろう。
だが、一割もあれば事足りる。
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!」
「えっ!? かぐやちゃん!?!?」
合体バーテックスに飛び乗ると同時に、ニルヴァーナをバーテックスに突き刺し、
「封印(ロック)――解錠(オープン)・・・!」
ガチャリ、とニルヴァーナを回した。
瞬間、バーテックスの合体は解け、元の四体のバーテックスへと変化した。

「な!?」
「これは・・・・・・!?」
「輝夜くんが・・・・・これを？」
夏凛、樹、東郷の三人が驚愕の声を上げる中、
「――――見て！御霊が!!」
友奈が、空から三つの御霊が堕ちてくるのに気付いた。
どうやら宇宙にまで行っていたらしく、大気摩擦とやらで真っ赤に燃えながらこちらに向かって来る。
大気圏突入とか、ロマンだよなぁ・・・なんて、体内の魔力がごっそりと奪われたせいで思考力が低下した頭で考えていると、堕ちてきた三つの御霊が、それぞれの本体の元にふわりと着地。
「何がなんだか良くわからないけど、今よっ!!」
夏凛の剣が、樹のワイヤーが、東郷の砲撃が、三つの御霊を破壊した。――――
そういや、今気付いたけど、なんか東郷がめっさごっついの乗ってるんだが・・・・・
なにさ、あれ？カッコいいから別に良いんだけど。

何はともあれこれでバーテックスはあと一体。でもアイツの御霊は未だに宇宙遊泳の真っ最中。

「最後の一つは私が行くよ!!」

「友奈ちゃん、一緒に行こう！今の私なら運んであげられる!!」

「友奈さん、気をつけて！」

「一番の大役、譲ってあげるからしっかり殲滅してくるのよ!!」

「うん、行ってくる!!」

東郷の戦艦に飛び乗って、友奈は宇宙旅行へと旅立って行った。

ぼけーっと宇宙を眺めていると、御霊っぽい星の近くで桃色の輝きが瞬いて、御霊だと思う星を打ち砕いた。

さて、魔力も回復してきて、だいぶ思考力も戻ってきた・・・・・

「樹ィ！ちょい手ェ貸してくれ!!」

「は・・・・はいっ!?」

樹の隣に飛び移り、ニルヴァーナを落下してくる友奈たちらしき物体に向ける。

「ところで樹。なんか服装変わってね？どしたん？」

「あ、これですか？私、満開したんです！」
満開って服装まで変わるの？確かに樹から感じる霊力が普段の時よりも数段パワーアップしてる。
「なら、ちょっと無茶やっても平気か？」
「・・・・・・・・・・・やります！友奈さんたちを助けられるなら！」
「ナイスガッツ。今から俺の指示する場所にワイヤー張って緩衝ネット造ってくれ！」
「はいっ!!」
樹の瞳には、決意に満ちた光が見える。まだ怯えもチラついちゃいるが、今はこれくらいで充分。
「夏凛！お前も来い！」
「え？何する気!?」
「俺とお前で、樹にパワーを送るの！焼石に水だけど、何もしないよりはマシだ!!」
「そんな事できるの!?」

「出来るっ！この『ニルヴァーナ』なら！」
樹の前にニルヴァーナを突き立てる。
「二人とも、ニルヴァーナに触れて。樹はワイヤーを。夏凛は樹にパワーを！」
「――――――――っ！」
「っ!?これは・・・・・・！」
ニルヴァーナに触れる樹の両手に、夏凛と俺が手を重ねる。
その状態で樹はネットを二重、三重に展開。友奈たちの受け止め準備に入る。
ギリギリネットは間に合った。
が、勢いを完全には殺しきれず、ネットは悉く破れてしまう。
「まだです!!『なるべく・・・・・・・あきらめない』！！！」
それでも、樹の心は折れていない！
ワイヤーを伸ばして絡めとったり、再びネットを展開したり、懸命に、友奈たちのいるであろうカプセル的な何かを受け止めようと、努力する。
「樹・・・・・・・・」
「大丈夫だ、樹・・・・・・お前の力を信じろ。俺が信じてる・・・・・お前自身

を信じろ!!」

「うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ・・・・・!!!」

瞬間、ニルヴァーナに輝きが灯り、あと五m程で墜落しそうになっていたカプセルを、風を纏ったワイヤーが縛りつけた。

風の力も受けてカプセルの勢いは止まり、無事に着地させることに成功したのだった。

「やった・・・・!やったわよ樹!!あんたがやったのよ!!!」

興奮を隠そうともしないで、夏凛は樹に抱き付きながら、彼女の頭を撫でた。

対して樹は疲労困憊。

「行ってあげて・・・・・ください・・・・・」

「あ・・・・・うん!」

ふり絞るようにそれだけ言うと、ふらり、と倒れてしまった。慌ててそれを抱き止める。

いつの間にか、先程までの衣装から、普通の勇者服に戻った樹は、俺の腕の中で死んだように眠っている。脈はあるので死んではいないのは確かだ。

「友奈・・・・・？東郷!?」
夏凛が悲鳴に近い叫び声をあげている。
突き立てたままのニルヴァーナに触れて、二人の脈を感じとる。
うん、大丈夫。生きてる。樹と同じで眠っているだけだ。
「ちょっと・・・・・二人とも起きろよぉ！！！！」
涙声で更に叫ぶ夏凛。彼女に大丈夫だと声をかけようとした、その時だった。
「けほっ――――けほっ――――」
「ゴホ――――ゴホ――――」
「っ！友奈！東郷！」
「――――へへ、大丈夫・・・・」
友奈と東郷が目を覚ました。更に、腕の中の樹も、咳き込みながら目覚める。
と、そこに風さんから電話がかかってきた。
「ああ、風さん。大丈夫かー？生きてるかー？」
「はーい・・・・・・一応・・・・・生きてまーす・・・・・」
「おう。そりゃ何より。全員生還。目出度い・・・・・ねぇ・・・・・・」

視界が暗転する。

みんなが無事で気が緩んだばっかりに、疲れがどっときたのだろう。

「・・・・・え？輝夜!?ちょっと！」

「あー・・・・・・だい・・・・・・・丈夫・・・・・・・・・ちょっと・・・・・・・・・・疲れた・・・・・・だ・・・・・・・・・け」

意識が遠退く中、樹海化が解け、讃州中学の屋上に転送されたのを確認した俺は、焦点の定まらない頭でぼんやりと思った。

そういや俺、カバン何処に置いてきたっけ？

ニルヴァーナについて・・・

最大出力を発揮できれば、『三千世界内に存在する全知性体を天上解脱させるこ

とができる』のだが、発動した瞬間にニルヴァーナの所有者が真っ先に解脱してしまうため、発動なんてしない。そもそもそれだけの出力を安全に操作できる人間がまず、いない。神樹などの神霊クラスならば可能だが、知性体の範疇に収まってしまうため、解脱。そもそも神霊だったらこんなものが無くても人類をどうにでも出来てしまう。

そんな、強いんだか強く無いんだか、良くわからない宝具。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―入院編―

「・・・・・・・・んぁ」

普段の寝起きは良い筈の俺だが、今回ばかりは流石に頭がまだぼやけている。

時間は――――あれ、時計無いや。ナースコールナースコール・・・・と。あった。ポチッとな。

さて、ここは何処だ？病院なのは判る。こう見えて病院に入院するのは三度目の経験だ。――――胸張れる事じゃないな。

――

やって来た看護婦さんに色々聞かれたり聞いたりして、情報を共有。どうやら俺は三日間寝っぱなしだったらしい。マジかー・・・・

「かぐやちゃん‼」

「お、ゆうな゛っ!?!?」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん‼かぐやちゃんのばかぁ！！！　ばかばかばかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

俺が起きたのを聞いたらしい友奈が病室に突撃してきた上に、俺に飛びかかってきてぽかぽかと叩いてきた。
「うぐぅ・・・・いってぇな・・・・飛びかかんの止めろよ・・・・ったく・・・・」
「うぅぅぅ・・・・だってぇ・・・・・」
半泣きの友奈の頭を撫でると、友奈は叩くのを止めた。相変わらずぐずっているが。
「ほら、俺もちゃんと起きたんだし、みんなんとこ行こうぜ？」
「・・・・・・・・・・・・・・うん」
「おいおい、もういい加減泣き止めって・・・・」
「――――――――かぐやちゃんのせいだもん」
むすっとした表情をして、友奈がとりあえず泣き止む。
そんな友奈の手を引いて、俺たちは病室から出た。

――――――――――――――――――――――――

「お、煌月!!やっと起きたのね!!心配したんだから!!」
談話室に行くと、風さんたちが居た。

と言っても東郷だけが病衣（もしかしたら検査衣か？）を着ていて他の連中は全員讃州中の制服を着ていた。

「あれぇ？お前らもう既に退院済みかよ・・・・・・っつーか風さん。その眼帯どーした？」

「フフフ・・・これは先の大戦のおr「あ、そういうのいいんで」ちょっとぉ!?」

風さんのボケを華麗にスルーして、本題に入る。

「で？本当は？」

「・・・・・・うん。なんか、右目の視力が落ちてるみたいなのよ。どうもあの戦いの影響みたいなのよねー」

「――――――ふぅん。そっか。治るの？」

「医者の話だと、そのうち治るそうよ」

そう、夏凛が言う。

「そう・・・・か。医者が言うなら・・・・大丈夫かな？」

不安な点は幾つかあるが、専門医の言うことだ。間違いは無い――――筈だ。

ちょんちょん

「??どうした樹。なんか用か？」
袖を引っ張り樹がスケッチブックを見せる。
『こうづき先輩はどこもおかしいところ、ないですか？』
「ん？俺かい？へーきへーき。心配ありがとう、でもどうしたんだ？スケッチブック持って――――――――まさか」
『おねえちゃんとおなじです。わたしは声が出なくなっちゃいました』
なんと
「――――それも、いつか元に戻るって？」
『そうきいてます！』
「・・・・・・・・・・・・なら、良いんだ。樹は本当に、良く頑張ったもんな」
樹の頭を撫でてやると、樹は心地よさそうに目を細めるのだった。
「さ！煌月も起きたことだし、早速始めましょ！」
「おや？何をするつもりだい風さん」
「なんか、煌月のそのキザ口調も久々ねえ。祝勝会よ！私たち、バーテックスをぜぇーんぶ！倒したんだから!!」

あー、なるほど。
「俺もご相伴に預かっていいのかい？なぁんも、してないぜ？俺」
「あら？何を言ってるの輝夜くん」
「そうよ。合体したバーテックスをバラバラにした癖に」
「私はそれ、知らないんだけどねー」
『おかげでせんとうがラクチンでした！』
「それに、かぐやちゃんも居てこその私たち勇者部だもん！今更辞退なんて・・・・許さないぞ♪」
にこやかに友奈が退路を塞ぐ。
「やれやれ・・・美少女たちからのお誘いとあっては、乗らないなんてのは野暮というもの・・・・遠慮なく、参加させていただこう」
「び・・・びしょ!?」
「わーいやったー!!というわけで、かぐやちゃん♪」
友奈が俺の手に財布を載せる。おや？この流れはまさか――――
「おやつ、買ってきて♪」

ですよねー・・・

――――――――――――――――――――

友奈がワガママを言う時というのは、大概が怒っている時だ。なので俺は大人しくそれに従う。五年もの付き合いとなれば、そういうところは自ずと判ってくるものだ。

さて、とりあえず適当にお菓子を選んで――――と、その前にマッキーや春さんたちに連絡しておこう。

『無事だと信じてましたよ』

「流石マッキー。でもまだ検査があるから退院は明日だそうだ」

『それも折り込み済みです。明日の晩御飯は蕎麦ですよ』

「白鳥家の伝統だな。祝い事に蕎麦」

『受け継いだものは大切にするべきですよ』

「ばっちゃからもよく言われたから知ってるよ」

『かぐやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

「ぅお!?びっくりしたぁ・・・マルさんか」

『おまえは何度マルたちを心配させれば気が済むんだよぉぉぉぉぉ！！！！！！！』
「あー・・・・・すんません」
『おまえはなぁ・・・・！お〝ま〝え〝っ〝て〝奴〝は〝な〝ぁ〝！！！』
『あ、もしもし輝夜くん？』
「あ、杏子さん」
『マルちゃんが泣き出しちゃったから私から話すけど、退院したら、一度こっちに顔出してね？』
「勿論。また杏子さんのコーヒー、飲みたいッスから」
『ふふふ♪とっておきのを用意して、待ってるからね♪』
『やあ、輝夜くん』
「おお、今度は春さんか」
『君の右足はもう直したよ。夏凛に頼まれてね』
「へぇ、夏凛が・・・・あ？そういや俺、今普通の義足付けてんのか」
『そこに気付かない君はきっと、大物になれるよ・・・・(苦笑)』
「当然！だって俺だから!!」

『自信たっぷりって感じ・・・・・やっぱり輝夜くんはそうでなくちゃね』
「ところで、夏凛は他に何か言ってたッスか？」
『・・・・少し、思い詰めていたみたいだったよ。主に君の事で』
「――――――うわっちゃあ」
『まあ、大丈夫って言って尻を叩いてあげたら、ボッコボコにされたから、平気だと思うよ』
「妹相手でも、それはセクハラッスよ春さんェ・・・」

――――――――――――――――――――――――

「あー！やっと帰ってきたぁー！」
「わりぃわりぃ。ちょっと各方に無事を連絡してたから」
「――――――もしかして、兄貴に連絡した？」
「俺の義足の事、ありがとな」
「っっっ//べっ！・・・・・べべべべべ別にっ!!大したことしてないしっ!!」
「あはは♪夏凛ちゃん顔真っ赤～♪」
「うううううるさいわね!!風！さっさと音頭取って！」

「ぅえ!?えー、本日はお日柄もよく――」
「真面目か！」
うーん。見事なツッコミよ・・・・流石夏凛だぜ！
「そんな固い感じじゃなくて大丈夫ですよ♪」
「・・・・そうね。そんじゃ！みんなお疲れ!!乾杯!!」
『乾杯!!』
手に持ったジュース入りのグラスを掲げ、乾杯する。
「いやぁ。まだ実感が無いなぁ・・・俺たちが世界を守っただなんて・・・・」
「輝夜、あんた何もしてないじゃない」
「うっせえ」
他愛の無い会話を続けながら、俺は、少し様子のおかしい友奈を見る。
――――まさか、な？
――――――――――――――――――――――――
友奈、東郷と共に病室に戻る。その途中――――
「――――なあ、友奈。お前、どっかおかしいだろ。身体」

「ふぇっ!?」
「・・・・・・・・」
「今更隠し事なんて、できると思うなよ？俺とお前の仲なんだから」
「――――あはは、東郷さんにもバレちゃってたけど、かぐやちゃんもすごいなぁ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・味、わかんないんだ。ジュース飲んでも、うどん食べても・・・味覚？が無くなっちゃったみたいで」
「――――――――東郷は？」
「え？私？」
「お前はどうだ？どこかおかしいところ、無いか？」
沈黙する東郷。俺はそれを肯定と受け取った。
「――――あるんだな？」
「――――どうしてわかったの？」
「身体がおかしくなった連中の共通点は何か。それをちょっと考えてみれば・・・・

自ずと答えは見えてくる」

「――――――≫満開≫？」

東郷の答えに、友奈が驚きの表情を見せる。

「風さんが満開したところを俺は見てないけど、したんだろ？風さんも満開を」

「うん・・・・・で、でも！治るよね？お医者さんも、そう言ってたし・・・・」

「――――――そうだと、良いよな」

重たい空気の中、俺は自分の病室に戻って行った。

ちなみに、輝夜はこの三日間ずっと眠り続けていました。

寝てる以外は健康状態であるため、本当に普通に寝てました。いびきまでかいて。

少女たちのＭ ―三好夏凛の憂鬱―

先週のジョジョが神回過ぎた

ギアッチョの声のマッチング具合と言い、ヴェネチア駅前の決闘と言い・・・・他にも、≫輪切りのソルベ≪配達シーンまでの暗チのアニメオリジナルとか、小説≫恥知らず≪でしか語られなかったフーゴの過去とか・・・・もうね、全てにおいてベリッシモ!!

アニジョジョ製作陣に、僕は敬意を評するっ!!

「ン、よし！完全復活!!」

修理された右足の調子を確かめて呟く。

相変わらず良い仕事っぷりだぜ。

「・・・・それにしても、相手はどんな怪力の持ち主なんだい？あんな壊れ方、見たことないよ？」
「超越者だったよ。悪魔はアンドレアルフス」
「・・・・・・・なるほどね」
「それと、もう一つ共有しておきたい情報がある」
「何かな？」
「その超越者、五歳くらいの幼女だったんスけど、なんとなく春さんに似てた」
「っ!?・・・・それは、本当かい？」
「俺の見間違いじゃ無ければ・・・・なんスけどね」
「――――――――まさか」
春さんの顔は青ざめていた。
「なあ春さん・・・・・・春さんには、子供がいたんだよね・・・？」
「――――――まっとうに、産まれていれば・・・ね」
「もし、産まれていれば、今年で五歳になる・・・・・よね」
「――――――――――何が言いたい？」

じろり、と春さんに睨まれる。
最悪、ぶん殴られるのを覚悟しつつも、俺は意を決して意見を言う。
「あの幼女・・・・もしかして、春さんの――――」
「――――――――――――――――」
春さんは答えない。否、答えられない。
多分、春さん自身も戸惑っているんだ。
そりゃそうだろう。事実確認はできてないものの、死んだと思っていた子供が、実は生きていたかもしれないなんて・・・・・ショックが大き過ぎる。
「――――今日はもう帰るよ春さん。色々と、整理したいッスよね？」
「――――――――――すまない」
「気にしないで。春さんにはいつも世話になりっぱなしッスから」
それだけ告げて、俺は≫嵐ヶ丘≪を後にした。
――
その帰り道。
「夏凛？何してんの、こんな所で」

「――――――――――輝夜」
砂浜に倒れている夏凛を見つけた。
「ははーん？さては自分一人活躍出来なくて、不貞腐れてたなァ？」
「――――――――違う、わよ」
「言い淀んでんじゃねえかよ。違うってンなら言うてみ？何があったか」
「・・・・・・・・・あんたには、関係「無くは無いだろう？仲間なんだから」なった覚えなんか無いっ!!」
夏凛が叫んで起き上がる。
「そうよ・・・元々、部活なんて行きたくなかったんだし・・・・そもそも残りのバーテックスは私一人で全部倒して――――」
「――――――――――」
夏凛がぶつぶつと独り言をしゃべり始める。やれやれ・・・
「夏凛」
「――――――――――なによ」
「自分の心を偽っちゃあ・・・・駄目だぜ？」

「っ!?わ・・・・私は別に・・・・・」
「東郷あたりから≫後遺症≪のこと、聞かされでもしたんだろ」
「――――――――――――」
押し黙った夏凛が無言で端末を見せてくる。
思った通り、東郷からのメッセージで後遺症の事について触れている。
「私は、バーテックスを倒す為に、今まで訓練してきた――――――なのに、私だけ傷付いてない・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「これじゃあ・・・・何の為に来たのか、わからないじゃない・・・・・・」
項垂れる夏凛。
そんな彼女の様子を見て、俺は――――
「夏凛」
「・・・・・・え?」
思わず、彼女の頭を抱き締めていた。
「この前会った俺の古い友達も、お前みたいな悩みを抱えていたよ。最も、こんな

事はしてないけどな」

「――――――――」

「まあ、それはともかくとして・・・・・・人間、誰でも自分の役割を明確に出来てるヤツなんていないさ」

「――――――――だから、なによ」

「別に？ただ、傷を誇るような真似は止めとけよ。只でさえ夏凛はかわいいんだからさ」

「かわっ!?」

胸に頭を埋(押し付けられて)めている夏凛が顔を真っ赤に染める。

「それに、お前がどう思おうが、アイツらはお前を仲間だと思ってるみたいだぞ？」

「？それってどういう・・・・？」

と、その時、ドン、と背中に衝撃が走る。

チラリと後ろを振り返れば、友奈が俺に抱き付いていた。

「よお、友奈。夏凛探しに来たのかい？」

「・・・・・むぅ！かぐやちゃんが夏凛ちゃんと仲良ししてるぅぅぅぅ！！！」

「羨ましいならお前、夏凛側にまわれよ」
「うん!!」
「ふぇ!?ちょ！」
友奈は素早く対面に回り込むと夏凛をぎゅううううう、と抱き締める。
「ふわぁぁぁぁぁ・・・・・・」
「むぎゅう～～～～♪」
「はっはっはっは～～、夏凛サンドだぁ～♪」
俺と友奈に挟み込まれた夏凛は、更に顔を赤くして、目を回してしまうのであった。

結局、夏凛は友奈の『大好き攻撃』によって撃沈。勇者部に戻ってきたのだった。
その日の夜、東郷から『明日には退院できる』と連絡があり、全員で迎えに行く事になった。
そして翌日――
「良い眺め～・・・」

夕暮れ時の学校の屋上。
東郷と合流した後、俺たちはここから町並みを眺めている。
「私たちが、守ったんだよね」
「普通に暮らしている連中は知らないけどな」
「それでも、誇れることだと思うわ」
全員で笑いあう。俺は、かけがえの無いこの日常が護れたのだろうか？
多分、答えはイエスだ。
友奈や東郷、風さんに樹、そして夏凛。
みんなが心から笑っている。だから、大丈夫。
ふと、夏凛と風さんが端末を見る。
その後の反応は対照的で、夏凛は笑い、風さんは暗い顔をしていた。
「なにか良いことでもあった？夏凛ちゃん」
「ふぇ!?べべ・・・別に何も！」
友奈の問に照れ隠しする夏凛を尻目に、風さんに声をかける。
「風さん」

「え？何？」
「・・・・・大丈夫だよ。何があっても、なるようになるさ。無責任な発言なのは、わかってるけどな」
「――――――――煌月」
『どうかしたの？お姉ちゃん』
「――――――うぅん。なんでもない。ありがと煌月」
「Ｙｏｕｒｗｅｌｃｏｍｅ」
そう言ってウインクしてやると、ようやく風さんも笑った。
そうして話題は、夏休みにやりたいことにシフトする。
やりたいことを語り合う中、俺は一人、何があっても大丈夫なように、準備だけはしておこうと、心に決めるのであった。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景 ―ｳｪｽﾀﾞ―編―

555×ゆゆゆっていう、誰も得しないクロスオーバーを思い付いたけど、書いてて絶対しんどくなるから誰か書いて

「夏休みになりました。
バーテックスをぜぇーんぶ倒したお祝いにと、大赦が夏合宿をプレゼントしてくれました！やったー♪
というわけで、私たちは海にいまーす♪」
「誰に話してるの？友奈ちゃん」
「俺等(この作品の読者)には見えない隣人たちじゃね？」
メタ発言を交えつつ、俺たち三人は砂浜を歩く。
東郷は水陸両用の特別な車椅子に乗っており、友奈がそれを押している。
こういう慰安旅行的なモンを用意されると、逆に疑いたくなるんだよなぁ・・・・

なんて考えていたら突然、友奈が東郷と共に走り出す。慌ててそれを追いかけていく。今は変に邪推なんかせず、楽しめってか？まったくもう・・・・・！

「ちょ・・・待てぇ～～！」

「へっへーん♪こっこまーでおーいーでー♪」

「きゃあああああ♪」

―――――――――――――――――――――

友奈と東郷と追いかけっこをして、パラソルの下へと戻ってくる。二人はあの後、海へと入っていった。

去年、春さんに海中用の義手と義足を造ってもらっているから海で泳ぐことは可能なのだが、今回はパス。ちょっと疲れた。

『およがないんですか？』

パラソルの下には樹がいた。風さんと夏凛は見当たらない。泳ぎにでも行ったか・・・・あの二人め・・・・

「ちょっと休憩。流石に、普段履き馴れない義足（アシ）で砂浜は難易度高かったわー・・・・」

『？？？』

どうやら普段の義足とは違いが分かりにくいらしい。

いいだろう・・・・説明しよう！

「海水用にポリカーボネイドで造られているんだ。構造自体も、普段使ってるのよりかなり単純化されているから、後始末も楽チンなんさ！」

『へぇ～』

「しかも！ポリカーボネイド製だから、耐久力もそこそこで、熱にもそこそこ強い！」

『へぇ～』

「関節に使用されている人工筋肉は空気圧式だから、ちょっとラグと遊びが発生しちまうのが難点だが・・・・競泳するワケでもねェし、普通に泳ぐ分には問題無いレベルさ！」

『へぇ～』

3へぇ～頂きました。ありがとうございます。

「ちなみに左腕も同じ素材で出来てるぜ？こっちは手首を河童の手首に交換できる！」

『へぇ～』

ノーマル手首を外して河童手首を取り付けたところで、樹の目が死んできたので止める事にする。

「樹は？泳ぎに行ったらどうだい？荷物番なら俺がしてるからさ」

『いいですか？』

「モチロン。楽しんで来いよ」

『いってきます！』

樹が砂浜の熱さに跳び跳ねながら海へと向かう。それと入れ換えに夏凛が海から戻って来た。

「おかえり」

「輝夜？友奈たちと泳ぎに行かなかったの？」

「歩き疲れた。いつもの義足（ヤツ）とは違うからさ～・・・」

「ふぅん・・・・そういうもんなの？」

「そういうモンなの」

クーラーボックスからドリンクを取り出して夏凛に放る。

受け取った夏凛はそのままゴクゴクと喉を鳴らしてドリンクを半分ほど飲み、俺の隣に座った。
「・・・・・・ふむ」
「？なによ」
うーむ・・・・こうして見ると、今まで訓練を受けてきただけあって、引き締まった身体してるんだよなぁ・・・・
そして、友奈ほども無いが、無くは無い・・・・・・と。
「――――――視線がやらしいんだけど・・・・」
「そりゃまあ、水着の美少女が目の前に居りゃあな」
「ばっ!?!?ばばばばばば・・・・バッカじゃないの！！！！！！」
持っていたドリンクを投げつけられたので、すかさずキャッチ。その間に夏凛は走り去って行ったのだった。
そんな夏凛と入れ換えに、今度は風さんが来た。
「おかえり～」

「ただいま～、夏凛が顔真っ赤にして逃げてったけど、煌月ぃ、なんかしたの～？」
ニヤニヤと笑いながら、風さんが訪ねてくる。
別に何もしてないんだがなぁ・・・
「ただ、『夏凛って、アスリート並みに引き締まった身体してるよなぁ』って思いながら観察してただけなのに・・・」
「それ、立派なセクハラだから」
「ぐへへ、知ってる」
知っててやったんかい、と脳天にチョップを貰いつつ、風さんにもドリンクを渡す。
「煌月は泳がないの？」
「そろそろ行こうかと思ってた所」
「なら行ってきなさいよ。友奈と東郷、待ってるわよ、きっと」
「うーん・・・・・そうかな？」
「そうよ」
「ン。そんじゃ、逝ってきますかあ！」

「いってらっしゃ～い――――――なんか字、変じゃない？」

気のせいだぜ。

――――――†――――――

友奈たちと合流し、一緒になって素潜りして遊び、それが一段落したら浜辺でサンドアート。

東郷がかなり精巧な高松城を作ったのに対抗して、俺は本腰入れて、東郷に負けず劣らず精巧な善光寺本殿を作ってみせた。

「少しは自重しろォ！」

「あー!!俺の善光寺さんがぁぁぁぁ！！！！！！」

「うーわ、見事に真っ二つ」

「あ！そうだ♪」

夏凛の木刀により、真っ二つにされた俺の善光寺さんを見た友奈が何かを思い付いたらしく、パラソル下の荷物へと向かう。

帰ってきた友奈が抱えていたのは大玉スイカ。

「なるほど、西瓜割りね」

「良いじゃな～い♪なかなか女子力高いわよ♪」
「やったー♪風先輩に褒められた～♪」
スイカ割りの何が女子力高いのか。
まあ、それは別にいいとして、スイカ割りには賛成だ。
そんな訳で、夏凛に叩き割られた善光寺さんを蹴り崩し、シートを敷いて場所を確保する。
そこに間髪入れずに友奈がスイカを置いて、準備完了。
「誰からやる？」
「ジャンケンで決めよう」

公正なるジャンケンの結果、樹がやることになった。
使用する棒は、先程俺の善光寺さんを壊した夏凛の木刀だ。
「目標、二時方向！」
「樹ちゃんから見て右だよ～！」
東郷の指示を友奈が翻訳しながら、樹をスイカへと誘導していく。

「まったく・・・こんな程度で熱くなって、て樹ィ！そこよ!! おもいっきり振り下ろして!!」

「夏凛も熱くなってんじゃねーか(爆)」

ピタリ、とスイカ手前で樹が立ち止まる。

何を思ったのか、樹は足を肩幅程度に広げ、ゆっくりと木刀を振り上げていった。

「あはははｗｗｗ樹何よその構え～～ｗｗｗ」

「あれ、あんたの真似でしょ」

「えっ!? 私あんなん？」

「あんなん」

樹らしい模範で納得である。

さて、そんな樹は振り上げた木刀を力強く握り締め、振り下ろそうとする。

「樹ィ、振り下ろす時は脇を締める！」

俺の指示に、樹は開いていた脇を閉じ、木刀を振り下ろした。

スイカに命中した木刀は、見事、スイカを真っ二つにしてみせたのであった。

「樹ちゃんすっご～～い!!」

「樹ちゃんは光る原石ね！磨けば磨く程輝くわ、きっと！磨かなくっちゃ！」
「でも護国思想に染めるのはNGな」
この後、割ったスイカはみんなで美味しく頂きました。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景―旅館編その①―

ゆゆゆいでまさかのランキングイベント。上位者にはＳＳＲ銀ちゃん。

ランキング見てきたけど、お前ら人間じゃねえ！
どうやってあれだけ稼げんだよ!?
ぶっタマげたわ・・・・ガチで

海で思い切り遊び、旅館へとやって来た俺たちを待っていたのは、類い稀に見ない豪華な料理だった。
「うわぁー・・・・・・！」
「すっごい豪華ぁ・・・・」
『見てください！カニですよ！カニ！』

「うわぁホントだ！カニさんだ！お久しぶりです、結城友奈です！」
カニと握手する友奈を微笑ましく思いつつ、風さんと仲居さんとの会話を聞く。
「あの～・・・部屋間違えてませんか？」
「とんでもございません・・・・どうぞ、ごゆっくり・・・・」
仲居さんはそれだけ告げて、去っていってしまった。
「うーん・・・・私たち、好待遇みたい？」
「ここは大赦絡みの旅館だし、お役目を果たしたご褒美って事じゃない？」
「て事は・・・・食べ放題!?これ全部食べちゃっても良いの!?」
『でも、友奈さんが・・・・』
樹の指摘に、友奈の方を見る。件の人物は、刺身を口に放り、その食感を堪能していた。
「ん～～♪このお刺身の食感が堪りませんなぁ～♪」
更にしらすを食し、「何でもないよ」と言うかの如く、食レポを続ける。
「んんっ♪このつるつるしたのど越しも良いね！」
やれやれ・・・・全く友奈は・・・・

「こーら、いただきますくらい言え」
いつもの調子で、軽く友奈の頭を小突く。
「あた!?えへへー、ごめ～～ん」
友奈もそれに答えて笑って謝る。
「ありとあらゆる手段で味わってる・・・」
「・・・・友奈には敵わないわ」
『尊敬します！』
さて、なんやかんやあったものの、この豪華料理を全員で堪能する事となった訳だが・・・・
「場所的に私がお母さん役をするわね」
「東郷が母親か・・・・厳しそうね」
「門限を破る子は柱にくくりつけます」
柱・・・・・・くくりつけ・・・・・・うっ頭が・・・・！
「ちょ!?輝夜どうしたの!?顔が真っ青よ!?」
「あー・・・・・・大丈夫・・・・ちょっとトラウマを思い出しただけ・・・・・」

「え？トラウマ⁉今の会話から思い出すトラウマってどんな⁉」
「まあまあお前、そこまでしなくても・・・・かぐやも反省してるようだし――――」
「あなたがそうやって甘やかすから――――」
「そしてあんたらはこんな輝夜放って夫婦漫才すんなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
――――――――――――――――――――――――――――――――――――
「しっかし・・・前にも言ったかもだけど、いつかこういうのを日常的に食べられるようになりたいわよねぇ・・・・・自分で稼ぐなり、良い男見つけるなりして」
「無理でしょ、風さんだし」
「煌月ぃ！」
『後者は女子力が足りませぬ』
「樹まで⁉」
最愛の妹にまでツッコまれ、風さんはショックを受けていた。
「女子力いうなら、東郷と輝夜の所作を見習いなさい」
夏凛がそんな事を言って、俺と東郷へ視線を向ける。

東郷はともかく、俺の所作なんざ見習うようなモンは無いんだが・・・・

「かぐやちゃんも東郷さんも、キレイに食べるよね～」

「もう、友奈ちゃん・・・・じっと見られると恥ずかしいよ・・・・//」

「ばっちゃがマナーにうるさい人だったからなぁ・・・・ペナルティ一回毎におかずが一品減るシステム。白飯残してくれるだけ有情さ。でももう白飯だけの晩飯はこりごりだよ・・・・・」

うわぁ・・・・といった表情でこっちを見る犬吠埼姉妹。

でも、そのおかげで俺もマナーには少し詳しい。

なんやかんや言って、ばっちゃにはとても感謝している。

――――――今さらだけど、俺、ばっちゃの事好きすぎじゃね？悪い事だとは思わんけど。

「ま、私もマナーにはそこそこうるさいけど、ね！」

と言ってるそばから、

迷い箸でワンアウト

刺し箸でツーアウト

手皿でスリーアウト
「はい、スリーアウトチェ～ンジ」
「ぬぐっ⁉べ・・・別に良いでしょ⁉」
「そうだそうだー！」
「食事はおいしく、そして楽しく～♪」
『ここで結託するの⁉』
こうして、夏凛、風さん、友奈による謎の同盟が組まれた。
訳がわからないよ・・・・

―――――+―――――

食事の後は露天風呂。
今、この薄壁の向こうでは、勇者部の女子五人が≪裸のお付き合い≫をしているわけで・・・・
それが少ぉし、気になる小生な訳でして・・・・
「―――――止めよう。後で確実に東郷に吊るされる」
でも、聞き耳たてるくらいなら、許されるよね？

そんな訳で壁に耳を当て、向こう側の様子を伺うことにした。

煌月輝夜の華麗で喧しい日常風景 ―旅館編その②―

ホワイトデーイベントがヤバい（迫真）

俺の中の乙女心がトキメキラリしてテンションがおかしいことになったわ・・・・
あ、今回のＳＳＲ園子様もゲットできました。ついでに競泳水着なっちも。
園子様（中）だけは、多分ＳＳＲコンプできてるんじゃないかな・・・・ちゃんと確かめた事、無いけど

結論から言うと、企みは失敗に終わった。
「まさか、友奈が俺の気配を察知して、耳元（壁越し）に大声だして怯ませてくるとはな・・・・」
おかげでびっくりした俺はひっくり返って風呂で溺れかけた。

「自業自得でしょ」
「ぐうの音もでねぇな」
会話しながらも作業の手を止めない。
現在俺は、両足を解体して水気の拭き取りを行っている。
両足が終わったら次は左腕だ。
「よっと・・・・あ、やべ。届かねえ」
『これですか？』
「お、サンキュー樹」
何かあった時の為に持ってきていた予備の義手を樹から受け取ると、今着けている左腕を外し、予備のを取り付けて外した左腕を解体（バラ）す。
「――――――――」
「・・・・じっと見てても気持ちの良いモンじゃねーぞ？」
「(フルフル　)――――――♪」
「んー・・・・・樹が見ていたいなら、止めはしないけどな」
こんな物に興味があるとは・・・・樹も変わってんなぁ。

バラした義手義足は元に戻してバックの中へ。
そして俺は・・・・・・・何故か友奈と東郷の間に挟まれた。
「・・・・・・俺、そこの押し入れン中で寝ようと」
「だと思いました」
「かぐやちゃんは私たちの間！ね？(威圧)」
「ｱｯﾊﾒ」
ちくしょう――――それもこれも大赦が部屋を一つしか用意しなかったせいだ。
大赦め・・・・・いつか報復してやる・・・・・・！
「輝夜がなんかアホな事考えているわね・・・」
「うるへー」
「はいはい、そこはそろそろ黙ってね～」
風さんが何か言いたいようなので黙る事にする。
「さて、女だけの旅の夜「俺、男だけｄ」友奈、煌月の口塞いで」
「はーい♪」

「んんんーーー！！！」
　タオルを猿轡にして、口を塞がれた。友奈のヤロウ・・・いつの間にこんな芸当を・・・・!?
「さて、女だけの旅の夜、どんな話をするか分かるわよね？」
「え？・・・・・・・・・つ、辛かった修行の体験談・・・・とか？」
「違う」
「正解は、日本という国の在り方について存分に語る事です！」
「それも違う！」
　夏凛と東郷の答えに半眼になって否定する風さん。
「はぁ・・・・樹、正解は？」
『コイバナ？』
「そう！コイバナ！恋の話よ!!」
「すみませんもう一度お願いします」
「こ・・・・・恋の話よ・・・・」
　真顔の東郷に気圧され、風さんが口ごもる。

「え・・・えっと、じゃあ・・・・今、恋してる人～・・・・」
友奈が手を挙げて全員に問う。
がっ！駄目!!
流れるのは気まずい沈黙のみっ!!
「なによみんなして～。女子力足りて無いんじゃないの？」
「そういう風はどうなのよ」
「ふっふっふっ――――――そうね、あれは・・二年の時だったわ。私がチア部の助っ人をした時、私のチア姿に惚れたやつがいてねー・・・・まあ、『デートしないか』とか、言われたりしたもんよ～。もんよ～！」
「な・・・なるほど・・・・ん？あんたたち、落ち着いてるわね？」
そりゃまあ・・・・
『この話十回目ッス』
「えぇ・・・・それしか自慢できる話が無いんかい」
「あるだけ良いじゃない！」
風さんの言葉には、一理あるんだよなぁ・・・・

俺なんか下駄箱に果たし状が入ってることはあっても、ラブレターとかが入った試しが無いよ・・・・

「ええい、こうなったら、話題変更よ！あんたたち、我が勇者部の黒一点たる煌月のことをどう思ってるのか、この場で洗いざらいしゃべっちゃいなさい！」

「「えぇ!?」」

おい待て風さん、それはどんな拷問だ!?つーか、俺の真ん前で言わせるんか!?

『じゃ、私から』

「お、珍しく樹が・・・・じゃ、どーぞ」

樹が挙手して名乗り出る。

うーん・・・樹のことだし、»怖い»とか、»近寄り難い»とか言うんだろうなぁ・・・・

『こうづき先輩は私にとって――――――お父さんみたいな人！』

ほらな、やっぱりそういうと思うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?!?

「お父さん？輝夜が？」

『？なにか変ですか？』

「いやいや別にぃ？」

くっそ、風さんの奴・・・・・露骨ににや付きおってからに・・・・

『最初は、ちょっと怖そうで近寄り難いイメージでした』

「そうかなぁ？かぐやちゃん、こんなにいい子なのに・・・」

『でも実際に話してみたら、全然そんなことは無くて、優しくて、時々怖くて、なんだかお父さんみたいだなぁって、思ったんです！』

――――――――猿轡されててよかった。

なんか、もう、ここまで誉め殺しにされると、奇声上げそうになるよ・・・・・

「んじゃ、次は私の番ね！」

樹に続き、今度は風さんが名乗り出た。

「私にとって煌月は・・・・・んー、そうね――――――相棒、かな？」

「相棒ですか？」

「そう。あ、別に深い意味は無いわよ？ただ、なんとなく、煌月には色々お世話になってるし、勇者部唯一の男って事で、私たちじゃ対応しきれない事にも対応してくれてる。煌月に励まされることもあったりしたし・・・・・なんだかんだで煌月には助けられてるのよ、私」

「それで相棒？」
「そうよ？」
「だって、かぐやちゃん！よかったね♪」
にこやかに言うなし・・・・・・
あー、もう・・・・・早く寝ちまいたい・・・・・・
「さて、私と樹は言ったわよ！次は誰！」
「風先輩」
「ん？――――――あれ」
東郷が≫静かに≫のジェスチャーをして、ある一点を指差す。
「――――――ＺＺＺＺＺＺ」
いつの間にか、夏凛が寝ていた。こいつ寝付き良い方なんだなぁ――――――ちょっとうらやましい。
「――――私たちも寝よっか」
「はぁい」
『それじゃ、電気消しまーす』

「おやすー」
「おやすみなさい」
樹が電気を消し、辺りは暗闇と静寂に包まれる。

その後、東郷が怪談話を始めようとする気配を感じたので、なんとか外したタオルの猿轡を東郷の口にねじ込んだのは、完全に余談である。

樹→「お父さんみたい」
風→「頼れる相棒」
どっちも恋愛対象として、輝夜を見ていない。ということの現れです。
さて、では残りの三人は・・・・・？

Ｖの再襲来-ＳｈａｐｅＳｈｉｆｔ-

ｅｘｔｒａ回を先に書いたのは、その方がこれ以降の話を読む上で内容が理解しやすいと思ったからです。

それはそうと、『鬼滅の刃』アニメスタートしましたね！

アニメーションがｕｆｏｔａｂｌｅ制作ってハナシだから、戦闘シーン期待してましたけど・・・・・・

良い意味で期待を裏切ってくれました!!

やっぱ鬼滅はサイコーだぜ！

いやはや、これから毎週が楽しみになって来ましたよぉ〜〜!!

「バーテックスに生き残りがいて、戦いは延長戦に突入した・・・・・・と」
「だいたい、そういうことね・・・・・・」
合宿から帰った俺たちを待っていたのは、大赦から送られてきた全員の勇者端末とバーテックスに生き残りがいたという報告だった。
「みんな・・・・・ごめん・・・・・」
「風先輩だって、さっき知ったばかりじゃないですか」
項垂れる風さんを東郷が慰める。
しかし・・・・・生き残りか・・・・・・
いや、まさか・・・・・な
「でもさ、そいつさえ倒しちまえばバーテックスは全部倒したってコトだろ？んなら、パパパっとやっちまおうぜ」
「もう、かぐやちゃん！バーテックスは壁の外から来るんだよ！どうやって倒すの？」

「・・・・・・・こっちから攻め入ることってできないん？」
「ったく、神樹様の教えにあるでしょ。『壁の外に出てはならない』って」
あー・・・・・あったなぁ、そういえば。
「・・・・・・輝夜、あんた忘れて・・・・・？」
「まー、大丈夫だって！今更一体程度、あの猛攻を凌いだ俺たちだぜ？」
「話をそらすなァ!!」
ちょ!?待っ!?チョークブリーカーはやめ――――あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!!!!
『成せば大抵なんとかなる！だよ、お姉ちゃん』
「樹――――そうね！」
続いてコブラツイストをかけられている俺を無視して、風さんが窓から大声で叫ぶ。
「何時でも来なさいバーテックス!!勇者部六人がお相手よーーー!!!」
それはいいから早く助け――――あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!!!!!

「なぁーんて言ってたのに、もう一ヶ月過ぎちゃったよ」
新学期が始まり、数日しての放課後。
俺たちは三人で、部室に向かいながら駄弁っていた。
「平和が一番さね」
「輝夜くんの言うとおりだわ。でも、気が弛みすぎても駄目よ？」
「わーってるって」
と、その時、赤い猫が唐突に現れて俺の頭の上に乗り丸くなった。
「わっ、だめだよ火車。戻って戻って」
友奈が慌てて端末を操作し、火車と呼ばれた赤猫は消えた。
「・・・・・・・・・あの牛もそうだけど、俺、友奈の精霊になつかれてる？」
「っぽいねぇ。よかったね！かぐやちゃん♪」
ちっとも良くねー・・・・・
そんなこんなで部室に到着。どうやら俺たちがラストの模様。ちょっち悔しい。
「うぃーッス！」
「ちっす。遅かったじゃない」

「日直にもなると、いろいろあるのさ～」
「またテキトー言って・・・・」
なんて他愛も無い会話をしていると、視界の端に何かが過った。
気になってそちらを見ると、尻尾が鎌になった謎の生き物に東郷が絡まれていた。なにあれ？
「ああ、ごめん東郷。その子まだ私の言うこと聞かなくて・・・・」
どうやら風さんの精霊らしい。
友奈の火車同様、大赦が今回用にシステムをアップデートしたらしく、夏凛以外の四人に新しい精霊が追加されたようだ。
（なんで夏凛だけ・・・・・・・関係あると考えられるのは、やっぱ・・・・・・・）
なんて事を思考していると、またもや視界に何かが横切る。なにこれ？鏡？
『私の木霊と雲外鏡も出てきちゃいました』
雲外鏡。
なるほど、だから鏡・・・・・・いや、やっぱワケわかんねーや。
そうこうしていたら、牛と火車も出て来て、更には東郷が自分の精霊を出し

て・・・・・いやいやちょっと待て。
「いくらなんでも多すぎぃ!?」
「ちょっとした百鬼夜行ねー・・・・」
「も・・・もう文化祭の出し物、これで良いんじゃないかな？」
「駄目よ」
「ですよねー・・・・」

牛が義輝にかぶり付いたり、俺が東郷の精霊ズに取り囲まれたり、ともかくいろいろすったもんだしたが、全員が自分の精霊を無事端末に戻すことに成功した。
「やっと戻ってくれたわね・・・・・」
「なんつーか、めっちゃ疲れた・・・・・」
肩で息をしながら、夏凛を見る。何か引っかかる事でもあるのか、夏凛は釈然としない顔をしていた。
まぁ、理解はできる。大方『なんで自分だけ、追加の精霊がいないのか』とか思ってんだろ。

精霊の追加。単純に、戦力が増した・・・・・・ってだけじゃないだろうな・・・・

考察ポイントは一つ。ズバリ、満開だ。

精霊追加の条件が、満開の使用であるのならば、かつて夏凛が言っていた『勇者は満開する度に強くなる』という言葉にも説明が付く。

ということは、東郷の精霊が最初から三体いたのは――――

と、そこまで思案したところで袖を引っ張られる感触。

振り向けば樹が、心配そうな表情でこちらを見ていた。

怖い顔でもしてたかな・・・・？

「んー？どうした樹ー」

なるべく笑顔をつくりながら、樹の頭を撫でてやる。うん、良い笑顔だ。

すると、スケッチブックを取り出して文字を書く。

『バーテックス、いつ来るんでしょう？』

文字の下には顔文字まで書いてある。緊張してる顔かな？

「うーん、そうね・・・・私の読みだと明日あたり怪しいわね！」

「うぉ!?夏凛お前いつの間に後ろに!?」

「実は神樹様の勘違いで、バーテックスの生き残りなんていなかったー、とか？」
「風さんもか・・・・!?」
お前ら人の後ろを取り過ぎィ!!
と、その時だった。

♪～♪～♪～

「ふぇ!?」
「樹海化警報・・・・!?」
「これはアレね。神樹様からのツッコミね」
「そういう夏凛だって外してんじゃないの！」
「はいはい、二人共ケンカしてんじゃないのー。行くぞ、正真正銘のラストバトルだ」

――

レーダーの反応を辿って、バーテックスが視認できる場所に到着。
「あの走ってるの、前に樹が倒してなかった？」
「元々、二体で一つの存在なのかも・・・・・」
「二体で一つ・・・・・双子って事？」
「それよりも、あいつの上に乗ってる奴・・・・・なんなのアレ？」
「黒い・・・・くらげ？」
「うーん・・・・くらげっていうか、カーテンみたいな感じだね、かぐやちゃん――――――かぐやちゃん？」

ああ、ちくしょう。なんでこう、悪い予感ばっか当たるのかね・・・・・・

「どうしたのかぐやちゃん!?顔、真っ青だよ!?」

「あれぇ～？もしかして～煌月ったら、ビビっちゃった～？」

落ち着け。冷静になれ。でなきゃあのときの二の舞だ。

いや、今回はバーテックスも一緒にいる。二の舞処か大惨事になりかねない。だから落ち着け。クールになれ。

「――――――えっと、煌月？」

「風さん！みんな！よく聞け！」

「ふぇっ!?あ、はいっ！」

「あいつ・・・・・シェイプシフターは俺がなんとかする!!だからお前らはバーテックスを!!いいな!?」

俺の指示に全員が困惑する。

気持ちは察するが、最悪のパターンだけは避けなければならないので承諾して欲しい。

「そんな・・・・輝夜くん一人じゃ危険よ！私が援護を「駄目だ！！！」っ!?」

「いいか!?お前らは絶対に手ェ出すなよ!?アイツに呑み込まれたくなかったらな!!!」

それだけ告げて、俺はバーテックスとシェイプシフターのもとへと跳ぶ。

「クソっ・・・・遅かった」

二体の側に到着した時には、既にバーテックスはシェイプシフターを取り込んでおり、進化――シェイプシフトしていた。

最初にバーテックスを見た時から感じていた、あの時の感覚。そこから推測した、バーテックスの正体。

すなわち、バーテックスとシェイプシフターは同一の存在である、という事。

シェイプシフターは、視認、もしくは接触した人間の心に≫悪意≪を注ぐ。抵抗力のある者はなんとも無いが、そうでない者は悪夢を見、終いには錯乱状態に陥る。

「友奈たちに抵抗力があって助かった。接触さえしなけりゃ、あいつらは錯乱しない」

だから、俺が終わらせる。

ニルヴァーナを奴に突き刺して分解させちまえば後は――――――

そんな俺の作戦を嘲笑うかの様に、シェイプシフトし下半身だけ筋骨粒々となったバーテックスは、目にも留まらぬ速さで俺の背後に回り込むのだった！

「っな!?ごはっ・・・・!!」

蹴られた。と理解した瞬間には、俺の身体は宙を舞っていた。

（クソ――――――嘘だろ・・・・・なんて速さだよ・・・・・）

だがそれだけではなかった。

俺が地面に落ちるよりも速く、強化バーテックスは俺を蹴り上げる。

恐らく、都合四度。

蹴り上げられ、天高く舞い上がった俺の脳天目掛けて、強化バーテックスはオーバーヘッドキックをお見舞いするのだった。

「――――――――ッハ」

地面に叩きつけられた俺は、悲鳴すら上げられず、肺の中の空気を吐き出した。

上空のバーテックスがそのまま落下してくる。恐らく踏み潰すつもりなのだ。

「ァァァァァああああああああ！！！！！！！！！！」

だが、そうはならなかった。
バーテックスを落下途中で撃墜した奴がいたのだ。
「――――これ以上」
友奈だ。友奈が落下するバーテックスを蹴り飛ばしたのだ。
「かぐやちゃんをいじめるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！
友奈の絶叫が、樹海に響き渡るのだった。

シェイプシフターについて・・・
二年前の瀬戸大橋にも現れた謎の存在。

見た者、触れた者の心に≫悪意≫を注ぎ、悪夢を見せて錯乱させる能力を持つ。
そういったものに抵抗力のない者は、簡単に錯乱してしまうが、神の加護等により、抵抗力を持っている者には全く効果が無い。
バーテックスと融合（これを≫シェイプシフト≫と呼ぶ）する事でバーテックスを強化する事ができる。

Ｖの再襲来 -再起動-

この作品の友奈ちゃん、ぶちギレ率多くない？
ムカ着火ファイアーし過ぎじゃない？（どの口が言う）

少女たちが気付いた時には、既に輝夜は地面に叩きつけられた後だった。
「は・・・・・？え・・・・？いったい、何が・・・・・？」
五人の中で唯一、制式な訓練を受けている夏凛すらも捉えられない速さだ。
だと言うのにも関わらず、たった一人、強化バーテックスに反応した少女がいた。
「待って！友奈ちゃ」
東郷の静止の声も聞かず、友奈が飛び出した。
「っく・・・・・友奈を追うわよっ！東郷は煌月の様子を見に行って！」
「り・・・・了解！」
咄嗟に風が指示を出し、残る四人も強化バーテックスへと向かっていったのだっ

た。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！」

飛び出した友奈は火車の力を使用。
炎を纏った飛び蹴りを落下していく強化バーテックスへと喰らわせた。
「かぐやちゃん！かぐやちゃんしっかりして‼」
地面に倒れ伏す輝夜に近寄り揺すり起こす。
が、輝夜の額から流れ出る血を見て、友奈の頭から血の気が引く。
そこに、強化バーテックスが迫り来る。
「・・・・・・かぐやちゃんを」
真っ直ぐに向かってくる強化バーテックス。友奈はそれを回し蹴りで迎撃した。

「かぐやちゃんをいじめるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！」

叫び、蹴り飛ばしたバーテックスへと突撃。
まるで仇討ちの如く、怒涛の連続キックでバーテックスに猛攻を仕掛ける。
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」
その蹴りはバーテックスの体を徐々にだが削っていく。自動回復を持ってしても追い付かない怒涛の連撃に、バーテックスが圧されていっているのだ。
そこへ――
「友奈！一旦どいて!!」
「封印の儀、やるわよ!!」
夏凛、風、樹の三人が到着。
強化バーテックスを囲うように並び立ち、友奈に下がるよう叫ぶ。
「――はい！」
仲間たちの声に、冷静になった友奈も加えて、封印の儀が行われる。

バーテックスの頭が開き、そこから御霊が――――――

「えぇ!?なにこれ!?」

「泥!?御霊は!?」

「――――――!?!?」

「御霊の気配を感じない!?どういう事!?」

御霊が出てくることはなく、代わりに汚泥が溢れ出てきたのだった。

汚泥は樹海の大地を焼き、シェイプシフターを産み出しつつ広がっていく。

「なによ・・・・・これ・・・・どうなって・・・・」

封印のおかげか、少女たちより後ろには汚泥は広がらず、留まっているが、シェイプシフターの数はどんどん増えていく。

「っ！」

そこに、樹は飛び込んだ！

「樹!?あんた、何を・・・!!」

風が驚愕の声を上げる中、樹はワイヤーでシェイプシフターを十把一絡げにし、まとめて仕留める。

「樹ちゃんすごい！」

「よーし！樹に続くわよ！アタシの女子力が轟き唸る!!」

風が汚泥の沼に突入しようとした、正にその時だった。

今回起きた事柄は、少女たちの想像を遥かに越えた事情ばかりだった。

だからこそ、誰もが気付く事が出来なかった。

封印のカウントダウンが、あのレオ・スタークラスターを封印していた時よりも速く減っていた事に。

「え・・・・・」
「あれ・・・・・・」
「っ!?」
「なっ!?」
封印が解かれると同時に、四人の変身も解ける。
そして、封印が解かれたということは、当然、塞き止められていた汚泥も・・・・
「きゃあああああ!!」
精霊のバリアによって、汚泥に溺れることはなかったものの、氾濫する汚泥の量と圧は凄まじく、あっという間に四人は汚泥に呑み込まれてしまった。
「みんな!?」
それをただひとり。遠く離れた地点から見ていた人物がいる。東郷である。
傷付いた輝夜の手当てを行っていた東郷だったが、戦場の様子が変化したことを察し、その場から目視していた。
このまま下手に動けば、輝夜の身が危険だ。

そう判断した東郷は、せめて輝夜の盾になろうと汚泥との間に立ち塞がる。
汚泥の波に乗ってシェイプシフターが迫る。
そのまま東郷も、汚泥に呑み込まれ――――――

るよりも早く、大地より木の根が生え、汚泥を塞き止めるのだった。
「!?――――――これは・・・・」

同時に、汚泥の中からも木の根がめきめきと伸び、呑み込まれた四人がそれに救出された。
「みんな・・・・・よかった。それにしても、この木の根はいったい・・・・・」
と、その時だった。

「『駆体制御権限 サブに移行 承認』」

「え!?」

東郷の背後から、聞いた事の無い声がした。

驚いて振り返った東郷が見たものは、緩慢な動作で起き上がろうとしている輝夜の姿。だが、様子がおかしい。

「――――――か・・・・ぐ・・・・・・」

「『システムオールグリーン 正常稼働率許容範囲内』」

彼は、こんなにも機械的な動きをしていただろうか・・・？そもそも・・・・

何故、輝夜の口から、知らない女性の声が聞こえているのだろうか・・・？

「『おはようございます 戦闘行動を開始します』」

輝夜（？）は両目を金色に輝かせ、呟くように宣言した。

Ｖの再襲来 - ＳＹＳＴＥＭ Ｊ．Ａ．ｉｄｏｌｌ -

アイドルの綴りは、本来は≫ｉｄｏｌ≪でｌが一つなのですが、ｄｏｌｌとのダブルネーミングも兼ねて、ｌを一つ足してます。
敢えてなので、ミスではないです。（念押し）

『シェイプシフター種 及び ケイオスタイドの 存在を確認 これより 全機能を持って 排除します』
「――――――輝夜くんじゃない。貴女は誰？」
輝夜の姿をした何かは、東郷の問いに答えず、バーテックスより溢れ出した汚泥とシェイプシフターの群れに向かって跳躍した。
『武装 展開します』
かつて、初めて輝夜が樹海に訪れた時、彼が二度押し何も反応がなかった指輪のマークのボタンを、下にスワイプ。画面外に消えた指輪のボタンの代わりに、五芒

星のマークが描かれたボタンが表れた。
躊躇もなくそれをタップした、次の瞬間――――
遥か上空から五色の光が汚泥の中へと落下し、汚泥の一部を吹き飛ばしてみせたのだった。

「『≫五武具足≪ 展開を確認』」
輝夜は円形に並んだ光の中心に降り立つと、青い光から長大な木製の武器を取り出した。
「・・・・・・棒？」
「棍ってやつかしら？」
汚泥の下の地面から生えた木の根に乗ったままの友奈と夏凛が、輝夜の取った武器を見て呟く。

「――――――あれは」
その武器の正体に気付けたのは、東郷只一人だけだった。
彼女の、狙撃手としての眼力と持ち前の知識。それによって、東郷は気付く事ができたのだ。
咄嗟に東郷は端末を操作し、四人に伝える。
「みんな！なにかに掴まって!!早く!!」
「え？東郷さん？」
「何？どういう――――」

パンッ!!

突如、乾いた音が響いて輝夜の持つ武器が大きく開いた。
「・・・・・あれ、なんだっけ？どっかで見た事あるような」

「えーと・・・・うちわじゃなくて・・・・東郷さんのお部屋に飾ってあったやつ」
「――――――扇子？」
「あ！それだぁ！さっすが夏凛ちゃん！」

『『羽翔嵐（ばしょうらん）』』

友奈たちがおしゃべりしている間に、輝夜は身の丈程の巨大扇を扇ぐ。
瞬間、台風もかくやと言わんばかりの突風が吹き荒れる！
『きゃあああああ!?!?』
必死になって木の根にしがみつく四人。
輝夜の起こした突風により、溢れ出していた汚泥は全て吹き飛んだのだった。
「――――――すご」
しかし、シェイプシフターだけは突風の影響を受けなかったのか、未だ残ってい

る。

巨大扇を背中にマウントした輝夜は次に、黒い光から薙刀を抜き取る。

振る度に矛先より水が湧くそれを振るい、シェイプシフターの群れを薙ぎ払いつつ直進。

全てのシェイプシフターを切り払った後、輝夜は汚泥の発生源たるジェミニ・バーテックスへと向き直る。

ジェミニは既に何処かへと消え去っており、輝夜の視界には見当たらない。

「『磨波氷冥（まなひめ）』」

輝夜は薙刀で地面を思い切り突く。その瞬間、薙刀の穿たれた地面から全周囲に向かって津波が発生。

「バーテックスが・・・・・！」

その津波に足を取られ、ジェミニが転んだ。
そこへ尽かさず輝夜は薙刀を背中に納めると、手を着地地点にかざし、赤い光を手元に呼び出して二刀の小太刀を手に取る。

『奏伽榴（そうかりゅう）』

小太刀の刃から炎が迸る。炎は輝夜の周囲にて刀の様な形状をとり、小太刀の軌道に併せて動き回る。
小太刀と炎の猛攻に、ジェミニは即座にバラバラになった。
「一瞬で・・・・・・!?」
「――――――!!」
「え？何、樹？――――――そうね、バーテックスは御霊を壊さないと、再生してしまう・・・・・・」

バラバラになったジェミニだったが、頭部から徐々に再生を始めだした。
「『シェイプシフター種の再生を確認 殲滅方法を検索します』」
じ・・・・と動かない輝夜。
「『検索完了 これよりシェイプシフター種を殲滅します』」
両手をジェミニにかざす。
すると、両手の小太刀、背中の扇と薙刀、そして残る二つの光がジェミニの周囲に集まり、ジェミニの頭部が開かれた。
「これは!?」
「封印の儀・・・・!?」
「かぐやちゃん・・・・・」
汚泥はもう出て来なかった。代わりに大量の御霊が溢れ出したのだった。
「『≫ヴァジュラ・カノン≫セット』」
黄色の光から≫大筒≫と呼ばれる手持ちサイズの大砲を取り出し、御霊たちの中心に向けて発砲。
着弾を確認したところで輝夜は、ヴァジュラ・カノンを腰にマウントし、白い光

からナックルガードを取り出して跳躍した。

『神鳴磁刺（かみなりじし）』

放たれた杭の如き弾丸を、電気を帯びた拳で殴った。

瞬間、周囲に激しい雷が解き放たれる！

雷に焼かれ、全ての御霊は破壊された。

『状況終了　お疲れ様でした』

バーテックスが消滅した事を確認すると、輝夜は呼び出した武器を仕舞い、そのまま倒れるのだった。

「かぐやちゃん!!」

すかさず友奈が倒れる輝夜をキャッチ。

しようとした。

「よっと」

輝夜を掴まえたのは――――――

「!!あんたは・・・・・!?」

「その面・・・・・・御社の！」

「――――――ついに、システムが目覚めたか」

「すみません・・・・・・しょり、間に合いません・・・・・・でした」

「良いさ。彼女たちに知らしめる良い機会だ」
御社のナマリと幼女だった。

五武具足について――――
ＳＹＳＴＥＭ Ｊ.Ａ.ｉｄｏｌｌ（ｊｕｓｔｉｃｅ.Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ.ｉｄｏｌｌ -人工化された正義の偶像-）が所有する、五行の属性に準えた五つの武器。
それぞれ……
・木属性の青い扇≫無花果（いちじく）≫
・火属性の赤い二振りの小太刀≫双炎義（そうえんぎ）≫（それぞれ、矛勇（むゆう）と鎖羅（さら）という銘がある）
・土属性の黄色の大筒≫ヴァジュラ・カノン≫（砲身の横に複数のツマミがあり、それを操作して弾丸の収束性と速度を調整できる）
・金属性の白いナックルガード≫金剛拳≫
・水属性の黒い薙刀≫穿ち水月≫

という名が与えられている。
劇中で出していた名前は術の名前。
羽翔嵐は風
磨波氷冥は水
奏伽榴は炎
神鳴磁刺は電気
の属性を持つ術である。

Ｖの再襲来 -真実-

「≫Ｊ.Ａ.ｉｄｏｌｌ（ジェイドール）≪――正式名称Ｊｕｓｔｉｃｅ.Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ.ｉｄｏｌｌ。≫人工化された正義の偶像≪・・・・いや、≫象徴≪の方が正しいんだっけ？さっきまでコイツの身体動かしてたモノは、そのシステムの統括AIだ」

輝夜の髪を引っ張りながら、ナマリは語る。

「その目的は、勇者の抹殺だ」

「神世紀しょとう、に・・・・・造られた・・・・このシステム、は・・・・・・おじいさまに・・・・・よって、凍結され・・・・・とある場所に・・・・・ほかん、されて・・・・・ました」

「そいつを掘り起こしたのが――――――――白鳥文野だ」

「文野おばあちゃんが・・・・・」

答えながらも友奈は端末を起動し、勇者に変身しようと試みている。が、封印の儀で消費したエネルギーが回復していないのか、反応は無い。

「白鳥文野は、コイツを人間として育成しようとしていた。まぁ、実際、その試み

は上手くいっていたさ――――――――バーテックスの襲来さえ無ければ」
遠くの東郷がスコープ越しにナマリを見つめる。引き金には常に指をかけてはいるが、少しでも動けば輝夜を盾にしようとしてくるナマリに、手が出せないでいた。
「ナマリ、さん・・・・との、戦闘記録・・・・・を、かくにんしました・・・・・・・そして・・・・・・システム、が・・・・・・正常・・・・・に起動している・・・・・こと、を・・・・・・おじいさまは・・・・・・理解、しました」
「だから、アタシらは狙いをコイツに絞る事にした――――――――全てはお前たち勇者を護る為に」
「これ・・・・・が・・・・・・わたしたち、の・・・・・・目的・・・・・・です。そして・・・・・・」
「ハッキリ言わせて貰う。コイツは、いつかお前たちを殺すぞ？」
一息に、全てを語ったナマリと幼女。それに対して、風が怒りを顕にする。
「さっきから聞いていれば、煌月の事をまるで人間じゃ無いみたいに言って・・・・・!!」

「はい・・・・・そのとおり、です」

幼女の、凍てついた笑みに、風は思わず気圧される。
「まあ、百聞は一見に如かずって言うしな・・・・・おい」
「行きます」
ナマリが輝夜の顔を突き出し、幼女が右手を振り上げる。
「待っ・・・・!?」
友奈の声も虚しく、幼女の巨大な爪は振り下ろされ――――

バギン！と音を立てて、輝夜の顔面左半分が砕け散った。

「あ・・・・・・・・ぁぁ・・・・・・・・・・」

「上蓋が砕けただけだよ。死んじゃいない」

よく見れば、額から左目の辺りまでが消失しているだけで、他に外傷は見当たらない。

が、その開けられた穴から見える内部構造に、友奈たちは戦慄を隠せなかった。

「・・・・・・・なに、あれ？」

電子的な輝きを放つ機械の中心、硝子製の水槽のような物の中に、それは浮いていた。

「・・・・・・・赤ちゃん？」

「・・・・・・・・木・・・にも、見える・・・・・けど」

膝を抱えて眠る、赤子の様な形状の樹木か。

若しくは、樹木の如き身体の赤子か。

兎も角、そのような奇っ怪なモノが、浮いていた。

「どっちも正解」

仮面越しでも判る程に、満面の笑みを浮かべて、ナマリは続ける。
「≫樹状退行≪と言って、神樹様の細胞を植え付けられた人間の末路さ」
「まず・・・・・・しんじゅ様、の・・・・・細胞が・・・・・・からだを、赤ちゃん・・・・・に、まで・・・・・たいかさせます・・・・・そのあと・・・・・そのからだ、を・・・・・栄養に・・・・・じゅもくに・・・・・なります・・・・・これ、が・・・・・・≫樹状退行≪・・・・・です」
「どういうワケか・・・・・コイツは中途半端に樹状化して止まってるが・・・・・・おかげでバケモノじみた外見になっちまってる・・・・・」
友奈たちは絶句していた。
あまりにも突拍子の無い事だったから、思考が停止したとも言える。
「さて・・・・・それでもお前らは、コイツを人間だと・・・・・・言えるか？」
沈黙が流れる。
風も、樹も、夏凛も、東郷も、誰も、何も言えないでいた。

一人を除いて。

「言えるよ！だって、かぐやちゃんは、かぐやちゃんだもん！！！」

友奈である。

「・・・・・・友奈」

「本当の姿がどんな形だって、かぐやちゃんには変わりないもん!!だから早く、かぐやちゃんを放せ！！！」

友奈に力強く睨み付けられ、ナマリは肩をすくめる。

「やれやれ・・・・仕方ない。離してやるよ」

そうしてやっと、ナマリは輝夜から手を離した。

「ただし、お前らの命は保証しないがな」

「・・・・・・え？」

離された瞬間、輝夜は立ち上がり――――――

『抹殺対象を確認』

輝夜――――ではなく、システムの統括AIは、五武具足の双炎義を呼び出すと、東郷にその切っ先を向けた。

「!?」
「かぐやちゃん待っ――――」
友奈の静止の声も届いた様子は無く、AIは静かに呟く。
『これより対象の処理を開始します』
瞬間、弾かれた様に東郷へとダッシュ。
足の動かない東郷はそれに反応できても避ける事が出来ず、結果として棒立ちのままそれを見ていた。
「東郷さん!!」
AIの刃が東郷へと突き出され――――――

樹状退行について――――

神樹の細胞を取り込んだ人間は、勇者と同等の身体能力を獲得できる。

しかし、神樹細胞の働きを抑制する特殊な薬を服用し続けなければ、忽ち身体が赤子にまで縮んでしまい、体組織が樹木の物に変質してしまう。

これを、≫樹状退行≪という。

樹状退行が始まってしまえば、二度と元には戻れなず、樹木になってしまうのを待つしかない。

たった一人を覗いて・・・・・

Ｖの再襲来 -睡蓮の君-

東郷の心臓目掛けて突き出された小太刀は、東郷と輝夜の間に割って入った何者かによって弾かれた。

『よっ、大丈夫か？』。ケガは無さそうで良かったんよ～」

「あなた・・・・・は・・・・・？」

AIの攻撃を妨害したのは、薄紫の衣に身を包んだ、金糸の髪の少女。

右手には槍、左手にはバスタードソードを持っている。

「・・・・勇者、なの？」

「――――――『やっぱ、覚えてない・・・・・か』。仕方ないんよ～・・・・・」

「え？」

『んにゃ、なんでもない』。ううん、こっちの話～」

東郷に顔を向けて少女が微笑む。その左目は――――――

「義、眼・・・・？」

『はは・・・・・・・カッコいいだろ？真鍮製だぜ』」

少女が右目を閉じて左目を誇示するように東郷に見せつける。すると、東郷が突然、頭を押さえて呻きだした。

「――――――――っ」

「わわ・・・・大丈夫～？。『頭痛だな？ちょっとそこで待ってな』」

少女は東郷の頭を優しく撫でると、手を振って――――――

「『またね』。またね～」

「あ――――」

その光景に、何故か、既視感を感じた東郷。少女に向かって手を伸ばし、記憶に無い筈の名前を呼ぶ。

「っ！待って！銀!!そのっち!!」

「――――」

少女は何も言わずに、輝夜の身体に組み付いて、遠くへと跳び去って行った。

後に残された東郷は、一人ごこちる。

「わ・・・・・私・・・・・あの子の事・・・・・知っている・・・・・・？」

―――――+―――――

「『対象増加 優先度は此方の方が高いと判断します』」

「『へぇ！アタシ等の方が強いって判るのか！』。どうやって判別してるのかな～？」

軽口を叩きつつも、AIの小太刀を槍と剣で捌いていく少女。

どちらも小回りが利きにくい武器である筈だが、それを感じさせない動きで、少

女はAIと渡り合う。
「『でやぁぁぁぁ！！！！』。え～～～～～い！！！」
一瞬の隙をついて、小太刀を蹴り飛ばす。
得物を弾き飛ばされたAIは、大筒を構えて少女から距離を取る。
「逃がさないよ～！」
少女は剣を背中に背負い、槍を地面に突き立てる。
瞬間、槍が伸びてAIへと急接近する！
接近しながら少女は、背中に剣を背負ったままその柄を捻る。
すると、バスタードソードの刀身が振動し、白熱し出した！
「『うおりゃあああああああ！！！！！！！』」
気合いと共に、刃が白熱化したバスタードソードを叩き込む。
防御が間に合わなかったAIは、剣の峰をモロに食らい、地面に倒れ伏す。
「『どうだぁ！！！』。うーん・・・ちょっとやり過ぎ～？」
「・・・・・・・・・・・ぅ『ダメージ 規定値を越えました これ以上の戦闘行動は不可能です』」

「――――――『もしかしてこいつ、今のアタシらと同じか？』。かもね～、何にしても～・・・・」

と、次の瞬間――――

少女の背後から、ナマリが襲い掛かってきた!!

「『おっと!?』」

「────────チ」
「いきなりはひどいんよ～。『不意討ちなんて卑怯だぞ！』」
「────────どういうつもりだ？お前が直接、干渉してくるなんて・・・・」
「『お前らこそ、なんであいつを引き剥がそうとした？』。彼が勇者たちと一緒にいる事を、大赦はちゃんと認めているんよ・・・・・勝手な真似しないでよ」
「五月蝿い‼」
ナマリが少女に突撃する。
少女はため息を一つついて────────
「仕方ないなぁ～────────お願い、ミノさん！。『あいよ‼』」
瞬間、少女の髪色が灰色気味なブラウンに変色した。
体格や顔立ちも、先程とは別人のそれになっている。
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」
そして、バスタードソードを片手に少女は突撃してきたナマリを迎撃する。
「うぐ・・・がぁぁぁぁぁぁぁ⁉⁉」
「おりゃああああああ！！！！！」

ガンブレードとバスタードソードの激しいぶつかり合い。
『そこっ！なんよ～!!』
猛攻の隙をついて、先程からずっと動かしてなかった右手の槍の柄尻を、ナマリ目掛けて突き出した。
槍は見事ナマリの額に命中。仮面が割れ、地面に落ちるのと同時に、ナマリは倒れるのであった。
「ふぅー・・・・。『お疲れさま～』。あぁ、園子もな」
と、そこに友奈たちが走ってくる。
「かぐやちゃん!!」
「平気、気絶してるだけっぽいから」
「――――――な!?」
友奈たちが現場に到着して、真っ先に驚いたのは、輝夜とナマリが地に寝そべっている事でも、少女の身体が別人のものになっている（髪の長さは変わらないようだが）事でもなく――――――

「――――――えっと、双子？」

露になったナマリの素顔と、少女の顔が、全く同じである、という事だった。

「あー・・・・別にアタシら、双子ってワケじゃないぞ。『うーん・・・敢えて言うなら・・・・・・・プラナリア？』。まぁーたワケわかんない喩えを――――――」

「・・・・さっきからあいつ、何を一人で会話しているのよ？」

『さぁ・・・なんでしょう？』

何処からどう見ても一人で会話している少女に対して、夏凛と樹は少し引き気味だ。

「あんたは・・・いったい？」

「おっと、残念だけど時間切れだ。樹海化が解ける」

少女の言葉通り、樹海が崩壊し始める。
「あ・・・待って！」
「『ゴメンね～？でも、そのうちまた会えるから～』ネコのおにーさんにも宜しく言っといて！」
それだけ言って、少女の姿は樹海と共にかき消えた。
周囲はいつも通りの学校の屋上。気絶したままの輝夜も含めた六人全員、どうにか無事だ。
ナマリの姿は消えていた。友奈たちは気づかなかったようだが、樹海化が解ける時に乗じて幼女が回収していたのだ。
「――――はぁ。まったく・・・もう・・・!!」
風がため息をつく。そして――――
「いったいぜんたい、何だってってのよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ・・・・」

万感の思いを込めた風の叫びが、夕暮れの校舎に鳴り響いたのだった。

友奈ちゃんと東郷さんもちゃんと一緒です。
八話後半のアレは、次回以降に・・・

告げられるＴ -後遺症-

リリフレのガチャは爆死しました。
東郷さんも、風先輩も、来てくれなかったよ・・・・・・

ま、樹ちゃんは来てくれたけどね～♪

あれから、かぐやちゃんはお部屋に引きこもったまま出てこない。
マッキー先生の呼び掛けにも答えないなんて・・・・・すごく、心配。
「今はそっとしておきましょう。坊っちゃんならきっと、大丈夫ですよ」
先生はそう言うけれど・・・・・・それでも、心配だな・・・・・・・
けれども、かぐやちゃんの心配ばかりしていられなくなった。

「結城友奈様で御座いますね・・・・？」
かぐやちゃん家から出たら、大赦のお面を被った同い年くらいの神官さんがいた。いきなり声をかけられたからちょっとびっくり。
「え・・・・・・あの・・・・・・大赦の・・・・・？」
「東郷様を始め、他の勇者様方は既に車中に。結城様もどうぞ、こちらへ」
促されるまま、高級車の中に入る。神官さんの言った通り、車の中には勇者部のみんながいた。と言っても、かぐやちゃんはいないけど・・・・・・
「――――――友奈ちゃん」
「東郷さん・・・・みんな」
「友奈、輝夜の様子は・・・・・・・？」
黙って首を横に振る。
夏凛ちゃんはそれだけで俯いてしまった。
「皆様には、これからさる御方に御面会していただきます」
「さる御方って・・・・・・？」
「先日、貴女様方が樹海内でお会いした方――――――と言えば、御理解頂けますで

しょうか？」
風先輩の言葉にそう返した神官さん。
樹海で会った・・・・・・それって・・・・・・
――――――――――――――――――――――――
車は、前に入院したあの病院にたどり着いた。
ここに、あの子が？
「それっぽい娘・・・・見なかったけどなぁ・・・・・」
『病室から出られないとか？』
「此方です。皆様」
「――――とにかく、付いて行きましょ」
案内されるて歩くこと、少し。
病院の奥の奥。『こんな場所あったっけ？』と思うくらいの所にその病室はあった。
中に入ったわたしたちを待っていたのは――――
「あ、やっと来てくれた～。いらっしゃい、今代の勇者のみんな～♪」

身体中包帯だらけのこの前の女の子が、ベッドに寝ていた。来ている病院服はわたしたちが前に着た物とは違って、なんだか、変な感じがした。

でも、それ以上に変な感じなのは――――――

「・・・・・・なによ、これ」

「これが・・・・・・病室・・・・・・？」

「――――――――――――!!」

部屋中を覆い尽くす、人型のお札。
壁、天井、床にすら。至るところに張り巡らされている。
ベッドの前には鳥居が立っていて、それはある種の神社のように、わたしは思った。
決して、病人が居ていい場所なんかじゃない。
「・・・・・びっくりしちゃったかな？ごめんね～、大赦のえらーいおじいちゃんたち、私がここを片付けて～って頼んでもぜ～んぜん、聞いてくれなくて・・・・」
女の子が困ったような顔で謝る。
「えっと・・・・あ、そうそう。自己紹介がまだだったんよ～。私、乃木園子って言うんだ。一応、あなたたちの先輩にあたる・・・・のかな？先代勇者ってやつなんよ～」
「先代勇者・・・・私たちの他にも勇者がいたなんて・・・・・・」
「てか、乃木ってまさか・・・・大赦中枢の『六花』の≫乃木≪!?」
「いや～、お恥ずかしながら～♪」

「ちょっと待ってよ!!乃木って言ったら大赦で最も権力を持つ『六花』の中でも、まとめ役として存在している最高の権力を持つ家柄じゃない!!なんでこんなところに・・・・・というか、先代勇者って・・・・!!」

夏凛ちゃんがパニックになって、なんだかよくわかんない事をしゃべってる。

「あはは～、そんなに難しい事じゃないんよ～。私と、あと三人のお友達。四人でえいえいおー！ってバーテックスと戦っていた。それだけのお話だからね～」

「あの・・・・・乃木・・・さんは、バーテックスと戦って、そんな風に・・・・？」

「ううん。違うんよ。これでも私、結構強いから～」

「園子様。そろそろ本題に」

いつの間にか、乃木さんの隣に移動していた神官さんが話を区切る。

「あ、ごめんごめん。こうやってまともに人としゃべるのって久しぶりだったから～」

神官さんに謝る乃木さん。二人は、仲良しなのかな？

「えっと・・・・みんなは満開、したんだよね・・・・？わーって咲いて強くなるやつ」

『!?』

乃木さんのその一言に、空気が凍りつく。

「――――――私以外、みんなしたわ・・・・・・満開」

「夏凛ちゃん・・・・・・・」

「・・・・・・そっか」

夏凛ちゃんの言葉に、乃木さんは一度目を閉じて、もう一度開けた。

「咲き誇った花は、その後どうなると思う・・・？」

え・・・・・・？

「満開にはね・・・・隠された機能があるんだ。『散華』っていうんだけど」

「さんげ――――》花》が》散る》って書く・・・？」

東郷さんの言葉に、乃木さんは頷いて――――

「満開した後、身体のどこかがおかしくなったよね？」

その瞬間、東郷さんは右耳を、風先輩は右目を、樹ちゃんは喉を、無意識に触れていた。たぶん、わたしもそう。

「それが散華。花一つ咲けば一つ散る。神様の力を振るう代償として、身体の一部を供物として捧げるシステム。代わりに、勇者は決して死ぬ事は無いし、捧げた供物の数だけ強くなれるんよ」

「・・・・・・じゃあ、その体は・・・・・そのせいで・・・・・・？」

「うん」

無慈悲な肯定の言葉が、わたしたちの頭に響く。

「身体の機能を徐々に喪って、最後はこうして祀られる。元々、ぼーっとするのが特技で良かったよ～・・・・ぜんぜん動けないのは、ちょっと辛いからね・・・・・・」

「痛むん・・・・ですか・・・・・？」

「痛みは無いよ～。敵にやられた訳じゃないからね～」

「どうして・・・・・・私たちが・・・・・・」

東郷さんが呟いた。それに反応した乃木さんが言う。

「何時の世も、神様に見初められるのは、無垢な少女だけだからね・・・・・穢れなき身だからこそ、大いなる力を宿せる。仕方ないこととは言え、残酷だよね・・・・」

その時、どすん、という音が後ろから聞こえた。

そちらを振り向けば、風先輩がしゃがみ込んでいた。

「――――――――知らなかった・・・・・・知らなかったのよ・・・・・・・・身体を供物に捧げて戦うのが勇者・・・・・・知ってたら・・・・皆を巻き込んだり・・・・・・しなかった・・・・・・」

項垂れて涙を流す風先輩に、樹ちゃんが寄り添う。

「治す方法は？無いとかふざけた事言わないでよ・・・・・・！」

「――――――――」

夏凛ちゃんの質問に乃木さんは答えない。

乃木さんへ夏凛ちゃんが詰め寄ろうとしたその時だった。

『あるよ！たった一つ、希望がなっ!!』

乃木さんの寝ているベッドの隣。机の上に置かれたパソコンから、その声は聞こえた。

「あ♪おかえり～ミノさん」

『ただいまー。よっと』

パソコンの画面から手がにょっきりと生えてきた!?

とか思っていたら画面から人が!?え!?呪いのビデオ!?

「ふぅ・・・・シャバの空気が美味し――――――くは無いな。ここだし」

「ごめんねミノさん。大赦のおじいちゃんたち、私をお外に出させてくれないから～」

「ま、こうやって身体を動かせるだけマシだからね。それ以上は高望みってやつだと思っておくさ」

パソコンから出てきたのは、ナマリによく似た人。

あれ・・・・どこかで見たような・・・・・・・・・・・・・・・？

「お、ナイスタイミングってか？今、園子が満開と散華について説明していた所だろ？」

「お～♪さっすがミノさん！わかってる～♪」

さっきまでの重たい空気は何処へやら。

乃木さんに≫ミノさん≪と呼ばれている人が現れた瞬間、なんだかいろんなものが吹き飛んだような・・・・・

「んじゃ、次はアタシの話だな。アタシは三ノ輪銀。園子と一緒に大橋で戦ってた勇者の一人だよ」

三ノ輪――――？あれ？どっかで聞いた名前・・・・・・・

「訳あって、今アタシの身体は別の所にあってさ・・・・ま、ユーレイみたいなもんだよ。だからさっきみたいに、ネットワーク回線を使っていろんな場所に行けたりするんだ。とは言っても、園子の近くに居ないとこうやって出てこれないんだけどね・・・」

「――――――で？あんたの言う≫希望≪ってのは、いったいどんな？」

夏凛ちゃん、ちょっと怒ってるみたい・・・・

「反大赦組織『錬獄』――――連中の持つ魔導技術を利用すれば、散華で奪われた身体の機能をある程度、取り戻せる」

『！！！』

「――――かもしれない。飽くまで可能性の話だよ」

でも、もし、本当にそれができたら――――

「――――樹の、声も・・・・・？」

「きっと。その右目だって、見えるようになるかもしれないよ」

三ノ輪さんの言葉に、樹ちゃんが風先輩に抱き付く。

「さっき、その成果を確認してきたんだ。もう少しすれば、みんなの後遺症は治せるはずだよ」

笑顔の三ノ輪さんに、みんなも笑顔になる。

良かった・・・・バーテックスも倒し切ったし、後はその『錬獄』ってところの人たちを信じて待っていれば――――

「――――――私の記憶も？」

え？東郷さん？

「二人の言葉が正しいなら、私は――――――。だとしたら、私の記憶も、取り戻せると言うの？」

「――――――」

「――――――」

東郷さんの言葉に、押し黙る二人。

え・・・・・と？どういう事？

「貴女たちの言う魔導技術。それは、輝夜くんの身体に使われているものと同じ技術。違うかしら？」

「――――――半分、正解」

「ちょっと待って――――――それじゃ、私たちの身体を機械化しようっての!?」

「そうなるかもしれないし、そうならないかもしれないんよ・・・・少なくとも私

は、機械化はあんまり好きじゃないな～」

いたって真面目に、乃木さんは答える。

「――――それで？わっ・・・・・・・美森ちゃんは、何が知りたいの？」

「私は、魔法の力でどれだけの事が出来るのかを知らない。でも、それって・・・・・・記憶の再生まで可能なものなの・・・・・・？」

そういえば、かぐやちゃんが前に言っていたっけ・・・・「魔術は決して万能では無い」って・・・・

「――――あなたたちをここに呼んだのはね・・・・ほんとは、満開の真実を伝える為じゃないんよ・・・・」

「・・・・・・・え？」

「アタシらにとっては、そっちはついで。後遺症を治す術は見つかっていたからね」

「本題はここから。美森ちゃんの記憶と、ミノさんの身体について。そして、御社のしてきた事。それを、あなたたちに伝えようと思って、今日は呼んだんよ」

そうして、乃木さんと三ノ輪さんは語り始めた。

二年前に、彼女たちの身に起きた悲劇を……

ここからオリジナル路線に突入。
でもちゃんと原作はリスペクトしていくつもり。
がんばるぞいっ！

告げられるT -御社の目的-

「御社の連中は、ある一つの事を心情として働いているそうだ」
「ある事・・・？」
「≫全ては人類の存続の為に≪」
人類の・・・存続・・・・？
「それを成し得る為ならば、どんな穢い手をも使う。そうして犠牲にされた人々だって・・・・いるそうだ」
「・・・・・・・・・・・・結女さん」
夏凛ちゃんが誰かの名前を呟くのが聞こえた。大切な人・・・・なのかな？
「それを踏まえて、聞いて欲しい。二年前のあの日――アタシらの身に何が起きたのかを・・・」

――――――――――――――――――――――――

「仲間の一人がいなくなってからしばらくして、勇者システムがアップデートされた。今、おたくらが使ってる奴さ」

「つまり、精霊と満開・・・・そして、散華の実装・・・・」
東郷さんの言葉に三ノ輪さんが頷く。
「アタシらの時も、やっぱり満開の後遺症については知らされなくてさ・・・・二回程満開して、園子が気付いた」
「満開の代償の事を黙っていたのは、大赦なりの優しさだとは思うんよ～。でも、私は教えて欲しかったから・・・・」
乃木さんの言う事は良く分かる。きっと、私たちは満開の代償の事を知っていても戦っていたと、私はそう思う。
「まあ、今は後遺症の話はいい。問題はその後だ」
その後・・・？
「みんなは、黒いクラゲみたいなヤツを見たことあるか？」
「黒い・・・クラゲ？」
もしかして、この前見たアレのこと？
「この前の、ジェミニと一緒に居たアイツ？」
「知ってるみたいだな。なら話が早いや」

風先輩の質問に三ノ輪さんは察して話を続ける。
「一度目の満開が終わった後で、そいつらがバーテックスと一緒に出てきた。で、もう一度満開しようとした時に、≫何かをされた≪」
「何か・・・？」
「何かって・・・・・・何よ？」
「分からない。何かされたのは明らかなんだ。でも何をされたのか、まったく分からなかった。でも、そのせいで、アタシはこんな体になっちまった」
三ノ輪さんの身に、いったい何が起きたんだろう・・・
「アタシは気絶してたらしいから知らないけど、園子ともう一人の仲間も、同じように何かされたそうだ」
「という訳で、ここからはわたしが話すね～」
三ノ輪さんから乃木さんに、バトンタッチして話は続く。
「わたしが気付いた時には、ミノさんとわっ・・・・もう一人のお友達はお面を着けた誰かさんに気絶させられていたんよ。真鍮製の義眼とサークレットを着けさせられて」

真鍮製？
「ちょっと待って・・・・真鍮製って、確か・・・・」
風先輩と夏凜ちゃんが何かに気付いて声を上げる。
「・・・・て事は、まさか・・・・強制契約!?」
「それも知ってるんだ～。すごいね～！」
「・・・・まぁ、ね。でもそっか、そっちのあんたが幽霊状態なのは・・・・」
「あはは、ご明察。契約失敗でこうなった」
え？契約？それってどういう・・・？
「簡単に説明すると、ミノさんたちはそのお面の誰かさんに、悪魔との強制契約をさせられたんよ。わたしはその前になんとかしてくれたけど・・・・」
「アタシはご覧の通り失敗。もう一人は・・・・」
言葉を区切って、乃木さんと三ノ輪さんは、東郷さんを見る。
「――――――記憶を無くしてしまった・・・・のね」

「・・・・・・・ああ」

東郷さんの言葉に、三ノ輪さんが頷いた。

「・・・・私には、二年前の記憶が無い。それは、私がされた強制契約のせい・・・・」

「正確には、強制契約を解こうとして無理矢理満開したせいだね・・・・そのせいで、散華システムにバグが出て、本来なら選ばれないはずの記憶が、選ばれちゃったみたいなんよ～」

「そんな・・・・・」

東郷さんの過去に、そんな事が・・・・

「・・・・・それじゃあ、私の記憶は――――――」

「ま、戻す方法は、無い訳じゃないけどな」

「ほんと!?」

三ノ輪さんの一言に、私は思わず嬉しくなった。だって、東郷さんの記憶も取り戻せるんだもん！

「おお～、すごい食い付きなんよ～♪」
「あ、ごめんなさい・・・///」
「はは、良いよ。それだけ想ってるって事だし・・・良い友達を持ったんだな」
「────ええ、私には勿体無いくらいよ」

「・・・・で、結局私たちを呼んだのは、その謎のお面野郎に注意しろって話？」
「うん、そんな感じ～」
謎のお面か・・・・・・
「どんなお面なんですか？」
「ああ、それを言ってなかったんよ～。えっと・・・・あ、紙とペン無い～？」
「此所に」
「あ～、ありがと～」
お面の神官さんが懐からメモ帳とペンを取り出して乃木さんに渡した。そういえば、さっきから居たっけ・・・
「さらさらさら～・・・っと、う～ん、右手が動かしにくいからちょっとへたっ

ぴになっちゃった～」

乃木さんが書いた絵を見る。確かにちょっぴり歪んでいるけど、太陽っぽいマークが書かれたお面という事はちゃんと分かる。

「なんか、太陽っぽいわね」

「これがその謎のお面野郎のお面ね・・・・」

「・・・・・・・・こいつが」

「――――――――（ゴクリ）」

なんだろう・・・・・どこかで見覚えが――――

「勇者様方。そろそろお時間です」

神官さんに言われて気付く。もうこんな時間――――

「あれあれ～？もうなの～？おしゃべりしてると、時間が流れるのって早いや～」

「とりあえず、伝えるべき事は伝えられたし・・・今はとにかく待っていて欲しい」

御社と謎のお面さんか・・・・・・そういえば・・・・・

「あの、どうしてこのお面の人と御社が関係してるって分かったんですか？」

「ん？あ～、それはね、そのお面の誰かさんが言ってたんよ。『我々≫御社≫の崇高

なる使命の為、貴女達に人柱となって貰う』って」

人柱・・・・どうして、そんな事を・・・・

「ともかく、今はどうにも出来ない。アタシや錬獄の人たちを信じて待って欲しい」

「・・・・・分かった。錬獄とかいう組織は信じられないけど、あなたたちがそう言うなら――」

風先輩はそれだけ言って、病室を出ていく。その後に私たちも続く。

――――+――――

今日はたくさんの事があった。

かぐやちゃんが知ったら、どんな顔をするかな・・・・・・・・？

「ただいまー！かぐやちゃん、聞いて！あのね――」

いつもの調子でかぐやちゃん家にお邪魔して、そのままかぐやちゃんの部屋に入る。

部屋には誰も居なくて、開いた窓から吹き込む風が、カーテンを揺らしているだけだった……

-この作品における精霊の作り方-

チャージされた勇者の力と、散華により抜き取られた身体機能を神樹の力で混ぜ合わせて神樹内に蓄積されている≫精霊≪の伝承を使用して創造される。

よって、姿形、能力は勇者毎にまちまち。

逆を言えば、精霊から身体機能を取り戻すことができれば、散華によって奪われた供物は取り返す事ができる。

ＥＸＴＲＡ．１　お祝い事には特別な・・・・

ＨａｐｐｙＢｉｒｔｈｄａｙ！！！　友奈ちゃん！！！
エクストラシナリオ第二回は友奈ちゃんのお誕生日回！

それではどうぞ、御堪能ください

神世紀３００年３月21日
この日をもって、結城友奈は13歳になる。
そのお祝いに・・・と、勇者部の仲間たち三人はパーティーの準備に勤しんでいた。勿論、友奈には内緒で、だ。
そして迎えた当日――――

「お誕生日おめでとう！友奈ちゃん」

「おめでとう！友奈！」
「えへへ♪ありがとうございます！風先輩。東郷さん」
輝夜の家にて行われる誕生日パーティー。
笑顔の友奈。
拍手で今日という日を祝う東郷と風。
しかしそこに、輝夜の姿は無い。
「にしても煌月ってば・・・・どこほっつき歩いてんのよ・・・・・・」
「どうしたのでしょう？輝夜くん、一番張り切っていたのに・・・・・・」
「――――――――――」
「今朝から見ないと思ってはいたけど・・・・・・まさかパーティーに遅刻するなんて・・・・・・来たらなんて言ってやろうかしら」
「吊るしましょう。風先輩」
「許可するワ！」
「わー！待って待って!?」
危険な事を言い始めた二人を制止し、友奈は少し申し訳なさそうに言う。

「かぐやちゃんだったら、平気です。いつもこんな感じなんで」
「いつも？」
「どういう事？」
「実は――――」

――――――――――――――――

輝夜は、こういったイベント事に、時間通りに間に合った試しが無い。
それは彼が、時間にルーズな性格をしているからだとかでは無くて、単に運が無いのだ。
否、運が無い処の話では無い。
彼のそれは、『天に見放されている』と言っても過言では無いレベルのモノなのだ。
その顕著たる例が、四年程前の２９６年同日に起きた事故だ。
「その日、かぐやちゃんの帰りが遅くて、わたし、心配になって探したんです。怖かったけど、路地裏とかも見てまわったりして・・・・」
そうして、友奈が輝夜を見つけた時には、全てが手遅れだった。

「かぐやちゃんは・・・・・重症を負って・・・・・どうにか助かったけど・・・・・」
「そんな事が・・・・・・・」
「――――――煌月」
「その日から、かぐやちゃんが何かしら頑張ろうとすると、いつも決まって大怪我するようになってしまって――――――」
これには、流石に二人も閉口せざるを得なかった。
「だから、良いんです。かぐやちゃんがちゃんと無事、帰ってきてくれるなら、わたし・・・・・それ以上、望んだりは・・・・・しません」
寂しげに笑う友奈。と、その時だった。

「いーや！望んでもらうぜ。なんたって今日のパーティーのメインはお前なんだ

からさ!!」

その声に、慌てて三人がリビングの入り口の方向を向く。

「――――――かぐやちゃん」

「よ。今年は間に合ったな！」

「ドヤ顔で決めている処申し訳ありませんが坊っちゃん、私がたまたま通りがからなかったらあのまま海まで直行でしたよ？」

「――――――言わなけりゃ、単に≫水も滴る良い男≪で済んだのに」

その言葉の通り、輝夜と彼に肩を貸している不同の二人はずぶ濡れだった。

「ならないでしょう。坊っちゃんですし」

「ひどいやひどいや」

「え？なんで不同先生が？てか、煌月はなんでびしょ濡れなの⁉」

疑問符を頭に浮かべる風に、不同が答える。

「私は元々、この家の使用人でして・・・・・教師は副業なんです。お給料も良いですしね」

「最後の一言だけは聞きたくなかったワ・・・・・」

びしょ濡れのままでは風邪を引いてしまうからと、風に着替えるよう言われた輝夜は、自室にて制服から私服へと着替えてきた。ワイシャツとチノパンという、知ってる者たちからすれば『いつも通りの輝夜』のスタイルだ。

「煌月、その服気に入ってるの？」

「Ｓｉｍｐｌｅ is Ｂｅｓｔだよ、風さん♪単純なれども侮るなかれ！・・・・ってね」

それより！と前置いて、輝夜は友奈に小さな包みを手渡す。

「ＨａｐｐｙＢｉｒｔｈｄａｙ友奈」

「かぐやちゃん・・・・・・」

「ちょっと時間がかかっちまったが・・・・・今回はちゃんと今日中に渡せたから、それで許せ。な？」

「――――――――開けて良い？」

「スルーか・・・・・・・・・ああ、モチロン」

包みの中には、植物を模したチェーンネックレス。

「これ・・・・・アイビー？」

「どっちかと言うとキヅタ」

「・・・・・・違いがわからん」

きょとんとしている風に輝夜が違いを教える。が、全く理解できていないようだ。

そんな二人をよそに友奈は、貰ったネックレスを大事そうに握りしめていた。その頬は、ほんのりと朱に染まっている。

「良かったわね、友奈ちゃん♪」

「うんっ!!」

こうして、友奈の誕生日パーティーはどうにか無事終了した。

ちなみに、キヅタの花言葉はアイビーとほぼ同様で『友情』『不滅』『誠実』そして――――――

『死んでも離れない』

神世紀２９６年３月21日の事故について――――

世間的には事故と公表されているが、その実態は輝夜が『あるもの』と戦い、それを大赦がもみ消した。

この時に輝夜はニルヴァーナを使用。反動で自壊を起こし、下半身と左腕、内臓のいくつかを失った。

この日以降、輝夜が本気で取り組む場合、何かしらの障害が発生し、輝夜が負傷するようになる。

当初は毎度大怪我を負っていたが、最近ではキツツキに追いかけられ亀につまずいて川に落ちる程度で済んでいる。

ＥＸＴＲＡ．２　『好敵手』と書いて»親友»と読む間柄

お誕生日おめでとう！東郷さん!!
そんな訳で、今回は東郷さんと輝夜の馴れ初め話。
どうぞ、御堪能ください。

～それは、勇者部が発足してから半年ほどが経過した頃のお話～

「東郷と煌月は、ホント仲良いわよねー」
ある日の事、風と東郷が部室にて作業していると、唐突に風がそんな事を言い出

した。
ちなみに輝夜と友奈はここにはいない。依頼で別の場所に行っているのだ。
「そう見えますか？」
「見える見える。なんか～、熟年の夫婦って感じよね～」
「うーん・・・・・・そうなんですか・・・・・」
「あら？それほど嬉しくない？」
「そうですね・・・・別にそこまで私たち、仲が良い訳ではないですから」
「え!?そうなの？」
風の驚きは最もである。
東郷と輝夜のコンビネーションは、まさに阿吽の呼吸と言うべきもので、風が言ったように『長年連れ添った夫婦』のような以心伝心っぷりを見せる時がある。
だが東郷は、『あまり仲は良くない』等と宣うのだった。
「――――そうですね・・・・・せっかくですから、私と輝夜くんの馴れ初めのお話でもしましょうか？」
「良いけど・・・・それ、話して良いの？」

「友奈ちゃんがいないから大丈夫です」
「あ、そう」
東郷の発言に、なんとなく察した風は、とりあえず何も言わずに東郷の話を聞くことにするのだった。

東郷の、輝夜に対する第一印象は『人形みたいな人』だった。
当時の輝夜は、話しかければ受け答えはするものの、会話をしようとはしない、機械じみた人物だった。
他の人々に対してもそうであったのなら、東郷もそこまで気に止めなかった。
が、どういう訳か、そのような態度を取るのが東郷に対してのみであった。それを知った東郷は、輝夜に問い詰めてみるも、そっぽを向いて「別に・・・・」と宣うだけであった。
これには、流石の東郷も憤慨した。
自分が何かしたのか、悪い所があるのなら治す、そう言ってみるも、「気にするな」だの「なんでもない」だのと、とりつく島も無い。

この輝夜の様子に、当時は友奈も困惑しており、心配して二人の仲を取り持つように行動していた。
が、それでも二人の距離は一向に縮まる気配を見せず、数日が経過した。
そんなある日。
東郷、友奈、輝夜の三人で買い物に出掛けた日のことだ。
忘れ物をしたと言う友奈が、一人店に戻って行った後、少しして輝夜が「ここに居ろ」と言って路地裏へと消えて行った。
直後、路地裏から聞こえてきたのは怒号と殴り合う音。
嫌な予感がした東郷は、輝夜の言い付けを守らず、路地裏を覗いた。
そこでは、高校生くらいの不良たちを相手に、体格の差を上手く利用して無双する輝夜の姿が。
「煌月くん・・・・・・！」
「!?お前・・・・・なんでっ!?」
その一瞬の隙を、不良たちは見逃さなかった。
「来い！」

「きゃっ!?」
不良の一人が東郷の腕を掴み、引き寄せる。
「テメエ！こいつがどうなってもいいのか!!」
「――――――――――」
「・・・・・・煌月くん」
輝夜は何も言わず、両手を挙げ、東郷を見つめていた。
「――――――――――？」
その視線はとても暖かで、どうしてか東郷は怖いはずなのに怖くなかった。
「やっちまえ!!」
東郷を人質にとった不良が仲間に命じたその時
「ていっ!!」

「んぎぃ!?」
可愛らしい掛け声が、東郷の後ろから聞こえてきたと思った次の瞬間には、不良が潰れたカエルみたいな声を上げて、泡を吹いて倒れた。当然、東郷も一緒に倒れる、が
「大丈夫!?東郷さん!!」
「・・・・・友奈ちゃん」
東郷を助けたのは友奈だった。
そこから後は一方的だった。不良たちを蹴散らし、輝夜は東郷に駆け寄る。
「怪我は無いか？」
「え・・・・・・ええ」
「――――――――ここに居ろ、そう言ったはずだろう」
「・・・・・・・・・ごめんなさい。でも心配で」
「――――――――これに懲りたら、俺に関わるな。また、同じ目にあう」
「――――――――どうして」
「え？」

その、突き放すような物言いに、ついに東郷の我慢が解かれた。
「どうしてそうやって私を除け者にするの!?」
「え・・・・・いや、別に・・・・」
「私の事が嫌いなら、はっきりそう言ってよ!!なんなのいったい!?いい加減にしてよ！！！」
「――――――――――――――」
ひとしきり声を荒げた東郷は、呼吸を整えて一言。
「――――私は、できることなら、煌月くんとも仲良くなりたい」
「・・・・・・・そう」
「ねぇ、教えて？どうして私の事、避けてたの？」
「――――――――――それ、は」
ちらり、と友奈の方を見る。
何かを察した友奈は、それを見て言った。
「もしかして、私が聞いちゃダメなやつかな？だったら私、先に帰るよ。かぐやちゃん、東郷さんと仲直りしたら、ちゃんと送ってあげてよ？」

それだけ言って、友奈は先に帰宅した。
後に残った二人は、近くの公園に向かい、そこで話し合う事にするのであった。
――
公園について早々、輝夜は自販機で緑茶を購入し、それを東郷に手渡した。
「――――――ほれ」
「あ・・・・・緑茶」
「ペットボトルだが、そこは我慢してくれ。ここの自販機、紙パックのは置いてないんだ」
「――――――ありがとう」
一口飲んで、再び口を開く。
「煌月くんはこうやって、誰かをちゃんと労れる。私、煌月くんのそういう所、嫌いじゃないわ」
「――――――そう」
「さっきのだってそう。あの不良さん、猫をいじめていた」
「・・・・・・・・気付いてたのか」

「髪に猫の毛、付いてるわよ？」
言われて輝夜は、自分の髪を探る。
確かに、茶色の毛が付着していた。
「良い観察眼だな」
「ありがとう。それで？どうして私を避けてたの？」
「――――――――自分でも、よくわからない」
「え？」
輝夜は至って真剣な顔で語る。
「お前が友奈と会話していると、何故か胸の奥がチリチリする。なんと言うか・・・・・・友奈が、遠くに行ってしまったみたいで・・・・・・」
「――――――――それって」
「？」
「煌月くん、もしかして・・・・・・嫉妬してたの？私に」
「嫉妬？これが？」
「そうだと思う」

「――――――――――ああ、成る程、これが・・・・・嫉妬」
そう呟いた輝夜の顔は、東郷がこれまで見たどんな表情よりも晴れやかで、可憐であった。
「――――――――――」
「ありがとう、お前のおかげでこの感情の正体がわかった」
「――――――――――」
「ついては、これまでの礼をしたいんだが・・・・・・・どうした？」
「ふぇ!?」
「俺の顔に何か付いてるのか？」
「い・・・・いいえ！何も!!そ・・・・・それより！お礼ですって？」
まさか、輝夜に見惚れていたとは言い出せず、東郷は話を合わせようとする。
「ん？ああ、何が良い？俺にできることなら、何でもしてみせよう」
「な・・・・なんでも？」
「うむ、男に二言は無い」
一瞬、輝夜に女装を頼もうと思った東郷だったが、それをぐっと堪えて、ある事

を提案するのだった。
「それなら、私のこと、名前で呼んでほしいな」
「名前？――――――東郷」
「・・・・・・・・・・・・・・・下の名前じゃないの？」
「・・・・・・・・・・・・・・・いきなりは流石に」
「もう、仕方ないわね・・・・・・・・じゃ、それで帳消しにしてあげる」
「ありが「その代わり！」？」
輝夜の感謝の言葉をふさいで、東郷が続ける。
「これからあなたの事は、≫輝夜くん≪って呼ばせてもらうわ」
「――――――――――――――――えぇ」
「あら、駄目？私、今まであなたに避けられてて、すっごい傷付いたのだけれど・・・・・・」
「――――――――――――――――わかったよ・・・・・・・・ったく」
「うふふ♪よろしい！」
ため息をつく輝夜。微笑む東郷。

「それにしても、まさか、輝夜くんもだったなんて」

「»も»？・」

「だって輝夜くん、友奈ちゃんと一緒にいた時間は、私よりも長いでしょ？それは、私には決して埋められない差。だから・・・・・」

「――成る程。似た者同士ってワケね」

「そういうこと」

今度は二人して笑いあう。

「――なら、今後は好敵手(ライバル)としても」

「ええ、仲良くやっていきましょ」

こうして、二人は友達になった。

最も、それだけでは収まらない関係と言えなくも無いが・・・・

「――こんなところですね」

「・・・・・・・なんと言うか・・・・青春ねえ」

「うふふ、そうですね」

部室に、二人の笑い声が響く。
そこへ更に、二人の声が追加される。

今日も勇者部は、平和である。

ＥＸＴＲＡ.３ 勇者部副部長

ＨＡＰＰＹ ＢＩＲＴＨＤＡＹ!!風先輩!!
元号変わって最初のエクストラ回！
今回は輝夜が風先輩を»風さん»と呼ぶきっかけのお話。
どうぞ、御堪能ください……

――これは、勇者部が発足して間もない頃の話――

「おい友奈。ここ、計算間違えてね？」
「ふぇ？――――ほんとだ。ごめーん」
「ったくもう・・・・・あ、東郷。これ、昨日頼まれたやつな」

「あら、もう？流石輝夜くんね」

「――――――――――」

三人の様子を、風はぼんやりと眺めていた。

ふと、手元の端末を見る。そこには一通のメールが表示されていた。送り主は大赦だ。

『煌月輝夜は勇者にとって、危険人物に成り得る。監視下に置き、その動向を報告せよ』

等と書かれている。

「(大赦は、あいつのどの辺を危険だって判断したのかしら・・・・？)」

輝夜の噂を知らない訳では無い。

しかし、風と接する時の輝夜は、大赦が危惧するような人物などではなく、本当に、普通の少年だった――――若干、喧嘩っ早いが。

「――――部長。なにしてんスか」

「ふぇ？」

輝夜の呼ぶ声に顔をそちらに向けると、呆れ顔の輝夜が風の事を見ていた。

「ああ・・・・ゴメンゴメン。今日の晩御飯何にしようかなぁーって・・・・・」

「そういえば、妹さんと二人暮らしなんでしたっけ？」

「料理ができるなんて・・・・風先輩はすごいよね！かぐやちゃん♪」

「――――――ま、良いッスけど」

とりあえず、その場は誤魔化せたようで、風はそっと、安堵のため息を吐くのであった。

―――――――――――――――――――――

翌日の夕方

「あら、事故？いやねぇ・・・・・」

買い出し帰りの風が、帰り道のとある橋にて人だかりを見つけた。付近にはトラックと救急車、パトカーが停まっている事から事故だろうと推測したのだ。

（この辺り、昔から事故が多いって聞くけど・・・・・本当なのねぇ・・・・・怖いわー）

なんて他人事のように考えながら、現場を横切ろうとした。

その中心に、見知った顔がいる事に気付くまでは。

「え!?ちょ・・・・煌月じゃない!?」

「――――――――――」

事故にあったのは輝夜だったらしい。

流石に放っておく事が出来なかった風は、道端で踞る輝夜に近寄る。
すると、輝夜の側にいた警官が風に声をかけた。
「あー・・・・君、彼の知り合い？」
「あ、はい。部活の後輩で――――」
「そうか・・・彼、こちらの声に反応はするみたいだけど、全然質問とかには答えてくれなくて・・・・・」
「ええっと・・・・・煌月が、何かしたんですか？」
「いや、実は――――」
警官の話によると、輝夜は青信号を進行中だったトラックの前に、急に飛び出してきたのだと言う。引かれるよりも早く、輝夜が対向車線に転がり出た為、軽症で済んだらしいが・・・・
「――――煌月、あんたなんでそんな事・・・・あら？」
その時、風が輝夜の抱き抱えているものに気付く。
「――――子猫？」
「え？あ・・・本当だ。まさか、子猫を助ける為に？」

「すみません！ちょっと！」
と、警官が別の警官に呼ばれ、その場から立ち去る。
「煌月、なんでそんな無茶を――――――」
「――――――――――――――――――違う」
「え？」
掠れた声で、輝夜は言う。
「俺は・・・・・・本当は・・・・・・・」
「あー、ちょっといいかな？」
「え？はい」
警官が風に声をかけてきた。
案内されるまま見せられたのは――――
「あ・・・・・・」
「多分、あの子猫の・・・・・・」
車に引かれてしまった、親猫の亡骸だった。
「・・・・確かに猫には可哀想だとは思うけど、自分がトラックに引かれる事を考

えないなんて・・・・まったく」

「――――――」

警官の言葉に、風は言葉なく俯く。

――――――――――――

いくつかの事情聴取の後、その場は解散となった。

猫の亡骸も片付けられて、道路にはその痕跡が残るだけ。

「――――――助けられるって・・・・・思っていた」

「え？」

ふと、それまで沈黙していた輝夜が口を開いた。

「いや・・・・・少し、違う。助けたかったんだ――こいつも、こいつの親も・・・・みんな」

「煌月・・・・・」

「ばっちゃが、去年死んだ。あのとき、凄く・・・・・悲しかったんだ・・・・・・・あんな思いは、もう、したくないし、誰にも、させたく・・・・なかっ・・・・・」

静かに、涙を流す輝夜に、思わず風はその頭を抱き締めていた。

「だからといって、無茶な事をするんじゃないわよ・・・・」
「でも!!」
「でももへったくれもないわよ!!死んじゃったら・・・・何にもならないのよ・・・・!?」
「――――――――でも、こいつ・・・・俺のせいで、一人ぼっちに・・・・・・・」
「――――――――なら、言い方を変えてあげる。助けられなかった命より、助けた命を優先しなさい！」
「・・・・・・・・え」
そこで初めて、輝夜は風の顔を見た。
「明日、勇者部でその子の飼い主になってくれる人を探しましょ。そうすれば、その子は一人じゃない」
「――――――――――――」
「よし！じゃ、そろそろ帰りましょ。今日のところはその子、あんたの家で預かってもらえる？」
うなずく輝夜に、風は満面の笑みを浮かべる。

「大丈夫よ。ちゃんと、見つかるって。じゃね♪」
「あ・・・・・あの！」
「ん？」
「――――ありがとう、部長・・・・・ううん、風さん」
「！――――ふふっ♪気にしないの！困った時はお互い様よ！それより！あんたは無茶しないよう、気をつけて帰りなさい！いいわね？」
「ああ――――！」
風につられて、輝夜も笑う。
そうして二人は、帰路についた。
――
「――――という訳で、今日はこの子猫の飼い主になってくれる人を探すわよ！」
「はーい！――――かぐやちゃんは後でお仕置きね」
「柱に吊るしておくわ」
「勘弁してくれぇ・・・・・」

「はいはい、それは後にしてちょーだい。今はこの子が先！」
風の音頭に、友奈と東郷が返事をする。
と、そこに――――
「風さん」
「ん？どうしたの」
輝夜が近寄り、話しかける。
「俺、昨日考えたんだ」
「ほう、何を？」
「風さんは勇者部の部長だろう？だからさ、俺は副部長をやろうと思うんだ」
「副部長ぉ？」
「かぐやちゃんがー？」
「・・・・・・必要なのかしら？」
「そこ、うっさい」
茶化す二人をあしらって、輝夜は続ける。
「俺はね、風さん。ヒーロー願望があるワケじゃないけど・・・・・それでも、誰

かを助けられる人に――――昨日の風さんみたいな人に、なれたらって思ってるんだ」
「あー・・・・面と向かって言われると、ちょっと恥ずかしいわね//」
「だから、とりあえず・・・だ。とりあえず今は、風さんのサポートを頑張ってみようと思う」
「それが副部長？」
「何か変かい？」
「――――――良いんじゃない」
「だろう？『≫大切なのは結果ではなく、そこに向かおうとする意志である≪』ってね」
「は？どういうこと？」
「小さな事からコツコツと。それがいつか、大きな影響をもたらすかもしれないってコト」
「ふーん・・・・よくわかんないけど、それも≫ばっちゃ≪の言葉？」
「いいや、違うよ。俺もよく覚えてないけど、ばっちゃとは別の人の言葉だよ」

「そうなんだ・・・・・でも、その言葉、なかなか良い言葉じゃない」
「フッ・・・・だろう？」(キリッ
格好付ける輝夜。
それを見て、風が笑う。

その日、風は大赦への報告書に、こう書いた。

煌月輝夜は、少し喧嘩っ早いだけの普通の少年です。
私達に危害を加える可能性は、限り無く零に近いでしょう。
と。

この日を境に、輝夜は格好付けた態度をとるようになりました。という話でもある。
尚、今回のメール及び、ある人物の決定により、輝夜は大赦から≫は≫マークされ

る事はなくなった。

契約者たちへの鎮魂歌

著者　渚のグレイズ

発行日　2019 年 11 月 27 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/151390/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。